
演劇団長は道化師さん

きらきら星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

演劇団長は道化師さん

【Nコード】

N9048C

【作者名】

きらきら星

【あらすじ】

中学を卒業した中本、彼は高校生活を迎える前に中学校であつた小さな思い出を思い出していた。彼を含め子供たちは思い出と思い出をもって高校生になろうとしていた。そして、思い出を持った子供たちが高校で出会い新たな思い出を作り出す。

第1話 苛立つ女（前書き）

中本の目線で書かれたお話です。

松島という女の子とであつた彼の中学生の時の思い出

第1話 苛立つ女

俺は一時間前に登校している。朝の清々しい空気、誰も居ない教室、静かな朝を楽しむために早めに登校している。これは、一年生の時からの癖で三年生になってもやっていることだ。俺の席は最前列で窓際だ。そこに座って陽射しを浴びているだけで楽しいのだ。

俺の席より前にある机、黒板のすぐ横にあり名前も書かれていないくちヨークの粉が積もっている余った机だ。本当なら使われているはずの机は、卒業が近いのに一度も使われたことが無い。使われても蛍光灯を換える時や窓を拭く時の踏み台ぐらいにしか使われなくて、誰かが勉強のために使うことはこの一年間無かった。俺の目の前にはいつも余った机があった。二年生の時にも一年生の時もほとんど置かれていた。その机に誰かが座ったのは、一年生の夏休みに入る前日までだ。

俺はその机を使っていた子を良く知っている。良く知っていると言っても、クラスの他の奴らより少し親しかっただけだ。その証拠に名前を知らない。苗字しか覚えていない。それに、まともに呼んだことも無い。ただ、短い休み時間につまらない話をするだけの仲だ。その子に会ったのは中学校一年生の時だ。俺の学校は小学校のメンバーがそのまま中学校に上がるので九年間同じ友達だ。だから俺は三年間友達には困らなかった。でも、その子は小六の三学期それも卒業式間近に転校してきたらしく、クラスの空気に馴染んでいなかった。その時はまだその机は窓際最後列の隅に置かれていて、俺の机もその横だった。

三年前……ぐらい？

「一番後ろか、見難いんだよな」

俺は空っぽで大きな目の鞆を持ちながら、教室の一番後ろまで歩い

た。教室には、親しい友達が二、三人いて軽く挨拶をした。

俺の机の上には、中学で使う新しい教科書が詰まっていた。それを鞆に詰め込んで、ただ外を見ながら今後の中学校生活の夢を見ていた。新しくできる友達、初めての学校行事、そしてなにより女の子との恋愛。最後のは無理だろうけど楽しくなりそうだ。

机に座っているだけで小学校からの友達が集まってくる。その友達の繋がりで全く知らない友達もできた。俺の名前は良く知られていよう、名前を言えば何人かすぐに友達ができた。

チャイムが鳴りみんなが自分の席に座っていく。それでも俺の横の席には誰も座っていなかった。チャイムが鳴り終わって、埋まっていない席はそこだけだ。すると、教室に女の子が走って入ってきた。

「初日早々遅刻、ドジキャラですか」

そんなことを呟いて、若干の期待を持って窓際の席を見た。その子と目が合って三秒。俺の友達リストにその子は、良くて話をするだけの友達止まりのリストに入った。悪くは無いが良いとも言えない普通の子。普通じゃ面白味が無い。何か面白味がある子がいいのだ。

「おはよ」

声をかけてきたのはその子からだ。小学校が同じでも新しいクラスメイトで何処かきこちない空気を無視して挨拶をしてきた。

「おはよ」

「私の名前知ってる」

「松島さんじゃないの」

「なんで分かるの、初めて会ったと思うけど」

「だって、名札」

「そうか」

ただそれだけのつまらないやり取り、それだけでその子は笑っていた。静かな教室で騒がしいのはこの子だけだ。場の空気が読めない子なのか。それにしても見覚えの無い子だ。小学校の時は、頻繁

にクラス替えがあつたから大体の顔と名前は分かるのだが……確か、卒業式間近で転校してきた無謀な奴が居るって聞いたことがある。多分こいつがそうなのだろう。

教室に担任が入って来た。担任は自分だけ自己紹介をして今後の説明を始めた。確かに自己紹介は不要だが、この子は必要じゃないのか。

「ねえねえ、中本君の趣味って何」

始業式も終わって自由な時間。立つのが面倒な俺は、自分の席に座っていた。するとまたその子に話しかけられた。同じ女友達の所に行くつもりは無いのだろうか。

「趣味なんて無い」

俺はそのまま黒板の方を見ながら肘を着いていた。

「無いって、休みの日は何してるの」

「知ってどうする」

「話しの切っ掛けにでもなるかもしれないし」

「話をする気なんて無いんですけど」

そのまま廊下の方を見た。教室に居るみんなは、男同士女同士で話している。俺もその中に入っていた方が良かったようだ。

「じゃ、私に聞きたいことって無い」

「無い」

「そんな、趣味とか好きな食べ物とか好きなドラマとか好きな人とかあるんじゃない」

俺はしばらく考えてこの会話が終わる方法を考えた。

「どんな質問でもいいんだな」

「うんうん、なになに」

「なんで、女同士で話さないんだ」

予想通り、それ以来その日は話しかけられることは無かった。

朝、自転車小屋から生徒玄関までの長い道、早い時間だから車も

人も無く気持ちのいい所だ。

道の先にある学校の後ろから太陽が昇ってきて美しい景色になっている。

教室に入っても誰も居なくてただ外を見ていた。そんな時間を三〇分位味わっていると、友達が来る。その友達とゲームの話やテレビの話をしているだけでチャイムが鳴る。そしてまた鳴り終わってから松島が入って来た。

「おはよ、早いね」

「正確には、お前が遅いんだ」

「いいじゃん、間に合ったんだから」

「そうですか」

授業中にも何度か話し掛けられたが簡単にあしらって終わらせている。話し掛けてくる内容も昨日は何をしたかどの部活に興味があるかなど、どうでもいいことで授業中に聞くことではないことばかりだった。

「中本君、どの部活に入るの」

昼休み、食後でゆっくりしていると、また松島に話し掛けられた。

「なんで一々報告しなきゃいけないんだ」

「いや、だって知っている人と一緒なら楽しそうだし」

「じゃあ女友達でも作りな」

「中本、ちよつといいか」

教室の真中に男の集団ができていた。クラスの男子の半分ぐらいの団体で、昨日までにできた友達だ。いつもくだらない話で盛り上がる中で、俺はそこで盛り上げ役をしている。正直、馬鹿騒ぎをするのは嫌いじゃない。

「中本は部活何か決めたか」

仕切り好きの男が話してきた。どうやらどの部活に入るかで話しているようだ。

「まだ決まってないけど、みんなはどんなもんなの」

「大多数がバスケだってさ」

「それじゃ、みんなバスケットでいいんじゃない」
「そうだな」

放課後、みんなで帰る約束をして自分の席に戻った。戻った直後に質問攻めにあった。

「中本君って友達沢山いるんだね」

「いるんじゃないくて、作ったの」

「部活バスケットにするの」

「すごい地獄耳だな」

「私もバスケットにしよう」

「お好きにどうぞ」

「止めないの」

「俺に止める権利はないし、お前がしたいならすればいいじゃないか」

「そっか」

放課後、部活の入部届けを出した。部活の入部は、強制なのに参加は自由だそう。俺達にとっては、好都合の部活だった。俺達はそのまま自転車小屋へ向かっていた。校庭の後ろにある自転車小屋までの道には、他学年組の生徒が混ざっていていたが俺達の集団は目立っていた。馬鹿みたいな話を団体でして恥ずかしくないのだろうか。俺はその団体から一歩引いてついて歩いていた。

「中本君」

後ろから聞きなれた声に呼び止められた。そのまま歩いていくと、くれば良いのに集団は良くできていた。俺が呼ばれたのに集団の男全員こっちを見て止まっていた。

「中本君、一緒に帰ろう」

「断る」

「そんなー困る、せつかく走ってきたのに」

困ると言われても約束した記憶は無いのだが……後ろの集団からからかう声が聞こえる。

「直接のご氏名だな」

「帰ってやればいいじゃないか」

こいつらは面白いからかかっていただけだ。面白い話のネタができて喜んでいただけだ。

「じゃーな、また」

そして、そいつらは俺と松島を置いて帰っていった。俺はそのまま自転車小屋に行き自転車の鍵を開けた。その間ずっと松島は俺の後ろをついて来ていた。

「帰らないのか」

「だって、一緒に帰るっていったじゃん」

「他の友達と帰れよ」

「だって、中本君しか友達いないもん」

知らない間に友達にされていた。にしても、友達がいらないんじゃないかって作らないだけじゃないか。日は沈み辺りは薄暗くなってきた。ここは男として送る必要があるのだろうか、そんな疑問を持ちながら松島が危険な目にあっては後味が悪いと思い送ることにした。

「分かったよ、チャリ持って来いよ」

「私歩きだよ」

ため息を吐き自転車を押しながら自分の家とは反対の方向へ歩き出した。

第2話 夢は遙かかなたに見るもの

「中本君って友達多いよね」

「小学からの付き合いだし、中には幼稚園からの友達もいるからな」
「羨ましいな、私の友達は中本君だけなんだよね」

「……………小学の時の友達は」

「全然、転校したてだったし」

「そっか」

で、中学で新しく友達を作ってできたのが俺だったということか。

「中本君の将来の夢って何」

「卒業文集に書いたはずだけど」

松島は苦い顔をしていた。

「文集貰ってないんだ。アルバムも、私の物って何も無かったから

……………で、夢は」

「大学教授」

「何それ、もつと子供らしい夢は無いの」

「そんなお前の夢はなんだよ」

松島は夜空を見上げながら

「友達一〇〇人できるかな」

と、笑顔で答えた。自分で言っているくせに何が面白いのか笑っていた。

「でも一〇〇人の名前覚えられないよね」

「苗字だけなら一〇〇人言えるぞ。六年間も付きあっていると嫌でも覚えるさ」

「じゃあ、半分の五〇人ならできるかな」

「自分しだいじゃないの」

「どうすればいいの」

机に座っているだけだと多くて三人までだ。自分から立ち上がって人に近づく、そして自分を知ってもらふ。そうすれば相手のこと

も分かってくる。話し掛ける切っ掛けが欲しければその人を良く見る。その人の会話を良く聞く。そして自分との共通点を見つける。そうすれば話ができる。その話に相手が食い付けば相手から話し掛けてくる。そこまでくれば自然と友達は増えていく。友達の友達、そのまたの友達、友達はそうやって増やすんだと教えた。

「へー、中本君って説明してる時楽しそうだね」

「だから、大学教授」

「なるほどね」

松島は一軒の家の前で止まった。二階建ての家の中からは全く光が出ていなくて留守を主張していた。松島は鞆から鍵を取り出した。「親は仕事なのか」

「うん、明日の夜まで帰ってこないんだ。泊まってく」

「馬鹿じゃない。まだ会ったばかりの男に向かって言うことか」

「あはは、なら夏休みあたりに誘ってみようかな」

「それまでには、俺にも彼女がいるかもよ」

松島は俺を下から上へゆっくり見てから苦笑いをした。

「無理でしょ」

「そうかもな」

松島は笑っていた。そんなくだらないやり取りで久々にそして自然に薄っすらと笑えた。

「中本君の友達術、信じてみようかな」

「おう、実証済みだ」

松島は小さく手を振ってから家の中に入って行った。俺もすっかり暗くなった夜道を歩いた。松島のおかげで、夜道を歩きながら星空を見るのも楽しいことだと分かった。

次の朝、松島はいつもより早く登校して来た。チャイムの一〇分前だったが、その一〇分間は女の子同士で話しているようだった。

「中本、あの新作のゲーム何処まで行った」

「みんなと同じ、ライバルが出てくる所まで」

俺は、五人ほどの集まりでゲームの話をしていた。

「あいつ異常に強くないか」

「そうだよな、俺一回負けだし」

みんなが同じ話題で盛り上がっている中、一人だけ話についていけない奴がいた。そいつは、そのゲームをまだやったことが無いようだ。

「確か、あのライバルって前作に出てきたよな」

俺は話しについていけないそいつに話しかけた。そいつは、前作はやったことがあると言っていたはずだ。

「どんな奴」

「赤い髪の奴」

「ああ、主人公の弟だった奴ね」

「えっ、あの強い奴前作のキャラなの」

「あ、うん。赤い髪で銃を持ってる奴でしょ」

さっきまで話に参加できていなかったそいつが話の輪に入り始めたら俺は、その話の輪から一歩ずつ離れていった。そのまま俺は自分の席に着いた。

自分の席に座りながら教室中を見渡した。小さなグループが五つ、大きなグループが二つある。松島は二つの小さなグループの間を行ったり来たりしている。松島が席に戻ってきたのは担任が入ってきた時だ。

「中本君、沢山の子と話せたよ」

「あーそうかい、それはよかったな」

「あとね、友達もできたの。後で紹介してあげる」

昼休み、俺は学校中を見て歩いていた。入学して二週間が経つが、今まで使った事の無い教室が幾つもあった。その探索の途中にクラスの子の集まりを見つけた。廊下の片側に陣取って五人ぐらいで話していた。その顔はいつのみたいに笑って話しているものではなく、愚痴をこぼしている顔だ。

「中本君、ちょっといい」

素通りしようと思ったが呼び止められた。そのまま歩いていてもよかったのだが、呼び止めたのは伊藤だった。伊藤は女子の中で纏め役をしていて、その力はクラスだけならず同学年や下級生にも伝わるほどのものだった。伊藤に目を付けられたら厄介なことになる。

「何か用ですか」

「松島って何なの。図々しいしうるさいし、正直邪魔だよね」

集まっている女子全員が伊藤の愚痴に納得している。どうやら松島は伊藤の逆鱗に触れてしまっていたようだ。でも、松島は伊藤に話し掛けてはいなかったはずだが、

「なぜ俺が愚痴を聞く役なんでしょうか」

「中本君も思うでしょ、いつも付きまとわれて」

確かに授業中ですらくだらな質問をされたり、周りの空気を読まない松島の相手をするのは疲れる。でも、

「まあ、俺はさ、あれだったから、そんなの気にしないようにしてるから」

そう答えると、さっきまで不機嫌だった女子達は気まずそうな顔に変わって行った。

「そつ、そうだったね……ごめん」

「もう行ってもいいですか」

「うん、ありがと」

俺は笑いながら教室に戻った。

「中本君、私のお友達紹介するね。斎条愛華ちゃん」

「中本君………久しぶり」

「久しぶり。って、同じクラスじゃん」

いつもの長い道、そこで松島が連れていたのは斎条だった。大人しくて優しい子だ。だから、松島の話し相手にでもなってやったのだろう。ゆっくりマイペースな斎条には、松島が加わって丁度よくなりそうだ。それにしても斎条の気まずそうな顔が気になる。

「齋条、どうした。体調でも悪いのか」

「そんなんじゃないの、……………あのね、中本君。……………小学校の時は……………」

「中本君じゃあね。今日は愛華ちゃんと二人っきりで帰りたいから」
「そうか、じゃあね。松島、齋条」

家に帰った俺は机の前に座っていた。机の本棚には俺の切り札のノートが入っている。その中の一冊を取りサ行のページを開いていた。その中に書かれている齋条愛華の名前と詳細、齋条に会ってからは何かが引つかかる感じがしていた。昔には無かったもので、何かは分からないがその分からないものが俺に何かを伝えようとしていた。

「齋条愛華、伊藤未来のお気に入りで齋条に下手に手を出すと伊藤に目を付けられる恐れあり」

齋条の所には赤字でそう書かれていた。だから伊藤は俺にあんな質問をしてきたんだと分かった。松島の目の付け所はよかった。が、六年間でえた情報、伊藤と齋条の関係を知らないのは大きな問題だったようだ。

「注意しないと干されるぞ」

翌日、松島は齋条と楽しげに話している。その話の輪には伊藤の姿もあった。松島は七人の中心で話していて、その話を聞いている伊藤も笑顔だ。見た感じでは全く問題は無く逆に好印象を与えているようだ。このまま伊藤と繋がりを作ればあいつの友達問題は終りそうだ。

「何見てるんだよ」

俺の目の前に立っているのは仕切り好きで俺の最初の友達だ。小四の頃からいつも側にいてくれた。おかげでこいつに出会ってから一人になったことは無かった。

「その目線には齋条の姿が……………愛ですか」

「愛ですか、じゃない。ただすごい奴だなって思ってたさ」

斎条の横にいるのは松島だ。まだ一ヶ月も経っていないのに伊藤にあそこまで気に入られるのは、今の俺でも無理かもしれない。元々あいつは、友達を作る奴だったんだ。その作る切っ掛けが無かっただけなのかもしれない。

「あいつか、確かにすごいよ。俺達の固定され尽くされた輪の中にあれだけ入ってきてるんだからな。昔の誰かを見てるようだよ」

「あーそうかい」

チャイムが鳴っても担任が入ってくるギリギリまで松島は席に戻ってこなかった。

「中本君、ちよつといい」

昼休み、俺の所に伊藤が来て、教室の外を指さしていた。伊藤の横には斎条がいた。それを見た松島は立ち上がり斎条の横についた。

「じゃあ、私も」

「悪いけど、今は中本君だけがいいの。ごめんね」

斎条は手を合わせて謝っていた。俺は斎条に手を引かれて教室から出された。何ですかこの雰囲気は、まさに告白の空気。斎条の付き添いに伊藤、二人とも真剣な顔をしていつもらしくない。期待大ですよ。

校舎の隅、屋上に出る扉の前まで連れてこられた。連れてこられるまでのドキドキは着いた瞬間に別のもに変わった。伊藤の他にも女子が五人、男子が三人、同じ学年だが違う組の同級生ばかりが集まっている。集まっている奴らの共通点それは、どれもリーダーシップが高くみんなに頼りにされ高い信頼を得ている者達ばかりだ。そんなやつらが真剣な目付き、まさか、非公開式の制裁。法律によらないで、暴力によって行う私的な刑罰。簡単に言うところリンチですか。

「俺は何のために拉致されたのでしょうか」

「会合よ、会合。各組での出来事とかこれからのルールとか決めるの」

俺のボケすら無視して伊藤は真剣な口調だった。ここにいる奴は誰もふざけた顔はしていなかった。

「ルールって、そんな事先生言っただけだ」

「学校のルールじゃなくて、私達生徒だけのルール。暗黙のルールってこと、知らないの」

「未来、中本君は今回が初めてだからよく分からないだよ」

斎条に注意されて伊藤はしくじったような顔をした。ここいる誰もがそんな顔をしていた。

「この会合はね、小学校の頃からやっていたことで、みんなを纏める人達で決め事を作って、それをみんなで守って守らせて今の状態を維持して行くためのものなの」

「それなら五十嵐の方が適任だと思うんだが」

いつも俺や友達を仕切っていたのはあいつの方だ。そうになると、あいつはこの会合に出ていたのだろうか。

「小学校まではそうだったんだけど、中学での調査で中本君の方が支持されていたからさ。それに、五十嵐君から願い出てきたんだよ」

「くやしいが、男子が一番支持していたのがお前だったんだよ」

一人を皮切りにみんなが話し始めた。そのまま各自の連絡が始まったようだ。

「はい、では本題に入ります」

伊藤が手を叩いた。どうやら伊藤が議長らしい。

「本題って、何マジにやってるんだか」

「副議長がそんなこと言わないの」

「俺、副議長ですか」

「はい、何も知らない副議長は黙っててください。では、前回の議題の松島についてですが、予定通り前面無視に決まりましたのでよろしく願います」

みんなは返事をした。どうやらみんな内容をよく理解しているようだ。

「ちよい待ち、前面無視っていいんですか」

「そうだが、分かるでしょ」

「俺はいじめを決めるために呼ばれたのか」

周囲に暗い空気が流れた。一部の奴は罪悪感があるみたいだ。

「これは決まったことなの。まだ一ヶ月も経っていないのに松島に対する苦情は相当な数になっているの。このままだとみんなの秩序が乱れる恐れがある。その対策として、松島を私達の中から完全に追い出すの」

「苦情ってなんだよ。見ていたけど、松島と話してた奴らはみんな笑ってたぞ。斎条や伊藤も楽しそうに話してたじゃん」

暗い顔をしていた斎条が口を開いた。その口から出てきたのは、友達の松島を救う言葉ではなく蹴落とす言葉だった。

「今の中本君なら分かるでしょ。本人の前でこんな顔できないよ。もうあんなの相手するの疲れたよ。自分勝手にこっちの話は全く聞かない。自分の意見が絶対に正しいって言い続ける。そんなの誰が喜んで友達になるの」

話を聞くと、松島は他のクラスの女子にも話しかけておりどの子も斎条と同じ意見だそうだった。

「分かった。これ以上あいつが思うように動いてもらうと、女子全員に迷惑なの」

伊藤は今までに無い強い口調で言い切った。斎条の顔も真剣なもので、誰もこの意見に反対していない。

「そっか、そんなルールがあっただんな、全然気付かなかったよ」

「あつ、」

伊藤が思わず声を上げた。ピリピリしていた空気が居心地の悪い空気になった。

「分かったよ。クラスの奴らをそんな空気にさせればいいんだろ。」

伊藤がほとんどしてくれそうだけど」

「女子はともかく男子は中本君に頼みたいの、あの男子達は一番扱いにくかったの。相手が松島なら簡単でしょ」

「中本君には辛いことかもしれないけど、長年やってきたことだから」

らお願いね」

斎条に手を合わせられてお願いされた。それは、謝っているようにも見えた。

六間目、体育は自由時間となった。俺は五十嵐の横に座って、昼休みのことについて話した。

「そうか、やつぱりか」

「知ってたんだな。松島がいじめられること」

「知っていたっていうか分かった。会合のたび伊藤が不機嫌そうに松島の愚痴を言ってたから」

「で、どうしたらいいと思う」

「どうもしなくてもいいと思うぞ。伊藤達の放つ空気は強力だからあいつらでも分かるって」

「それじゃあ困るんだよ。五十嵐君の手助けを頼みたいぐらいなんだから」

俺の横に座ったのは伊藤と斎条だった。松島は体育館の隅で他の女子と話していた。

「見た感じそんな風には見えないけどな」

「あたり前じゃない。あの子達の演技力は凄いんだから」

伊藤は誇らしげに言っていた。それを聞いた五十嵐も笑っていた。「こっちに來られると困るから、仮設の友達か。で、本格的に動くのはいつからだ」

「愛華には今日の放課後からで、明日には私も動くかも」

「凄いことになってるな」

「小学校の時はもっと凄かったぞ。あの一年間は俺も怖かったけど、楽しかったし」

「五十嵐君、何が楽しかったの。ふざけないでよ」

斎条は笑っている五十嵐に怒鳴りつけた。どうやらそのことに關しては、斎条自信後味が悪かったようだ。

「まー伊藤は十分反省したし俺は別にもういいけど」

「悪かったと思ってるわよ。まさか、あんなことにまでなるなんて思ってもいなかったし」

それは、小学生の時の小さな思い出だ。

第3話 嫌なやつ

自転車小屋までの長い道を俺は斎条と伊藤との三人で歩いていた。俺の少し後ろには五十嵐とクラスの男子達がついて来ている。

「愛華ちゃん」

「来た」

斎条は、後ろから聞こえる馴れ馴れしい呼び声に苛立った顔をしながら、松島が横に来るまでには、笑顔に戻っていた。

「愛華ちゃん帰ろう」

「悪いけど今日は中本君と帰る約束してたんだ」

「えっ、」

斎条は俺の手を掴んできた。それを見て一番驚いていたのは伊藤だった。顔は笑っていたが、握る手には凄い力が入っていた。

「そうなんだ。なら、中本君と一緒に帰ろうよ」

意外な要求に斎条の顔は徐々に崩れてきて、笑顔ではなく引き攣った顔になってきた。

「お前の家ってさ、俺と斎条の家と反対方向じゃん。無理言っとなつて」

「えー、二人とも喜んで一緒に帰ってくれたのに」

「斎条はともかく俺は喜んで帰っていたつもりは無いが、それに、俺もそこまで暇じゃないし」

「そっか……そうだよな。暇な時にまた誘っていい」

「暇な時があつたらな」

「うん、それでいい。ばいばい」

松島は手を振って帰っていった。

「凄い、昨日は何言っても聞かなかったのに」

「まっ、経験の差ってことかな」

「で、どうする。本当にこのまま一緒に帰るの」

斎条は小悪魔みたいな笑顔を俺に見せた。すると、繋いでいた手

を無理やりに引き離されて、間に伊藤が入って来た。

「駄目、また許可してないって言ってるでしょ」

「あーそうですか。五十嵐、一緒に帰ろうぜ」

「まーいいけど」

男子の集団の横を通ると、一人の生徒が低い声で言った。

「分かったよ。中本がそうするなら俺達は着いて行くまでだからさ」

会合があつてから数日がたった。松島は日に日に話し相手を増やしていつていた。斎条ともたまに話している所を見る。見た所みんな楽しそうで全く問題は無いように見えていた。その友達ごっこが続いていたのは、ゴールデンウィークの少し前までだった。

朝、クラスの男女がくつきり二つに分かれた。この時季ゴールデンウィークの計画を立てる。計画と言っても一日集まって映画を見て終るだけだ。もちろんそのことを知らない松島は、チャイムのギリギリまで来なかったのでクラスの異様さに驚いていた。

「なんか凄いことになってる」

松島はいつも通り斎条の横まで行った。

「で、どうすればいいと思う」

五十嵐が相談して来たのはどの映画を見るかという話だ。候補は三つあつて、多数決をとつても大差が無い。

「簡単な話し、全部見ればいいんじゃない」

「それだと、金が足りない奴いるだろ」

「この数だと団体割引が効くし、学生割引も付く曜日だったら三話見ても二〇〇〇円ぐらいで済むと思う。それに、見たくない奴はその分安く済むし、待ってる時間もこれだけいれば十分遊べるだろ」

この意見は、みんなが納得できて最後まで楽しめる内容だと思う。
「うん、いいんじゃない」

それでこつちの話は済んだ。が、順調に進んでいたように見えた女子の方は問題ができたようだ。

「だから、そんなの無理に決まってるでしょ」

声を上げて怒っていたのは伊藤だった。その怒りの矛先は予想通り松島だった。

「だって、楽しむなら楽しい方がいいに決まってるじゃない」

「だからって、そんなこと出来るわけないでしょ」

「何口論してるんだ」

複雑な顔をしている斎条に話を聞くと、松島が来るまでは映画を見ることになっていたそうだが、松島が遊園地がいいと言い出したようだ。多数決では遊園地がいいと言っているのは松島だけで、予算の問題でも無理だそうだ。

「そんなに行きたいなら一人で行けばいいでしょ」

「みんなで行くから楽しいんじゃない」

「友達が沢山できたと思って好い気になってるんじゃないよ」

「未来、それは言いすぎだよ」

斎条が止めに入ったが、睨み合いは続いた。

「そっちも映画ならさ、俺達と一緒に行かないか」

俺の誘いにみんな驚いていたが、男子達は楽しくなりそうな顔をしていた。

「でも、遊園地」

「お前は黙ってる。たまには人に合わせて話せ」

それだけ言うと、松島は黙り込んだ。

「みんなで遊ぶのもたまにはいいんじゃないか」

伊藤達は少し相談をした結果、一緒に遊ぶことになった。喧嘩の仲裁の冗談のつもりが面倒なことになった。

「よくやった中本」

「お前にしてはいいことするじゃん」

よく分からないが、男子達に揉みくちやにされながら褒められた。

「愛華ちゃん、今日は忙しいんだって」

昼休み、久々に俺の横に松島が座っていた。斎条達は本格的に動き始めたらしく、斎条を含めいつも話をしていた女子達は、誰一人

松島の側に寄り付かなくなっていた。その引金になったのは、今朝のあれだろう。実際、伊藤がそんな空気をいくら出そうと、簡単に無視できるわけが無い。でも、あんな状況を一瞬でも作ってしまうとドミノのように次々と広がっていく。もしかしたら、今朝のあれは伊藤の策略だったのかもしれない。

「愛華ちゃんは吹奏楽部に入っていてね、フルートをやってるんだよ。友達も沢山いてね、私にも紹介してくれるんだ」

聞いてもいないのに楽しそうに話始めた。これが、斎条や伊藤が嫌っている松島か。

「愛華ちゃんと出会えて沢山友達ができたんだ。愛華ちゃんは最高の親友なんだよ」

「そうですか」

「うん。でね、愛華ちゃんと同じ部活に入ろうと思ってるんだ。どう思う」

「どう思うって、それはお前が入りたいなら……」

「そうだよ。やっぱり入ったほうがいいよね。うん、そうした方がもっと友達できそうだし」

俺は自然とその場から立ち去ろうとした。

「何処行くの」

「お手洗い」

俺はそのまま屋上へ出る扉の前まで来た。そこには、伊藤と斎条が居た。隠れているようだが、ただ遠慮なく愚痴をこぼせる所を見つけたかっただけかもしれない。

「中本君、どうしたの」

「今朝は助かった。あのまま続けていたら私の方が悪いように見える所だった」

「どうせ、落としいれるための演技のくせに」

「んー、流石に分かったか。演劇部にでも入ろうかな」

伊藤は珍しく笑っていた。何が面白いのかよく分からないが、俺も少し面白かった。

「で、みんなで遊ぶことに関しては問題ないよな」

「そのことに関しては、散々愛華に頼み込まれた。一緒に遊びたいっさ」

「未来、言わない約束でしょ」

斎条は顔を赤くしながら伊藤を叩いていた。

「でも、駄目だから」

「はいはい、分かってます」

いつもの伊藤の注意にいつもの通りの返事を返した。

「それで、何をしに来たの」

「ちよつと聞きたいことがあつて、斎条っさ、松島の友達なのか」

「何を今更、友達のフリも今日まで、明日からはみんなで無視なの、即答で否定された。その顔はここ以外では絶対に見せないもので、彼女の印象をガラツと変えてしまうものだった。その顔を俺は初めて見た。小学校からの知り合いだったが、ここまで感情をむき出しにした顔は初めてだった。

「なら、友達になる気は無いんだな」

「無い、全然無い」

「そっか、今度は本気らしいな」

俺は、斎条に手を引かれ教室から一番に出て行つた。そのまま玄関を出て、長い道を歩いている。いつもより確実に早足だ。

「愛華ちゃん、一緒に帰ろう」

懲りずにまた松島が斎条を誘いに来た。しかし、今回の斎条は笑顔ではなく感情をむき出しにした顔だ。そんな顔をしていたが、松島が横に来るといつもの顔に戻った。決別を願っているのになぜ受け入れるような顔ができるのだろうか。

「ごめんね、私用があるから」

暗く冷たい声、笑顔が一瞬で氷の仮面を被つたように変わった。斎条の目は真っ直ぐに松島を睨み付けていた。それは、松島からの温かい笑顔を全て受け入れず、その返事に冷たくどこかに突き刺さ

るような攻撃をしているようだ。

「今日もなの、最近一緒に帰ってないよ。ねえ、今日だけでも駄目なの」

「何で私があんたの都合に合わせて遠回りしなきゃいけないの」

多くの生徒が居るのにも拘らず、斎条は地面を踏みつけながら今まで溜めていた思いを吐き出した。それでも彼女は本性を押し殺すように小刻みに震えていた。必死に押さえようとしても一端出始めてしまったものは止まらず、斎条は今までの不満を吐き続けた。

「あんたは私のこと友達だと思ってるみたいだけど、名前を呼ばれるだけで虫唾が走るの。今までは仕方なく付き合っていたけど、もう嫌、私に付きまとわないで」

斎条はそのまま走って帰ってしまった。俺の横を猛スピードで伊藤が走りぬけた。が、一端止まり松島の前まで来た。そして、俺に聞こえないように小さな声で何か言ったようだ。そして、伊藤も斎条を追いかけるように走っていった。

「何今の愛華ちゃん。それに、伊藤まで」

「さーな、一緒に話しながら帰るか」

「うん、たまにはいいかも」

第4話 友達にすがりたい時

帰り道はまだ明るい、俺達二人しか居なく寂しいものだった。歩いている間ずっと松島は、斎条の話ばかりしていた。

「最近の愛華ちゃん何か変なの、いつも教室に居ないし、たまに見つけても忙しいからって」

休み時間はいつも屋上の扉前に居たのだろう。

「話ができて『うん』とか『そうだね』しか返ってこないし、いつも疲れた顔してるの」

そりゃ、嫌な奴に付きまとわれたら疲れるよな。

「この前までは、遊園地に行きたいって愛華ちゃんも言っていたのに何で今朝は賛成してくれなかったんだろう」

その場しのぎで『そうだね』とか言っただけだろう。

「愛華ちゃんには困るんだよね。疲れているか何か知れないけど、それだけで雰囲気変えられたら話できないって」

「斎条とはどんな話をするんだ」

「色々話したよ。でも、いつも私から愛華ちゃんから質問されたこと無かったから盛り上がらないんだよね」

「斎条以外にどんな友達ができたんだ」

「沢山できたよ。でも、愛華ちゃんが一番仲良しかな、お互いが必要としている仲なの」

「そんなにいいのか、見た感じそんなにいい奴には見えないけど」

「愛華ちゃんのこと何も知らないくせに」

何も知らないくせに……その言葉が頭の中で木霊し、足が動こうとしなくなった。

「俺、やっぱ帰るわ」

もう少しで松島の家という所まで来ていたが、これ以上進むのが嫌になった。こいつの話を聞いていると、自分も感情を出してしまえそう。

「何で、そっちから誘ってきたのに」

「話しながら帰ろうって言ったんだ。お前と話していても、斎条のことしか分かんないだろ」

あの時から何年経っただろう。その時以来だと思う。ここまで自分の感情を表に出したのは。久々に思ったことを言えてスッキリもしていた。

「斎条の気持ちが分かったよ。お前、もう少し変わった方がいいかもな」

俺は、さよならの挨拶の代わりにそれだけ言い残し、松島から離れていった。

「変わるって何が、どう変われって言うの」

後ろから必死に叫ぶ声が聞こえる。その声に冷めた声で予め用意しておいた返事を返した。「さーな、一番の友達の斎条にでも聞きな」

次の日、ゴールデンウィーク前日なので、明日の話で盛り上がっている。いつもは分かれている男女だが今日は入り混じって話している。明日の予定にみんな興奮気味だ。特に男子達。いつもは話さない同士でも話している。友達の輪を広げる絶好のチャンスなのに松島は自分の席に座っているだけだった。俺も自分の席に座っていたが、話し掛ける事もなく大人しくしていた。しかし、それも斎条が来るまでで、伊藤と一緒に登校してきた斎条に近寄って行った。話し掛けているようだが、前面無視されているようだ。それでもしつこく付きまとっていた。

昼休み、雨が降っていて俺達男子は教室前廊下で何をするか考えていた。昼休みになると男子は教室から出てどこかに遊びに行つて教室は女子の話場として提供するのが昔からの慣わし、ルールみたいになっている。これも、小学校から自然としてきたことなので、伊藤達を作った暗黙のルールなのだろう。教室から男子を引き出していたのは五十嵐だったはずだ。

「何する、体育館は先輩でいっぱいらしいぞ」

小学校からの先輩だと言っても俺達はまだ入学したてだ。先輩達の中で遊ぶのは無理だろう。

「思いつきり走りたいよな」

「それなら童心に帰って鬼ごっこでもするか」

俺の提案にみんな反対はしてないが気まずい顔をしていた。

「いや、流石に廊下を走るのは問題だろ。先生に見つかったら面倒だしさ」

「だから面白いんだろ。無敵の鬼は先生で、先生の前では鬼でも歩くこと、捕まったら職員室前に待機、助けに行くのは可ってことでどう」

「いいんじゃない、廊下もいい具合に濡れていて滑れて楽しそうだし」

「怪我だけはするなよ。みんなそれで良いな」

返事をする代わりにみんな拳を出していた。

俺は校舎の隅だが袋小路になっていない所を見つけて、そこで隠れている。最悪なことに俺は逃げに入って、鬼に五十嵐が居る。奴は指揮するのが好きで、鬼達を上手くチェスの駒のように扱って責めてくるはずだ。そうなると、こっちは体力勝負だ。俺が今居る所は、後ろは行き止まりだが、前には階段左には長く職員室にいける廊下、逃げ道の確保は完璧だ。さらに、結露した廊下や階段を歩くと、擦るような音がする。逃げる側には最高の場所だった。

「付きまとうなって言っただでしょ」

後ろから聞こえたのは伊藤の声だった。即座に隠れたから何人いるか分からないが、伊藤と松島がいるのは分かった。

「愛華も嫌がっているのも分かったでしょ、あんたの友達って誰かいるの」

「いるよ、クラスのみんな友達なんだから」

「それはあんたがそう思ってるだけじゃないの。そんな自分勝手な所が迷惑なの、言っておくけど、あんたに友達なんて一人もいない

んだからね」

「何でそんなこと言われなきゃいけないの」

「言われなきゃって、みんなの嫌そうな顔見て分からないのが問題なの」

「分かるはずないじゃん。みんな笑ってるだけなんだもん」

伊藤と松島の口論は、俺が何とか聞ける声だが心に重く響くものだった。まだ、暴力まで行っていないからいいのだが、それも時間の問題のようだ。

「あんた明日からどうするの」

聞こえてきたのは落ち着いていて、伊藤でも松島の声でもなかった。

「愛華ちゃん……どうするって」

「友達もいないのに学校に来るつもり」

「でも、愛華ちゃんが」

「私は何？友達だとしても言うつもり、本当に鈍感なんだね」

「分かんないかな、もう来るなって言ってるんだけど、もう諦めたほうが楽だよ」

床を擦る音がして二人がこっちに歩いて来た。俺は逃げることもなく二人の顔を見た。その顔は、暗くもなく笑顔でもなくただ普通に歩いている時の顔だ。

「中本君、居たんだ」

伊藤達に見つかって、どうなるかと思ったが普通に接してきた。

その横にいた斎条にいたっては、笑顔で俺を見ていた。

「私も動くことにしたから」

斎条を残して伊藤は先に教室に戻っていった。

「伊藤って優しいんだな」

「うん、未来は優しいけど今の見ていてそれ言える中本君は変だよ」

斎条は笑顔で手を振って伊藤を追いかけて行った。

伊藤達が居た所には、小さくなって顔を伏せた松島がいた。その姿は今まで見せたことがないので、松島の明るくて騒がしい性格

からは想像のつかないものだった。

「捕まえた」

死角だった後頭部から腕が伸びてきて体を拘束された。そのまま首を絞められ始めた。

「ギブギブ、今は待ってくれ」

引き離れたそいつは五十嵐だった。俺は、五十嵐に今の状況を話して鬼ごっこを抜けることを告げた。

「分かった。がんばれよ、先輩」

「うるさい」

俺は小さくなっている松島の横に座った。座っただけで松島は今の気持ちを話し始めた。

「何を言っても笑ってくれてみんな私を必要としてたと思ってた。みんなの笑顔は無理してるんだって何となくだけど分かっていったんだ。分かっていったんだけど、私がみんなを楽しませているって思っちゃってさ、だから気のせいだ、きっとこんなもんだって自分に思い込ませたの。それに、みんなが友達じゃないって考えるだけで裏切ることになるし、唯一の救いも無くなっちゃうかもしれない。本当に一人になっちゃうかもしれないって思っちゃうの」

顔を深く伏せ俺に表情を見せないように話していた。松島が出す言葉一つ一つは、今まで苦しんで溜め込んでいた彼女の心からの声で、その言葉はどれも傷だらけのように聞こえた。

「最後の支えだった愛華にもあんなこと言われちゃって、本当にもう友達一人も居なくなっちゃった。伊藤の言う通り、学校に来るの止めようかな」

俺は立ち松島から離れた。今、彼女の顔が一番見たくなかった。

「学校に来るか来ないかはお前の自由だが、本当に友達はどうなのか」

「そうだよ。友達って呼べるのはもういないの」

「俺がお前の初めての友達じゃなかったのか」

返事は返ってこなかった。松島は俺が友達だったことなんてもう

忘れてしまっていたのだろう。あまり話さなかったし偽りとはいえず友達も沢山できていたから、俺なんて必要なかったのかもしれない。所詮、友達作りの切っ掛けにしか使われない存在だったのだ。それでも、松島の友達との付き合い方は、多かれ少なかれ俺にも責任がある。それに、クラスの輪から外れているこいつを救うのも俺の仕事なのかもしれないと思う。

「お前はもう友達だと思ってないかもしれないけど、俺は嫌じゃないぞ。明るくてお前と一緒に居ると退屈しないからさ。話す相手がない時は、俺が聞いてやるからさ」

「分かっているようなこと言わないでよ。一番の問題は中本君自信なんだよ」

後ろからの激怒した声に驚き振り向くと、目を赤くして松島が立っていた。さっきまで弱気な声を出していたのに今は強気な目で俺を見ていた。

「俺が問題ってなんだよそれ」

「はつきりしないから問題になってるの。中本君が」

松島が言いかけた時、チャイムが鳴った。チャイムを聞いた松島は、疲れたため息を吐いていた。勢いを失ったようにも見えたが、安心した顔にも見えた。

「続きは帰りでもいいか」

「うん」

第5話 手の繋ぎ方

「落ち着いたか」

「うん、もう大丈夫」

俺は、斎条の誘いを断り珍しく教室に最後まで残っていた。帰り道にクラスメイトがいるのが嫌だと松島が言ったので時間を空けて帰ることにしたのだ。時計は夕方を指していたが、まだ辺りは明るく気温も下がりちょうど良くなっている。

「そろそろ帰るか」

「まって、中本君」

教室を出ようとした時、松島に呼び止められ振り向いた。時間が経つのを待っていた時の顔とは違い、満足したような無理のない微笑の顔だった。

「昼休みの時は変なこと言ってごめんね。気にしないで良いから」

「気にするなって、あんなこと言われて気にならないわけないだろ」

「それは、そうなんだけど……」

松島は苦笑いをしながら視線をずらした。

「たく、話したくないなら良いけどさ。話せるようになったら話してくれよ」

「うん、そうしてくれると助かる」

「なら、帰るぞ」

「あ、あの、手繋ぐ？」

呆れた目で松島を見ると、手を差し出していた。顔を赤くして握ってくれるのを待っているようだ。それでも視線は合わせようとしてなかった。俺の返事が遅いせいで長い時間が経ってしまった。一分は経っていないが、お互いの間に気まずい空気が流れた。今の俺でもこれは松島のボケなのかそれとも本気の気持ちなのか分からなかった。

「ばーか、そういうことは、相手の目を見て言えるようになってか

らしな」

「うーボケたつもりなのに」

松島は笑いながら俺の横に並んだ。

学校を出て自転車小屋までに着くまで二人の間に会話はなかった。教室での空気を引き連れてきているようで、何を話せばいいかお互いで探り合っている所だ。話したいことは沢山あるくせに前みたいにし話掛けてこない。

「何か聞きたい事とかないのか」

自転車を押しながら聞いてみた。松島は俺達二人しかいない長い道を見ながら聞いてきた。今までの気まずさがが嘘のようにすぐに返事は返ってきた。

「友達を作るのって何でこんなに難しいのかな」

色々聞きたいことはあるだろうに真っ先に出てきた質問は、彼女が今一番知りたくて彼女が最も苦しんでいることだった。今の俺は簡単だと思っている。でも、松島の気持ちもよく分かる。悩む質問だが、聞かれることは分かっていた。だから、答えも用意できていた。

「昔からの付き合いだからもう友達の型ができているから、その中に入るのは難しいんだよ」

「型？」

「そ、こいつとこいつは仲がいいみたい。一人一人に役がある感じ。配役が決まった演劇団にいきなり入るのは難しいだろ」

「そうなんだ。それなら伊藤は団長だね。中本君は何なの」

「副団長らしい」

「らしい？」

「よく分かんがそうだった」

「いいな、知らないうちに良い役が来るなんて」

「そうか、俺は岩や木ぐらいの役でいいんだけどな」

暗い顔になりかけていたのが何とか笑顔になってくれた。

「副団長さん、どうしたら村娘その一になれますか」

「そうだな……お前は主張力が強いから……周りに合わせて変わって見たらどうだ」

「変わるってどんな風に」

「伊藤や斎条を相手には難しいけど、他の女子の側で黙って立っているだろ。質問された時だけ答えて必要以上に話さなくてもいい、取り合えずみんなをよく見る。そして、各自にあった会話を持ちかければいいんだ」

「なんだか難しそう。よく分からないし」

「簡単な話、話し相手によって自分の雰囲気を変えればいいんだよ」松島はさらに難しそうな顔をしていた。今の話の内容をすぐに理解できるぐらいならこんな問題は起きなかつただろう。人間関係について何も知らない所が彼女の良い所かもしれない。

「それなら聞かせてくれ。前まで通っていた小学校では、どうやって友達を作ったんだ」

「そんなの話し掛けたただだよ。逆にあっちから話し掛けて来たぐらいだもん」

「いい所だったんだな。転校は親の仕事か」

「うん、日本にはちよくちよく来てたけど学校は初めてかな」

「日本？前までの小学校って何処の小学校？」

「アメリカ、所謂、帰国子女。どう驚いた」

からかうような笑顔が俺を見ていた。初めての学校であんなことになって、よく今まで笑ってこられたと彼女の強さを知った気がする。

「ハーフなのか」

「えっと、難しいけど聞く？」

頬を掻きながら苦笑いをしていた。

「是非」

「えっと、お父さんのお祖父ちゃんがアメリカ人でお母さんがフランス人、お母さんのお祖母ちゃんがイタリア人でお母さんが中国人、

あとはみんな日本人」

「…………多、それに、アメリカ人の血薄。なんか沢山国名出てきたんですけど」

「あはは、ほとんどが日本人だから何とも思わないんだけどね。碧眼じゃないし、それに、どれもみんな人間だし」

松島にしては似合わない台詞が出て来た。彼女は国境や人種を全く気にしない大きな子だったのだと知ることができた。そんな彼女にとって、あの学校はあまりにも小さすぎるのかもしれない。

「いいじゃないか、そんな感じに話せばいいんだよ。楽しかったぞ」
「そう、ありがと」

松島の家に着いたが、松島は家に入ろうとしなかった。前回来た時とは違い明かりが点いていて、家の前には車が止まっていた。

「どうした、入らないのか」

「うん、ちよつと驚いただけ。私より先に親が帰っているなんて初めてだから」

すると新しく後ろから来た車が松島の家の前に止まった。その車から出てきたのは同じ年の男だった。その男を見るなり松島はそいつを連れて家の中に入ろうとしていた。

「ま、またね、楽しかったよ」

男を家の中に押し込んだ松島は、慌てながら手を振って家の中に入ってしまった。

「なんだか逃げられた気分だ」

帰ろうとした時家の中から松島の奇声が聞こえた。

「確かに言い出したのは俺だけど、流石に早過ぎないか」

「無計画だと伊藤達が文句言うだろ」

俺と五十嵐は、開園三〇分前の映画館の前にいた。映画館と言っても、それを中心色々な施設が集合している娯楽地区のような所で、休日になると多くの学生で溢れる所だ。それで、今日の予定はこの辺りでみんなで遊ぶというものだ。まだ何処も開いていないの

に俺達はなぜここにいるかと言うと、集合場所を連絡するのを忘れていたのと、どの映画をどの時間帯で見るのかを決めていなかったのだ。

「学校じゃなくても早いんだね」

伊藤と斎条が来た。制服のイメージが強い二人なので私服だと新鮮だ。

「おはよう中本君」

「おはよ、珍しいなこんな早くに来るなんて」

学校では遅めに来て団体で登場するのだが、伊藤と二人だけで登場した斎条が挨拶をしてきた。

「そのことなんだけど、五十嵐ちよつと私に付き合ってくれない」

伊藤が五十嵐を手招きしている。学校では見せない控えめな彼女の行動に五十嵐は含み笑いをしていた。

「付き合えといわれましても何処へでしょうか。この時間帯に行くような所があるのですか」

「いいから私に着いて来るの」

「はいはい分かりましたよ。私五十嵐はそこまで鈍感で馬鹿じゃないのでね。それに、伝えておきたいこともあったし」

五十嵐と伊藤はそのまま映画館前から離れていった。

「行っちゃったね」

「そうだな」

「二人つきりだね」

「そうだな」

「二人しかいないんだよね」

「そうだな」

何故そこで二人つきりを強調したがるのだ。確認したくせに周りに誰もいないことを見回していた。今日の斎条は妙に挙動不審に見える。一帯何を考えているのだから

「中本君。今日時間空いてる」

「まー見る映画も決めてないし暇って言うたら暇だけど」

俺は、ある一箇所に視線を送りながら返事を返した。斎条も俺と目を合わせないように遠くの方を見ていた。ので、今俺が直面している異様な威圧感、もとい重圧感に斎条は気づいていないようだ。

「それならね、もし良かったら一緒に映画見ない」

「別にいいけどみんなで見らんじやないのか」

「それはそうだけど……隣って言うか二人きりで見たいって言うかその……」

「それって……俺は一向に構わないけど伊藤はいいのか」

俺の視線の先には、多くのクラスメイトの目があった。その中にはもちろん伊藤の目もあり強烈な威圧感と殺気を飛ばしてきている。あれだけ離れていれば話は聞こえないだろうが、気付いてしまうとやりにくい。

「未来には午前中だけならいいって許可を貰ってきたから」

「そうか、ならいいけど」

「できれば一緒に遊んでくれないかな」

「いいけど、何して遊びたいんだ」

「えっと、うーん、お任せします」

「任せるって、ゲーセンぐらいにしか行かないと思うけど」

「うん、それでいいよ」

「駄目に決まってるでしょ」

伊藤が殺意むき出しの顔で俺の目の前まで来た。伊藤が来たことに斎条も驚いていて、残念そうな顔をしていた。

「未来、聞こえていたの」

「聞こえた聞こえないの話じゃないの。何で愛華を連れてゲーセンなの。もっといい所なんて沢山あるでしょ」

「いいの、行き先は中本君に決めてもらいたかったんだもん。それに、午後までは口を出さない約束じゃなかったの」

いつになく強気の斎条に伊藤は押され気味で、場の悪そうな顔をしている。そのずっと後ろでは、五十嵐達が俺達のやり取りをまだ見ていた。

「そうだけど……でも……」

「でもじゃない、約束を破るなら明日から遊んであげないんだから」
「分かった分かったごめん愛華、約束は守るから」

「あはは、流石の伊藤様も形無しですね」

笑いながらクラスメイトを引き攀れ五十嵐が戻ってきた。俺と斎条とのやり取りを見ていたせいかもしれない。余所余所しい。

「一人以外みんないるぞ。もう開いたみたいだから始めようか」

先頭を切って男子達が映画館の中に入って行った。俺も入ろうとすると、服を後ろに引つ張られた。そこには、目を合わせないようにしている斎条がいた。

「あの……手、繋いで」

「たく、そういう事は相手の目を見て言えるようになってからにしろ」

歩き出そうとしたが、さらに後ろへ引つ張られた。仕方がなく後ろを振り向くと、斎条が真っ直ぐに俺を見ていた。

「手、繋いでください」

顔は赤いが真剣な目で俺を見ながら手を差し出していた。学校では控えめで大人しいのに今日はやたら強気のようなうだ。強気と言うより覚悟を決めたような目をしている。

「たく、その勇気を買ってやる」

斎条の細く柔らかい手を握った。その手は力加減を間違えると壊れてしまうようなガラス細工のようなものだった。

「こらー、中本、なに手出してるんだ」

「伊藤、勘違いされるようなこと叫ぶなよ」

今にも飛びついてきそうな伊藤を五十嵐が羽交い絞めで抑えようとしていた。それでも、伊藤は五十嵐を引き摺りながら俺の後ろに着いて来ていた。

「どうして女はこんなことに必死になるのだから」

「でも、女の子はこんなことでも嬉しいんだよ」

俺の少し後ろを歩いている斎条が呟くように言った。握っている

手に力が入り俺を引っ張るように斎条が前に出た。

「早くしないと良い席なくなっちゃうよ」

「たく、席なんて何処でも同じだよ」

「でも、当たり前大きいと思うよ」

その時俺は、どうでもいいと思っていた。映画館の席なんてどうでもいいと、その時は簡単に思っていた。それ以前に松島のことなんて全く考えていなかった。

第6話 プレゼント

「ね、当たり前大きいでしょ」

「俺には策略にしか見えないが」

俺と斎条は受付でモニターを見つめていた。ここは、席を指定でき好きな場所を選ぶのだがまともな所が残っていなかった。始まるまで五分しかないのだが、朝早いこともあって俺達以外客はいない。俺と斎条以外のメンバーは、中央辺りを全て指定していて余っているのは、前の方でみんなからかなり離れる所と通路側一列ずつと明らかにわざとと分かるように残された二席。その二席はみんなが選んだ席の真中に位置していて、一番いい席のようだ。三〇〇席以上あるはずなのに三〇人弱でそれだけ買い占めたのには拍手を送りたい。

「斎条が好きな場所選べよ」

「うん、じゃあここ二席ください」

斎条が指さしたのは、不自然に空いた二席だった。確かに、ここ以外に座るとなると有らぬ噂を作られそうだ。

「中本君ってパンフレット買う方？」

斎条が指さしているのは、今から見ようとしているやつだろう。タイトルからして有りがちで始めの三〇分で結末が分かってしまう恋愛物だろう。そんな作品のパンフなんて買ったら見る必要すらなくなってしまう。

「買わない方。大体、それに書いてあることって始め一〇分ぐらいじゃん、今から見れるんだから無駄遣いは止めた方がいいよ」

「あはは、だつてさ未来」

俺達から少し離れた所で伊藤がパンフを読んでいた。席に着いてから読めばいいのに売店の前で読んでいる。斎条の側を離れたくないのだろうしかし、約束とやらで一定の距離に入れないようだ。

「うるさい、別にいいでしょ」

「中本君、そろそろ入ろうか」

中に入ると薄暗くなっていて、ギリギリだったようだ。が、誰一人座っていないかった。

「みんな早くしないと始まっちゃうのに」

「まさかな」

俺達は真中の席にポツンと座っていた。すると、暗くなり宣伝が流れ始めた。それでも、誰一人は行ってこようとしなない。二人しかいなくてこれだけ広いと不気味さすら感じる。

「誰も入ってこないね」

「そうだな」

「騙されたのかな」

「そつだろつな」

「ちよつと嬉しいかも」

「そうか」

そのまま話は始まった。話の内容は予想通りだった。ヒロインの女の子は靈感の強い一族に生まれた中学生。その子の幼馴染で好きな男の子、ヒロインの友達の子、幼馴染の友達が出てきて始めは有りがちな三角関係を描いていた。だが、急に現われたのがヒロインの許婚の男の子だ。ヒロインは無理やり幼馴染から引き裂かれて会えない日々を送るようになった。そして今はヒロインが許婚と喧嘩するシーンだ。

『どうして私の邪魔をするの。何で会わせてくれないの』

『君があいつのことを好きになってもらったら困るんだよ。君はあいつのことを忘れた方がいい。それが君のためにもなるんだ』

有りがちな展開、どうせこの後幼馴染と付き合うことになるんだろ。つまらない顔で横を見ると泣きながら見入ってる斎条がいた。始まってからずっと斎条は泣いている。正直気まず過ぎる。結局、誰一人入ってこないのだ。

『どうして、どうして彼のことを忘れなきゃいけないの』

するとBGMが止まり強ばった許婚の顔が映った。

『君は未熟だから分からなかったんだと思うけど、彼は人間じゃないんだ』

「うわ、そっちに行くの」

思わず呟いてしまう展開だった。横では、息を呑んで止まってしまった斎条がいた。

『亡霊の彼を野放しにできない。だから、今晚にはもう彼はこの世界から居なくなる。だから』

『それでも、それでも私は彼が好きなの。私のことは私が決める。誰がなんと言おうと彼を嫌いになれない。だって、初めての恋だったんだもん』

そしてその後は、消えてしまった彼のことを忘れられないヒロインが死者復活の禁術に手を出して死に掛けた時、死んだはずの彼が助けてくれて少しだけ再開できた。そして、告白しずっと忘れなから私の中で生き続けてとか何とか臭い台詞を言って終わったのだ。
「終っちゃった」

エンディングを聞きながら斎条は涙を拭いていた。エピソードに入っているのがそれほど見る気はないようだ。

「私、あのヒロインの子に憧れちゃった」

「そんなに可愛い子だったか」

「うんうん、演技してた子じゃなくてお話の中の子の方」

俺に微笑を見せながら手を握ってきた。そして、斎条はまた前を見た。

「自分で問題を全部解決して困ってる友達も救える強い子。誰にも揺るがされない自分の意思をしつかり持っていて、自分の思いを他人に伝えられる。誰かに着いて行くんじゃないってみんなを引っ張っていく子。私と正反対みたい」

繋いでいる手に力が入ってきた。

「私にも少しでいいからそんな強い心が欲しいよ」

「強い心……か、自分の思いを伝えるのにはそんなの要らないと思うけどな」

「どうして」

「伝えたいことを自分なりの言葉で必死に言えればいいだけだろ。伝わる伝わらないは別にして、本当に伝えたい相手ならその必死さだけで分かってくれるって」

「難しいこと言うな中本君は、そろそろ出ようか」
「そうだな」

俺達は手を繋いだまま劇場を出ようとした。

映画館を出た俺達はゲーセンに向かった。後ろからは伊藤を含めたクラスメイトがぞろぞろとついて来ている。

「なんか尾行されてる感じ」

「追い払ってあげようか」

小悪魔的な笑顔で後ろを指さしていた。

「いや、別にいいけど」

斎条を連れてきたのは景品を中心としたゲームが多い店だ。ここなら時間を潰すのには十分だろう。斎条も気に入ってくれたようで俺より先に入って行った。

「くまさんだ。くまさんだよ、しろくまさんだよ」

入り口近くには白くまが二匹入ったゲームがありそこから斎条は動こうとしなかった。

「斎条、まだ入り口なんだけど」

「くまさん欲しい。買って」

「これは買うんじゃないやなくて取るやつなの。やった事ないのか」

「冗談だよ。お得な五〇〇円玉登場ですよ」

財布の中には大量に五〇〇円玉が入っていた。相当やり込んでいるようで五〇〇円玉の山を横に置き挑戦し始めた。一枚、二枚、三枚……山はどんどん削られていく。

「あのさ、そろそろ止めておいた方がいいぞ。全然動いてないし」
くまの頭を掴んだアームはくまを持ち上げることなく元の位置に戻ってくる。そんなことを何十回も繰り返し返してる。いくら投資しか

た分らないが、買った方が安上がりになりそうだ。

「いいの、取るの」

「あーあ、スイツチ入っちゃった」

俺の横に尾行していた伊藤が来た。黙々と店に貢献する斎条を見て伊藤は頭を掻いていた。

「スイツチって何」

「愛華は取るって決めたら諦めないの。お金がなくなってもその場から動かないんだから、閉店しても動こうとしないから御情けで貰ったこともあるんだよ」

「そこは俺が何とかするから大丈夫だ」

「相当な自身ね」

「まーね」

財布の中には五〇〇〇円、これだけあれば十分だ。

「愛華はあのままでいいから少し話してもしない」

「お前から誘うなんて珍しい」

「飲み物奢るから」

「オレンジな」

店中の騒音がわずかだが和らぐ隅にある自販機コーナーで俺達は向かいあって座っている。

「で、話はなんだ。それに、今日は何を企んでるんだ」

「企むなんて……お礼を言いたくて、ありがとう」

「何がだよ」

「愛華があんなに笑っているのを見たの久しぶりなの。私が言えた義理じゃないけど愛華はあんと一緒に居るのが良かったのかもしれないね」

「今更そんなこと言われても困るんですけど」

「あの時は愛華をあんたに取られると思ったから……あの子だけなんだよね、私のこと心から友達って言ってくれて遠慮無しでぶつかって来てくれるの。だから、愛華には幸せになってもらいたい。後悔はさせたくないの」

伊藤はコップを捨て俺に背を向けた。

「あんたはどう思ってるか知らないけど、私はもうあんたのこと普通の子と変わらないと思ってる……うん、普通の男の子以上に認めてる。あんただけなんだからね、あんなだけやっても諦めないで未だに愛華と話できる男の子は。誰も文句言わない、私が言わせないから愛華のことお願いね」

「お願いされても俺は何もする気は無い」

「それでもいい、ただ、愛華の側にいてほしいだけだから」

そのまま伊藤はゲーセンから出て行った。

斎条の居る所へ戻ると足元にはビニール袋に入った白くまがこつちを見ていた。一つ取れたのに斎条はまだ挑戦をしていた。

「あーもー、あと一回か……」

二つ目に挑戦しているようだが、取れるような位置にはなかった。「あつ、」

くまは動かずその場にあった。斎条はその場にしゃがみこみくまを撫でているようだ。

「なー、一個取れたならそれでいいじゃないか」

「あとちよつと」

よく見ると、細い腕を取り出し口に入れて無理やりでも取り出そうとしていた。

「何やってるんだ」

「あ、中本君」

くまを抱きゲーム機から一步離れた。流石に今の行動は恥ずかしいと思っているのだろう。

「そこまでしてあれが欲しいのか」

「うん、だってずっと一緒に居たのに一人にしちゃうのは可哀想だから」

「ふーん、で、本心は」

「意地ですよ」

笑顔で言うには大きな損失だってようで、作り笑いか引きつって

いるだけに見える顔だった。

「でもやっぱり欲しいな」

ゲーム機の中のくまを寂しそうな目で見ていた。時折俺を見てため息を吐いている。

「そんな子猫を見るような目で見るなよ。こんなのは、こつさえ掴めは簡単なんだ」

一回分のお金を入れてボタンを長めに押した。

「中本君押し過ぎだよ」

「いいんだよこれで」

アームをくまの後ろまで持っていて、くまを前に倒した。

「あいよ、二匹目のくま」

「そんな簡単に取りれるの」

「こんな重い物なら持ち上げるより倒す方がいいんだよ」

係りから袋を貰って斎条に渡そうとしたが、首を振ってそれを拒んだ。

「私は持つてるし、中本君が持っていてくれる方がいいと思うの」
「持つて帰っても俺の部屋に合わない」

「あはは、ならこれから二人で少しずつ増やしていこうよ」

「また来る機会があったらな」

「そうだ、明日来ようよ。休みだし暇でしょ」

「気が早いな。夏休みになったらいくらでも付き合ってやるから」
「まーそれでいいよ、そろそろ戻らなきゃ未来が怒るね」

斎条が差し出した手を自然と握ると、微笑を返してくれた。

第7話 道化師とお姫様

映画館の近くに來た時左手を引かれた。俺の手を握っている齋条は小さなアクセサリーショップを指さしていた。商品を広げて真中におじさんが居るだけでお祭りなどの出店のような所だ。並んでいる商品は手作り感のある物で安い物が多かった。

「これ欲しいな」

齋条が手にとって見ているのは星と月が付いているネックレスだった。

「あつ、壊しちゃった」

慌てた目で俺に助けを求めている。齋条の手にはさっきまで一つだった星と月が二つに分かれていた。

「いいんだよ。それは元々二つに分かれるようになってるんだからおじさんはネックレスを簡単に一つに戻した。」

「……………これ、買ってやろうか」

「えっ、わるいよ。それにこれ高いよ」

確かに、一文無しに近い齋条にとっては高価な物だが今の俺にとってはそこまで困る値段ではなかった。

「そうか、なら」

俺はおじさんに代金を渡してネックレスを受け取った。そして、星と月に分けて星を俺のくまに月を齋条のくまに付けた。

「これで間違えることないだろ」

「ありがとう、中本君」

「礼ならくまに言ってもらいたいんだがな」

「ありがとうくま」

齋条はくまの手を取って上下に動かしていた。

「恥ずかしいのか」

「かなり恥ずかしいですう」

そこに伊藤が迎えに來た。俺は齋条を渡した、帰っていく齋条は

手を振っていて俺も手を振って見送った。

「いい加減隠れてないで出て来いよ」

「いやー面白いもん見れて良かったぞ」

柱の影から五十嵐が出て来た。ついて来ていたのは知っていたが、一部始終を見られていたと思うと恥ずかしくなってくる。

「あんなんでよかったのか」

「上出来上出来、伊藤も気付いていないようだし」

「何を企んでいるんだ。わざわざ大金をはたいて席まで買い占めやがって」

五十嵐は、みんなから回収したチケットの束で仰いでいた。

「一公開分全部買うと安く済むんだぜ。それに上手くいけばこんな出費痛くない」

「そんなにお前にとってメリットになったのか」

「メリットというより確信を得ることができたんだよ」

「確信って何のだよ」

「斎条はお前のことが好きだって言うことだよ」

「何を今更、そんなこと誰でも知ってるだろ」

小学校の時、斎条は俺に大々的に告白してきたのだ。誰に構うことなく己の意思を俺に伝えてきてそれが問題になったときもあった。それを五十嵐が知らないはずないのだが

「それと、斎条の意思は伊藤に影響を与えるってことだ。お前が斎条を上手く使えば伊藤をひいては女子全員を動かすことができるかもしれない」

「その何が楽しいんだか、やるならお前一人でやってくれ。俺は自分の欲望のために誰かを使うなんてことはしないんでね」

「そうか、お前がそう思ってるなら止めておくか」

つまらなそうな顔をして五十嵐はゲーセンの中に入ろうとした。

入る直前に何かを思い出したように振り向いた。

「そつだ。報酬代わりに情報提供。松島が来てるらしいぜ、伊藤の懐刀と歩いているのを見たから気をつけたほうがいいかもな」

「何が言いたいんだ」

「なーに、ここには欲しいものが沢山あるなっと思ってさ」

「……………たく、松島が何処にいるか分かるか」

「元副議長の情報網を舐めてもらっては困りますよ。今はCDショップ辺りに居るらしい」

「ありがとな」

俺は重い足取りで松島の居るらしい所に足を向けた。

「みんな楽しく遊んでるんだから頑張ってくれよ」

「やかましい」

CDショップの前には伊藤の友達の名がいた。彼女は表では体育会系のいい子なのだが、裏では伊藤の命令を忠実に実行する子だ。伊藤自身で手を下すことは少なくほとんど彼女がやっているのだ。本来なら喧嘩の仲裁や問題解決をしているのだが、あの時は椎名自身の意思とは反して色々やっていた。その忠実さが彼女の長所であり短所でもあるのだろう。

「仕事ご苦労様です。椎名さん」

肩を震わせこっちを見た。

「中本、仕事って何のことかな」

椎名は知らない顔をした。演技、行動、考え、彼女は昔と何も変わっていない。椎名がここにいるなら今松島に何をさせようとしているのかも分かる。なんと幼稚な考えとつかかり来たりというか椎名の考えることは相変わらずつまらない。

「この俺を誤魔化せるとでも」

「いや思っていますよ。それに、私はただここに立っているだけ、中本が何をしたらって私には関係ない。私はここに遊びに来ているだけなんです」

「いいのかよそれで」

「未来さんには悪いけど休日労働はしたくない方なので」

「夏休みずっと付きまとってた人がよく言う」

「違う。じゃあ私からのご褒美、最高の愛華の笑顔を見せてもらったから一時間だけ未来さんの仕事はなかったことにしてあげる」
椎名はシヨップから離れていった。俺はシヨップの中に入り松島を探した。

シヨップの隅にある演歌コーナー、そこに松島が居た。松島の趣味を疑うわけではないが、演歌コーナーで二〇分も動かないのは明らかに不自然だ。手を出したり引つ込めたり、辺りを見渡したり今からすることをみんなに教えているようだ。

さらに一〇分経ったころようやく松島が動いた。手に取ったCDを鞆の中に入れすぐにその場を立ち去ろうとした。

「待って」

「ごめんなさい」

腕を掴んで止めたとたんに謝り始めた。謝るぐらいなら始めからしなければいいものを

「いいから、顔を見てみる」

深く頭を下げていた松島はゆっくり頭を上げ俺の顔を見て安堵した顔を見せてくれた。

「なんだ、中本君か」

「黙ってる、こっちに来い」

俺は、シヨップの隅に松島を引つ張りこんだ。

「あの、見てたの」

「ああ、俺以外にも五十嵐と店員が二人ほど」

いつのまにかに五十嵐がお供を連れて来ていた。

「本当に、全然気付かなかった」

棚から顔を出して確認しようとした松島を無理やり戻した。

「馬鹿、自然を装え。確認したいなら上だ」

上には万引き防止用の鏡がありそれで店員がこっちを見ているのがはっきりと分かった。

「どうしよう」

「うるたえるな。いいか、ここの店は出入り口にセンサーがあつて、

商品を持っ たままだと出れないようになってるんだ。商品を戻せばいいだけだから出すんだ」

「うん」

商品を棚に返して早々に帰ろうとした時、松島が店員に呼び止められた。が、五十嵐達の助力もあり逃げ切れた。

俺達は映画館まで逃げてきた。入り口付近は広く時間待ちに使えるように椅子や自販機があり松島を壁沿いの椅子に座らせ俺はその横に座った。

「あのね、あれは」

「言わなくてもいい、分かってる。心からやりたかったわけではないだろ」

「うん」

「相手に合わせてみるって言ったけどよ少しは考えろよ」

「うん、分かった」

「ならいい、五十嵐にお礼言っておけよ」

「うん……羨ましいな助けてくれる友達がいるって」

「いい友達を作るのにはそれ相当の努力が必要なんだよ」

「努力？全くしてなさそうだけど」

ようやくいつもの笑顔が戻ってくれた。しかし、これ以上問題を起こされても困る。

「そうだな、ある国のお姫様と道化師のお話をしよう」

「道化師？王子様じゃなくて」

「それは話を聞けば分かる」

『ある国にお姫様が居ました。お姫様は笑うことも泣くこともせずいつも退屈な日々を送っていました。それを不憫に思った国王は、道化師を呼びお姫様の相手をさせました。その道化師は、国中の民に人気があり彼が居るだけで周りの雰囲気明るくなるぐらいでした。お姫様は道化師と出会ってからは毎日笑うようになりました。しかし、その笑顔は道化師を滑稽だと笑っているのではなく恋焦れ

る男性と一緒に居られて幸せだから笑っていたのです。それを知った国王は道化師に賞金を掛けました。人気者だった道化師でしたが国民に命を狙われるようになり国に居られなくなりました。国王が道化師を追い出した理由は、道化師と姫が結ばれることは都合が悪くただ身分が違うというだけでした。道化師と引き離された姫は泣きました。何日も何日も泣き続けどんどん衰弱していきました。国王は国中の医者を集めましたけどどの医者も口をそろえて同じことを言うだけでした。そんな日々が続いたある日、姫の前に仮面を付けた男が現われました。その仮面は無表情のものでその男のことで分かるものは声だけでした。ですが姫はその男が誰なのか分かりました。姫だけではなく国王も国民も誰でも分かったはずでした。分かっているのに誰もその男を捕らえようとはしませんでした。姫が昔のように笑ってくれるようになったからです。その後、仮面の男はずっと姫の側にいるようになり幸せに暮らしましたとさ』

「道化師って中本君のことでしょ。そのことなら聞いたことあるから」

「まーな、俺も色々頑張っていたんだぞ」

「そうなんだ」

「おう、みんなを笑顔にするのは大変だったんだぞ」

「でもそれってお姫様や国王様は幸せかもしれないけど、仮面の子自身は幸せなのかな」

松島に見られてその質問をされると即答できない。確かに昔に比べたら今の方がみんなよく接してくれるし輪から外れることもなくなった。でも、昔にはあった満足感は未だに手に入れていないような後味の悪さがある。でも、俺は仮面を外さないと決めたのだ。

「どうしてそんな事が言えるんだ」

「んー、お姫様と話している時や国民のみんなを笑わせている時は、仮面さんはどんな顔をしているのかなって思ったの。仮面は無表情だけど仮面の中の顔は笑ったり怒ったりしているんじゃないのかな」

目の前に顔を出してきたので横を向いて目線を逸らした。

「さーな、どんな顔をしてるんだろうな」

「今は笑ってるんじゃない」

しばらく笑顔を見せた松島は、深く息を吐き真面目な顔に戻った。「道化師さんは仮面を付ける事を選んだけど、私はそれを選ぶのは止めた。今日のこともそうだけど自分の本当の気持ちを隠すのはよくないと思うの。どんな顔をしてようとそれが本当の私なんだから本当の私を見てもらいたい。私はそう思う、たとえ村娘でお姫様に近づけなくてもそれでいい」

「それで今の状況に居ると」

「うううそれを言われると痛いかも」

「まっ、それがお前の生き方なら何も言わないから」

俺はそのまま帰ることにした。これ以上ここに居る理由もやることも資金もないからだけではない。これ以上友達とか計画とか厄介ごとに巻き込まれるのが嫌だからだ。

第8話 道化師は道化師であって…

そのまま何事もなくゴールデンウィークを終えまた平凡な学校生活が始まった。伊藤も斎条も元通りに戻っていて俺に近づこうとしない。松島も変わらずみんなの輪から外れていて何も改善されていなかった。むしろ悪化していた。机は倒され教科書がばら撒かれ悪口が書かれていた。それでも松島は笑って片付けていた。その笑顔の目と合ってしまった。

「中本君、おはよ」

いつもと変わらない笑顔で俺に挨拶を掛けてくれる。本当に何もなかったような笑顔で

「よく笑ってられるな」

「中本君だつてよく私の側にいられるね」

松島の机は教室の隅にあるので自然な形なのかは分からないが、みんなが関わりを持ちたくないと言わんばかりに机から距離をとっている。

「俺の席はここだ。ここにいて何が悪い」

「悪くはないですよ」

俺達は久々にそろって笑った。

「中本君、ちょっと話し聞いてくれる」

放課後、松島と他愛のない話をしている所に斎条が一人できた。笑っていた松島が黙ってしまった。廊下からは伊藤がこつちを見ている。

「ああ、悪いな松島」

「うん、気にしなくていいよ」

前までは俺より斎条を優先していたのに今は目すら合わせようとしていない。松島の中でも斎条を避けているのだろうか。これが、松島の本当の素顔なのだろうか

斎条に連れてこられたのは松島が泣いていた行き止まりの廊下だった。しかし、そこには俺と斎条しか居なく俺達を中心に何人かの生徒が付いてきているのが気配で分かる。見えない所で伊藤が連れてきているのだろう。

「話って何だ」

と口で言っているが伊藤が居ないので大体分かる。まっ、松島がどうこの話じゃないなら気楽な話で済みそうだ。

「小学校の時のこと覚えてるよね。あの時は一ヶ月も付き合えなかったよね」

「そうだったな、色んな妨害があつたから付き合ってる感じがしなかったし、な」

あえて廊下へ叫ぶように言った。

「それなら今からでも続きしない。あの……また付き合って欲しいな」

斎条の心から出て来た気持ち、演技でなく今まで押し付けられていた俺に伝えたかった本当の気持ちは、今までの抑制を全て跳ね除け俺にぶつかってきた。でも

「悪いけどもうそんな気分になれないんだ」

「どうして、この前は楽しそうにしてたじゃない。また一緒に遊びに行こうよ」

「遊びに行くのは構わない。だけど、付き合うことはできないんだ。悪いな」

「どうして、未来も認めてくれたんだよ」

「俺は道化師だ。道化師の仕事は人を笑わせること、退屈な日々にちょっとした刺激を与えるだけだ。始めはいいかもしれないけどずっと一緒にいると退屈するに決まってる。お姫様を幸せにするのは王子様って決まってるだろ」

「なら、王子様になつてよ」

珍しく必死に食らいつく斎条を見下すかのように笑った。

「何処の世界に道化師が王子様になるんだ」

斎条は下を見たまま話し始めた。小刻みに振るえて俺に表情を見せないように髪が降りてきている。しかし、ここで同じような光景を見たことがある。二人は何処か似ている所があるのかもしれない。似たもの同士は仲良くなれないのだろうか

「…………… 中本君変わったね。昔はいつも笑っていて親しげに話してくれたのに」

「変わったか…………… そうかもな」

「やっぱりあいつのせいなのかな」

「何を考えているか知らないが変な考えは止めろよ」

教室に帰ろうとした時、伊藤と出会った。すぐにでも殴りかかってくるかと思ったが斎条から離れた所へ連れて行かれた。

「あんたは愛華のことが好きじゃなかったの」

「そうだったかもな。でも、愛華を好きだって言える僕はあの時死んだのかもしれない」

「あんた……………」

「一度たりとも諦めたことなかった、この日が来るのをいつも待っていたのに」

「それならどうして、あんたを邪魔するもんなんて何もないんだよ。それよりかみんなお似合いだって応援してたのに何で」

「どうしてだろうな、ただ、愛華が可哀想に思ってたさ」

「可哀想って何で、断ったほうがもつと可哀想だよ」

「今の愛華は昔の僕の影しか見てない感じなんだよ。愛華にとって今の僕は昔を懐かしむだけの写真みたいな存在なんじゃないかって思ってたさ。でも、僕だって写真でいられない。写真じゃないって分かった時の愛華が可哀想でさ。愛華の性格だと辛くても黙って耐えてしまうだろ」

目を手で覆うようにした。仮面は外さないって決意したはずなのに日に日に崩れてきているようだ。

「泣いてるの」

「構うな。伊藤も斎条のこと考えてやれよ。あいつ、無理するから」

「…………分かった」

次は五十嵐に止められた。一帯こいつらは何重で警備してるんだか断ったのか」

「悪いか」

「全然、お前の考えだろ」

そのまま通り過ぎようとしたが、肩を掴まれ止められた。

「中本、今のお前は昔に比べて確かに親しみやすい奴になった」

「そりやどうも」

「だがよ、それでお前は楽しいのか。いつも人の顔色伺って自分の意見感情は滅多に表に出さないで俺達と一緒に居て辛いのか」

「何が言いたい」

「そろそろ演技を止めるよ。みんな、昔のお前の方が楽しそうだって言ってるぞ」

そのまま教室に戻った。そこには松島を含め数名しかいなかった。

「中本君、帰ろう」

「そうだな」

「愛華とは何の話をしたの」

「何かぐらい分かるだろ」

「うん」

松島との会話が続かない。彼女なりに聞いてはいけない領域に入らないように気を付けながら話しているようだ。

「聞きたいことがあるなら遠慮なく聞けばいいぞ」

「きこえない動きがなくなりいつもの口調になった」

「本当、返事は、返事はどっちにしたの」

「やっぱり興味があるのか」

「えっ、えっと……………」

笑顔のままで固まって俺を見ていた。返事を待っているのか質問したことに後悔してるのかどちらにせよいつもの松島だ。

「断ったよ」

「嘘、何で、どうして」

「率直に言うと疲れるからかな」

「そんな理由で断ったの」

「おう、それに、斎条のことだ、簡単には退かないはずだ」

「確かに、愛華の執念は強いと思うよ」

「良く知ってるんだな」

「そりゃー愛華とは友達だったんだから」

「演技だけど、だろ」

意外にも松島はそこで首を横に振った。昔を懐かしむようで古傷を見られたような悲しい顔をしていた。

「初めの一日だけは友達だったの。それは、お互いの好きな人の話をするぐらいの仲良し」

松島は俺より一歩前に出て振り返った。

「この前の道化師さんのお話の続き考えたんだけど聞きたい」

「それって、一番の問題は俺にあるってことか」

ただ微笑んでいるだけで質問に答えてくれない。

「聞かせていただきますよう」

『お姫様は隣国のお友達を呼びました。お姫様はお友達に仮面の男を紹介しました。仮面の男は、優しく誰にでも同じように振る舞うのでお友達も仮面の男のことが好きになりました。お姫様とそのお友達は、仮面の男が選ぶなら選ばれなかった方は諦めようと約束をしました。二人は仮面の男に気に入られるため色々とやりました。しかし、仮面の男はいつも無表情の仮面を付けているだけで笑っているのか泣いているのか分かりませんでした。長い時間が経っても仮面の男はどちらとも選びませんでした。そしてお姫様は気付いたのです。この友達さえいなければ、仮面の男が選ぶ必要すらなければ答えはすぐに出ると。お姫様は友達を国に入れなくなりました。友達と仮面の男を失ったその子は、泣いていました。しかし、その子の前に道化師が現われました。仮面の男とは違い感情豊かな表情

を見せてくれて毎日笑わせてくれました。その子は気付いていたのです。その道化師こそ仮面の男で本当の彼なのだと言っことに……」

「そっか、これでこの話も終わりを迎えるのかな」

「うん、そうなのかも」

確かにその時の松島は笑っていた。笑顔で心の底から見せてくれた笑顔、彼女は絶対に自分の心、思いは隠さないと思っていた。思っていたのに……

第9話 道化師は笑顔を呼ぶ

翌日から松島は学校に来なくなった。伊藤や椎名は今頃効果が出たのかとぼやいていたが最後に見た笑顔からはそんなこと微塵も感じなかった。松島が来なくなってから幾度になく斎条の告白攻撃があった。松島がいなくなっても変わらない学校生活を送っていた。そして、松島に再会できたのは夏休みに入る前日だった。

終業式が終ってから斎条の誘いを断り逃げ切るためにみんなが帰ってから帰ろうとした。誰もいない廊下を歩いていると、父兄の人が職員室から出てくるのが見えた。その後から出てきたのは松島だった。その時初めて松島の夏用の制服を見た。二ヶ月ぶりに会ったが変わっていなく左手首にリストバンドを付けるようになっていただけだった。声を掛けようか悩んだが母親に話してから向こうから来た。

「久しぶりだね」

「久しぶり、話でもするか」

「うん、教室に行こうよ」

松島は親に手を振って教室に向かった。

「なんだか新鮮だな」

自分の席の所に立って嬉しそうに黒板を見ていた。俺も自分の席に座ると松島はこっちを向いた。久々に見た松島の顔は最後に分かれた時と変わっていない。

「やたらと長い休みだったな、病気にでもなったのか」

「うん、ちょっと外国巡り。アメリカとイタリアとフランスと中国と巡って昨日やっと帰ってきたの」

「家族旅行にしては長過ぎないか」

「旅行ならよかったんだけどね」

松島は窓の外を見ながらため息を吐いていた。窓に顔が映っているが今、本当の彼女はどんな気持ちなんだろう。

「親戚のみんなに挨拶をしに行つて来たの」

「挨拶つて何の」

「私の我俣を聞いてくれてありがとうございました。これからは、修行に励みますつて」

「修行つて何の」

「花嫁修業、あはは、今時古いよね。私まだ中学生だつて言うのに」
声を上げて笑っていた。何処か俺の思っていた松島とは違う感じの笑い方だ。

「親戚みんなが私の帰国に反対だったの。私の世代で女の子なのは私だけだったからへんな期待を掛けられちゃつて、みんなうるさくてさ。フランスの親戚の所で修行することになったの」

「ふーん、で、学校を辞めると」

「読みが早いなー。涙の別れを期待していたのに」

苦笑いが今松島のできる最高の笑顔のようだ。明るくていつも楽しそうに笑っている松島のこんな顔を見るのは二回目だ。

「もう帰つて来れないかもしれない。向こうで結婚する相手も決められてるし結婚しちゃったら帰りにくいのはみんなを見ていてよく分かつてるから」

俺はまっすぐに見ているのに松島は窓の外を見ている。窓に反射して見える顔は我慢の顔だった。

「お前はそれでいいのかよ」

「仕方がないよ、みんなの期待に答えなきゃいけないんだから」

「お前無理してるだろ。お前は仮面を被らないつて決めたんじゃないのか」

振り向いた松島は泣いていた。拭いても拭いても涙は止まらず言葉より鮮明に伝わってきた。

「無理なんてしてない。無理なんて……」

全身から力が抜けるように椅子に座り込んだ。涙は止まったが笑顔が戻っていない。

「嫌なら嫌つて言えるのがお前の長所だったんじゃないのか」

「そうだけど……」

「たく、道化師の話の最後を変えなきゃいけないじゃないか」

『道化師と会っていたその女の子は旅に出なきゃいけなくなりまして。それを道化師に話すと道化師はこういいました。「たとえ君が何処に行こうが止めたりしない。そこで君が笑顔で笑っているならそれでいい。でも、悲しくて辛くて笑顔の仕方を忘れたらいつでも戻って来い。来れないなら俺が君を探し出して笑顔にしてやる。それが道化師である僕の仕事だから」』

『そして彼女は言いました。「それなら私の帰る場所を残して置いてください。笑顔を忘れてしまったら必ず戻って来られるようにするために」

そして彼女は笑顔で旅立っていきました。』

「終わりだな」

「うん、終ったね」

二人で満足した。最後はやっぱ笑顔になれてよかったと思っている。

「私が会いたいののは仮面の男じゃなくて道化師さんだからね」

「それなら俺からも、また会おうな」

「なにそれ、私が笑えなくなること前提なんだ」

「おう、道化師を懐かしんで絶対に戻ってくる」

「たく、まーまた会えたら幸せだね」

「ああ、またな」

「うん、またね」

夏休みが終つてすぐに松島の机は教室の一番前、黒板の横に置かれるようになった。そして、それ以来俺はその机に一番近い窓際最前列に席を置いている。もうそこに松島が座らないことは分かっている。でもあいつを一人にすると泣いている様な感じがするからだ。そんな中学校生活も今日で終る。散々あった斎条の告白攻撃から開放されると思つたが高校も一緒だそう。松島に関わつた奴ら伊藤も五十嵐も椎名もみんな同じ高校。今ここに松島がいれば笑って新しい

高校生活に期待を持てたはずなのに……でもあいつのことだ、向こうに行っても笑っているだろう。もう友達同士で喧嘩することも無くずつとずつと笑っていられるだろう。

「この机、大分汚れたな」

結局、あれ以来使われることの無かった机を雑巾で拭いていた。所々に松島の落書きがあつたりしてあいつの心が分かった。あいつは絶対に戻ってくる。それも笑顔で、今までに無い最高の笑顔で俺に会いに来る……それまでに俺は道化師に戻っていられるかな。

「中本、まだ残っていたのか」

俺の横に座った五十嵐は雑巾を見て含み笑いをした。

「居ちや悪いか、お前こそ一端帰ったんじゃないのか」

「お前が残ってるって聞いたんでね。結局、そこを動かなかったな」

「ああ、なあ五十嵐、俺、昔みたいになれるかな」

「昔といわれても色々あつて困るんですけどね。小学校でいじめられる前？いじめられた後？松島に会った頃？松島が学校を辞めた頃？生徒会長と議長をやり始めた頃？まーどれも卒業間近のやる気無しのお前に比べたらまともだぞ」

「やかましい。もういい。じゃあな、また高校で」

「待てよ」

出ようとする目の前に五十嵐が飛び出して俺を止めた。

「俺はどんなお前でもどんなに変わろうともずつと友達でいるから安心しな」

五十嵐が手を出してきた。その手にハイタッチをして帰った。

家に帰って新しく貰った中学校の卒業アルバム、もちろんそれには松島の写真は無い。小学校のアルバムにも載っていなかった。だからこそ俺はあいつの顔を忘れないようにしよう。

「窓際最後列か……因縁なのかな」

高校に入っても登校一時間前は変わらない。教室に一番乗りをし

て新しいクラスメイトの顔を見たいのだ。と言っても、伊藤や五十嵐もみんな同じクラスになっている。初めはその辺をしっかりしてからかな。

教室に入ると誰もいない…………と、思ったが俺の席の横に女の子が座っていた。とても可愛くて大人しそうな子だ。

「おはようございます」

「おはよう」

挨拶をちゃんと返してくれた。俺は自分の席に座った。これが、

松島が見ていた景色か……

「初めまして、僕は、中本慎也です。貴女は？」

「松島です。初めまして」

…………これは運命と言うのだろうか、それとも神様の悪戯か余りにもできすぎているような

「失礼ですけど名前を教えてくださいませんか。友達に同じ苗字の子がいるので」

「友美です。松島友美。友達の友に美しいと書きます」

「友美さん。と呼んでいいですか」

「はい、構いませんが」

「一番、と、思ったらやっぱり居たな中本、と、誰？」

軽快に入ってきた五十嵐は僕の所まで来た。

「彼女は松島友美さん。五十嵐、自己紹介は」

「松島さん……で、お前がそこ、面白すぎだろ」

口を押さえて五十嵐は笑いを堪えていた。そして、咳払いをして「失礼しました。俺は五十嵐誠です。よろしく」

「よろしく願います」

高校生活が始まって斎条に二回告白された頃、正確には入学式の次の日に席替えが行われた。場所の決め方はくじという担任の平凡な提案で決まった。

「先生、僕目が悪いので最前列に行っていていいですか」

中学校の時と同じ理由である場所に着けた。

「先生、私もいいですか」

それは友美だった。僕の横には友美が来て後ろには誠、誠の横には愛華が着くことになった。

「よろしくね、慎也君」

「ああ、よろしく友美さん」

「ねえ、慎也君の夢って何」

「夢か……そうだな」

外を眺めながらある一言が蘇ってきた。

「友達一〇〇人できるかな」

第9話 道化師は笑顔を呼ぶ（後書き）

はい、これで中本慎也の中学生編『道化師と村娘』は完結です。
次回は、中本の小学生編、中本が仮面を付ける切っ掛けのお話『仮面の道化師が生まれる時』です。
また、読んでいただけるよう頑張ります。

第10話 仮面の転校生

「電車行っちゃったね」

「そうだな」

「次は……二時間後だね」

「そうだな」

高校を入学して二週間が過ぎた。たった二週間しか経っていないが後悔している。有名私立校だからという単純な理由で選んだ自分が悪いのだが入学してから悪いことしか起きていない。

高校からの新しいクラスメイトを期待していたが五十嵐と斎条と伊藤と友美ぐらいとしか話さない。昔みたく輪を広げればいいのだが今のクラスメイトなら別に友達の輪にいらなくてもいいような奴が多い。文句を言うつもりは無いが事実なのだ。クラスメイトの特徴は勉強をしているか寝ているか携帯をいじっているかのどれかで自分の世界に引きこもっている奴らしいのだ。演劇で言う台詞のない村人から最悪な奴は木や岩並の奴だ。

それから、一番前に座っているからという理由で学級委員長に選ばれた。そのせいで色々と仕事をさせられるようになったのだ。委員長だからって黒板消しをすべて任せるのはどうかと思う。

そして、最も後悔しているのは学校のある場所だ。写真では綺麗で近代的な建物だったから安心してしたが、山奥にあるとは想像できなかった。そのせいで通学は電車となった。それもラッシュを逃すと待ち時間が半端ではない。

「もう真っ暗だね」

「そうだな」

ただいまの時刻は夜の九時。何故こんな時間まで学校にいるのかというと、

委員長だからだ。

てな分けて、僕はもう一人の委員長である友美と一緒に電車を待っているところだ。

「どうして返事が『そうだな』だけなの」

「たく、出会って二週間しか経ってないのにお互い名前で呼び合っているのを他人が見て変な噂ができてもおかしくないだろ。だから、できるだけ他人の振りしているの」

「何それ、出会ってすぐに名前聞いてきた男の子の台詞とは思えない」

「控えめな子ですよ。っていう猫を被っていた女の子には言われたくない」

「猫被っていてもいいじゃない。今は愛華や未来の前でも被らないようにしてるし」

「そうですか」

そう言いながらペンキのはげた木製のベンチに座った。友美もくつつくように座った。

「もう少し離れろ」

「えへ、ドキドキする？」

「何が『えへ』だ。演技下手すぎ。せめて手を握って言え」

「手握って欲しいの？」

「ばーか、繋いで欲しい時は目を見て言うって」

「そうですか」

友美は自動販売機に近づき適当に二本買って缶コーヒを僕に突き出した。委員の仕事で遅くなった時の暗黙のルールで交互に奢ることになっているのだ。

「演技って言えばなんだけど。五十嵐君に言われたんだけどね。私は猫を被るのが下手だって、で慎也君に教えてもらって言われたんだけど」

「あー下手だ。クラスの奴らなら十分だが俺達四人には通用しないな」

缶コーヒをちびちび飲みながら星空を見るのが最近の楽しみだ。そう思うと年を取ったのかそれとも松島と一緒に歩いた星空が懐かしいのかどちらなのだろうか。

「そうなんだよね。愛華や未来にもすぐばれたし。そういえば、四人って小学生からの付き合いなんだよね」

「そうだが」

「ねえねえ、小学生の頃の四人ってどんな子供だったの」
「……………」

小学生の頃か。僕達四人、いやもつと沢山の男女を巻き込んで起きた僕達の小さな戦いや事件事故。それがあつたせいで僕達の関係はおかしくなった。でも、それがあつたから今の僕達があるのかもしれない。

「覚えていないの？」

「いや、しっかりと覚えているよ。そうだな、電車が来るまでの暇つぶしには丁度いいかもな」

五年前…… 僕達が小学五年生だった頃の話だ。

五年生になってすぐにそいつは来た。先生と一緒に入ってきたその子は黒板に難しい漢字をいくつか書いて一言。

「よろしく」

読めなかった。書かれたのはたぶん名前だと思う。

「なあ、五十嵐。何て読むんだ」

前に座っている五十嵐を蹴りながら聞いた。

「瑠璃川珊瑚。それぐらい読めるだろ五年生にもなって」

「読める訳ないだろ。川以外全部同じ漢字に見えるぞ」

「はあ、バスケ馬鹿はこれだから困る。いいか、あれ位の漢字を読めなきゃ中学に入学できないぞ」

「ほ、本当？どうしよう未来。私、川しか読めない」

「大丈夫、私も読めないから。それにいい愛華、五十嵐の言うことの半分は嘘でもう半分は理解不能発言だから」

「失礼な。私五十嵐誠は純粋で素直に生きていますよ」

「よく言うこの前『人の不幸は私の幸せ』とか言ってたくせに」

「……先生、席を替えてもらえないでしょうか」

僕の横には転校生の瑠璃川珊瑚が立っていた。横の窓際最後尾の席が彼女の席のようだが、僕達四人のテンションが気に入らないようだ。

「ごめんなさいね。辛いでしょうが我慢してもらえますか」

「はあ……」

瑠璃川は諦めたように座った。それと入れ替わるように五十嵐が手を上げて立ち上がった。

「先生、不詳私五十嵐誠は瑠璃川珊瑚さんが早くクラスに馴染めるように全力をつくしたいと思います」

「よく言った五十嵐。クラスのために三年ぐらい休んでくれ」

「中本君、ナイスツッコミ」

斎条の good にクラスに笑いが起きた。これが僕達のクラス。五十嵐がボケて僕が伊藤がツッコミを入れて斎条が笑ってくれる。それを見て皆が笑って先生も笑う。そんなクラスに新しく入ってきた彼女はどの役をするのだろう。ボケてくれる？ツッコミ？笑ってくれるかな。

「僕、中本慎也よろしく」

明るく声を掛けた。

それなのに彼女は冷たい目をしていた。

ガラスの仮面をつけているようでまったく表情を変えず綺麗な顔で僕を見ていた。

笑うときつと素敵なんだろうなと思う。

僕と彼女との一番初めの思いでは二人が笑顔で笑っていたらいいなと思っていたのに彼女が言った一言は

「うるさい」

第11話 馬鹿な先輩

瑠璃川はクラスに馴染んでいなかった。自分から関わることを拒むような態度を取り僕達が差し出した手も振り払うような子だった。そんな彼女と話すようになったのは彼女も高みを目指す子だった分かった時からだ。

「中本君、今日もバスケの練習？」

「ああ、そうだけど」

僕はバスケットに入っている。と言っても小学生の部活ではなく中学生の部活に参加させてもらっているだけだ。初めは小学校の方でやっていたがワンマンプレイすぎるのと周りレベルが違いすぎるという理由で追い出された。今は大会の時に呼ばれるぐらいでそれ以外は中学校で練習している。

「見に行ってもいいかな」

「いいけど伊藤と帰るんじゃないのか？昼にそんなこと話していたみたいだし」

「あれは、今日は一人で帰るからって話していたの」

「ふーん、それじゃ行こうか」

中学校への道を二人で歩くことはよくある。斎条とだけではなく伊藤や五十嵐も付いてくるときもある。二人がいれば会話が弾むのだが二人だけだと沈黙の時間が多い。

「中本君ってさ瑠璃川さんのことどう思う」

中学校まで少しのところであろうく斎条が話しかけてきた。距離を開けて歩いていたが僕は足を止め斎条が横に並ぶのを待った。

「どうって、んー僕的には友達にしたいけど話しくいかな。なんでそんなこと聞くの」

「あのね、私も未来も瑠璃川さんと仲良くなりたいのね。でも、瑠璃川さんあれでしょだから皆で無理やりにも引き込んで仲良くで

きないかなって」

「んー仲良くなることには賛成。でも、無理やりは良くないな、今は馴れていないだけだろうしそのうち仲良くなれると思うよ」

「そんなものかな」

「そんなもんだ」

「おや、シンシン今日は彼女連れか」

「あの、私は彼女とかそんなのじゃなくてすね。あのー」

「ただの友達ですよ。それよりキャプテン皆は？」

あたふたしていた斎条がため息を吐き落胆しているのをキャプテンは笑いながら見て武道館の方を指さした。そこにはバスケット部の皆以外にも多くの中学生が集まっていた。

「皆何やってるんですか」

「部活破りが来てるんだってさ」

「部活破りって何ですか？」

「自分の力がどれだけのものか他の部活に勝負を挑みに行くことですよね」

「なんだ、中本君のことか」

「はは、違うない」

キャプテンはハーフ以上ある距離からかつこよくシュートをして見せた。だが、無常にもリングに弾かれた。キャプテンの横にいた僕はすぐにゴール下まで行き何とかリバウンドを決めた。

「さすがシンシン。君の彼氏かつこいいねえ」

「はい」

「おいおい斎条何返事してるんだって、それにキャプテンかつこ悪いうえに無茶すぎです。ほとんどやけ投げじゃないですか」

「ふん、彼女持ちの野郎に何言われようとなんとも思いませんよ。」

いいよな彼女、俺全然できねえし……誰か紹介してくれねえか」

バスケット部キャプテンで頼りがいがあって頭もよくて生徒会長もやっついて見て見た目も悪くない。だけど、キャプテンにはもてない理由

があるのだ。

「小学生の僕に何言ってるんですか。中三のくせに」

「でも私キャプテンさん嫌いじゃないですよ」

斎条の一言にキャプテンは異常な反応を見せた。斎条自信は励ますつもりで言っただと思うが、キャプテンの耳には告白のように聞こえるのだろう。

「マジで、斎条ちゃんだったけど今からでも遅くない。中本なんか捨てて俺と付き合えないか」「あっあのう、……中本くん」

キャプテンに手を握られてあたふたしている斎条は僕とキャプテンを交互に見ながら僕に助けを求めている。

「いいんじゃないの付き合えば」

ユニホームに着替えて軽くシュート練習をしながら気楽に答えた。「ええ、でも、私は……中本君の方が」

「あーあーあー羨ましいぞシンシン。俺の愛しの斎条ちゃんの熱い眼差しを独り占めとは」

「いや、ただの友達だから」

「そう……ですよね」

「シンシン女の子を悲しませるのは感心しないな。こうなったら斎条ちゃんを賭けて勝負だ」

「結構です」

ビシッと指を指して宣戦布告したキャプテンを無視してシュート練習に集中していた。

「なあーあシンシン、勝負」

「しつこいですよ。その勢いで斎条に告白すればいいじゃないですか」

「いやーマジな話今日部活できそうなのシンシンしかないんだよ。だから、一対一で勝負」

「？皆何やってるんですか」

キャプテンは武道館の人ごみを指さして苦笑いをした。

「部活破りの観戦。どうやら女の子が来てるみたいでさ」

「ふーん、ならいいですけど。ハーフコートでいつもみたくなりませんか」

キャプテンにボールを渡してゴール下に付いた。

この部のハーフバスケのルールはボールを持つている人以外がデフエンスになってボールを奪う。奪ったらハーフラインを踏んで攻撃になる。これの繰り返しでシュートを決めたらその人の得点になる。スリーポイントラインより内側でシュートをするのが僕専用ルールだ。なぜならハーフラインまで離れていてもどんな体勢でもシュートできるからだ。

「斎条ちゃん見ていてくれ俺の華麗なる勇姿を」

キャプテンは斎条に親指を立てて白い歯を見せた。

「あの……中本君頑張ってる
「はい」

三十分後

「もう駄目、体力の限界」

「キャプテン大丈夫ですか」

「なんとか。て、なんでシンシンは平気な顔してるんだ」

「キャプテンと違って体力ありますから」

「小五の餓鬼に言われたくない」

キャプテンはゴール下で大の字になって倒れていた。

勝負はキャプテンの降参で終わった。動きの鈍いキャプテンからボールを奪うのは難しいことではなかった。それより酷かったのはデフエンスだ。動きが重いのに無駄に飛んだり走ったりしていたキャプテンはすぐに体力が尽きた。それにくわえて最後のダンクシュートがあだとなったのだ。

「あの……大丈夫ですか。汗、沢山出てますよ。立てますか？」

キャプテンに近づく斎条。これで水と救急箱を持っていたらマネージャーに見えるんだろうなと思っ

た。

「さ、斎条ちゃん。た、立てないからその柔らかい体で……いや、肩を貸してくれないか」

「キャプテン。シュート決めたら頭に直撃ですよね」

ボードにボールを当ててまた自分の手に戻す基本動作をあえて力を強めにやりながらキャプテンに作り笑いを見せた。

「じ、冗談だつて、シンシン目がマジだし。ほら立てる立てる」

即座に立ちあがりゴール下から離れた。

キャプテンがもてない理由それはキャプテンが生粋のロリコンだからだ。

「でも、最後はすごかったです。あんなに高く飛んでバーンて」

斎条がキャプテンの真似をしてジャンプをして見せた。

「斎条ちゃん違う違う。うーんこうなったら俺が手取り足取り腰取り」

「え、私そんなつもりじゃあ」

「キャプテンさっきから変な発言しないでください。それより早く保健室行ったらどうですか」

「ありや、ばれてたか」

「あたりまえです。体力が尽きたぐらいで倒れこむ人じゃないですよ」

この部活の人で本気でやりあったらキャプテンだけが僕とやりあえるのだ。今日のキャプテンは明らかにかつこよく見せるプレイをしていたからあんな結果だったただけだ。

「怪我したんですか、早く保健室行かないと」

「おお、さすが斎条ちゃん。肩をいや体全身で傷付いた俺を支えてくれ」

「キャプテン、僕の手には当たると痛いボールがあるんですよ」

「いや、マジでシンシンでいいから肩貸してくれないか」

立つことで背一杯のキャプテンに肩を貸し保健室に連れて行くことにした。

この中学校には多くの小学生が出入りしている。お互い近いこともあるが小学校からこの中学校に入学する生徒がほとんどだからと言うことが一番だろう。放課後になると小中関係なく出入りをしている。僕みたいに部活に参加する小学生も少なくは無い。だが、この保健室は少々変わっている。

「早瀬先生馬鹿なキャプテンお願いしまーす」

「シンシン俺は馬鹿ではない。ロリコンなだけだ」

しばしの沈黙。いつもなら早瀬優雅先生の鋭いツツコミが来る所なのだが今日は何も飛んでこなかった。

「あれ？」

机の前に座っていたのは白衣を着た早瀬先生の妹、早瀬舞だった。彼女は不思議そうな顔をしてキャプテンに一つ質問をした。

「赤井さんロリコンって何ですか」

「んー早瀬ちゃん、『さん』じゃなくて『先輩』って言うて」

「と言う発言をするキャプテンのこと」

「赤井……先輩？」

早瀬は小首を傾げながらそう呼んだ。キャプテンは身悶えながら満面の笑みを見せた。

「先輩元気になったみたいですね」

斎条のふとした一言にキャプテンは異常なまでの反応で斎条に近づいた。

「斎条ちゃんまで『先輩』と呼んでくれるか。羨ましいだろシンシン『さん』とか『君』には無い憧れのまなざしを感じるこの響き」

「赤井虎之耶先輩、早く足見てもらったらどうですか」

キャプテンの足首を軽く蹴った。

「いつ……たくない。そう、俺は今幸せなんだ。可愛い後輩二人から『先輩』と言われて幸せなんだ。だからこんなの全然痛くない」
キャプテンは痛みか感激か分からない涙を流している。

「うわ、この人本物の馬鹿だよ」

「赤井先輩怪我しているのですか？ならここに座ってください」
早瀬はソファを叩きながらキャプテンを手招きした。
「はいはい」

第12話 苗字と名前の違い

「捻挫ですね湿布貼っておきますよ」

さすが早瀬妹、兄の優雅とは違い判断と処置が早い。もしかしたらあの人より保健室が似合っているかもしれない。でも、保健室にぬいぐるみが増えていくのはいただけない。

「ねえねえ、中本君あの子……」

「斎条は初めてだっけ、早瀬舞さん早瀬こいつクラスメイトの斎条愛華」

早瀬は持っていたキャプテンの足を床に落とし斎条の前で一礼した。

「初めまして斎条さん」

「こちらこそ初めまして」

「早瀬ちゃん……助けて」

悶えるキャプテンの助けの声を遮るように意外な奴が来た。

「早瀬いるか」

五十嵐だ。メモを持って現われた彼はどこかやる気のない顔をしていた。

「なんだ、中本もいたのか」

「いちゃ悪いか」

「いや、はあ……それより早瀬いないのか」

「はいはい、あ、五十嵐さん」

「あ、五十嵐君」

「斎条……だからか……」

斎条を見た五十嵐は少し嬉しそうにしかし疲れたような顔をしていた。

「五十嵐さん私に用ですか」

「ああ、そうだった」

メモを広げたため息を吐き嫌そうな顔で読み始めた。

「『早瀬舞へ貴様の兄優雅は預かった。返して欲しければバニーガールの格好をして武道館へ来い。さもないと優雅をサッカーゴールに貼り付けにする』と、笹山かりんからの伝言だ」

なんだ今の伝言は、そのへんてこ伝言を五十嵐に読ませる笹山かりんとはどんな奴なんだ。

「簡単に言うつと優雅が手伝いに来て欲しいと言っていたつてことだ」

「柔道部の人の怪我はそこまで酷いものではないと聞きましたが」

「そうだったんだがな弱っている柔道部員の関節を片っ端から外していった馬鹿がいるんだ」

「笹山さんですね」

「ああ」

二人そろって重いため息、笹山かりん。いったい何者。

「よく分からないけどそいつ捕まえなくていいのか」

「捕まえてもらつたけど見る？」

「なんだか珍獣扱いだな」

「珍獣の方が可愛いかもな。入って来いよ」

小学三年生ぐらいの女の子が羽交い絞めにされて連れてこられた。連れてきたのは瑠璃川だった。

「あちきを怒らせたら国際問題になるぞ。いいか、あちきの力で前らを日本から追い出すことなんて簡単なんだからな。放せ放せ放せ放せ放せ」

「瑠璃川放してやってくれ、これ以上騒がれると頭痛がする」

五十嵐は頭を押さえていた。瑠璃川は絞めるのを止めたただと思う。それなのに笹山は突き飛ばされたように床に倒れこんだ。

「あう、なにをする。いきなり突き飛ばすなんて」

「いや、私はただ」

「保健室に連れてきて何をするつもりだ。もしかして……あちきは知らないぞ学校を爆破する非常ボタンがどれかなんて知らないぞ」

笹山はカーテンに包まって隠れてしまった。

「何だよあれ」

「それより早瀬早く行ったほうがいいぞ」

「はい、それでは失礼します」

早瀬は救急箱を持って武道館へと走っていった。

キャプテンは部員に話をしてくると言い残し保健室を出て行った。本人は気付いていないと思うが置いてきぼりにされて寂しい顔をしていた。

しばらくするとカーテンは左右に揺れ始めた。

「あれなに」

「なにつて物扱いはよくないよ」

「斎条悪いが俺も中本の意見に賛成だ。怪我人にトドメを刺すような奴だしな」

「そう言えば柔道部員の関節外したんだっけ、瑠璃川そんな奴よく押さえられたな」

「別に、バット振り回して疲れたのを捕まえただけだし」

「バットまで使ってたのか」

「ああ、関節技をかけられないとそいつのケツをバットで叩くんだ。でも、瑠璃川なら簡単に押さえることできるだろあれだけやれるんだから」

瑠璃川は答えずそっぽを向いていた。相変わらずのクローズドハート。

「そうだ。あの笹山かりんだっけ、あの子が部活破りに来た子なのか」

「いや、部活破りは瑠璃川だぞ」

意外だった。背は僕より高いけど筋肉質には見えない。話を聞くなりでは瑠璃川一人で柔道部員全員を倒したそうだ。それだけやって何もなかったような顔をしている彼女はそれなりの実力者なのだろう。

「瑠璃川って強いんだ」

「強くない」

それだけを言い残して瑠璃川は保健室を出て行った。

「あいつ怪我してたのにいいのかな」

「怪我してたのか」

「笹山に噛まれたときに左肩ぶつけていたからな、本人は大丈夫って言っていたけど相当やばそうな音してたから」

音？もしかしたら骨が折れた？いや、それなら笹山を抑えることはできないはず。とにかく確認はしておいた方がいいな。

「瑠璃川が心配だから帰るな、じゃ」

「それなら私も」

僕に付いて帰ろうとする斎条を五十嵐が呼び止めた。斎条は気まずそうな顔をして振り返った。

「斎条、伊藤が探してたぞ。放課後の約束はどうなったんだって。お前を見かけたら連れてきてくれて頼まれてたんだ」

「なんだ斎条、伊藤と帰る約束してたのか？さっきはそんなこと言っただけだったよな」

別に責めるつもりは無い。斎条が本気で嘘を付いたことは今まで一度も無いからだ。ただ、斎条は何かと他愛も無い嘘を付くことが多くこれぐらいの小さな嘘は日常茶飯事だ。そのことを反省してもらうつもりで責めるような質問をした。

「えっ、あのーそんなこと言ってたわけ？きつと未来の勘違いだよ」

「でも伊藤の奴全校放送で呼び出してたぞ」

斎条は赤くなっただけでほとんど小さくなってた。それでも否定し続ける斎条が少し可愛いと思った。

「まあどっちでもいいや、伊藤が用事あるんだっただけでやれよ」
「でも、でも、……」

「瑠璃川のことなら僕一人で十分だから心配しないでいいからさ」
「………分かった」

斎条は僕にさようならと言い残し保健室を出て行った。その背中はどこか寂しく小さく見えた。

「じゃあ俺も帰ろうかな」

「なんだよ五十嵐、あれの相手しなくてもいいのかよ」

左右に揺れるカーテンを見た五十嵐は苦笑いをした。

「あはは、当然じゃないか謹んでお断りします。それに、ここに長くいると先生達に共犯だと思われそうだし」

五十嵐は逃げた。

「結局一人で帰るのか」

「あちきが一緒に帰ってやろうか。途中でアイス奢ってくれるなら手繋いでやつてもいいぞ」

カーテンの隙間から顔だけを出して笹山かりんが話しかけてきた。身長は低く小学三年生だろう。性格も明るくて変わったところもあるけどそれを帳消しにするぐらい可愛いと思う。なのに、なぜキャプテンの反応はあんなに薄かったのだろう。

「まあ紳士な僕としては家まで送るのが礼儀なのだが……すまない。先生達が来たようだ。これ以上君に関わると面倒なので失礼するよ」
「こら待て、あちきを生け贄にするつもりか、お前の犯した罪を全てあちきに擦り付けるつもりだな。ふ、まあいいさ、あちきがこの血肉でお前の罪を全て償ってやろう。そして、あちきの屍を見て己の罪の重さを知れ！」

一つ訂正させてもらおう。僕は何一つ悪いことなどしていない。
瑠璃川に追いつくため急いで中学校を後にした。

「あれが中本慎也か……マコちんの言っていた通り本当に鈍感で馬鹿な奴」

カーテンから出て埃を払った。まだ手にはあの感触が残っている。確実にやった。やったはずだったのにあの瑠璃川とか言う女は平気な顔をしている。あんな女がユメちゃんのライバル。正直ユメちゃんに勝算は無いと思う。確かにユメちゃんも強い。でも、リュウちゃんを倒せるのはあの女だけだと思う。

「にしてもあの中本とか言う男」

保健室の窓から中本が走っていくのが見える。その先には瑠璃川。
「中本慎也って……最低だな」

保健室に入ってきた教師一同を睨みしマコちんの様子を見に行くことにした。

「おい、待てよ」

校門を出た所でようやく瑠璃川に追いついた。左肩には竹刀が入っているであろう長い袋、左手には柔道着を持っており怪我をしているようには見えなかった。その柔道着を縛っている帯びは黒帯で金色の刺繍で名前が書かれていた。

「何か用か」

「いや、五十嵐からお前が怪我をしたって聞いたから」

「……………」

心配しているのに睨まれた。怪我のことには触れられたくないのだろうか。無言で歩き出してしまった。

「おい、無視するなって、お前無理してるのか」

瑠璃川は立ち止まりさつきよりも鋭い目付きで睨まれた。武道家としての彼女の気迫は僕の動きと声を止めた。まるでガラスの破片を突きつけられたような緊迫感と冷たさが僕の目の前にあった。

先に動いたのは彼女だった。ため息を吐いた彼女からは先ほどまでの鋭さは感じないが近づけない間合いを作られたようだった。

「心配してくれるのは感謝する。だが、人を呼ぶときは名前を呼ぶものだろ」

そのまま歩いていってしまう。

「待てよ珊瑚」

「なっ！」

止まった。しかも今度は睨まれていない。けど、……………すっごい見られてる。

「今なんと言った」

「だから待てって」

「違う！その後だ」

「はあ？珊瑚？」

赤くなつた珊瑚は地面に向つてブツブツ呟いていた。よく聞こえないのですぐ近くまで寄つた。すると、今までとは違う喋り方で何か言つていた。

「そりや、名前で呼べつて言つたけど普通苗字だろ。いきなり名前でなんて……」

「苗字の方がよかつたのか」

「……」

後ろに跳び竹刀を向けられた。

「い、いつの間に近づいた」

「独り言を言つてるときに、苗字で呼んだほうがいいのか」

珊瑚は空を見上げてどこか嬉しそうな顔をしていた。

「そうだな、名前で呼ばれるのも悪くない」

その時僕は初めて珊瑚の笑顔を見た。その笑顔は斎条の笑つている顔とは違つて微笑んでいるだけだがとても綺麗で心が温かくなる笑顔だつた。

第13話 野望と臨海学校（前書き）

誠に勝手ながら一部分削除させていただきました。
お話の流れにはまったく変更ありません。

第13話 野望と臨海学校

その日を境に珊瑚と僕達はよく一緒にいるようになった。一緒にいるようになったが珊瑚はあまり話さず僕達の質問に答えてくれるようになっただけだ。

珊瑚は武道全般が得意で全国大会でも優勝したことがあるそうだし、珊瑚の夢。武道家の珊瑚としては意外な夢だった。

「復讐？」

「復讐というよりは野望というのだろうか……どうしても倒したい奴がいてそいつを探しているんだ」

「倒したい奴？名前は」

「龍真」

「龍真……苗字は？」

「それが分からないのだ。そいつの友達がそう呼んでいたから」

「親の仇だったりして」

「……」

「冗談だろ」

「兄を……兄さんに勝つことができたのは龍真だけなんだ」

「兄貴？それと珊瑚と何が関係あるんだ」

「私の夢は兄に勝つこと、兄はもう……だから龍真と一度戦ってみたい」

珊瑚にとつての目標もしくは壁であったであろう兄。その兄がいない今彼女の目標は兄と同じかそれ以上の実力者の龍真になったということか。もし、珊瑚が龍真に会うことができたかどうか、どうするのだろうか。一対一の勝負を挑むのだろうか、全力を出して自分の力がどれほどのものか確かめるのだろうか、自分には兄以上の実力があるのか確かめるのだろうか。

「龍真か……」

「知っているのか」

「いや、知らない」

「そうか……」

「五十嵐たちにも聞いてみるよ」

「いい、龍真はこの近くの小学校に通っていると聞いた。時期にある大会に出てくるはずだ」

「大会ねえ…… かぶつてなかったら応援しにいくよ」

「中本も何かの大会に出るのか」

「ああ、バスケの大会に」

「そうか、なら私も応援に行こう」

僕は嘘をついた。それも大きな嘘だと今になって後悔している。

咄嗟についたこの嘘は珊瑚を傷つけたくないためについた嘘だが後にもっと彼女を傷つけることになると思うのはずっと後だが

「そう言えばそろそろ臨海学校だな」

「唐突だないきなりどうした」

「いや、珊瑚は誰の班なのかなって思ってた」

小中合同で行われる行事。小学生の面倒を中学生が主体で見るという伝統行事だ。

臨海学校でやるイベントは色々あるが全て班で行うものだ。班と言うのは中学生一人に対して小学生五人の計六人となっている。ちなみに小学四五年生が参加することになっていて僕は今年で二回目だ。

「確か…… 赤井虎之耶だったはずだ」

「キャプテンなら僕達と一緒にだな」

「そうか……」

珊瑚は表情を変えていないが僕には薄っすらと微笑んでいるように見えた。

「中本たちと一緒に楽しみだな」

今僕達は臨海学校の目的地『北斗七星』を目指してバスに乗っている。

「ハローうら若き乙女達と野郎共、生徒会長の赤井虎之耶だ。乙女達は『先輩』野郎共は『生徒会長様』と呼べ。臨海学校の三日間、おもったいきり楽しもうじゃないか。ただし、いいか野郎共俺に迷惑をかけるなよ」

キャプテンが挨拶をしている。あんな人だけどしつかりと生徒会長の仕事をしているようだ。

「コノちゃんマイク貸せ」

狭い通路を走ってくる女の子がいる。補助席を飛び越えキャプテンのマイクを奪い取った少女はかりんだった。

「いつもあちは縛られ続けていた。しかし、あちは今日から三日間の自由を得た。教師の暴力から解放されたあちはここに臨海学校開催の花火を上げよう」

彼女がリュックから出してきたのは本物の二尺玉の打ち上げ花火だ。そして、右手にはジッポが……

彼女の周りの生徒は一齐に後方へ逃げた。バスは今高速道路を走行中。逃げ場を完全に失った僕達は彼女にわずかでも常識があることを願った。

「点火！」

無駄だった。

「馬鹿かお前は、バスごと吹っ飛ばすきか」

「あう、なにをするコノちゃん。返せ、聖火を返せ。あちはオリンピックをしたんだ。聖火を次にまわすんだ」

「なにが聖火だ。それにお前リュックの中花火だけか何も入っていないじゃないか」

「何を言っているコノちゃん。ほらバナナならあるぞ」

ハイソックスから取り出したバナナをキャプテンの顔に突きつけていた。バナナは見事につぶれキャプテンのバナナまみれの顔はだんだん変わり始めた。

「おう、コノちゃん美味しそうな顔になったな」

キャプテンが切れた。いつもふざけている人だが怒る時は本気で

怒鳴ってくれる人だけ決して手は上げない。特に女性には怒鳴っている所すら見たことなかった。そんなキャプテンが彼女の頭を拳で殴った。

「あうう、なにをする。暴力反対、はわ、もしかしてコノちゃん教師軍の回し者か」

「うるさい、副会長の面倒を何で俺が見なきゃいけないんだって、おい聖弥さつさと連れてけ」

「はいはい分かりましたよ」

南海堂聖弥、五十嵐に匹敵する天才児。僕はあまり知らないが五十嵐の友達らしい。サッカーが上手くて女子には人気が高いと伊藤が言っていた。しかし、裏では五十嵐とつるんで悪さを働いているそう。伊藤の情報によると二人ともう一人、赤井龍真を含めた三人でテストの答えをばら撒いたり学校中の机を校庭に並べたりと他校ではやりたい放題らしい。

赤井龍真、そう、キャプテンの弟が珊瑚の探している奴なのだ。だが、今の龍真は珊瑚の決闘を受け入れる訳がない。それ以前に龍真にあった珊瑚は勝負を挑むかどうかもう危うい。龍真が同じ学校でなかったことがありがたい。

「セイちゃん放せ、あちきは会長だぞ会長。えらいんだぞ、あちきを怒らせると世界二十億人のファンが黙ってないぞ」

「そりゃ怖い怖い、でも、このバスの中にはいないみたいだから怖くないーい」

彼はかりんの扱いを良く知っているようだ。

「それとかりん、会長は俺だ。お前は副だ副。ナンバー2だ」

「コノちゃん興奮しすぎなのら、見るこの子達の落ち着きを、もはや帰りのバスのようですぐにでも寝そうな顔だぞ」

僕達五人と通路を挟んで向かい側にいる四人そこに聖弥が加わっての五人も疲れた顔をしていた。

「どうしたシンシンにマコマコ、男の子だろ。もしかしてリバースか？バス内の空気を一気に悪くするあれなのか」

「どうしたユメちゃんにシオちゃん、いつもの元気はどこに行った。新人のユカちゃんが不安がつてるぞ。そうだ、マイちゃん何か芸をやれ」
向かいに座っていたのはかりんの担当する班の子達だったようだ。その中のユメと呼ばれていることが合った。

「お互い大変だな」

「そうだな。でもあたいは嫌いじゃないけどな、こういう人達」

「皆、この人は荒熊さん北斗七星のオーナーさんだ」

北斗七星についた僕達の前に現われたのは無精髭を蓄えた身長二メートルを超えている大男だ。大声で笑う馴染みやすいおじさんだ。
「ちなみに四十五歳の一人もんで夜は寂しくてぬいぐるみを抱いて寝るおっちゃんだ」

「おお、かりんちゃんに虎之耶くん今年も楽しみにしてるぞ」

荒熊さんはかりんの頭をもぎ取る勢いで撫で回していた。

荒熊さん達は笑顔だが作り笑いだと言うのが丸わかりだ。

「いたたた、ごめんなのらくマちゃん。ごめんなさいなのら」

「うん、素直が一番だ。さあ、皆テントの設営に行くぞ」

僕達とかりんの班以外は荒熊さんについて設営場所へ向った。

「コノちゃん、始まったのらよ」

「そうだな。あれから一年長かった」

「あちきは短く感じたのら」

ふざけていた二人の間に緊迫した空気が流れ始めた。何時にも無い只ならぬ雰囲気僕達十人は二人をただ見ていることしかできなかった。

「今年こそは勝たせてもらうからな」

「そうはいかないのら。最後の臨海学校もあちきの勝ちが約束されているのら」

「今年こそは……今年こそは……」

キャプテンは拳を握り締めて小刻みに震え始めた。そして、拳を高らかに掲げて叫んだ。

「今年こそはお前に『お兄ちゃん』と呼ばせてやる」

.....はい？

「そんなのは嫌なのら。今年もあちきは『コノちゃん』と呼んでやるのら」

かりんも負けじとキャプテンを指さした。

「ちょ、何ですかキャプテン今のは」

「はあ？何がって勝負に決まってるだろ」

「勝負？」

「そう、あちきが勝ったら『コノちゃん』と呼んでいい」

「俺が勝ったら『お兄ちゃん』と呼ばせられる」

「何がいいんですかそれが」

「シンシン、分かってないな。いいか、女の子から『お兄ちゃん』と呼ばれるのは特別なんだ。それも血の繋がった妹ではない普通の女の子にだ。これほど男を駆り立てるものは無いだろ」

いや、そんな熱く語られても

「別にいいじゃないですかちゃん付けでも、『このやくん』より『コノちゃん』の方が仲良さそうに聞こえますよ」

「馬鹿言え、コノちゃんなんて女の子みたいじゃないか。それに、一度お兄ちゃんと呼ばれたい。いや、呼ばせたい」

「第一、キャプテンには弟がいるじゃないですか」

しまった。珊瑚に気づかれる。

「はあ？シンシン。男に兄と呼ばれて何が嬉しい」

よかった。キャプテンが馬鹿で

「は、もしかしてシンちゃんはそっちの人。幼い男の子が好きで好きでたまらない異端児」

「笹山かりん先輩、本気で殴ってやりましょうか」

「とにかく、俺の野望のためにシンシン手伝ってもらうぞ。そのために選りすぐりのメンバーを選んだんだからな」

「ふん、それならあちきだつて負けてないのら。あちきに少し足りない頭脳をカバーすべく南海堂聖弥を筆頭に癒しとまとめ役の早瀬舞。彼女の身体能力を補うべく新たに加えた新人の椎名由香里。そして、あちき直伝で教え込んだ最強の双璧、策戦担当の東詩音と戦闘担当の神原夢だ。どうだ参ったか」

「なにが少し足りない頭脳だ空っぽのくせに、それに、いくら聖弥でもこの完璧な頭脳を持つ俺に五十嵐誠が付いたら太刀打ちできない。さらに、椎名由香里ちゃん対策なら考えてある」

「なっ、なんだと!」

「こつちには伊藤未来ちゃんがいる。いくら椎名でも伊藤には歯向かえまい」

「くそ、だがこつちにはまだシオちゃんとユメちゃんがいるのら」

「だからなんだ。こつちは柔道部を全滅させた瑠璃川珊瑚ちゃんだ。さらに、身体能力なら俺に並ぶシンシンがいる。策戦など俺達の前では無力」

「くっ、体力馬鹿が……だが、こつちには運動部全員のアイドルマイチんがいる」

「確かに早瀬ちゃんは強力だ。だが、こつちにも小学校のアイドル斎条愛華ちゃんがいる」

「ふ、コノちゃん良いメンバーを選んだね」

「そっちこそ、今年は楽しくなりそうだ」

「はっははははは」

「中本君、早く行こうよ」

斎条に呼ばれた。行かなきゃ。

「ああ、今行く」

「あははははははははは」

「ははははははははははは」

二人を置いて僕達十人は設営所へと向った。

第14話 割り振りは計画的に

「テントはこんなもんか」

「中本、何か違うような気がするんだが」

「俺達三人が手を出して失敗するよりいいだろ」

「自分も中本君の意見に賛成ですね。私達三人にあの手スキルはないでしょう。なら、力仕事に専念すべきですね」

幸運にもリーダーを失った俺達は合同班を形成しテントの設営と早めの夕飯作りを分担して始めた。

「でもよ」

五十嵐は女子メンバー7人の方を見ながら不満そうな声を出していた。

「やつぱり薄い。舞、もっとルー入れようぜ」

「え、でも夢箱にはこれでいいって書いてあるけど」

「あら、濃いほう美味しいものもありますわよ。ほら」

「はわわ、詩音どうするのこれ塊みたいになっただよ」

「あら本当。でも大丈夫、かりんなら食べられそうですから」

「もーそれじゃあ私達はどうするのよ。椎名さんご飯の用はできましか」

「うん、それが泡だらけで……」

「泡？うわ、洗剤の匂い」

「早瀬さん大変そう」

「由香里も何やってるんだか。愛華はお米の準備ね。瑠璃川さん火の準備できた？」

「ああ、私は大丈夫だが……斎条どう思う」

「なにがですか」

「伊藤の持っているのは人參だと思っただが小さくないか」

「へ？み、未来皮剥きすぎ」

「あ……しょうがないじゃない。ずっと同じ色なんだし」

「だがジャガイモも大分小さくなってるな」

「う、うるさいなあ。一口サイズでいいじゃない」

「……………」

「いやー自分は助かりましたよ。少しはまともな食事にありつけそうですから」

「中本、やっぱり班戻そうぜ」

「そうだな」

「そんなこと言わないでくださいよ。自分と誠君の仲じゃないですか」

仲はともかく南海堂を一人にしては可哀想だ。

それに、今更戻すと言い出したら伊藤に何を言われるか分からない。い。

さらに、伊藤に泣きついてきた椎名をまた追い出すとなったら良心が傷つく。

「賑やかでいいじゃないか。五十嵐も嫌いじゃないだろそういうの」

「そうだな。斎条たちも楽しそうだし」

「いやー本当に助かります。これでよく寝れそうです」

「？」

「……………聖弥まさか」

五十嵐は慌てて二班のメンバー全員の名前を地面に書き始めた。

そして、苦虫を潰したような顔をして南海堂を睨み付けた。

「やってくれたな」

「どうしたんだ五十嵐」

「中本うんと言えそうすれば全て上手くいく」

両肩を掴み酷い形相で五十嵐が迫ってきた。

「な、何だよ訳分らないぞ」

「自分がお教えいたしましょう」

南海堂は五十嵐の書いた名前の上に四つの四角を書いた。

「ここには女子八人男子四人がいます。そして、自分達に与えられたテントは三人用のものが四つ、ここまではいいですね」

「ああ」

「自分が見ての判断ですがまず『笹山かりん、神原夢、東詩音』の三人で一つのテントを使うでしょう」

まず一つ目の四角に三人の名前を書いた。

「あの三人は俺と聖弥達よりもたちの悪い集まりでなまず離れて過すことは考えられない」

五十嵐が補足をしさらに聖弥が付け加える。

「ええ、それに厄介者は一箇所に集めた方が警備も楽ですし」

警備つて……まさしく獣扱い。

「次に椎名由香里です。彼女は間違いなく伊藤未来と一緒にでしょう。また、伊藤未来は斎条愛華を無理やりにも引き込もうとするのは必至」

まあ、長い付き合いだからあの三人の繋がりが異常なのはよく分かる。

そして、二つ目の四角に三人の名前が書かれた。

「次に自分達男性陣ですが『自分、誠、赤井虎之郎』を一緒にしていただきたい」

「？なんでだ」

「明日からあるイベントの準備だ。まったく、顔見知りだからって使わないで欲しいよな」

キャプテンらしいと言えばキャプテンらしいや。

「でもよ、二人にイベントの内容教えていいのか」

「班に一人仕掛け人がいてイベントを盛り上げる役になって訳だ」

「ふーん、まあいいけど」

「では、了承と言うことで」

三つ目の四角も埋まった。

「で、残った三人『早瀬舞、瑠璃川珊瑚、中本慎也』をここに書いて終了と、いやー本当に助かりましたよ」

これで最後の四角も埋まって……………ておい。

「ちよつと待てよ。俺珊瑚と早瀬と一緒に寝るのかよ」

「中本意外と気付くのが遅いのな。焦った振りして嬉しいくせに」
「なら変わってやつてもいいぞ」

「結構、第一瑠璃川が心開いているのってお前だけだろ。いいじゃん仲良くしてやれよ」

「それにしても不味いだろ。男女が一緒と言うのは」

「はい、非常に不味いです。本来班は男女三人ずつと決まっていたのですが笹山さんがどうしても言うことで自分の班はあんな形になったのです。本当なら自分が二人の女性に挟まれることになっていたのですが…………いやー助かります」

「いや、待てよ。それは…………やっぱりだな…………」

「中本君助けて」

俺の抗議を断ち切るように半分泣きながら斎条が駆け寄ってきた。斎条のずつと後ろの方では湯気が上がり罵声が飛び交っていた。

「ユメちゃん見損なつたぞ。何だこれは」

「元カレーだが何か文句でも」

俺達が現場にたどり着いた時にはかりんと神原の間には只ならぬ空気が流れていた。

「文句？あああるとも。キャンプでカレー？は！馬鹿じゃないのそんな一般人の真似事」

「じゃあ普通じゃないかりんは何を作るんだ」

「あちき？あちきならシシカバブとか豚の丸焼きとかワイルドなものをだな」

「どこのどいつがそんなもんキャンプ場で食うんだ」

「あら、私の家はそうだったけど」

「シオちゃんナイス」

「詩音は黙っていて、とにかく、あたしが頑張って作ったカレーをよくも…………よくも…………」

神原が指さしたのはカレーであつたであらう物とお米と焚き火が混ざつたものだつた。しかし、本当にあれはカレーだつたのだらうか。円柱状の塊が焚き火の上に乗っているだけにも見える。辺りにはカレーの焦げる香ばしい匂いがするからたぶんカレーなのだらう。「夢は舞の邪魔をしていただけじゃない」

「うるさいうるさいうるさい。とにかく、かりん責任取りなさい」
「よし分かつたのら」

かりんは伊藤達の所へと向つた。

「こ、これは伊藤ちゃんが作つたのか」

「ええ、私と愛華で作つたんですけど」

「伊藤ちゃんと斎条ちゃんの手作り、伊藤ちゃんの斎条ちゃんの…」

…」

荒い息遣いのキャプテンは伊藤にジワリジワリと迫り始めた。伊藤は異常なキャプテンから一定の距離を保ちながら後ろに下がっていく。その後ろには俺達の夕食であらうカレーの鍋が。

鍋へ向け猛スピードで駆け寄る獣がいた。その後ろを俺達は必死に追いかけたが追いつくはずも無い。

「未来逃げて」

「……」

斎条の呼びかけに伊藤はキャプテンを押しつけ鍋から離れた。

その直後、かりんは鍋を勢いよく蹴飛ばしていった。

直前まで沸騰していた鍋の中身はそばにいたキャプテンに容赦なく襲い掛かつた。

「熱い熱い熱い、けど……甘口でおいしい。ああ、この痛みもこの苦しみも伊藤ちゃんと斎条ちゃんの愛情があれば耐え……耐えられ……」

キャプテンは自分の太股に付いたカレーを舐めながら涙を流していた。

「はわわ、カレーが」

「かりん先輩なんてことをするのですか」

「付け、よいではないかコノちゃんは涙流して喜んでるのら」

キャプテンの足に水がかけられた。流れてゆくカレーを見ながら
キャプテンは悲しそうな顔をしていた。

「あ、あ、ああ俺のカレーが……伊藤ちゃんと斎条ちゃん
の愛情が……」

「何を言っているのか……痕が残っては大変だろ」

ホースで水をかけていたのは瑠璃川だった。この状況下で一番落
ち着いていたのは彼女だった。

「瑠璃川ちゃん分かってないなあ。その傷跡でさえ愛情の証拠じゃ
ないか」

「……」

「中本、よくあんな人の下で部活できるな。ただの変態じゃあねえ
か」

「ああ……て、よく考えたら俺達の飯は」

「これですね」

南海堂が見ていたのは泥水とカレーが混ざったものだった。

「カレーカレー、伊藤ちゃんと斎条ちゃん
の愛情の塊……」

「キャプテンやめてください。その一線を越えてはいけません」

「放せシンシン、例えば人間じゃないと呼ばれようとも俺は女の子の
手作り料理を残す訳にはいけないのだ。俺は女の子の悲しむ顔を見
たくないのだ」

半分ゾンビ並みのしつこさのキャプテンを押さえ込んだ。キャプ
テンの優しさは分かるが度を越している。

「ありがとうございます赤井先輩。また作りますから気にしないで
ください」

「おおそうかそうか斎条ちゃんはどうしても俺に食べてもらいたか
ったのか。どうだシンシン羨ましいだろ」

「ええ、とても」

「おや、今回のシンシンは素直だな」

「斎条の作ったカレーを食べたいのは本心ですよ。ですが……」
「ですが？」

皆が声をそろって聞いてきた。

「食材はもうないんじゃないんですか」

「あ……………」

この事件の張本人を皆で睨み付けた。だが、そいつは指を振りながら舌を打っていた。

「甘い甘い、あちきがそんな無計画に行動するとても」

「思う！」

皆の大声に驚いたかりんは後退したがそれでもない胸を張って言った。

「それならこれからやるぞコノちゃん」

「まさか……………」

「そう、コノちゃん班対あちき班の第一回戦『食材奪い合いバトル』」

「

第15話 自由時間の過ごし方

「各自一つ取るのら」

かりんは大小黒い袋を12袋出してきた。

「中にはクマちゃんから貰った食材が一種類入ってるのら。それからこれも」

手渡されたのはエアガンだった。

「さあ、己の欲を満たすために戦え。敵の屍を越え食材を奪え。さあ、戦うのら」

「いただきまーす」

俺達11人は美味しいカレーにありつけた。

予定されていたカレー以外にもサラダや手作りのプリンまで付いた。

「斎条ちゃんのカレー……美味しい。はあ、よかった生きてて」

「ありがとうございます先輩。お代わりどうですか」

「もちろん」

「五十嵐君美味しいですか？」

「これ早瀬が作ったのか」

「はい……どうですか？」

「美味いよ早瀬ちゃん」

「ロリコンは黙ってなさい」

キャプテンは神原にカレーを奪われた。

「返して、早瀬ちゃんのカレー返して。でも、これが神原ちゃんの愛情ならそれもいい」

「キモ！なにこいつ」

周囲から見ればキャプテンは二人のカレー二つを交互に食べて嫌

らしい顔をしている変態だ。

「あら、素敵な人じゃない。全身で愛情表現をするなんてまるで獣みたい。私は嫌じゃないわ」

「おお、東ちゃん」

「ただの野蛮人が変態じゃない。愛華気を付けなさいよ」

「未来の言うとおりです。その目付きその手付き何をとつても嫌らしい人です」

椎名とキャプテンはほとんど初対面のはずのだがそこまで思われていると言うことは相当酷いのだろう。

「キャプテン言われない放題ですね」

「よいのだよシンシン。これが彼女達の愛なのだから」

「いや、無いから。絶対に微塵も無いからそんなの」

「神原さんすごい否定ですね」

「セイセイ分かってないなあ。神原ちゃんはツンケンキャラなのだよ」

「そんなんじゃないっていつてんだろ」

「皆少しうるさいぞ」

珊瑚のぼやきに笑いが起こった。そんな和やかな夕食を俺達は送っていた。

「あちきにも食わせろ！！」

近場の大木に縛り付けられたかりんが騒ぎ始めた。かりんの目の前にはキャプテンが置いたバナナがあるだけだ。

「無計画馬鹿はバナナでも食ってろ」

キャプテンの言うとおりかりんは無計画の塊だった。

無計画もとい無謀な計画とはエアガンで打ち合って食材を奪い合おうと何とも危険な遊びだった。

もちろん、全員猛反対にくわけ荒熊さんにバレてエアガンを没収。

その後、罰としてかりんは貼り付けの刑となったのだ。

「たく、何を考えているのか。後先考えないで行動するからこんなことになるんだ。反省しろ」

「けけ、仕事がてら取材に行つてネタを沢山見つけて調子に乗つて書いていたら前回の話と繋がりがなかったことに気付いた小説家気取りの誰かさんじゃあるまいしあちきはそこまで無計画じゃないのら。それよりお腹すいたのら」

「おおそうだな、俺が食わせてやる」

キャプテンはバナナをかりんの顔に擦り付けた。どこかで見たような光景だ。

「おら食え食え」

「はうう、コノちゃん貴様もしかして、あちきのようなかわゆい女の子をヒイヒイ泣かせるのが好きなペドフィリアだな」

「何とでも呼べ。今の俺はそんなのではへこたれないぞ。今の俺は愛情に満ち溢れているからな」

「馬鹿、変態、ロリコン、スケベ、このペド野郎め」

「おらおらおらもつと食え」

「はぷぷ」

二人のやり取りを見ながら食事も終わりデザートプリンを一口頬張った。

「これ美味しいな。これも斎条が作ったのか」

「それは私だが」

いつもの変化の薄い顔で珊瑚が答えた。いつもと同じ表情に見えるが俺には少し喜んでるようにも見えた。

「珊瑚が……意外だな」

「そうか？食事よりも菓子の方が得意なのだな」

「うん、美味しい。市販のより何倍も美味しいぞ」

「あ、ありがとう」

凜としている珊瑚の声ではなく女の子らしい照れた声だった。

その声に異常に反応したのはやっぱりキャプテンだった。

「瑠璃川ちゃんのプリン！俺も食べる」

「あちきもら」

騒がしい二人が輪に戻ってきた。

後ろに服を引っ張られた。振り返ると斎条だった。

「中本君、私のカレー美味しかった？」

「斎条のカレー？美味かったけど」

「そう……ありがとう」

斎条の表情は喜びともう一つまったく逆の表情二つをあわせたようだった。

「それじゃあ自由時間なのら」

夕日が辺りを茜色に染め始めた頃俺達はひと時の落ち着いた時を迎えることになった。

しかし、それは臨海学校で起きる小さなとても小さな出来事の前触れを呼ぶものだった。

自由時間に入るなり南海堂がテントの割り振りを発表し始めた。

瑠璃川は特に反論もせず早瀬だけが困ったようなことを言い出した。

「私は女の子同士がいいのですが」

「ですがね早瀬さん代わってくれそうな人がこの中に居ますでしょうか」

周りを見渡して早瀬は潤んだ瞳で皆に助けを求めた。そこまで必死に拒まれると正直へこむ。

「私が代わりましょうか」

斎条だった。伊藤たちは反対していたが斎条が自分が代わると言い張り早瀬と代わることになった。早瀬より斎条の方が親しんでいるからまだマシだろうと俺も腹をくくった。

「問題も解決したことだし皆で海に行こうぜ」

キャプテンの誘いで皆で海に行くことにした。

山を降りること10分。夕日が海を赤く染め空は青と赤が混ざり幻想的な紫色をしていた。

俺達はしばらくその景色を黙ってみていた。あのうるさいかりんでさえこの神秘的な空気に飲み込まれているようだった。

それでも先に騒ぎ出したのはかりんだった。

「ユメちゃんシオちゃん走るのら。青春なのら」

「かりん一人でやれば」

「私は結構です」

「二人ともそれでいいのらか？今夜の下見に行くのらよ」

まあそれならと三人は浜辺を走り始めた。

「三人ともどこに行くんだ」

「ほら、あそこにある小島だろうよ。有名な所らしいからな」

キャプテンの指さす先には小さな島があり浜辺から赤い橋が架かっていた。

「荒熊さんの話では有名なダイビングポイントらしい」

「海水も綺麗できつと素敵なんでしょうね」

伊藤は波打ち際で遊ぶ二人を見て言った。

早瀬と斎条は海水に足をつけ波と戯れていた。

「私は他の所を見てくる」

珊瑚が一人で山と海の境目付近を目指して歩き始めた。

「一人で大丈夫か？」

初めてキャプテンが班長らしいことを言った。

「大丈夫だ。少し一人になりたいだけだ。山の入り口付近で待っている」

そう言い残すと珊瑚は砂浜を出てコンクリートの道を山へ向けて歩いていった。

伊藤と椎名も海に足を付け四人で遊び始めた。

するとずっと後ろから生きのいい声が聞こえた。

砂浜の終る付近にフェンスに囲まれた小さいバスケのコートがあった。そこで高校生と小学生だろうが四、五人がゲームをしていた。

「シンシン見に行くか？」

「キャプテンもしかして勝負を挑みに行くとか言い出しませんかよ」

「と言う中本自身が言い出したり」

「誠君もそういうの好きではなかったですか」

「聖弥バスケット得意だっけ」

「貴方達三人と比べられるとたいしたことないですが、フリーシュート率七割って所です」

「よし、当たって砕いてくるか」

キャプテンの気合の入った声に徐々に戦闘態勢になった。俺達四人の即席チームがどんなものかは分からない。南海堂はそこそこできるようだ。バスケットが上手いが部活に入っていない趣味でやっているぐらいの上手さだろう。

五十嵐の実力は良く知っている。俺が速さで奪って確実な3Pシュートタイプだったら五十嵐は力で奪って高さで入れるタイプだ。

五十嵐はバスケット部のキャプテンだ。本当なら俺だったのだが俺が小学校の方に顔を出さなくなってから五十嵐がキャプテンをすることになったのだ。

そして、赤井キャプテン。ディフェンスには絶対の自信がある人だ。動きが重い時があるが確実にボールを奪う技術の高さは俺以上だ。

「キャプテンお互いマジでやりましょうね」

「おうよ、シンシン」

この時のキャプテンが一番カッコいいから俺はこの人と一緒にバスケットをしている。

「中本君達バスケットするの？」

斎条たちが海から上がり俺達のところに来た。

「うん、斎条ちゃん応援してねえ」

「は、はい。中本君頑張ってね」

こんな時のキャプテンは好きになれない。

頭二つ分も高い高校生は快く受け入れてくれた。

一番背の低い小学生でも俺と比べると頭一つ高い。俺達三人は身長で圧倒的に負けていた。

「そんじゃあまあ始めますか」

ジャンプボールはキャプテンと小学生だった。

ボールは投げられたがその小学生は飛ぶことすらしなかった。

「ボールは譲るよ」

小学生を含め相手は俺達を甘く見ているようだ。

その態度にイラつき始めたキャプテンは俺にボールを渡した。

「舐めやがって、シンシン見せてやれ」

「たく、口だけキャプテン」

コート真中、いつもやっているコートより二周りより小さい。

ここからのシュートなら少し力を抜いて投げた方がいいな。

軽く投げたボールを見た高校生は驚くより呆れたような目をしていた。

そんな中唯一慌てた声を上げたのは小学生だった。

「ヤルミ飛べ」

「はあ？」

パスツと軽い音がしボールがコンクリートを叩く音が響いた。

ゴール近くにいた高校生は何もできず突っ立てるだけだ。

「まぐれだよな。ヤルミ、ボール」

「ああ」

ボールを受け取った高校生は軽くドリブルをしながら近づいてきた。両脇にいた小学生と高校生はその前を歩き三角形を書くような形をとっていた。

「中本、久々に行くか」

「転ぶなよ。五十嵐」

ボールを持った高校生に一気に近づく、パスする相手を探した彼だが両脇に控えていた二人の前にはキャプテンと南海堂が着いていた。

「くそ、海斗頼んだぞ」

高校生はあえて背の高いキャプテンの張り付いている小学生に無理やりパスをしようとした。

「馬鹿」

海斗と呼ばれた小学生は無理矢理キャプテンの前に出ようとするがボールは一向に飛ばない。

「考えすぎ」

ボールはすでに俺の手の中にあつた。周りを見渡している時にドリブルの合間を抜いたのだ。

「打たせない」

高校生が覆いかぶさるように立ち上がった。

「五十嵐頼むぞ」

視界を奪われたがゴールの位置は分かっていた。その方向に力強く投げた。

「馬鹿が、ゴール下にはヤルミがいるんだぞ」

ボードに弾かれる音、そこに五十嵐が猛スピードで駆け寄り飛んだ。

「高い！」

海斗が防ぎに入ろうとするが五十嵐のジャンプはリング側まで届いていた。

そして、そのままボールをいれリングにぶら下がった。

「小学生のジャンプ力じゃねえぞ」

それよりも海斗のスピードは異常なほど速かった。俺でも追いつけないほどに。

「五十嵐君カツコイイ」

「ありがとうよ。斎条」

五十嵐が俺達の所に戻った所でゲームが再開された。

「どいつもこいつも俺一人でやる」

海斗はボールを持つなり俺達に切り込んできた。

五十嵐、俺、南海堂、と順々に抜いていく。速い。速さには自信があつた俺が簡単に抜かれた。そして海斗は最後の守りのキャプテンの前までにいた。

「見ていてくれ斎条ちゃん」

腕を広げてディフェンス態勢になった。

しかし、その脇を簡単にすり抜けた。

それを予測していたキャプテンは右足を軸に周り海斗の目の前に立ち続けた。

「これで終いだ」

カットしようとするがキャプテンの手は空を裂いた。

海斗はキャプテンの股を抜いたボールをキャッチしてゴールに入れた。

「相手の行動を予測する判断力、それに対する対応力、相手を罠にかける技術、それらが君には足りない。そして何より」

キャプテンを指さした海斗は胸を張っていった。

「速さが足りない」

海斗に散々言われたキャプテンはブチギレた。

「舐めくそ回しやがつて、完膚無きまで叩きのめしたる」

その後俺達はいいい汗をかきながら己の技術を披露し続けた。

第16話 無理せず話せる人、話せない場所

バスケはキャプテンの体力切れでお開きになった。

「キャプテン、体力メニユーちゃんとやってますか？」

「よく言う。お前の相手しているだけで部活なんてまともに参加できやしねえよ」

「それにしても中学生の体力じゃないですよあれじゃあ」

「マコマコうるさい」

「ねえ、中本君」

「なんだ斎条」

「あのね、中本君は五十嵐君みたいなのできないの？」

「五十嵐みたいなの？…… Dankとかジャンプ系のアクションのことな。」

「あー無理無理、中本には到底できないよ。この身長じゃさ」

「五十嵐は俺の頭を叩きながら嬉しそうに笑っていた。」

「馬鹿にしゃがって、見てろよいつか Dank 決め手やる」

「本当、中本君。私楽しみにしてるからね」

「おう」

俺達は北斗七星に戻るため山の入り口に集まっていた。

「遅いのらコノちゃん」

「わるいわるい、あれ、瑠璃川は？」

先に待っているといっていた珊瑚がそこにはいなかった。

「サンちゃんなら散歩してくるって先に帰ってくればいいといってたのら」

いくら珊瑚でも暗い山道を一人は危ないだろう。

「キャプテン、俺探してきます。先に帰ってください」

「おう、悪いなシンシン」

「中本君、私も行こうか？」

「いいよ、斎条は皆と先に帰ってなよ」
俺は小走りで珊瑚を探すことにした。

林に入ってすぐの所に小高い丘がありそこに珊瑚はいた。
そこからは水平線と沈む太陽がよく見えた。

「珊瑚そろそろ帰るぞ」

「中本……すまないな」

その時の珊瑚はいつもより俺から距離をとっているように見えた。
「いこうか」

舗装された山道を俺達二人だけが歩いている。

空は一番星が見え始めていた。

「久しぶりだな」

始めに話し始めたのは珊瑚だった。いつもは俺が話しかけないと
何も喋らなかったのに。

「なにが？」

「二人きりでいるの」

凜々しい珊瑚とは思えない女の子らしい声で答えた。

驚きよりその可愛さに心を奪われそうになった。

「ほら、斎条とか五十嵐がいつも側にいたじゃない」

「珊瑚」

「うん、なに？」

「変なものでも食べた？」

「……………」

急に赤くなっていく珊瑚は頭を抱えて塞ぎこんでしまった。

「どうしたんだ」

「やっぱり駄目だ」

珊瑚は左右に頭を振り勢いよく立ち上がって大声を出した。
その後、体全身で脱力感を表現していた。

「な、なんだよ。いきなり」

「かりんに無理しないで話せないのかと聞かれたのでな。試してみた」

その声は強さと凛々しさが伝わるいつもの話し方だった。

この話し方の方が馴染みはあるが珊瑚が俺との間に壁を作っているように感じるものだった。

「さっきのが本当の珊瑚なのか」

「そうだが……やはりなあ」

「恥ずかしいのか？」

首を傾け少し考えていた。

「恥ずかしい……訳ではないのだ。自然に話したほうが楽なのは楽なのだ。ただ、ほら私武道家で話さないと思われているだろ。だから中本も変だと思ったんだろ」

「いや、よかったよ。今のよりずっと」

「本当か？」

「ああ、話しやすいなら自然に話せば」

「それなら……そうしようかな」

笑顔だ。俺だけに分かる珊瑚の笑顔ではなく誰にでも分かる笑顔。珊瑚は今笑っている。

「そうしろよ、珊瑚はお菓子も作れるし綺麗だしいいんじゃないか」

「中本って恥ずかしいこと簡単に言うんだね」

「悪いかよ。自分に嘘をつくのは嫌いなんだ」

「そうなんだ。おっかしい」

笑ってくれている。普通の女の子みたいに笑顔で楽しそうに、

「中本は……？」

「珊瑚？」

言いかけて立ち止まり考え込む珊瑚は俺の顔を見て不思議そうにしていた。

「中本は私のこと名前で呼ぶのに私は苗字で呼ぶって変じゃない？」

「違和感があったかな、しかも呼び捨てだし」

「そうだったんだ……じゃあ、…中本君？」

ぎこちない珊瑚の喋りに思わず笑ってしまった。

「どうして笑うかな」

「ごめんごめん、いつそのこと珊瑚も名前で呼んでくれればいいよ」

「名前で？名前……名前……」

腕を組んで考え始めた。まさか

「もしかして、忘れたとか言い出すなよ」

「いや、ほらいつも苗字だけだったし」

「慎也だ。中本慎也！」

そのまま珊瑚を置いて先に進んだ。すると、後ろから

「まってよ、慎也」

「名前でも呼び捨てなんだな」

呆れて振り返ると当然と言つ目が俺を見ていた。

「だって、慎也だって呼び捨てじゃない」

「分かったよ、いいよ呼び捨てで」

「うん。分かった」

「速く戻って風呂入ろうぜ」

暗くなつた山道、空の多くの星と青白く光る月だけが俺達を照らしていた。

暗闇に潜む不安や恐怖など忘れ俺達は笑顔でいられた。

その時の俺は珊瑚の本当の心と忘れることのできない笑顔を知つて珊瑚のことをすべて知ることができたと過信していた。

彼女の心の闇の一端すら俺はまだ知らなかつたんだと……

俺が珊瑚についた初めての嘘の残酷さもまだ俺は知らなかつた……

……

「あがつたらロビーに集合な。かりん、ちゃんとするんだぞ」

「心配ならこっちに来ればいいのら」

「生憎、まだ犯罪は犯したくないのでな」

俺達は風呂に入るために北斗七星の大浴場で男女に別れた。

ここの大浴場は銭湯と同じ作りになっていて壁には夜の富士山が

描かれている。これは荒熊さんの趣味だそうだ。

「シンシンはさ」

「なんすか？」

「好きな子いるのか？」

「唐突な質問ですネいきなりなんですか」

「馬鹿を言え、裸の付き合いで話すといったらこれにかぎるだろ」

キャプテンの声は浴場中に響いて煩かった。

「キャプテンはいるんですか」

「俺か？俺はだな………セイセイはどうなんだ」

誤魔化しやがった。

「自分ですか、いますよ」

即答だった。今まで興味がなさそうにしていた五十嵐ですら身を乗り出して聞き出した。

「聖弥誰が好きなんだ」

「早瀬舞さんですよ」

俺達は南海堂の立て続けの即答にポカーンとしていた。

「やけに素直に教えるな。冗談じゃないよな」

「自分は冗談を言えるような人間ではないことは誠君が一番知っているではないですか」

「知ってるがよ、少しは恥らえよ」

「では、誠君の好きな人は誰ですか？」

「俺？俺は……いねえよ」

「そうですか。では、中本君は？」

「何で俺なんだよ。キャプテンは」

必死に誤魔化そうとする俺を五十嵐と南海堂は嘲笑うような目だった。

「何言ってるんだよ。同級生同士のほうが面白いに決まってるだろ
いないと一言で言い終わらせた奴に言われたくない。」

「いねーよ」

「うっそだー。ぜってえ斎条のこと好きだろ」

なにを根拠にそんなことを決め付けるのやら……

斎条は俺と五十嵐の幼馴染みたいなものだろ。

「お前は違っても間違いないく斎条はお前のことが好きだな」

「何言ってるんだか。なわけないだろ」

「そんなことないぞシンシン。誰がどう見ても斎条ちゃんはシンシンが好きだろうよ」

五十嵐とキャプテンは顔を見合って頷いていた。

「そうなんですか。でも自分が見る限り瑠璃川さんも中本君に好意を持ってると思いますよ」

「そうか！シンシンは瑠璃川ちゃんが好きだったのか」

「どこをどう聞き間違えばそうなるんですか。それに珊瑚が俺ことを好きだって？南海堂も何言ってるんだよ」

「ですけどね。名前で呼ぶほど仲良しなのは中本君だけではないのですか」

それはそうだけど、それは成り行きといえますか……

「それに、瑠璃川のお前に対する話し方は俺達と違うしな」

「あーあーあー、この話はこれで終いだ。あがるぞ」

ロビーで待つこと20分。ようやく女子チームが出て来た。

「遅かったな珊瑚」

「慎也……」

赤く火照った珊瑚は俺と目を背けた。

「おいおい斎条大丈夫か顔真っ赤だぞ」

「あ、ありがとう五十嵐君。私は大丈夫だから、ねえ未来」

「あ、うん」

「おや、早瀬ちゃんも上せたちゃったのかな」

「いえ、そうじゃないです赤井先輩。実はですね」

「あー、そうだ。皆にジュースを奢ってあげるのら。さ、行くのらよ」

女子全員を連れてかりんはいつてしまった。

「長湯しすぎなのかな」

「だよな。大分赤かったし」

「あーそう言えば言い忘れたことがあった」

キャプテンが頭をかきながら俺達に衝撃の事実を打ち明けた。

「実はあの風呂、男湯と女湯が繋がっていて話し声丸聞こえなんだ」

第17話 メンバー不足の肝試し

気まずい。珊瑚と斎条に挟まれて寝ることになった俺は眠れない時を過していた。

もう、何時間も経ったような気分だ。今、何時だろう？だが、時計は見えない。

挟まれてからずっと羊を数えていたが千を越えていない。30分がいいところだ。

キャプテンがあんなこと言わなければとづくに夢の中だ。

今まさに隣にいる子が俺のことが好き？その真偽はともかく、その話を聞かれていたことで変に意識してしまう。

「駄目だ、外に出よう」

テントから出て星空を見上げた。いつもなら落ち着いた気持ちになれるのだが今はもやもやした気持ちがまったく晴れない。

「慎也……外にいるの？」

目を擦りながら珊瑚が出て来た。

「悪かったな。起こしちゃったか」

「うっん、私も起きていたから」

「そうか」

「うん……」

話が續かない……沈黙のまま二人で星空を見ていた。

この空気を打破するために何か話さなければ。

「珊瑚って龍真って男探してるんだよな」

「そうだけど」

「もし会えたらなにをするつもりなんだ。目的もなしに探しているわけでもないだろ」

「そうだなあ……」

空を見たまま珊瑚は考えていた。ただ会いたかっただけなのだろうかそれとも何か言えないことでも考えていたのだろうか。

「まずは手合わせを願いたいな。自分がどれだけ兄さんに近づいたか聞きたいし」

自分の握りこぶしを見つめながら珊瑚は楽しみにしている笑顔を見せた。

「それから話もしたい」

「話？」

「兄さんと龍真はライバルで親友だった。龍真は私より兄さんのことを良く知っているみたいなんだ。だから、兄さんの事を聞きたい」「兄妹のことで知らないことなんてあるのか」

名前で呼び合ってから初めて……いや、転校してきて珊瑚に初めて会ったあの日から今まで見たことない。珊瑚は悲しい顔をしていた。

「私が小さいころに兄さんと離れて暮らすことになったの。まだ小さかったから兄さんの記憶で残っているのは強かったことと龍真のことだけ。それと、兄さんの遺言かな？『俺より強くなれ。俺を超えてみる。そこで俺は待っている』で、言い残したのが最後だったの」

「そうだったのか……にしても難しいこと言う人だったんだな」

「うん、でも私はそんな蓮兄さんが好きだったんだ」

星空の下。俺達二人の静かな時間はいつもとは違った空気をも出し出していた。

その時の俺にはもうあのもやもやした気持ちはまったくなかった。ようやく落ち着けたのも例のあいつがぶち壊してくれた。

「忘れてたのらー……」

テントから飛び出てきたかりんは俺達のところへ駆けしてきた。

「シンちゃんにサンちゃんラブラブしている場合じゃないのら。速くみんなを起こすのら」

「はあ？なんで？みんな寝てるのに」

「いいから起こせるだけ起こすのら、今から肝試しをするのら」

「クマちゃんごめんなのら。すっかり忘れていてぐっすりだったのら」
「いいのだよ。君はそういうやつだって良く知っているから」

かりんに連れてこられたのはダイビングポイントとして有名な離れ小島だった。

「しょうがないのら、皆起こすのに時間が掛かったのら」

結局、早瀬と椎名とキャプテンは起きなかった。伊藤は起きたが二人が心配だから残ってくれた。

「うーん、人数が合わないのら。しょうがないのら、適当に三人組になるのら」

「ごめんごめん、私も入る」

赤く塗られた橋を伊藤が走ってきた。

「未来、残るんじゃないの」

「ああ、それね。赤井先輩が起きてくれたから行ってくればいいって言うてくれたから」

「ええと、うん。ちょうど三人組で割れますね」

南海堂が確認する前に既に組み分けはできていた。

かりん、神原、東組

俺、斎条、珊瑚組

伊藤、南海堂、五十嵐組となった。

「よし、組み分けできたのでクマちゃんよろしくなのら」

「おうよ。わしゃあこれが楽しみでの」

荒熊さんが話してくれたのはこの離れ小島にあるとお話だった。

この島にはね。ある決まりがあるんだよ。それはね、絶対に左回りにしか回ってはいけないというものなんだ。そして、何があっても振り返ってはならない。

それはね、この島にある女性の霊がいるからなんだよ。

その女性がまだ生きていた頃にはまだ橋なんてなくて本当の離れ小島だったんだ。

その頃この島に来るには舟で来るしかなかった。見て分かんと思うけどこの島の周りは流れが激しい海流がいくつも入り組んでいて入ったら最後生きては出れないからね。

この島にその女性と男性がやってきたんだ。彼女は彼のことが好きだった。だけど彼は彼女とは身分が違った。しかし、彼女は諦めなかった。だから彼はこの島に彼女を誘ったのだ。

彼は彼女と競争をしようと言ったんだ。

「君は左から、僕は右から回るから先に真中にある神社に着いたほうの勝ちだよ」

「もし私が勝ったら付き合ってくれる」

「ああ、僕を捕まえられたらね」

そして、彼女は左回りに走り出したんだ。だけど彼は彼女を置いて島を出て行ってしまった。

三年ほど経ったある日、彼は彼女に酷いことをしたと罪悪感に終れ彼女のお墓を作ってあげようと思ったんだ。そして、彼はまたこの島に訪れたんだ。彼は、左回りに島を回ったんだ。

だけど、さがしてもなかったんだよ。

彼女の骨がさ。

鳥が運んでいったのかと思って彼は神社に簡単なお墓を作ったんだ。そして、右回りに帰ろうとしたんだ。

すると、目の前にボロボロの服を着た女性が現れたんだ。

女性が男に近づいてこう言ったんだ。

「みーつけた」

彼は女性に背を向け必死に逃げたんだ。だけどすぐ後ろで自分を呼ぶ声が聞こえるんだ。

だけど彼は振り向かず逃げたんだ。そして、なんとか逃げ延びることができたんだ。

その後、何度もこの島を調べたんだが骨もその霊も見つからなかったんだ。

ただ、生きて戻ってきたのは左回りに回ったものだけなんだ。右

回りに回ったものは一人も戻ってこなかったんだ。そして、そのいなくなつた者の骨も見つからないんだ。

「そつ、そんなのあるわけないのら」

「それで、つい最近の話なんだけどな」

荒熊さんは続きの話を始めた。

このように立派な橋ができた頃、ある大学のサークルで君達みたいに肝試しをしようと集まつた人たちがいたんだ。

当初は皆右回りで回ろうと話していたのだがある男女二人だけが左回りで回りたいといったのだ。結局、その二人だけ左回りをすることにしたんだ。

二人は先に待ち合わせの神社に着いたんだ。だけど、何時間待つても他の人は来なかった。

不思議に思つた彼は彼女と一緒に先に進むことにしたんだ。

そして、一周したけど誰一人として見つけることはできなかった。彼は彼女を残してまた回り始めたんだ。彼女の忠告通りに左回りで、別れる直前彼女はこう言つた。

「絶対に振り向かないでね」

神社まで来た彼だけどやはり見つからない。

そこで彼は仲間の一人に電話をしたんだ。だけど、一向に出なかった。

すると、後ろの方で彼を呼ぶ声がした。

正直彼は嬉しかったのだらう。聞きなれた友の声を聞いて何事もなかったのだと安心したのだ。彼女の忠告など忘れて彼は振り返つてしまった。

そこには誰もいなかった。

突然、彼の携帯がなった。

友からの電話だと喜んだ彼は急いで出た。

「おい、大丈夫か、今、どこにいるんだ」

必死にそう叫んだ彼だが返事は驚くものだった。

「何言ってるんだよお前、俺はお前が待ち合わせ場所に来ないから電話しただけだぞ」

悪寒に襲われた彼は助けを求めようとしたが携帯が切れてしまった。

すると、後ろから声が……

「だから、振り向かないでって言ったのに」

彼は、左回りに逃げた。だけど、疲れていた彼は転んでしまった。死を覚悟した彼だが彼女は捕まえに来なかった。そのまま彼は島を離れ公衆電話を見つけ友達に電話をした。そして、受話器から聞こえてきたのは……

「あなたも私を置いて行くの？」

「それじゃあ行ってみるか」

荒熊さんは固まって動けないでいる俺達に陽気に話しかけてきた。

「そ、それじゃあ、じゅ、順番を決めるのら」

ガチガチに怖がっているかりんが出てきたくじを代表が引いた。順番は五十嵐組、俺達、かりん組となった。

「それにしても有名なダイビングポイントなのに怖い話があるんですね」

斎条の問いに荒熊さんは明るく答えた。

「そんなこと誰が言ったんだ。ここは飛び込み自殺の名所として有名なんだぞ」

一同沈黙。のち苦笑い。

「そ、そんなのきにしないで二人とも行くよ」

「い、伊藤痛いよ。もう少し力緩めろよ」

伊藤は二人を連れて行ってしまった。

「10分たったら次が出発するのら」

島を一周できる砂利道を俺達三人は進んでいた。

両脇には林が生い茂っていて暗かった。
空の青白い月の光もほとんど届かない道だ。明かりは懐中電灯一つだ。

「斎条もう少し離れられないのか」

斎条に右腕を抱かれている。傍から見れば中のいい二人に見えると思うが実の所斎条は体重の半分以上を俺の右腕にゆだねている状態だ。歩きにくいことこの上ない状況だ。

「憤也、辛くないのか」

珊瑚は二人きりの時だけあの話しかたをするようだ。

「まあなんとか。もし肩が外れても珊瑚が直してくれるだろ」

「そうするが初めては痛いぞ」

「十分気をつけます」

「ねえ、中本君」

下から見上げる目が俺を見ていた。

「なんだ斎条、幽霊でも見つけたか」

「うん、なんでもない」

ため息を吐いて斎条は俺から離れた。

「あれって……未来？」

神社に着いた俺達に背を向け仁王立ちしている女性、伊藤がいた。

「おい伊藤一人でなにやってるんだ」

肩を震わせ驚いていたが伊藤はこっちに振り向かなかった。強がっていたが意外と信じているようだ。

「もう、中本、後ろから呼びかけないでよ」

「悪い悪い、で、二人はどうしたんだ」

伊藤は暗い林を指差した。

「トイレだつて、なに考えてるんだつて本当にデリカシーの欠片もない二人ね」

「だな、俺達は先に行くけど伊藤もいっしょに行くか」

斎条と珊瑚を見た伊藤は首を横に振った。

「私が消えたって騒がれると困るからここに残ってる」

「そうか、じゃあな」

歩き始めようとすると伊藤が二人を呼び止めた。

「斎条に瑠璃川、何があっても振り向かないでよ。もしかしたら本当に出るかもしれないか」

「伊藤は大げさだな。だが、心配してくれて嬉しいぞ」

「あ、うん。じゃあね未来」

伊藤を置いて俺達は先に進むことにした。

島を一周してようやくもといたところに戻ってきた。そこには五十嵐と南海堂がいた。

「遅かったな。あれ、伊藤は？」

「なに言ってるんだよ。伊藤なら神社でお前達を待ってたぞ」
「待ってるって……なあ」

南海堂と顔を合わせた五十嵐がおかしなことを言い出した。

「伊藤ならお前達と一緒に回りたいからお前達が来るのを待つって言っただけだぞ」

まさかな……という空気が流れた時、かりん組が戻ってきた。

「ふう、何も出なくて物足りなかったのら」

「とかいってずっと騒いでいたじゃない」

「そうそう、おかげで耳が痛くなったし」

「かりん、伊藤見なかったか」

「ミラちゃん？見なかったのらよ」

次に言うことを悩んでいると斎条が脅えながら言った。

「あのね、さっき会った未来ね。私のこと『斎条』って呼んだの」
「それがどうしたんだよ」

「上手く言えないんだけど……えつと……」

斎条が答えを見つける前に答えが来た。

「おいおいかりん、俺をおいてなに楽しんでくれてるんだよ」
「キャプテンと早瀬、椎名が来た。その中には伊藤もいた。」

みんなの視線は伊藤に集中していた。当の本人は気味悪がっている。

「なに、皆で私を見つめたりして」

「未来、今までどこにいたの？」

「なに言ってるの愛華、ずっとテントにいたに決まってるじゃない。あまりに帰りが遅いから今来た所じゃない」

俺達は、苦笑いしかできなかった。悲鳴を上げようにももしかしたら見間違いだったかもしれない。そんな見間違いをするはずはないがそう信じたかった。

「あれ？おいマコマコ右腕どうした。あざができてるぞ」

「あざ？」

五十嵐の右腕には手の形をしたあざが残っていた。そこは伊藤に捕まれた所だった。

第18話 確認と下準備

臨海学校二日目。今日は一日自由時間。そして、夜は楽しみにしていたキャンプファイヤー。

大丈夫、この日のために何度も練習したんだから。

私達は海で遊ぶことになった。海に入るにはまだ早いけどみんな楽しそうに遊んでいる。

だけど私は一人で日陰に座っている。

中本君を待っているのだ。

中本君と瑠璃川さんは海に来るのを嫌がっている五十嵐君を説得してくれている。

本当は中本君と一緒に来たかったのに……五十嵐君の馬鹿。

「そんな所でなにやってるんだ」

中本君だ！……と、瑠璃川さん……。

「夜遅かったからまだ眠くて」

中本君を待っていたなんて言えるはずもなく咄嗟の嘘をついた。

「ふーん。なら珊瑚行こうか」

「うん。慎也」

えっ、私置いていかれちゃうの。まって、行かないで。

「私も行く」

立ち上がろうとすると中本君の手が私の肩を押されて座らされた。びっくりしたけど、すっごく嬉しかった。

初めてだ。臨海学校で初めて中本君が私に触れてくれた。

「無理すると夜までもたないぞ。今は休んでおけ」

中本君と一緒にいられない。だけど、今夜は大切な……。

「うん、分かった。そうする」

悔しい。また中本君を取られた。また瑠璃川さんと二人きりだ。
「それじゃな」

見送りたくも無い瑠璃川さんにまで笑顔で手を振ってあげた。

「ふうー、自分が嫌いになりそう」

その場しのぎの嘘なんてつくもんじゃないな。

嘘をつくたびに思う。後先考えないで簡単に嘘をついて……

平気に嘘をつける自分が嫌い。

「嫌いになってもいいんじゃないか」

五十嵐君だ。もうどこかに行ったと思ってた。

独り言を聞かれて恥ずかしいより怒りが湧いてきた。そうだ、五

十嵐君が全部悪いんだ。

「なに言っているの？」

「無理して自分を好きにならなくてもいいだろ。自分に満足している奴なんていないって」

「そうだけど……」

自分に満足していない……か。私は自分に満足できなくてもいい。それでいいから中本君に満足してもらえるようになりたい。

「自分が自分を嫌いな私を中本君は好きになってくれるかな」

波打ち際で楽しそうに遊んでいる中本君に視線が行く。

もし、あそこにいるのが瑠璃川さんじゃなくて私だったら……もしそうだったら私が今感じているみたいに未来たちは見てくれるのかな。

「ずっと中本しか見てないよな。斎条はやっぱり中本が好きなのか」

「うん、好きだよ」

中本君がいなければこんなに簡単にいえるのに彼の前では話だけで胸が苦しくなる。

それが恋なんだって未来は言っているけど昔みたいに素直に話せないのは嫌だな。

「はあ、どうしよう」

「そんな顔辞めろよな、頼むから笑顔でいてくれよ」

「なに言ってるの？五十嵐君らしくない。中本君に言われないよそ

んなこと」

「あの二人を見ているときいつもそんな顔するよな」

ただ私は中本君を見ているだけなのに、どんな顔をしているのだろう。

怒ってる？

泣いてる？

笑ってる？

どんな顔をしているか私は分からないけどどれも私の気持ちと違うのは分かる。

「そんなの知らないよ。私がどんな顔していようが五十嵐君には関係ないでしょ」

「それが関係あるんだな」

「どうして？」

「中本、気付いてるぞ。お前がそんな顔していること、斎条には笑顔でいて欲しいってさ」

中本君が私の笑顔を……そう言われてみると本当の笑顔をしたのはいつだったけ？

「本当？」

「ああ、よかつたら手伝ってやるよ」

「手伝うって？」

私の前でひざまずいた五十嵐君はナイトみたいでドキツとした。

「姫の笑顔は私に取り返してまいります」

五十嵐君はよく分からないことを言い残して立ち去ろうとした。

「な、何それ」

「さーな、伊藤たちと楽しく遊んでいてくれてことだろ」

「よ、楽しそうだったな」

珊瑚と分かれた後、日陰で休んでいる所に五十嵐が来た。

「そう見えたならそうだったんだろうな」

「おや、楽しくなかったと」

楽しかったのだろうか自分でもよく分からない。もちろん五十嵐と遊ぶとは違った感じだったし斎条とも違ったと思う。自分が感じたことを言葉に表現できない。

「なんだろうな、珊瑚といるのは嫌じゃなかったんだよな。ただ……」

「ただ……なんだよ」

「普通じゃない感じなんだよ。珊瑚は斎条とは違うんだよ」

「あたりまえだ。瑠璃川は瑠璃川、斎条は斎条だろ」

「そうじゃなくて」

頭をかきながら斎条と珊瑚のほうを見た。俺に一番近いのはきつとこの二人だろう。

でも、俺にとっての二人はまったく違う存在に感じる。

「珊瑚は普通のクラスメイトなんだよな。斎条は……んー、妹かな」

「お前にとって瑠璃川はただのクラスメイトなのか」

「そうだけど」

よく話すクラスメイトだろう。彼氏彼女の関係からは程遠いと思う。仲のいい女友達止まりだろう。

「で、斎条は妹だと言うのか」

「五十嵐もそう思ってるだろ」

小さい時から一緒にいた五十嵐なら分かるだろう。いつも俺達の後ろを伊藤に手を引かれてついてきていた斎条を妹のように感じていただろう。

「昔はそう思っていた頃もあったさ。でもな、今は違うだろ」

五十嵐の目線の先には伊藤たちと遊ぶ斎条がいた。

「俺はもう普通の女の子だと思うぞ。そりゃもう恋愛対象としても十分すぎるほどにな」

真剣だ。いつも冗談しか言わないような五十嵐が真面目なことを言っている。そんな時は対外奴の本心だ。

「五十嵐……お前……斎条のことが」

「ばーか、ちげえよ。俺が好きなのは他にいるんだ」

「いるのか。誰だ」

五十嵐は軽い笑い声を出して俺に背を向けた。

「何を必死になっているのだから、そうだなあ、俺の質問に答えたら教えてやるよ」

何かを企んでいる五十嵐の顔だ。嫌な顔だけど退屈しない顔だ。

「もし、俺と斎条が付き合うことになったらお前は祝福してくれるか」

「はあ？」

「いつもは四人で遊んでいたのに俺と斎条だけで遊ぶようになったりいつもはお前と帰っていた斎条が俺と帰るようになったりお前から斎条が離れていても俺達を温かく見守ってくれるかって聞いているんだよ」

斎条が俺の側からいなくなる。側にいてあたりまえだった斎条が急にいなくなるなんて言われてもよく分からない。

斎条が五十嵐と楽しそうにしている光景を俺は温かく見ていられるのだろうか。

俺に見せてくれていた笑顔が五十嵐だけの物になっても俺は……

「俺は……できないかもしれない」

「俺なら見守ってやれるぞ」

俺がどう答えるか知っていたかのように即座にそういった。

「お前と斎条が付き合うことになったとしても俺はお前達を温かく見守ってやれるぞ。それが斎条とお前の本当の気持ちならな」

「いいのかよそれで、お前も斎条のことは妹みたいに可愛がっていただろ」

「いいんだよ。それが『兄』ってもんだ」

かつこよかった。そして、到底敵わないと思った。五十嵐がとても大きく見えた。

その時の五十嵐からは昔の珊瑚に似たオーラを感じた。

「お前は口で『妹だ』とか言ってるけど心ではそう思っていないんじゃないか」

「俺は…斎条のことを……」

彼女じゃない。だけど、ずっと側にいて欲しい。俺に笑顔を見せて欲しい。楽しく話して欲しい。そう思うのは妹だからじゃなかったのか。

「分からないなら斎条と話してみろよ。妹としてではなくクラスメイトとして」

「五十嵐、俺」

「あー、もういいからさっさと行けって」

五十嵐に背を押され斎条を探すことにした。

「あつぶねー。もう少しで好きな人教えなきゃいけないところだった」

俺の好きな人……か。ごめん、ごめんな。すぐに答えられなくてごめんな。

斎条は一人でどこかに行ってしまったようだ。しかなく辺りを探していると昨日のバスケットコートに斎条がいた。そこには他にバスケット部の奴がいた。

そいつは斎条にシュートする所を見てもらっているようだ。

「……………」

「……………」

何か話しているが聞こえない。俺は息を殺しながら近づいた。何をしているんだ俺、堂々と近づけばいいものを

「どうだった俺のシュート」

「かつこよかったですよ」

「なら、俺と付き合ってくれよ」

告白！それを聞いて悔しくなった。もし、斎条がOKしたら……悔しさの次に怒りが湧いてきた。

「ごめんなさい」

即答！相手には悪いけど安心した。

「そっか、いや、いいんだ。うん、それじゃあ」

苦笑いで走っていつてしまった。

帰ろう、今会うのは気まずい。

「おや、シンちゃんこんな所でなにやってるのら」

こいつはどうしてこんな時に現われやがるんだ。

「誰かいるの」

「やば、あちはずらかるのら」

かりんは逃げた。一帯あいつは何がしたいんだ。

「中本君」

「よう、斎条」

平常心、そう平常心を保つんだ俺。

「見てた？」

どうしよう笑って誤魔化すことしかできない。

「見てたんだ」

「うん」

「はは、困っちゃうよね」

「どうして断ったんだ」

「好きな人いるから」

小さな声、顔を伏せて見せてくれない。

「それって五十嵐か」

安心が欲しかった。五十嵐はあんなこと言っていたけどもしかしたらと言うものがある。

「五十嵐君？違うよ」

「そっか、なら行こうぜ」

斎条の手を取って砂浜へ出ようとした。

「あ、中本君。手」

「？嫌なら放すけど」

「うっん、このままがいい」

斎条が笑顔になってくれた。笑顔になってくれればそれでいい。

そう自分に言い聞かせた。

この繋がれた手は斎条を笑顔にするためだ。

斎条は妹……。だけど、離れて欲しくない。自分だけのものにした
たいという気持ちが握る力を強くした。

第19話 伝えられた思いと秘められた思い

あつという間に夜。臨海学校最後のメインイベントのキャンプファイヤーの準備をかりん指揮の元進められていた。

「マコちゃんあれの準備はできた？」

「ああ、聖弥が仕上げてくれてる。それと、これがスイッチ」
かりんに渡されたのは不恰好な赤いスイッチだ。

「くくく、これでそろったのら。さあみなよ、炎の祭りを始めるのら」

炎が着き俺達は各々好き勝手に座っていた。

俺のところに五十嵐が来た。

「聞いたぞ。斎条に告白したんだって」

「誰がそんな噂を」

「かりんだ」

「言っておくが違うからな。斎条が告白されてただからな」

「でも手を繋いで楽しそうに歩いていたのは本当なんだろう」

否定もできず黙り込んでしまった。それはもう認めていると同じ意味なのだ。

「本当なんだ」

「まあ、な」

「自分で答えは見つけられたのか」
答えか。

「俺にとつての斎条は隣で笑っていて欲しい存在なんだ」
妹ではない。いつも隣にいて欲しくて悲しい顔はしないでほしい。いつも隣にいて笑っているのがあたりまえだと思っていた。

だから、今日のあれは俺の前から斎条がいなくなってしまうのではないかと思ってしまった。

「瑠璃川はいいのか」

「何度も言っけど珊瑚は話していて楽しいクラスメイトだ。斎条とはちよつと違う感じなんだ」

そつだ。珊瑚は斎条とは違う。珊瑚以上に斎条のことが大切だ。
「そつか」

納得した五十嵐は立ち去ってしまった。

数分後、斎条が俺のところに来た。

「始まつちゃった」

ずっと楽しみにしていたキャンプファイヤー。だけど、焦らされているみたいで落ち着くことができない。

「愛華本当にするの」

「うん。するよ」

「別に今日じゃなくてもいいんじゃないの」

「駄目だよ。今日告白するって決めていたんだから」
キャンプファイヤーの前で告白すると絶対に別れない。そんな噂を未来に聞いてからずつと決めてたんだよ。

「愛華がそう言うなら私は応援するしかないんだけどね」

「おい、中本見つけたぞ」

「本当！それじゃあ行ってくるね」

「愛華がんばってね」

中本君のところへ向う私に未来が応援してくれた。

「ありがとう未来」

「よかったのか」

「なにがよ」

「斎条が中本に告白すること」

「愛華がそう決めたなら私は止めたりしない。ただそれだけ」

「本当にそれだけなのだろうかねえ」

「五十嵐の方こそいいの？愛華と中本が付き合うことになっても」

「いいんじゃないの、お似合いだと思うけど」

「五十嵐がそう思ってるならいいけどさ。私は愛華が笑ってくれるならどっちでもいいけどね」

「中本君、もつと側に行こうよ」

「別にいいよ。俺熱いの嫌いだし」

差し伸べられた斎条の手は行き場を失い宙に止まっていた。

「それじゃ困るの」

いつにない強い口調の斎条は俺の手を取って無理矢理炎の柱へ導いた。

炎の近くにはキャプテンとかりん以外誰もいなく俺達二人だけが浮いたような存在に見られているだろう。

そんな俺達に自然とみんなの視線が集まった。

「どうしたんだよいきなり。斎条目立つの嫌いだろ」

「そうだけど今日だけ特別」

炎で赤く照らされた斎条の顔は可愛いと素直に言えるものだった。俺はその顔に見とれていた。大好きな笑顔じゃないが不安そうな斎条の顔は今俺しか知らないんだと思うと斎条の特別になれたんだと思ってしまう。

「特別？何が」

分かっていた。斎条が何を言いたいのかくらい分かっていた。だけど、その答えを出すのに少しでも時間と自信がほしかった。

「あの…私、私ね……」

騒がしかった周りが静まり炎が燃える音が聞こえるほどに静かだ。息苦しい。胸の高まりと炎の熱が俺を落ち着かせてくれない。

「私、中本君のことが好き」

「私バスケットしているときの中本君が好き。かつこよくて見ていると胸が苦しくなるの。苦しいのにずっと見ていたくてずっと側にいたいって思ってた。中本君は私の笑顔をとても優しい目で見てくれる。優しく手を引いてくれる。誰よりも私を大切にしてくれる。そんな中本君が大好き」

強く斎条を抱きしめた。ずっとこのままでもいい。離れないで欲しいと心から願った。

「中本…君」

暖かい。斎条の温もりが伝わってくる。

「俺も大好きだ。愛華」

首筋に暖かい滴が流れていくのを感じた。その滴は胸を強く締め付けて苦しめたけど嬉しかった。

「ありがとう、慎也君」

その時を待っていたかのように炎が消え星空に大きな花火が打ち上げられた。

「あちきたちからのプレゼントなのら」

数々の花火と皆が俺達二人を祝福してくれていた。

「ありがとう、ありがとうね」

「泣くなよ愛華。笑ってくれよ」

「うん」

花火の色鮮やかな光に照らされた愛華の笑顔からは涙と嬉しさが溢れていた。

太陽が昇り朝日が俺達を包んでいた。夜の冷たい光とは違い体を温めてくれるその光は俺達の心をより暖かくしてくれる。

「綺麗だね」

「そうだな」

「私、昨日あったことは絶対に忘れない」

俺達の関係。友達だった俺達。妹のように思っていた愛華が俺と付き合うなんて正直不思議な気分だ。だけど……

隣に愛華がいて笑ってくれて温かくてずっとこのままでありたい。そう思えるようになった。

「俺も忘れない」

愛華の笑顔を見たいから強く握ったあの時の手とは違って今握られている手はお互いの思いが握る力を強くした。

「おーい、ラブラブのお二人さん。そろそろ出発するぞー」

「おう、今行く」

「もう、五十嵐君たら」

むきになって否定することなく笑ってふざけあうことができるようになった。今まで誤魔化していたのが馬鹿らしく思えるほどだ。

帰りのバス中、皆寝ちゃった。

五十嵐君も未来も慎也君も。

慎也君が隣で気持ちよさそうに寝ている。肌が触れ合って慎也君の心臓の音が分かるくらい近くにいます。

肩の上に頭を乗せると安心できる。

ふと下を見ると慎也君の開いている左手に釘付けになった。

昨日の夜は勇気を使い果たしてできなかったけど今なら。

「慎也君の手温かい」

締め付けられる辛さと動けない苦痛で目覚めた。寝起きは悪い方だが隣で愛華が寝ているのを見ると機嫌が治まった。

左腕を抱いて俺のほうに乗り出して無理に寝ているようだ。

だけど、その表情は安心しきっていて心地よさそうだ。

「大変そうだね慎也」

通路を挟んだ向かい側の珊瑚がこっちを見ていた。

「そっちな」

珊瑚の左肩には東詩音の頭が乗っていた。

「まあねえ。大変だったみたいだから」

相方の神原夢も南海堂と一緒に爆睡中だ。

「かりんの相手か。ご苦労なこった。……そう言えば二人の勝負はどうなったんだ？」

「さあ」

珊瑚と俺が首を傾げていると前から答えてくれた。

「あちきが2Pでコノちゃんが1Pだったのら」

「たく、シンシン協力不足だぞ」

「第一勝負らしい勝負してなかったじゃないですか」

「何を言っているのら白熱したバトルがあちこちであったのら」

「そうだぞ。まあシンシンはなんだかんだで3Pも取ってくれたから許してやるけどよ」

「でも、2Pとったのもシンちんだったのら」

「そうだ。責任取れ！」

この人たちは何が言いたいんだ。

「うゝん。慎也君？」

うるさくしたせいだろうが愛華が起きようとした。

「もう着いたの？」

「んにゃ、まだまだだ。もう少し寝るか？」

「うん。寝る」

俺は愛華の頭を優しく撫でながら心地良い眠りに導いてやった。

「おやすみ愛華」

俺も一緒に寝ることにした。一緒に夢を見られるようになるべく近づいて……

慎也と斎条を見ていると懐かしい気がする。私もあんなふうだったのかな。

「慎也……」

なんだろうこの気持ち。斎条が羨ましい。私が欲しかったものを彼女は持っている。

隣で私を心配してくれて困った時助けてくれる。それが私の思っている蓮兄さん。

私の中の蓮兄さんと慎也がいつしよなんだ。

「慎也……兄さん」

誰にも聞かれていないと分かっているのに顔が熱くなった。

「なっ、なに言ってるの、私。でも……」

斎条のあの安らかな寝顔を見ているとあそこにいるのが私だった
らどれだけ嬉しいか。

「兄さん……」

第20話 嘘は忘れた頃に

俺と愛華は付き合い始めた。

毎朝一緒に登校して休み時間は楽しく話して放課後は俺の部活を愛華が見に来て……

特に変わったことは無い。今までと同じだ。俺は前よりも一緒にいる時間が増えたと思うけど五十嵐から言わせると大した変化ではないらしい。

「慎也君何してるの」

「バスケの練習だけ」

放課後、大会が近くなつたので今日から小学校で練習を始めた。練習といっても五十嵐と数名との打ち合わせとタイミングを合わせるだけで俺は部としての練習には参加していなかった。

「それは分かるけど板に当ててばかりだしいつもらしくないよ」

本来の俺の練習はターンとロングシュートを軸にしたものだ。今日から始めたこの練習は愛華にとってはそう見えるかもしれない。

「スランプじゃないぞ。わざとだ。わざと当てるんだ」

「そうなんだ。でもどうして？」

「秘密だ」

「おい、そろそろ終るぞ」

顧問が部員を集め始めた。現時刻5時。終るにはまだ早い時間だ。

「俺ももう少しやってから帰るから愛華は先に帰ればいいぞ」

「私待つてる」

「待つてるって……遅くなるんだぞいいのか」

この練習の後にいつものメニューをこなしてから帰ることになっている。

帰る頃には星が見えるほどだろう。

「それでも待つてる」

付き合い始めて知ったことだが愛華は意外と頑固だ。

だが、このときを待っていたかのように伊藤がやってきた。

「愛華、一緒に帰ろう」

「やだ」

短くはつきりと断られた伊藤は潔く一人で帰るなどと言っている。「そうだ。五十嵐からの伝言、赤井弟が目覚ましたから見舞いでも行つてやれって」

そう言われれば放課後五十嵐を見ていなかったな。

それよりよかった。龍真が目覚ましたか。

龍真は二ヶ月前に事故にあつてからずっと意識が戻らない状態だったんだ。

体には問題ないらしいが俺も顔見知りだったから結構心配していた。

それも珊瑚のあの話を聞いてから心配が強まっていたりもした。

「そうか、分かった。なら今日は早めに終るか」

「本当、今日は早く帰られるの」

「そうだ。愛華も一緒に行くか」

「うん行く」

「なら今すぐすませるから」

フリーシュートを5本決めて片づけを始めた。

せっかく早く帰るために頑張っていたのにキャプテンが来た。ま

あいいか、お祝いの一つでも言いたい所だったし。

「お、シンシンやつてるな」

「キャプテン、聞きましたよよかったじゃないですか」

「お、おう。まああ、可愛くない弟だが……妹だったらどれだけ嬉しいか……妹だったらずっと病院に居座つて看病してやったのに」

愚痴りながらも嬉しそうだ。

「今日は一段とにぎやかな集まりだな」

「神原は人のこと言えないぞ」

今一番聞きたくない人の声が聞こえた。

それにしても珍しい組み合わせだ。神原夢、いつもかりんか東詩

音という所は見るが珊瑚という所を見るのは初めてだった。

「珊瑚と神原って仲良かったんだな」

「ただの仲良しじゃない。ライバルだ」

「ライバル？」

「神原は剣道が強くてなよく練習相手になってもらっているんだ」
詳しく聞く前に珊瑚が答えてくれた。

「ふーん、どっちが強いんだ」

「瑠璃川だ」

神原が悔しく無いといわんばかりに胸を張っていった。

「今日だってあたしのボロ負け。サンドバックもいいところだ」

「そんなことはない。神原は力も強くて動きも速い。同じ年の女でここまで強い奴はいない」

「はは、男みたいだといわれている気分だぜ」

「そういう意味では無くて」

愛華たちと話しているときは違い今の珊瑚は楽しそうだ。これなら神原は珊瑚の親友になりそうだ。いずれ神原にも無理せず話せるようになるだろう。

「いい友達ができたな珊瑚」

「ありがとう慎也」

「慎也君早く病院行こ」

長い間待たされた愛華が不満そうな顔をして催促してきた。

「そうだなそろそろ行くか」

俺と珊瑚はこれでさよならと言って別れると思っていた。いつも通り、の放課後のように。

しかし、俺の考えを裏切る訪問者が現われた。

「赤井君こんな所にいたのか探したんだぞ」

早瀬舞の兄、早瀬優雅だ。

生徒の行き来はあるが小学校に中学校の先生が来るのは珍しいことだった。

「ユウユウ何しに着たん」

「龍真君が大変だそうだ。すぐに行きなさい」

「龍真…」

珊瑚の驚きの呟きが俺にははっきり聞こえた。取り乱して早瀬先生に問い詰めそうだったがそれより先に神原が動いていた。

「優雅、龍真に何があつた。死んだか、死んだのか、死んだんだな」

「まーまー落ち着けよ。それよりユウユウ送ってくれないか」

実の兄が一番落ち着いているようだ。

「分かっている。それと……そうだな。皆も来てくれ」

面識のある俺ならともかくこの一大事に愛華や珊瑚を連れて行く必要があるのだろうか。

正直な話珊瑚は一緒に来てほしくなかった。

「何だよ今度は団体かよ」

病室にいた龍真は点滴もしていないうえに左手にダンベルを持っている。病人にはまったく見えない状態だ。

「医者は大げさなんだよ」

「いいから右から順に言ってみなさい」

カルテを持った医者が俺達を指さしていった。

「たく、兄貴の赤井虎之耶、中学校の先生の早瀬優雅、何かと突っかかってくるか神原夢」

一人一人指さした人の名前と関係を言っているようだ。

「誠の友達の中本慎也…よ、久しぶり。あとは……会ったことないな」

「合っていますか」

「はい、確かにそうです」

先生が代表して答えた。医者はカルテに何か書き込みキャプテンと先生だけを残して俺達を部屋から出した。

「慎也、龍真のこと知っていたの」

いずれ聞かれるだろうと覚悟はしていたがこれ以上隠せるはずがない。

「ごめん、嘘ついてた」

「どうして嘘なんてついたの」

「前の龍真に会わせたくなかったから、龍真の奴事故に会って意識が無かったんだ」

「それならそれで一言言っただけじゃなかったな」

「ごめん」

俺の情けない心を暖めるかのように愛華が手を握ってくれた。

「愛華」

「もう、誰にも嘘はつかないでね」

心の中で深く頷いた。

再び病室に入った俺達に龍真の口から現状を伝えられた。

「記憶障害？」

「そうなんだぜしかもかなり中途半端な。九九の七だけ忘れてるとか都道府県を全部言えないとかさ。昔でも言えていたのか危ういけどな」

本人はふざけているが実際大変なことだ。そんなことをまったく表に出さないのが龍真の強い所だ。

「ために何でも聞いてみな」

真っ先に質問したのは神原だった。

「かりんと舞のことは覚えてる」

「早瀬舞のことだろ。もちろんだ。かりんは…忘れたくても忘れられるかあんなの」

次は予想通り珊瑚だった。

「龍真だな」

「お、おう」

強気で負けることを知らない龍真が珊瑚の凜とした空気に押され

ている。

「瑠璃川珊瑚だ。よろしく」

「おう、赤井龍真だ」

龍真も一応武道家のスポーツマン。珊瑚と握手を交わしていた。

「！……ふーん」

龍真は一瞬驚いてすぐに笑顔になった。

「！」

龍真の笑顔を見た珊瑚は手を振り払った。

珊瑚はしばらく龍真を見ながら固まっていた。

「で、何か質問か」

龍真の問いかけに肩を震わせ話し始めた。

「得意な格闘技は」

俺と神原以外は珊瑚の質問にポカーンとしていたが龍真は真面目な顔でこたえた。

「柔道と剣道かな。実力は想像に任せる」

コクリと珊瑚は頷いた。

「それなら、瑠璃川蓮を知っているか」

「蓮？ああそうか」

龍真より先に反応を見せたのはキャプテンだった。龍真と関係があつた珊瑚の兄のことならキャプテンも知っていてもおかしくはない。

「はあ、瑠璃川蓮？誰だそれ」

「なに言ってるんだ。蓮のことだぞ。お前のライバルみたいな奴だった……」

キャプテンが教え切る前に先生が止めた。そして、医者呼びに行つた。

「そうか……すまなかつたな」

そのまま珊瑚は部屋を出て行つた。

「珊瑚」

俺は珊瑚を追いかけて部屋を飛び出した。

勢いよく飛び出したのはよいものの…広すぎるんだよこの病院。規則正しく部屋が並んでいてそれを直線の廊下で結んであるこの病院はどこも同じ所に見える。素直に言おう、迷子です。

「あら、中本君じゃない」

知り合い！喜びに振り向くと花束を持った東詩音がいた。

「こんな所で何をしているのかしら。捨てられた雑巾のような顔をして」

さらっと酷いことを言われたが我慢しよう。

「あら失礼。雑巾ではなくて子犬でしたわね。とてもそう見えなかったのでつい」

「そんなことはどうでもいい珊瑚を見なかったか」

「そんなに急がなくてもいいではないですか。速く求めるのは女性に嫌われますよ」

「知ってるのか知らないのかどっちだ」

「あらあらむきになっちゃって。瑠璃川さんならたぶん屋上でしょうね」

「なんだよその頼りない情報は」

「別に信じてもらわなくても結構ですよ」

東はそのままエレベータに乗り込み行ってしまった。

屋上。本当に珊瑚はそこにいた。

「慎也」

「ごめん珊瑚、嘘ついて」

「どうしてもつと速く教えてくれなかったの」

「ごめん」

珊瑚が龍真を探していること聞いたときはまだ龍真は事故にあつてはいなかった。

「どうして、どうして知らないなんて嘘ついたの」

「ごめん」

その時変な気遣いなどせず教えていればと何度も昔の自分を殴っていた。

「どうして、どうして……」

「ごめん」

泣き崩れた珊瑚に俺は謝ることしかできなかった。

「やっと、やっと兄さんのことが分かったのに」

「ごめん」

「このときのために強くなったのに」

「ごめん」

「やっと分かったのに……兄さんが私に伝えたいことが分かると思ったのに」

「ごめん」

俺は話すことも文句も言わなくなった珊瑚を前にただ立っているだけだ。

あの時変な気遣いをするぐらいなら今珊瑚を慰める一言でも言うて見せるよ俺。

遠くから雷鳴が聞こえる。それでも二人は空を見上げたりしなかった。

「ごめん」

「もういいよ」

座り込んでいた珊瑚は立ち上がり建物の中に戻ろうとした。

「そんな所にいると風邪引いちゃうよ」

笑顔でそういつて珊瑚は先に行ってしまった。

一人になった俺は空に向かって叫んだ。

珊瑚に嘘をついた。

珊瑚の目標を潰してしまった。

珊瑚の本当の笑顔を奪った。

そんな俺は不器用な珊瑚の作り笑いの笑顔さえ見る資格はないと

叫
ん
だ。

第21話 二羽の鳥

その日から俺と珊瑚との間には距離ができた。珊瑚から逃げる俺は惨めだった。

「慎也君元気ないよ」

「そんなことないぞ」

シュートしてみるが入らない。あの日からスランプが続いている。

「慎也君やっぱり調子悪いんじゃない」

「大丈夫だつてわざと外しているだけだからさ」

「いや、シンシンはスランプだ」

中学校も試合が近いのにこの人は何をしに来ているのだから。

「そんなこと無いですよ」

「なら本気で入れてみるよ」

集中、集中、ここで外すわけにはいかないんだ。

久しく見ていないほど綺麗に入った。

「よし、どうだ」

ガッツポーズをとった。

キャプテンに胸を張る。しかし、キャプテンも愛華も浮かない顔だ。

「かなりスランプなんだな。頑張れよ」

なんだよその可哀想なものを見るような目は、綺麗に入っただろうが。

「前の慎也君はシュート決めてもあんなに喜ばなかったよ」

愛華に言われると恥ずかしい。握り締めた拳を緩め頭をかいた。

「やっぱりキャプテンには分かるか。何かアドバイスは無いですか」

キャプテンを頼るなんて相当参っていたようだ。

「可愛い女の子と楽しく話す」

「聞いた自分が馬鹿でした」

「拳を震わせながら感動しないの。でもよ、誰かに話をするだけで直る時もあるぞ」

キャプテンは目的の南海堂を見つけたようのでそのまま帰っていった。

話か。今は少しでもこの気持ちを晴らしたかった。

「愛華、話を聞いてくれないか」

「うん、いいよ」

体育館の隅に座り手を繋いで話を聞いてもらった。

「俺ある人を傷つけたんだ」

「瑠璃川さんのこと」

特徴も言っていないのにすぐに当てられた。

「どうして分かった」

「慎也君最近瑠璃川さんのこと避けてたから」

自分では気付かれないようにやっていたつもりなのにやっぱり分かるんだ。

「俺珊瑚の目標を台無しにしたんだ。目標を失った珊瑚は前と変わって不器用な愛想笑いしかできなくなった。そんな俺が、そんな最低な俺が目標を目指していいのかわかって、笑っていていいのかわかって思っ」

「それでも瑠璃川さんを避けなくてもいいんじゃない」

それは自分でも分かっていた。

「そうなんだけど珊瑚の無理した笑顔を見たくないんだ」

あやまりたくても笑顔でいいよと言われるだけだ。そんな珊瑚を見たくない。見られない。

「慎也君。私達付き合っているんだよね」

不意に聞かれた答えの決まっている質問をされ戸惑ったがすぐに答えた。

「あたりまえだろ」

「それなら……」

強く左手を握られた。愛華の言葉から逃げられないように錯覚さ

せられるように強く感じた。

「それなら私だけを見てよ。瑠璃川さんのことなんて考えないで私のことだけを考えていてよ」

「愛華……」

「慎也君の隣には私がいるから慎也君を苦しめるようなことは言わないからだから、ね」

励まそうとしているのだろう。それなのに俺はまだ珊瑚のことが気がかりだった。

「あつ、うん」

必死に忘れさせようとしてくれる愛華のことなど分からず適当な返事しかできなかった。

まだ珊瑚のことを忘れられないんだと愛華も気づいているのだろう。

励まそうとして笑ってくれた笑顔は俺が最後に見た珊瑚の笑顔と同じだった。

次の日の昼休み。このときが俺の人生を少し変えるときだった。

「慎也、龍真はもう大丈夫なのか」

いつもの5人で話していたが五十嵐がどこかに行ってしまい成り行きで珊瑚と話すことになった。

「もう退院して学校にも通ってるらしいぞ」

「そうか、それはよかったな」

お互い顔を見ないでの会話。そして沈黙。

「し、慎也君スランプはもう大丈夫なの」

「いや、より酷くなったかもな」

「そうなの。頑張ってね」

「おう」

そして沈黙。

俺達三人の沈黙を呼ぶ空気に嫌気が挿した伊藤が俺に噛み付いて

きた。

「さつきからあんた達はなんなのよ。なにかあったの、ねえ」

「……」

「……」

「……」

三人とも伊藤から目を背けて黙るだけだった。

「あーもう、中本ちよつと来なさい」

伊藤に手を引かれ教室を出された。

二人の間に挟まれていた俺としてはありがたいが愛華には悪いことをしたと思う。

伊藤に連れてこられたのは屋上だった。ここの屋上は柵が無く危険なので本来出ることにはできない。できないのだが伊藤はこの鍵を持っていたようだ。

「どうしてそんな物持つてるんだ」

「かりんがくれたの」

夏が近づいているにも関わらず涼しい風が吹いていた。

伊藤は風にあおられた長い髪を押さえながら屋上と空の分かれ目ギリギリに立った。

「危ないぞ」

だが振り向いた伊藤の目には絶対の自信と余裕があった。

「愛華と仲良くなるにはここに立つてこと」

落ちるギリギリの所を歩き出した。

「一歩間違えればすぐに終る。一歩踏み出せばすぐに安全な所へいける。でも、ここじゃないと見えない景色がある」

伊藤は生死の狭間を笑顔で楽しんでいる。

「不安、恐怖、人生全てをかけても得られるのは小さな本当に小さな喜びだけ」

俺を見る伊藤の目は強かった。

「中本はここに立つことができる？」

「できるさ」

勢いよく乗ったのはいいが半端ない怖さだ。心地良かったそよ風が空への手招きのようだ。

「中本は愛華と付き合ってるんだよね」

「そうだが」

お互い真っ直ぐ見詰め合ったの会話。俺の好きなものだけどこれは好きになれない。

「ならどうして愛華は笑ってくれないの。どうしても辛そうな顔をしているの」

「伊藤には関係ない。俺達の問題だから」

「関係ない？あんと付き合うから愛華はずっと幸せになってくれると期待させておいてこれ？ふざけんじゃねえよ」

伊藤に胸倉をつかまれた。同じ身長のはずなのに伊藤が大きく脅威に見えた。それ以上にこの足場で暴れたら……こいつ足元に意識が行ってない。

「あんだ達を付き合わせるためにどれだけの努力と犠牲を払ったか分かって言ってるのか」

「伊藤落ち着けて危ないだろ」

きつと試されたのだろう。俺がどうするのか神様に試されたと思うしかない。

そよ風の間に吹いた突風、俺達二人はバランスを崩した。

俺一人なら確実に助かるだろう。だが、伊藤もとなると……

伊藤を屋上に残して俺は空を選んだ。

人間って死ぬ時走馬灯を見るって言うけどそんなもん見る暇もなく地面に背中を打ちつけた。

やべ、完全に左腕が折れた。足も痛い。

口の中も血の味で一杯だ。

はは、吐血してる。

俺死ぬんだろうな。

あつ、バスケの試合に出れないだろうな。

珊瑚の試合も応援行けないだろうな。

また嘘ついちゃったな。

愛華との約束も守れなかったな。

せっかく練習したのに。

五十嵐は葬式に来てくれるかな。

愛華はずっと泣いてくれるかな。

珊瑚にも泣いてもらいたいな。

ああ、これが走馬灯なんだ。

もうどうでもいいや。

第22話 苦悩する人と追いかける人

夢を見た。

隣で誰かが泣いている。

右手をずっと握ってくれている。

暖かい夢だった。

「痛！腹が痛！」

暖かい夢も心地良い眠りからも激痛に追い出された。

「ここは……」

夏が近いにも拘らずこの生暖かさ、広い部屋を小さく区切るカーテン。

「ここは病室か？」

「俺、死ななかつたのか」

起き上がろうとしたが力が入らない。

左腕と胸を全てプロテクターのようなもので固められていた。それに、起き上がるうにも激痛が走って起き上がれない。そ

「何とかして起きられないものか」

「枕元のボタン押すの」

向かいに居る人だろ。親切な人だ。

「ありがとうございます」

「いえいえ」

程なくして医師と看護師が来た。

術後がどうのこうの言っていたがよく分からなかった。

「意識ははっきりしているね」

「はい」

「どこか痛むかい」

「右腕以外全部」

「吐き気はないかい」

「はい」

「それでは…」

「あの、」

「なんだね」

目線をカルテから俺に変えて優しくそんな医師が答えた。

「起こしてもらえませんか」

医師と看護師は苦笑いで俺を起こしてくれた。

向かいに居る人に改めて御礼をしたいと思います顔を見た。

そこには大量の参考書だろうかそれに向っている女の子が居た。

「女！」

驚きで指を指してしまった。

「ああ、彼女のことが、それは後で説明させてもらうよ」

いや、冷静に言われてもいくら小学生とはいえ男女一緒に問題だろ。

「それより君の両親はとんでもない親だね」

親？……ああ、そう言われればそろそろ帰ってくる頃か。

「息子が入院しているのに、生きているならそれで十分ですって一度見てすぐに帰る親は初めてだよ」

「いえ、来てくれただけで奇跡ですよ」

「そ、そうなのか。まあそれは置いておこう。で、君の状態だが…凛ちゃん少しどこかに行っていてもらえないかな」

看護師さんが一緒に行こうといっているが彼女は断固として動こうとしなかった。

「大丈夫です。聞かないように努力しますから。それに、他人に興味は無いので」

「だがね……」

「構いませんよ」

これ以上無駄な時間を使わせるのは失礼だ。ここは俺が折れよう。聞かれても大した事ないだろうし見たこと無い顔だ知り合いに言われることもないだろう。

「そうか、では。左腕は三箇所、骨折の複雑骨折、肋骨も何本も折

れていて臓器に突き刺さっていてね。特に肺と心臓が深刻だった。全力をつくしたが完全とは言えないところだ。酷使すれば発作が起きるだろう」

「回りくどいのは嫌いです。はっきり言ってください」

医師はため息を吐き頭をかいていた。医師は言いたくないことも言わなければならない辛い仕事だな。

「君はバスケットをしていると聞いてね。とてもいいづらいのだが」「何ですか」

覚悟を決めてくれたらしく分かりやすく言ってくれた。

「全力で20分……いや、10分走れるかどうかという所まで心臓がやられている」

全力疾走を10分？ふざけるなよ。それだけなのかよ。

「幸運にも君はまだ小学生だ。成長すれば発作も起きなくなる。本来の機能を取り戻すだろう」

医師の暖かい目も声も要らなかった。ほしいのは真実だけだ。

「いつですか。全力でゲームができるのは」

初めてだろう。目を見て話してくれなかったのは。

「バスケットの本番：高校生までには直っていると思うよ」

高校生……遠い、遠すぎる。

「もっと速く直らないんですか」

「そうだな……」

医師はカレンダーを見て微笑みくれた。

「星に願ってみてはどうだ。幸運にも今日は七夕だ」

医師のアドバイスを俺は無言で受け止めた。

「すまない。冗談しか言えなくて」

俺の真剣な目を見て医師は悪いことをしたと思ったのだろう。小学生の俺に頭を下げて本気で謝ってくれた。

「それで彼女のことが……生憎部屋が足りなくてね我慢してくれ」

「はいそうですかで満足できるかって、この辺りで一番大きな病院

がそれでいいんですか」

「わかった。君には正直に話そう」

医師は俺の肩を掴み目前まで迫った目で語っていた。どうにもならない状況だと。

「大人の事情だ」

それを言われたら何も言いようが無いではないか。

「まあ二ヶ月もの間一緒にいるんだ仲良くするといい」

そして広い広い部屋に俺と彼女の二人きりになった。

「はあ、二ヶ月か…それに…10分…」

10分。10分の試合でどうする。もし、五十嵐とキャプテン相手で10分あれば5本は決められる。実力が二人以下なら良くて10本だ。得点にして最大30点。それだけでければ逆転を決めるだけの仕事ができる。だが、もし前みたいな小学生がいたら…たしか海斗とかいったけあいつが相手だったら3本打てればいいところ。最悪得点なしも考えられる。

心臓に負担をかけるな…か。

「ゴール下でボール待ってるしかないかな」

「ちよつと、あんた。小5よね」

向かいの女の子確か凜とかいったか。

「なんで分かるんだ」

「あんたの彼女が毎日来てるからね。話をしてるの」

愛華のことか、そうか毎日来てくれていたのか。

「それよりこれ分かる？」

俺のベッドの横にあった椅子に座った彼女は算数の参考書を俺の前に出した。

彼女が指さした問題は五年生の始めに習ったような問題だった。

「お前馬鹿？」

この問題が解けないならこの先の問題も解けないような基本の問題だった。

「お前って言うな。あたしには虹島凜って可愛い名前があるの」

「あつそ、いいか虹島こんな問題解けないでよく五年生やれていたな」

「ちょ、ちよつと待った」

「なんだよ」

「苗字で呼ぶの可笑しくない？名前で呼べ名前です」

「誰かにも似たようなことを言われたような……ともかく、俺もその時を思い出して。」

「俺の名前は中本慎也って言うんだ。そういうならお前も」

「慎也、余計なことはいいいから速く教えなさい」

「なんだこいやつは、俺の周りにはいなかったような奴だな。」

「なに慌てているのか知らないがいいか凜この問題はだな」

俺は凜の先生として基礎から教えることになった。

五十嵐に勉強を教えてもらうことがある。その時は分かりにくい説明だとか意味が分からないとか言っていたが本当にすまないことをしたと今分かった。

「だから、ここは掛け算じゃなくて割り算だって言ってるだろ」

「さっきは掛け算だったじゃん」

「あーもう、さっきとはここが違うだろ」

「失礼しま…… 慎也君目覚ましたの」

疲れ始めた頃愛華が来てくれた。愛華の慌てているのと喜んだ顔を見ると俺はついさっきまで死にかけていたんだと思い出させられる。

「愛華も来てくれたことだし、これは…… ぽい」

参考書を凜のベッドに投げ捨てた。どうやらコントロールは落ちていないようだ。

「慎也ひどい。あたしだって二人の邪魔なんかしませんよーだ」

凜の代わりに愛華が隣に座った。学校帰りだろうとか制服のままだ。

「もう大丈夫なの。いつ退院できるの」

「二ヶ月後だとさ」

怒鳴っていた俺を見て期待していたのだろう。今すぐにも退院できるのかと、俺自身も今すぐに退院できそうな気分だ。

「二カ月後って夏休みが終ってから…そんなの嫌だな」

付き合い始めてほんの少し、以前と変わらない付き合いで付き合っているのを実感することも無く気まずい関係になってその問題も解消されずに長い間会えない。

愛華にとっても俺にとっても辛い現実だ。

「夏休みは一緒に海に行きたかったのに」

「そう拗ねるなって、仕方ないだろ」

「もうどうして屋上なんかに行ったの。入れないはずでしょ」

そうか、愛華は知らないんだ。

「そのことは先生も知りたいな」

担任の先生と五十嵐それから伊藤が病室に来た。嘘はもう嫌だとあれほど思ったのに嘘をつかなかった俺を思うと嫌な奴に見えた。

「空を飛べると思ったんです」

先生は理解できない顔をしていた。五十嵐も愛華もよく分かっているように。伊藤でさえ驚いているようだ。

「屋上の扉が開いていて、気持ちいい風が吹いていて、周り全てが空に見えて、鳥が自分を呼んでいて、空と鳥と自分しかそこにはなくて、鳥に呼ばれるまま空を飛んで、ああ、俺は空を飛べるんだと思ったんです」

先生はそうですかと言いつつ残し難しい顔をしながら病室を出て行った。五十嵐も愛華を連れて出て行った。ただ、伊藤だけはもう少しと言いつつその場に残った。

「どうして本当のことを言わなかったの」

罪の意識がある、悪いのは私だと言っているようだ。

「本当のことを言っただけでどうなる。怪我が治るのか？」

「それは……」

「起きてしまったこの現実はどうにもならない。本当のことを言うのが言わなかるうが俺にとってはどっちでもいい。だけど…」

「だけど…なに」

「本当のことを言ったら愛華は怒るだろうな。そしてお前のことをどう思うだろうな。どうなるうちにしろ愛華がこれ以上悲しむようなことを俺はしたくないんでね」

見たかった。目覚めて初めて会った愛華は笑ってくれなかった。

愛華の笑顔が見たかった。

「中本…ありがとう。ありがとうね」

女性を泣かせたくない。俺の考えの一つだがこの涙ならいいかもしれない。

慎也君が目を覚ました。良かった。私のことを忘れていなくて。

「ねえ未来。慎也君の近くににいるにはどうすればいいかな」

「んー、面会時間の間ならいいと思うけど」

「それだけじゃ足りないの。もっと長い間一緒にいたいのに」

「我慢するしかないんじゃない。中本はあれでも入院の身なんだから休ませてあげないと」

そうだよな、慎也君怪我してるんだもん。私も我慢しなきゃいけないかな……

怪我速く治って退院してくれないかな。

怪我？

「ああ、そうか」

「どうしたの？」

「なんでもなーい。相談に乗ってくれてありがとうね」

「あっ、うん」

急いで家に帰った。お母さんが帰ってくるまであと1時間ぐらいかな。

キッチンでちょうどいいサイズの果物ナイフを見つけた。

「ナイフ、ナイフ、ナイフ」

ルンルン気分で部屋に戻って正座。そして、ナイフ。うん、いい感じ。

手首にナイフを当ててしばらく考えた。

「血が出るだけじゃすぐに退院させられちゃうな。もっといい方法は無いかな」

ここは思い切って切腹？でもあとが残ると慎也君怒るだろうな。んーま、いいか。退院したらまたすればいいんだし。

痛い、痛いよ。……救急車って遅いんだな。

思ったよりいっぱい出たよ。

「待っててね。今行くから」

暗くなっていく。

黒の中に赤が見える。

だんだん気持ちよくなってきたよ。

慎也君。

大好き。

第23話 お見舞いは十人十色

星に願ってみたが何も起きなかった七夕から数日後、プロテクターが外されて自由になった左腕の関節を動かす練習を始めていた。肘と肩しか動かないが固定されているより幾分ましだ。

「失礼するわよ」

昼食中汚れた白衣を着た女性が来た。飴を舐めながら俺と凧の顔を見て変に頷いていた。

「ふーん、なるほどねえ。かつこいいじゃない」

人の顔をじろじろ見て第一声がそれか。次に俺の昼食を見て笑われた。

「最近美味しくなっただって言われているみたいだけど私は要らないわ」

「何かようですか」

唯一の暇つぶしの昼食を邪魔された俺は少々不機嫌だ。この後は凧の教育が控えていて俺の時間なんてほとんどないと同じだ。まったく、夏休みが2倍になってよかったなって五十嵐に言われたが外れたようだ。

「そんなにムキにならないの。そんな所は似てるんだから…娘の彼氏の顔ぐらい見に来てもいいじゃない」

娘の彼氏？まさか…こんなニート直前オーラを出している人が？彼女は首からかけていた五枚のIDカードから一枚を俺に見せた。「精神科医の斎条桜、今日から慎也君の担当だから桜先生って呼んでいいよ」

精神科医？どうしてそんな人が？

「どうして精神」

「あら、凧ちゃん元気？この前の外泊はどうだったの？彼氏といいことしていたんじゃない」

無視された。

凜は俺が目を覚ました七夕の日に外泊をしていた。次の日の夜には帰ってきた短い外泊だった。が凜はそれからしばらくはご機嫌だった。

「彼氏なんかじゃないですよあんなの。それより桜先生が来るなんて珍しいね」

「大学のついででね。ああ、そっだ凜ちゃんに飴あげなきゃね。慎也君もほしい？」

「斎条先生探したんですよ」

慌てた看護師さんがやって来た。理由もいわずに桜先生を連れて行くことしたが当の本人は動く気は無いようだ。

「何があつたの？私が働くことなんて無いでしょうに」

仕事放棄！駄目だこの人。でもこの人が愛華の母親なんだよな。娘さんが急患で運ばれたんです」

その日の夜、俺達の病室に愛華が加わることになった。

愛華の顔は青白く生氣を感じるものではなかった。それでも俺に笑顔を向けてくる。

「慎也君」

「どうしたんだよ入院なんて」

「料理の時に手を深く切っちゃって…」

左手首から肘付近まで包帯が巻かれている。どのように怪我をしたか知らないがあのような所を料理中に怪我をするのだろうか。

「もー愛華あなた料理で怪我をするような子じゃないでしょ」

「ごめんなさい」

桜先生が怒ってる。本当に母親だったんだ。

「あなたが家事をやらないと私はどうすればいいのよ」

「ごめんなさい」

自分でやろうと思わないのだろうか。そこは文句を言っていいる所だぞ愛華。

「もういいわよ。跡も残らないそうだし一週間で退院できるように

頼んでおいたから」

「それじゃ困るの！入院が長くなってもいいの」
急に大声を上げて拒んだ愛華を桜先生は呆然と見ていた。俺も驚いた。生気がなくせに迫力だけはすごかったからだ。興味のなさそうだった凜ですら愛華の顔を見ているぐらいだ。

「はあ、ああそう分かった。御波にはそう伝えておくわ」

新しい飴を舐めながら部屋を出る時俺だけに聞こえるように愚痴を言った。

「面倒臭いなあ。私の仕事増えちゃった」

愛華も入院することになって俺たち三人は暇な時を共有する仲間になった。

比較的会話が多いとはいえないこの面子だ。会話があつたとしても

「もう少して夏だね」

「そうだな」

「慎也君は退院したら何がしたい？」

「そりゃもちろんバスケだろ。夏の大会には出られないけど秋の大会には出たいからさ」

「そつか……頑張つてね」

「おう」

こんなもんだ。ちなみにこの会話は今日一日だけで三回目だ。

凜が会話に入ってくれば少しは盛り上がりと思うがいつも図々しい凜は昨日から譜面に向つてうなっているだけだ。

Pineapple社の音楽プレイヤーで何かを聞きながら書いては消してを繰り返している。

「凜、何してるんだ」

「……」

無視された。分かっていたさ、こいつは自分以外のことは考えない奴だって。勉強の時もそうだ。散々質問したあげく理解できないと言い答えを丸写しするような奴だ。俺のことなんて眼中にないよ

うだ。

「凜さん何をしているのですか」

「アリスドールの歌に似たものを書きたくてね。さつきから考えてるんだけど難しくて」

「アリスドールですか。私大好きです」

「へー意外。あなたこっち系の歌聴くんだ」

愛華には即答ですか。まあ、女の子同士というのは大きいでしょうよ。

ちなみにアリスドールとはダークな歌詞を多く出している人気の三人グループだ。ゴシックロリータの服を着ていて人形のような女の子達だそうだ。だそうだと言うのは誰も素顔を見たことが無いからだ。噂だと素顔を見ると呪われるとか記憶喪失になるとか言われている。じつは俺も隠れファンだったりもする。

「入りますよ」

愛華が入院して初めて見舞いに来たのは伊藤ではなく東詩音だった。大きな花束を二つ持っていることから俺達の見舞いに来てくれたのだろう。あまり交流があったとはいえないのにそこまでしてくれるのは彼女の良い所なのだろう。口は悪いけど。

「あら、斎条さんに雑巾ではないですか」

「雑巾？」

愛華は凜を指さしてから俺を指さして首を傾げていた。

「斎条さんお気になさらないでください。場を和ませるただの冗談ですから」

東は俺の所に来て……

「そうですね、雑巾は言いすぎですね。これからは初心に戻って犬と呼ぶことにしましょう」

犬？ああ、そういえばそれが始まりだったような。

「って、名前で呼べばいいだろうが」

「ワンワン吠えられても分からないです」

花束を置かずに１８０度回って凜の所へ行ってしまった。

「はい凜。これが私から、こっちは拓馬からです」

あの二人知り合いだったのか。

「拓馬のはいらない愛華にあげて」

「そうですか」

本来受け取られるはずのその花束は愛華の方へ贈られることになった。

「いいんですか？」

「いいのいいの。花なんて貰っても嬉しくないんだから」

東に貰っておきながらそれを本人の前で言うかよ普通。

「長い間入院しているとね。100回花束を貰うより1回会いに来てくれる方が嬉しいものなの」

「そうなんですか」

「そういうもんなの。だから遠慮しないで貰ってよ」

二人の隣には花が飾られることになった。俺はもらえなかったけど好きじゃないし俺が貰っても花なんて似合わないだろ。

「そうだ、犬にも何かあげなきゃね」

手提げ鞆をあさりながら何かを探しているようだ。

「いいってそんな気を使わなくても」

「いいから手を出して」

嬉しさを隠せずほころんだ顔をしながら右手を出した。

広げた手に置かれたのは百円硬貨だった。

「なにこれ？」

「『百円あつたらミヤックに行こう』野郎は花より団子でしょ」

ミヤクドナルト。ファーストフードなのに鳴門を扱っていて低力ロリーで有名なチェーン店だ。俺も部活帰りにキャプテンとよく行ったりもする。

「俺入院中の身なんですけど」

「あら、そうでしたわねえ。なら、これはいりませんわね」

俺の手に置かれていた百円玉を奪い取り東は病室の出口へと逃げた。

「それでは皆さんお大事に」

その日の夕方伊藤たちが見舞いに来た。今日は日曜日と言うこともあってみんな私服での登場だ。昔からの付き合いとはいえそれは学校内でのこと五十嵐となら休みでもよく遊ぶが伊藤と休日会うのは意外と新鮮だ。

「愛華大丈夫？どこか痛くない？」

「もう、未来は本当に心配性なんだから。ちょっと切っただけじゃん」

「ちょっとじゃないでしょ、入院までして」

やっぱり伊藤と愛華が話しているのを見るといつも通りって感じで落ち着ける。

「中本、もう歩けるのか？」

五十嵐だ。バスケの帰りなのだろうかボールとスポーツバックを持っている。

「歩くだけならな。走ったりするのはまだ無理かな」

『まだ』ではなく『もう』に近いとも言えるかもしれない。

「ふーん、なら秋の大会には出れるのか？」

「まーな、他校との練習大会だろ復帰戦には丁度いいと思ってるかな」

勝っても負けても誰にも迷惑はかけないからな。自分の限界を知るには丁度いい。

「慎也、二人だけで話したいんだけど…歩けるか？」

いいぜと答え立ち上がり久々に会った凜々しい珊瑚についていくことにした。

第24話 宣戦布告と戦闘態勢

珊瑚と来たのは屋上だった。あの時と同じとは言わないが似たような気まずさがあった。

あの時と似ている空気なのに空は青く晴れ渡っていた。俺が空を飛んだあの日のように。

「憤也、無理をさせてすまなかったな」

冷たい声、突き刺さるような目付き、昔の近づきにくい珊瑚が今の珊瑚だ。

「気にするなつて外に出られていい気分転換だ」

「辛くなつたらすぐに言ってくれよ」

珊瑚はすぐ隣にいるのに遠くに感じるように感じる。氷の壁が間にあって珊瑚の暖かさも表情も全てを消し去っているようだ。

「前みたいに無理しないで話してはくれないのか」

珊瑚に嘘をついた俺がそんなことを言っているとは思っていない。珊瑚に見限られたとそう思うのが普通だろう。だけど、この氷の壁は珊瑚が無理をして作ったものだと思うと辛かった。

まだ名前で呼んでいてくれたから前みたいに話してくれるのではないかと期待してしまう。

「……………」

「やっぱりまだ怒ってるよな。夢…潰しちまったんだもんな」

俺も夢、目標を失って分かった。これほど苦しくて無気力になるなんて。

逃げることになるかもしれない。だけど、珊瑚の近くに俺はいてはいけないんだ。

珊瑚に近づいてはならない、触れてはならない、話しかけてはならない。そうだ。珊瑚から離れよう。たとえ、自分がどれだけ傷つこうとも珊瑚がこれ以上傷つかないならそれでいい。

「ごめんな。瑠璃川」

戻ろう、あの病室にはまだ俺を受け入れてくれる笑顔がある。

「待つて、行かないで！」

氷の距離を置かれた瑠璃川の声ではなく俺が欲していた珊瑚の声だった。

「瑠璃川……」

「やだ！名前で呼んでよ。私から離れていかないで！お願い……」いきなり泣き崩れた。なにがどうしたんだ？

「私から逃げないで、私を怖がらないで、お願いだから、昔みたいに、名前で呼んで、そばにいてほしいの！」

涙……どうしてだろう。俺はなぜ何度も珊瑚を傷つけるようなことをするんだろう。

そんな自分が嫌いになって、珊瑚の涙が忘れられない傷となって、俺の中から珊瑚が消えない。珊瑚のことも珊瑚を傷つけたことも何一つ忘れさせてくれない。

「でも、俺は珊瑚の夢を……」

「そんなことはもうどうでもいいの！」

どうでもいい……心の中ではそう言われるのをずっと待つていたのかもしれない。俺はなんて卑怯で小さな奴なんだ。珊瑚といると俺は自分の本当の姿を見せられている気分だ。

「蓮兄さんのことを知ることができなかったことは辛かった」

「だから、俺は……」

「それよりも慎也が隣からいなくなっただけがもっと辛かった！」

「珊瑚……」

泣きじゃくる珊瑚が強く抱きついてきた。傷口や脇腹が碎けれるほど痛かったけど今の俺は珊瑚を受け止めなければならぬと思いつつ耐えた。

「いつも隣にいてくれた慎也が急にいなくなって悲しかった。大怪我をしたって聞いて私のことを忘れていないか怖かった」

薄地のパジャマに涙がしみこんできた。深く傷をつけた涙なのに俺を心配して流されたこの涙は心に刻まれた戒めの記憶を薄めてく

れた。俺は黙って珊瑚の頭を撫でることしかできないが少しずつ自分が変わっていくのが分かった。

「慎也にはずっと隣にいてほしい。私から逃げないで！」

珊瑚に迫られているとき俺は愛華のことを忘れていた。

「いった。くそー、脇腹痛！」

「ごめん……」

「気にするな……って言いたいけど少しは悪いと思っていてくれ」
痛みを堪えながらベンチに座っていた。

目の腫れた珊瑚を連れてすぐに病室には戻れないので休むことにした。

「珊瑚、本当にいいのか」

「何が？」

「兄貴のこと……本当に俺を許してくれるのか」

柔らかだに戻った俺達の関係だ。これを聞いてこの柔らかな関係がまた崩れるかもしれない。だが、前みたいに少しでも硬い関係に戻すならここから始めなければならなかった。

「まったく気にならないと言えば嘘になる」

「やっぱり……」

「でも……」

右腕を抱かれ見上げる瞳が俺を見ていた。

「私には蓮兄さんのことより慎也が必要なの」

本人は無意識で言っているんだと思うが俺にしたら愛の告白をされた気分だ。

「そ、それならなんであの話し方をしていたんだ。嫌なんだろアレ」
珊瑚に見つめられて視線を離してしか話ができなかった。

「慎也のことを忘れよう……名前で呼び合う前の関係に戻ろうとしたの」

「それってやっぱり」

「違うの！そうじゃないの」

俺の予想を即座に否定した。

「慎也は斎条と付き合うことになって初めは悔しかった。でも、負けたくないって思った。だけど……」

「だけど？」

「斎条には敵わないと分かった。『慎也君のためなら私は死ねる』冗談だと思ったけどそんなことを実際にやられると私なんかよりずっと慎也のことを思ってるんだなって」

やっぱりか、愛華がそこまでするとは信じたくは無かったがそこまで愛されていると知ると嬉しいより恐怖を感じる。俺のために自分を傷つけてほしくないとはつきりと伝えなければ。

「だから、慎也のことをあきらめようと思った」

「珊瑚」

「だけど、やっぱり無理みたい」

俺から距離をとりフェンスの前に立った珊瑚は笑顔で敬礼をした。

「私、瑠璃川珊瑚は中本慎也を本気で愛します」

ニコツと笑って走っていった屋上を後にしようとしていた。

自然とその背中を追いかけていた。

走り出した時にはもう珊瑚は見えなかったけどそれでも珊瑚に会いたくて走った。

走れたのはたったの20mだ。

夢のような感動からいつきに現実に突き落とされた。

膝に力が入らずその場に倒れこむ。心臓の速度が異常に早い。必死に呼吸をしても全然足りない。呼吸をしなければ死ぬ。それなのに胸の苦しみが呼吸を拒絶している。

涙も汗も唾液までもでて空気を求め続けた。

嘘だろ。本気で走ってこれだけの距離かよ。

「おい、大丈夫かよ」

誰かの声が聞こえて俺は安心できた。

よかった。また誰かを悲しませることをせずに済んだ。
その時、初めに浮かんだ顔が珊瑚だったことは良く覚えている。

「いち、にーい、さーん……」

遠くで数えているのが聞こえる。

「しーい、ごーお、しーんやーくーん……」

誰かが呼んでいる。起きなきゃ。

「やあ、おはよう慎也君」

目覚めて目の前にいたのは男性の医師だった。眼鏡をかけ無精髭を生やした30歳ぐらいの優しそうな人だ。その隣には愛華の母親の桜先生が飴を舐めながら立っていた。

「はじめましてかな、君を手術した御波聖雅だよ。よろしく」

微笑んだ顔が目前まで来た。そして、彼の本性の一端を俺は知った。

「ようやく治り始めた体で走りやがって、次面倒かけたら殺すぞ餓鬼」

御波先生は笑顔のまま病室を出て行った。

「走りたい気持ちは分かる。けど、体のことを考えなさい」

いくら大人として見習いたくない桜先生でも今回は大人しく説教されよう。

「すみません」

「本当に迷惑。さつさと仕事終らせて帰りたいのになかなか起きないんだし、おかげで15分20秒も待ったんだからね」

人が気を失ってる時間なんか計るんじゃないやねえよ。

「さつさと始めるわよ。愛華、貴方もここに座りなさい」

隣に愛華が座った。愛華に大丈夫など聞かれたが簡単に答えて桜先生の診察が始まった。

「慎也君。鳥が見えたって言ったみたいだけど何色の鳥が何羽いたのかな」

「はい？」

この人は何を言い出したんだ。鳥？何羽？わけわかんねえ。

「飛び降りた時に鳥が呼んでいるとか話したんでしょ」

あのその場しのぎの嘘がこんな扱いをされるとは……大人ってこんなに簡単に信じるんだ。

とは言え、いつまでも嘘をつくのは疲れるので速めに白状しておこう。

「実はその話う」

「嘘だつてことぐらい知ってる。慎也君は何を例えて鳥と言ったのかな」

「どうして分かった」

「精神科医だつて言ったでしょ、嘘を見抜くのは得意なの。で、何色で何羽いたの？」

親は嘘を見抜くのが上手いけど娘は嘘が下手ときたか…愛華はばれていないつもりでもこの人は全て知っていると言うことか。

「白色で二羽ですよ、二羽。今ひらめいたから深い意味は無いですよ」

「ふーん、白色で二羽…ねえ。愛華頑張りなさい」

「？」

「雲がある空を飛んでいる白い鳥を見るのは難しいこと、その鳥だけに注目している。つまり白色は気になると言う意味。そして、その数が二羽。慎也くん、愛華以外にも好きな子いるのかな？」

な！そんなのこの人の嘘だ。そうだ、嘘に違いない。俺をほめようとしているだけだ。

「いませんよ。俺は愛華一筋ですから」

「慎也君」

「あらあら愛華ったら赤くなっちゃって、ねえ愛華手ぐらひは繫いだんでしょ」

小さく頷いて肯定した。

「それじゃあ、キスは？キスはしたの？最近の小学生は速いって聞

「いてるからねえ」

「そ、そんなことしたこと無いよ」

「えーないの、つーまーらーない。そうだ。いますればいいじゃん。私が許可する！」

「なんだか友達みたいなノリになったぞ。親子と言うより姉妹みたいな会話だ。」

「いやだよこんな所で、初めては大切な時までとっておきたいの」「ふーん、それじゃあ凜ちゃんキスしたことあるの？」

急に話を振られた凜だが聞かれることを覚悟していたのだろうすぐに答えた。

「ありますよ。相手は言いませんけど」

「おお、それなら凜ちゃんしてみてよ、慎也君と」
凜は俺の顔を見るなり鼻で笑った。

「冗談、誰がこんな奴と、いくら桜先生の頼みでもそんな」

「駄目です！」

賑やかだった病室が愛華の大声で静まり返った。

「駄目！慎也君は私だけのものなんだから誰にも譲らない。奪う奴は私が……」

俺にしがみつく愛華は凜を睨みつけていた。いつも強気な凜だが流石に怯んでいるようだ。

「はいはい、分かっているわよ。ただの冗談じゃない。愛華ったら必死になっちゃって可愛い」

顔が真っ赤になった愛華の頭を撫でながら桜先生はカルテに読めない字を書き俺達三人に飴をくれた。

「それじゃあねえ。仲良くやりなさいよ」

ゆるい声を出しながら桜先生は病室を出て行った。

「まったく、あの子ったら私にそっくりで……」

舐め始めたばかりの飴を噛み砕く。

「独占意欲が強いんだから」

明日で退院だった愛華の予定を二週間後に延ばす手続きに向った。

第25話 本心を隠して

夏休みを病院で過ごすというレアな体験をさせてもらって新しく学んだことが沢山あった。

一つ目、学校は病人に優しくしてくれないとこだ。

夏休みが始まるなり宿題を届けに来やがった。利き腕が使えるならできるよなつて理不尽な説得をしてきた。

少しは労わる気持ちは無いのだろうか。

確かに問題集はやることはできる。だが、学校を怨んだ宿題があった。自由研究と写生だ。

病院の中でどんな自由研究をしようか相当悩んだ。毎年と同じ向日葵の観察日記は駄目だったので唯一外に出れる屋上、そこから見える星の天体観測をすることにした。始めは楽しくできたが夜起きるのがどんどん辛くなつてきて間違つた選択をしたと今更思っている。

写生は自分の隠された能力を発揮することになった。写生のお題は『夏らしいもの』だ。入院してしばらくしか経っていないが病室にいただけでは季節の流れなど感じない。それどころか時間の流れも狂ってしまうほどだ。

夏らしいものを想像して描くしかなかった俺はスイカを想像で描くことにした。だが、病院で絵の具を使うことを禁止されていた。渋々鉛筆一本でスイカを描くことになった。時間はたつぷりあったのでそこそこのものができたが白黒のスイカは夏らしさを感じないだが、何も見ないでここまでスイカを描くことができた自分を褒めてあげよう。

二つ目に暇になると何に対してもツツコミを入れたすことだ。

当初は凜や愛華の行動に対してだけだった。二人とも面白がつて受け答えしてくれていたが近頃では無視され始めている。相手されなくなつて退屈が頂点だった頃は鏡に映った自分に話しかけ始めた

ほどだ。桜先生を呼びに行かれた時は相当焦ったがな。

三つ目に

「慎也煩い！いい加減にしなさい」

「あ、すまん。俺またやってたか？」

「慎也君、そこまでだと病気かもしれないよ。またお母さん呼んで
こようか」

三つ目に無意識に長々と独り言を言い出すことだ。無意識なので
本心を口に出したりしていて正直困っている。

今のように皆そろっての勉強中に良く出しているようでイライラ
や退屈が原因だろう。始めのうちに写生や工作を済ませてしまった
のが原因とも言える。残った宿題は問題集だけだ。ひたすら書くだ
けで気晴らしが無いのが辛い。愛華が時々問題集以外の宿題をして
いるのを見ると遊んでいるようで羨ましいくらいだ。

「くそーまた解らねえ問題だ。五十嵐の奴来てくれねえかなあ」

「夏休みになった途端五十嵐君お見舞いに来てくれなくなっただね」

「そーゆーもんよ。心配しているって言いながらも結局は始めの形
だけなんだから」

経験者は語る……。か。夏休みが始まって二週間。それまでしつこく
来ていた五十嵐が急に見舞いに来なくなった。大会が近くなってきた
たから来れなくなるのは仕方ないが宿題の助力を願いたい所だ。特
に凧の相手をしてほしい。

「慎也この問題教えて」

「断る！俺は自分のことで精一杯だ。愛華に教えてもらえ」

愛華は読書感想文のための本を読んでいるだけだ。そんなことを
しているなら凧の相手をしてほしい。俺より勉強できるんだから余
裕のはずだ。

「愛華教えて」

「凧さんごめんなさい。これから未来が来てくれるから」

伊藤が来るのか……。凧の相手には十分な面子だな。

「こいなあ」

「からさ」

「未来だ」

入り口近くから伊藤の声が聞こえた。それ以外に男の声も聞こえる。

「いい加減にしてください。ついてこないで」

「へー君もここにようなんだ。奇遇だな、僕もなんだよ。きっとこの出会いは星の導きだよ」

「この声、この喉の奥に引つかかるような嫌な台詞」

凜が苦虫を潰したような顔をしている。この声の男と知り合いなのだろうか。

「やあ凜、久しぶりだな」

病室に入ってきたその男は伊藤と肩を組んでいた。伊藤はというとかなり嫌そうで引き離そうと必死だ。

「離れる、何なんだよお前は」

「駄目だなあ。君のように美しい女の子がそんな乱暴な言葉を使つて」

「くっ……」

伊藤が押されているなんて珍しい。

「ほーら、そんなむくれた顔しないで笑顔笑顔。君って笑うととても素敵なんだろうなあ」

伊藤は嫌がっているが俺から見ると付き合っている二人に見えてきた。そんな事伊藤には言えないがな。

「ほーう、拓馬いい度胸してるね。私のことはもう諦めたってことね」

凜が怒っている……と言うよりやきもちを焼いているのかな。いつにない凜を見られて俺は十分面白いけど。

「勘違いをしてはいけないよ凜。僕は全ての女性を愛している平等愛主義者なのだよ」

「それなら私も愛華もその子も同じなら私にこだわる必要はないでしょ」

「分かっていないな。他の女の子と話しているときのやきもちを焼いている凜が可愛いんじゃないか。そうだとその少年Aよ」

同意を求められてもそんな事気安く答えられるわけ無いだろ。

「慎也君そうなの？」

愛華までそんなことを聞かないでくれ。

「うーん……嬉しいような気もするかな」

なんだかんだで本音を言ってしまう自分がいた。もし俺が彼の立場だったらそう思うだろうし、愛華にもやきもちを焼いてもらいたいとも思う。想像すると顔がほころんでしまう。

「もう！だから男は嫌なの。で、わざわざ何しに来たの」

「いやなに、凜が僕に会いたがっていったって詩音が言っていたから」

「べ、別にそんなこと言っていないもん」

100回花束を貰うより1回会いに来てくれる方が嬉しいとか言っていたような気が……まっ、これが凜の照れ隠しなのだろう。もし、独り言が大きかったら喜びの声で一杯だろう。

「そうか、それなら帰るわ」

「えっ、ち、ちよつと待ってよ。帰らないでよ」

180度変わった凜に俺達はい笑ってしまった。素直に喜べない凜は面白いとより可愛く見えた。

「今の反応は良かったぞ。いつもの1.2倍可愛く見えた。そうだと少年A」

「ああ、いつものツンツンした凜とは違ってよかったぞ」

「慎也、あんたねえ」

怒りのオーラが見える。それもまたいいかもな。

「慎也君！私を見るの」

やきもちだ。愛華がやきもちを焼いている。思ったとおり可愛かったし嬉しかった。

「悪かったって怒るなよ」

満面の笑みでそう言っても愛華の機嫌は簡単に直ってくれなかった。

「中本、ちよつといい。話したいことがあるの」

今まで黙っていた伊藤が俺だけ呼び出した。始めからおかしいと思っていた。愛華の見舞いなら椎名も一緒のはずだし真っ先に愛華に駆け寄るような奴だ。そうしないということは俺に用事がある。それも、あのことだろう。

「別にいいけど屋上だけは止めてくれよ。すつごく雨降ってるし」
蒸し暑く熱帯雨林のような豪雨の中彼と伊藤は見舞いに来てくれた。それぞれ何か強い思いでもあったのだろう。この雨の中をわざわざ来るほどに強い何かが。

屋上以外で二人きりになれるところがなかなか見つからない。確かに病院で目の届かない所があるのは問題だと思うがこれからする話を他人に聞かれたくないのが心情だ。

探しに探して病院と大学の境目まで来た。ここから先俺達は立ち入ることができない。仕方なく戻ろうとすると珍しい声が聞こえた。
「こんな所でなにやってるんだ馬鹿」

大学エリアから滅多に聞かない声が聞こえる。そこには薄汚い白衣に無精ひげを生やしたやつがいた。周りには何人も大学生を引き連れてでかい態度だ。

「君達は先に戻っていてくれるかな」

大学生を先に行かせ俺のところへ来た。

俺より伊藤をじっくり見て

「浮気か？斎条から聞いた話とは違うな」

「うるさい、彼女は伊藤未来。ただのクラスメイトだ」

伊藤は頭を軽く下げて挨拶をした。こいつに頭を下げなくてもいいのにと心で思っていた。

「そうか、愛華ちゃんとは仲良くやれよ。斎条と職場で気まずくなるのはごめんなのでね」

「うるせえ、そういえばお前一度も見舞いに来なかったな」

「馬鹿言え、運び込まれてすぐに行ってやったぞ。おかげで実験を止められていい迷惑だぞ」

「俺より実験の方が大事だと言うのか」

「ああそつだ。1024倍大事だ。2の10乗だ」

「2の10乗ってなに訳の解らねえこといつてんだよ」

「そうか、頭がさらに悪くなったのか。中学生ですら知っていることなのにな」

「小学生の俺がそんな事知ってる訳ねえだろうが」

言い争っている袖を伊藤に引っ張られた。

「中本…この人誰？お兄さん？」

兄貴…そうか。見た目から判断するとそう見えるよな。

「親父だ。親父。育児放棄したような駄目親父だ」

そう、生活費を大量に送りつけてくるだけで滅多に顔を見せない親父だ。生活は麗羅さんがいるからなんとかなるが親がいないのも何かと不便だ。あつ、麗羅さんについてはまた今度説明するからな

「お父さん？すごく若いんだね」

「その辺は気にしないでくれ。それより親父、誰も来なくて二人きりになれる場所知らないか」

餅は餅屋。この建物に詳しいこいつに聞くのが速いだろう。

「二人きりになりたいだと……仕方ないな俺の研究室を貸してやる」
渡された鍵には部屋の番号が書かれていた。

「この先を真っ直ぐ行って突き当たりの階段を6階まで上って緑色の扉を通って左側にある二番目の階段を3階まで下りて突き当りまで行って4階まで上がって始めの曲がり角を右に曲がればあるから」

「覚えられるかよ。もっと分かりやすく教えるよ。先生だろ」

「たく、その角を左に曲がればすぐだ」

初めからそう言えよ。こいつは病人をどれだけ歩かせるつもりだったんだ。

着いた部屋は使われている感じがまったく無くただの物置となっている部屋だった。ただ話をするだけなら十分な所でもあったが研究室とはいえない。

「で、長くなっただけど話ってなんだ」

「あの事故のことなんだけど……ごめん」

やっぱりか。俺はもうどうでもいいと思っているがやはり伊藤はまだ引き摺っていたのか。

少し前の俺と同じだな。今になって分かる珊瑚がどんな気持ちで謝罪を聞いていたのか。

もう、どうにもならないと分かっている。自分でも決着をつけていることに対してここまで謝られると逆に悪いようで苦しくなる。だから、俺はあの時一番ほしかった一言をあげた。

「そんなことはどうでもいいよ」

「でも……」

「いいって、あれは俺も悪かったんだからさ」

「そんなことない！全部私が悪いの」

伊藤は何かと頑固だからな。正義を貫いて白黒をはっきりしたいのだろう。そして、あいつの中では自分を自分で真っ黒だといっているのだろう。

「そんな事無いって、あれは俺達二人だけの秘密にしておこうぜ」

「そのことなんだけど……私、皆に本当のこと言おうと思うの」

決意、自分のしたことの重さを知ってなお恐怖に脅えながらそれに立ち向かう。伊藤の強さが見えた。だが、震える彼女はそのまま砕けそうで見えていられなかった。

「駄目だ！」

「どうして」

「お前がどう話そうとしているか知らないが今のお前は全部自分が悪いように話しそうだ。それは真実じゃない。お前の正義や責任が作った嘘だ。その嘘を聞いて愛華は悲しむしお前を怨むと思う。ただでさえ今の愛華の心は不安定なんだ。そんな嘘絶対つくな。いい

な」

素直に伊藤を守ってやりたいと言いたかった。だけど、そんなこと言うと伊藤はさらに責任を感じるだろう。ここは悪いが愛華を理由に使わせてもらった。愛華ごめんな。

「でも」

「絶対だ。約束だぞ！」

「でも、それじゃ中本が……」

「俺のことは気にするなって、伊藤は愛華を笑顔にしてくれればそれでいいからさ」

泣きじゃくる伊藤の頭を軽く叩いて慰めてやった。

その時俺は何も知らなかった。

俺を取り巻く環境、友達、それらがどう変わっているのかを……

それを伊藤は伝えたかったのかもしれない。不器用ながらも必死に自分を削りながら……

第26話 諦めるとき

夏休み終了一週間前になって俺と愛華はようやく退院できた。俺はリハビリ期間を省いての特別扱いの退院だ。親父に頼んだかいがあったというものだ。

愛華の怪我なら夏休みに入っただけでも退院できたのだからなか桜先生の許しが出ず俺が追いついた形になったのだ。

窓から手を振っている凜に俺達は手を振って別れの挨拶をした。

「慎也君まだ学校でね」

「お互い短い夏休みを楽しもうな」

俺は家で療養することが退院の条件の一つに入っている。それを知っている愛華は俺とではなく伊藤たちと遊ぶらしい。そうしてもえらると俺も助かったりもする。五十嵐が学校で宿題と共に待っていてくれる。結局残った宿題を片付けて二人でやるのが沢山あるからだ。

愛華は桜先生と帰って行った。

俺は荷物を麗羅さんに預けすぐに小学校へ向おうとした。

しかし、簡単に麗羅さんに捕まってしまった。力が強く振り切ることができなかった。

「離してくれよ。どうしても試してみたいんだ」

1クォーターしかもたない体。小学生独自のミニバスケットではどこから打つても2点しか取れない。目標は15本。10分で15本打てるようにならなければならない。フリーでいけるかいけないかわからないの難しさだ。ボールがまわされないことも考えられる。奪って打つ。トリックを極めることもしなければ。それよりなにより10分走り続けられるかどうかを確かめたい。

「駄目です。慎也様に運動はさせないよう旦那様にきつく言われているのですから」

麗羅さんは家事と家庭教師と保護者を親父から任されたメイドさ

んだ。歳は聞いても笑って誤魔化されるだけで見た目は25歳ぐらいのお姉さんだ。容姿も良く文武に優れ親父に言わせれば麗羅さんこそ自分の子供にふさわしいらしい。

「頼むよ、麗羅さん。三日分のお願い」

「少ないですね。駄目なものは駄目なんですからね」

そう言われることは分かっていた。俺が長い入院生活で何も考えていなかったと思うなよ。麗羅さんの弱点は既に研究済みなのだ。

あたりに顔見知りがないのを確認して潤んだ瞳で麗羅さんを見つめた。

「お願い麗羅お姉ちゃん」

「はうあ！」

昔一度だけ間違って麗羅さんをお姉ちゃんと呼んだことがある。それからしばらくはどんなお願いでも聞いてもらった記憶がある。性格を利用するのは悪いが俺にも譲れないものがある。

「だ、駄目なのでしゅ」

台詞は怒っているが顔は笑顔で一杯だ。でも、これ以上やっても喜ばせるだけだ。こうなったら脅ししかないか。

「だったら親父に言うぞ」

「な、何をですか？」

笑顔から緊張と恐怖を含んだ顔になった。顔がコロコロ変わる麗羅さんは面白い。

「屋根裏部屋で猫を10匹も飼っていることとか」

「ふえ、なんで知っているのですか」

「親父が大事にしていたワインを飲み干して代わりに安物のワイン入れたこととか」

「旦那様美味しいって言って飲んでいましたよね」

「目の前に俺がいるのに息子を誘拐したって電話を信じて身代金振り込んだこととか」

「あ、あれは慎也様を心配して」

「親父が帰ってきたとき二日酔いで夕飯はお惣菜を盛り直しただけ

だったとか」

「はうっ」

泣き出しそうなドジメイドの麗羅さんに満面の笑みを見せて回れ右をした。

「親父に話したいことはまだまだ沢山あるし、まだ大学にいるよな」病院に戻ろうとするが先ほどより強い力で引きとめられた。

「待ってください……わかりました。許可しましょう」

「マジで？」

「マジです。ただし、私が付き添うことが条件ですよ」

そっちの方が好都合だ。限界ギリギリもしくはそれ以上を試せるからな。

「それならすぐにいこう。今すぐいこう」

車に乗り込むとバスケットボールとシューズが置かれていた。お昼のお弁当まで用意されていて麗羅さんはこうなることが分かっていたようだ。やっぱり麗羅さんはすごい人だな。

小学校の体育館に入るとバスケ部が練習をしていた。その集まりから離れて隅の方で五十嵐とキャプテンがトリックの練習をしていた。特にキャプテンは動きに切れを出す練習を重点においてやっていた。五十嵐も苦手としていたボール捌きが上手くなっていた。2ヶ月見ない間にずいぶんと追いつかれた、いや、追いつかれ追い抜かれたと言った方が正しいか。

「シンシンようやく登場したな」

「どうしてキャプテンがいるんですか。中学の方は？」

「虎之耶は俺が呼んだんだ」

格段に上がったシュートを俺に見せつけるようにして五十嵐が来た。

「俺だけではお前がこれからやっていけるか分からないからな。虎之耶にも見てもらおうと思って」

五十嵐とキャプテンだけでは俺のことを教えてある。黙っていてもすぐに分かることだ。それなら早めに相談しておいたほうが何らかの策ができるかもしれない。

「それよりシンシンあの人は？」

キャプテンが指さしたのは顧問の先生と一緒に楽しそうに話しているフリフリメイド姿の麗羅さんだ。

「ああ、麗羅」

言いかけて戸惑った。麗羅さんは家のメイドさん。そんなこと言ったらこの二人はどんな反応をするだろうか。今の今まで隠していた家のことは言いたくない。言ってもいいのだが長く隠していたので言いづらいのだ。

「姉さん。そう、姉なんだ」

「シンシンにお姉さんなんていたんだ」

「そんなことより五十嵐、勝負してくれないか」

久しぶりに履くシューズの感触を確かめながら五十嵐に近づいていった。

9分後、まるで計っていたかのように俺の体が悲鳴を上げ始めた。呼吸が続かず腕に力が入らなくなってきた。五十嵐にボールを奪われ始めて足がもつれ転びキャプテンが10分経過の合図をした。

その場に座り込み五十嵐とキャプテンが側に座った。五十嵐も息が上がっていたが回復するのは五十嵐の方が倍以上早かった。

「キャプテンどうだった」

「技術やスピードは前までとまったく変わってないな。成長してないともいえる。マコマコの方が成長したと言うことだな」

容赦ないキャプテンの感想を黙って聞いていた。五十嵐は褒められて嬉しそうに頭をかいていた。

「だが、最後はアレだ。徐々に悪くなるのではなく途端に悪くなる。それはシンシン自信がよく分かっているだろ」

確かに終了間際体力がなくなっただけとも言ってもいいような疲労感と

苦しみが体を支配していた。

気力で1分走ったが速度も自慢のシュート率もガタ落ちだった。

「俺が監督だったら9分で即交代させる。マコマコはどう思った？」
スポーツ飲料をCM顔負けの飲み方をしていた五十嵐が俺に満面の笑みを見せて笑っていた。

爽やかスポーツ少年とはこんな奴を言うんだろうな。

「得点は18対8、俺の惨敗。だが、終了1分だけを見るなら0対4だ。初めの10点差なんてあと3分で埋められる。虎之耶の判断は俺も正しいと思う」

「はつきり言つてやる。戦力不足とは言わん。体力不足だ。小学校ではそれでいいが20分持つ体にならないと中学では通用しないな」
中学のことはどうでも良かった。五十嵐相手に18点、五十嵐一人だぞ。目標に遠すぎて悲しくて悔しくて先のことを考えなくなつた。大会中コートの中で一人遅れて走っていて最後には倒れる自分。想像するのは惨めな自分しかいなかった。

「外走ってくる」

今は少しでも体力を付けたい。外に出る時麗羅さんに付き添うと言われたがもしもの時の薬と携帯を貰って一人で行くことにした。

外に出ると日差しが強くまだ夏は終わっていないことを主張していた。

首に掛けたストップウォッチを9分にセットしてコンクリートで舗装された学校の周りを走り初めた。このコースは運動部の体力コースとして使われているので他の部のも走っていた。

9分経って4分休み実際の試合の時間運びに近い走りをしてみた。それでも走ることができたのは14分ぐらいだ。ただ走るだけなのにこれでは試合なんてとてもできたものではない。

「慎也退院したんだ」

コースから外れ絶望に打ちひしがれている所に珊瑚が現れた。学校指定の体操服を着た珊瑚はコースを走っていたようだ。コースか

ら外れ俺の隣に座った。

「座り込んでどうしたの」

「退院したてだから体力が戻ってないんだ」

「そうなんだ。無理しないでね」

無理をするなか…無理をしたくてもできない体なんだ。

俺達は走っていく生徒をただ見ているだけだ。途中椎名がいたが軽く話ただけでそのまま行ってしまった。

同じ生徒を見かけるようになった。椎名が俺のところに再び現われてタイムを見たらさらに悲しくなった。俺が休み休み走ったタイムの半分で回ってきやがった。今の俺は女子にも置いていかれるようになったのか。

「珊瑚、これは独り言だから黙って聞いていてくれ」

「うん」

独り言は本心を正直に声に出せる。理解してもらいたいからではない。自分の本心を知りたいから自分が聞きたいのだ。

「俺…バスケ辞めようと思う」

珊瑚は驚くことも理由も聞くことも無く黙ってそれを聞いてくれた。

「今日五十嵐とやってみて分かったんだ。俺はもうあいつには追いつけないって、必死に追いかけても俺は転んで置いていかれてどんどん差が広がるだけだ。五十嵐に追いつけない程度の俺じゃあ世界で活躍することもできやしない。限界が分かっている夢を追いかけるなんて……」

最後まで言い終える前に珊瑚は立ち上がり俺に手を差し出してきた。

「慎也付き合って」

珊瑚の手を受け取る前に無理矢理手を繋がれた。

「つ、付き合うつてどこに？」

「七ヶ橋小学校」

その小学校は赤井龍真が通う小学校だ。

第27話 夢を変える人と変えない人

七ヶ橋小学校はスポーツが盛んで強豪としても有名だ。夏の大会決勝でうちの学校はここに負けたそうだ。

「こつち」

珊瑚に連れてこられたのは体育館裏にある小さな道場だった。中から竹刀のぶつかり合う音が聞こえる。しかし、威勢のいい声はまったく聞こえず何かが倒れる音がするだけだった。

「入るよ」

ここに来てから不機嫌な珊瑚は必要最小限のことしか話さない。もしかして怒ってる？

道場の中にはなぜか冷房が聞いていて涼しかった。

一面に敷き詰められた畳の真中に立っていたのは赤井龍真だった。龍真は防具を着けず竹刀一本だけを持っていた。彼を中心に男女問わず多くの生徒が座り込んでいた。

彼達も竹刀や木刀を持っていた。

「弱いなー。話にもならねえ」

龍真の周りにいる男が龍真に襲い掛かった。しかし、竹刀を向けられ男は停止、そこを龍真の回し蹴りが脇腹に入り男は床に叩きつけられた。

「はい、また一人」

龍真は竹刀を男の首に当てた。男はため息を吐き龍真から離れた。「あとはお前だけだな」

龍真の目線の先には神原夢がいた。神原も防具を着けず竹刀を一本持って立っていた。

「いい加減諦めろよ。夏休みだぞ」

「煩い。あたしはそんな奴らと同じ考えでやってない。あんたを倒して姉さんに認めてもらうただそれだけなんだ」

「キーキー煩いなあ。5秒でけりつけてやる」

一跳躍で神原の近くまで飛び大きな着地音を響かせた。その音に怯んだ神原の右手を龍真は容赦なく竹刀で叩いた。

竹刀が転がってゆき神原の首に竹刀が当てられた。

「終わりだ」

「あーくそ、どうして勝てない」

わめきながら神原は俺達の所に来てぶつぶつ言っていた。

「今のつて剣道じゃないよな」

防具着けてないし回し蹴りとかしてたし俺の知っている剣道ではない。剣に触れたら終わりという本当の死闘と同じだ。

「この道場は一番強い人の指揮のもと使われる。この学校の決まりなんだって」

知らぬ間に袴に着替えていた珊瑚は防具をつけながら説明してくれた。

「元々先生の冗談から始まったそうなの。道場の設備に不満を持った生徒がいてね先生に勝つことができたなら好きにしていって。したら龍真が先生全員を倒してここを好きにしているの。それで、生徒会がどうにか取り返そうとしているんだけどあのざまってこと。夢や私は別の目的だけだね」

防具を着け終わった珊瑚は龍真に近づいていった。龍真も珊瑚を見るなり防具を着けて待っていた。

「よお珊瑚、懲りずにまたきたか」

「お願いします」

龍真に深く頭を下げた珊瑚は竹刀を向け戦闘態勢に入った。

「悪いけど」

龍真はさっきまで肩に当てていた竹刀を高く上げた。あれは確か上段の構えだ。

「女だからって手加減はしないぞ」

あれほどふざけていた空気が張り詰めたものに変わった。冷房の風が肌を切り裂く刃に感じるほど空気が研磨されていた。

先に動いたのは珊瑚だった。胴を狙ったようだが逸らされ珊瑚に

大きな隙ができたようだ。剣道未経験者の俺には分からなかったが神原が声を上げていたから不味かったのだろう。

それからすぐだった。龍真は珊瑚の首を突いた。珊瑚は飛ばされ床に大の字に倒れた。小学生で突きをしてはいけなかったようだ。神原が怒っていた。

「煩いなあ、剣道のルールは守ってるぞ。それに、弱者は黙ってる」「くっ、少し強いからっていい気になりやがって」

「少しじゃない。かなりだ。それに、不満は珊瑚だけが言う資格があるんじゃないか」

お互い面を取って見合ったが珊瑚は満足しているようだ。首を摩ってはいるが怪我はしていないようだ。

「いえ、ありがとうございます」

着替え終わった珊瑚は俺を連れて急ぐように道場を後にした。

道場を出て人氣が無いところに連れてこられた。

「慎也は夢を諦めるの」

「だってそうだろ。どうなるか分かっている夢なんて目指しても」

高校生まで我慢すればどうにかなるかもしれない。だが、それは遅い。五十嵐やキャプテンを見てよく分かる。たった二ヶ月でこれだけ成長するんだ。4年もたったら追いつけるわけがない。

「目指しても無駄。そんな理由なら私は許さないから」

珊瑚の真剣な目に俺は何も言えず立っているだけだった。

「例え無理な夢でも、叶わないと分かっているもそれに向って必死に頑張るから意味があると思う。少なくとも私はそう思っている」

「珊瑚……」

「龍真と初めて試合をしてみたとき勝つなんて無理だ。女の私には無理だって思った。蓮兄さんに追いつくことなんて無理なんだって思った。だけど……」

珊瑚は俺を睨みつけた。

「自分で自分に言い訳しなくなかった」

珊瑚は俺に話しているのではなく自分自身に言いかけているようだった。

「それらしい言い訳を探して自分が正しいみたいなのを言って夢を諦めた自分を認めたくない」

体が持たないから。

五十嵐に追いつくことすらできないから。

俺が思っていた夢を諦める理由、本当にそれは夢を諦めなければならぬほどのものなのだろうか。

体力は鍛えれば増えるかもしれない。高校生になれば普通に戻りもする。五十嵐にだって五十嵐の10倍練習すれば追いつくことができるかもしれない。

「惨めでも弱くても夢に向ってそれに必死に食らいついていく。私はそう決めた」

珊瑚の決意、俺に潰された夢なのにそれを知っていながらそれを目指している。珊瑚にとつての夢は何なんだろう。

「珊瑚の夢って兄貴より強くなることだったよな」

珊瑚の夢を聞いたことがある。その到達点が無い珊瑚は今何を目指しているのだろう。

「それは昔の夢、今の私の夢ではない」

夢が変わった？いや、替えたのだろうか。どちらも俺にはない考え方だった。俺にとつて夢は一つしかなかったから。世界で活躍できるプレイヤーになる。それが俺の夢だった。

珊瑚は小さな微笑を見せて夢を語った。

「誰にも何にも負けないぐらいに強くなる。龍真にも必ず勝って見せる。何があっても折れない心を持つ。試合でも恋愛でも何も私は誰にも負けない。たとえ負けても諦めない。絶対自分には負けない。それが私の夢、私が求める蓮兄さんを超える強さ」

憧れた、それ以上に敗北感を感じた。珊瑚も俺と同じで一度夢を失った。なのに今の珊瑚は昔以上の大きな夢を持っていた。だが俺は二ヶ月も夢を探す時間があつたのに新しい夢を見つけようとし

なかった。古い夢にすがり付いてどうすればいいかだけを考えていた。そして、出した結果は俺の理想より絶望的なぐらい離れていた。あれだけすがり付こうとしていた夢を自分の浅はかな考え一つ通らなかつたために諦めた。自分を正当化するための言い訳を沢山並べて夢を目指す恐怖から逃げたんだ。

「慎也の夢はなに？」

きつとこれが最後のチャンスだろう。夢を目指すなくなつた俺は楽だが立ち止まったり振り返り続ける人生を、夢を目指す俺は辛く苦しいが立ち止まることのない前を見つめ続ける人生を歩むだろう。どちらも俺にとっては辛い人生だ。だが、俺は

「俺の夢は、人生に後悔したくない。一度してしまつたことをいつまでも引き摺りたくない。何に対しても全力で自信を持つてやっていきたい。例え結果がどうあれ笑顔でそれを受け入れられるようになりたい」

「慎也はそれを目指すのね。で、具体的にはなにをするの？」

「秋の大会で七ヶ橋に勝つ！」

そうだ。五十嵐達だけでは勝てなかつたここを倒せたらそれは俺がチームに必要なだと言うことだ。どんな結果でもいい。俺ができるプレイをやればいい。もし、試合に出ることすらしなかつたら俺は永遠ここに勝つことはできないと思う。だから、試合に出る。出るなら必ず勝つ。

「あはははは、慎也可笑しい」

さっきまでの先輩みたいな頼りがいのある珊瑚から親しみやすい笑顔の珊瑚に戻っていた。

「何が可笑しいんだよ」

「いや、結局バスケで強くなるって、夢変わってないじゃない」
よく考えるとその通りだ。俺はバスケから離れられないのかな。
「いいんじゃない。慎也はそれだけあの夢が大切なんでしょ」

確かに俺にとってバスケで強くなることは大切な夢だ。これは小さい時からずっとそうだった。一度も揺らぐことなく持ち続けた夢

だ。捨てかけたけどここに帰ってきた。

「一つの夢に一途な慎也は好きだよ」

それを聞いて思い出した。俺、珊瑚に告白されたんだよな。

「珊瑚、あ、あのさ」

「秋の大会絶対に応援に行くからね。それじゃ、まだ学校で」

珊瑚は俺から逃げるように帰って行った。ありがとう珊瑚と心の中でお礼を言つて俺は小学校へと帰った。

体育館に戻った俺は麗羅さんに散々怒られた。だが、清々しい顔をしていると言われて嬉しくもあった。

それから夏休みが終るまでの短い間俺は少しでもバスケができるようになるための特訓が始まった。ほとんどの時間を五十嵐との勝負に費やし体力をギリギリまで削ることを繰り返していた。親父の知り合いの先生からのアドバイスで短時間で体力を取り戻す方法も教えてもらった。俺の体は心臓と肺の機能が著しく低くなっている。激しい運動をすると体中の酸素が足りなくなるらしい。2分のインターバルで酸素をできるだけ沢山補給してなんとか15分間だけなら前と同じプレイができるまでに回復した。

だが、そこからはまったくといっていいほど時間は延びなかった。そして、夏休みが終わり新学期が始まった。

俺のクラスは知らない間にずいぶんと様変わりしていた。気付きたくなくても気付いてしまうほどに激しく変わっていた。

第28話 小さな嘘と大きな嘘

時間の感覚がずれているせいで遅刻ギリギリに教室前についた。

教室の外でも中のにぎわいが聞こえてくる。夏休みの思い出盛り上がっている教室を見ると自分だけ置いていかれたような疎外感を感じる。そんな教室に俺は踏み入った。

一斉に多くの目線が俺を貫いた。その数秒間、静寂が教室の色だった。

「中本遅かったな」

五十嵐の呼びかけで教室のにぎわいは戻ってきた。俺は窓際最後尾隣の席に着いた。

前には五十嵐、横には珊瑚、左前には愛華、愛華の前に伊藤、この見慣れた光景を見るのも2ヶ月ぶりだと新鮮に感じる。

「慎也君おはよ。あの、今日一緒に帰らない」

伊藤と話していた愛華が満面の笑みで近寄ってきた。一週間会っていなかったせいかな今まで以上に愛華が可愛く見えた。

「俺、バスケの練習があるから遅くなるぞ」

「うん、待つてる」

「ちよ、今日は帰りに病院行くんでしょ」

愛華のいつもの嘘に伊藤が飛んできた。嘘をつくというより忘れていた感じだ。自分にとって都合の悪いことは忘れられるなんて少し羨ましい。

「えー、いいよ。ママと話すだけなんだし。慎也君と帰るほうがずっと大事」

何よりも俺を優先してくれる愛華はやっぱり俺にとって大切な彼女だと実感させられる。それは嬉しいが用事があるならしょうがない。

「病院にはちゃんと行けよ。こんどまた…」

目線を感じ言葉に詰まった。愛華や伊藤の目線ではない。他の遠

くから見ているクラスメイトの目線だ。あってもおかしくはないのだがその数が異常に多く感じる。その先に目をやるとすぐに目線が外される。俺の周りは前までとまったく変わらない空気だがその外側はまるで違う空気があるようだ。俺は愛華や珊瑚たちのいるこの空気の中に居るから分らないが外の空気はどう変わってしまったっているんだろう。その空気とギリギリで触れている愛華たちはどう思っているんだろう。

「慎也君どうしたの？」

「いやべつに……なあ、五十嵐。クラスのみんな変わったか？」

バスケット部の奴と話していた五十嵐はそいつに聞こえなくなるまで待つてから答えた。

「変わったな。あの噂が広がり始めた頃から」

「五十嵐！」

伊藤が声を張り上げ立ち上がった。取り乱した伊藤にみんなの目が集まっていた。

その緊迫した教室に無関心に先生が入ってきていつもの教室に戻った。

始業式が終ってから先生達の会議があるらしく教室で長い休み時間をとることになった。

みんな好き勝手に話したりしている。他クラスの出入りも激しく神原夢が珊瑚と話していた。愛華は伊藤と椎名と話しており俺と五十嵐の二人だけで教室の隅の方でクラスを見ていた。

「五十嵐、噂って何だ」

「お前が屋上から飛び降りた次の日から出てきた噂なんだがな。」
伊藤がお前を突き落とすって噂だ」

伊藤が関係しているのは合っているが突き落とされたのではない。噂はそんなどこか正しくて根本的なところが間違っていた。

「そんな噂が斎条の耳に入ってた。伊藤に本当かどうか聞いた。たんだ。もちろん伊藤はすぐに否定したよ。すると今度は『中本が

伊藤を突き落とそうとして失敗した』と言う噂に変わったんだ」

「まったく逆の噂に変わったな」

「そうだな。だが、今回の噂は強い根拠がおまけについていたんだ。斎条と伊藤は仲がいいだろ。いつも伊藤と一緒にいる斎条を独り占めしたいがためにお前がやったんじゃなかった」

あの時の愛華は伊藤よりも俺という時間の方が多かったはずだ。小学校だけを見るとそう見られたのかもしれない。

「それで、その噂が広まって教師達の間話題になったんだ。そして、お前のあの発言」

あの発言、鳥が呼んでいるとかいったやつか。あれは伊藤をかばうがために咄嗟についた嘘だったのだが。

「お前の発言が噂と共に広がってな。お前が殺人狂じゃないかって言われ始めてるんだ」

「ひでー言われようだな」

「だな。でも疑わしきは罰せよって感じだな今のクラスは」
だからみんな俺に近づこうとしないのか。

「ちなみに俺は真実を知っている」

「真実？」

「伊藤をかばったんだってな」

あれだけ強く念を押して秘密にしろって言ったのに。まあ、伊藤のことだ俺より先に五十嵐に相談したのだろう。五十嵐はいざと言う時に頼りになるからな。

「かばったんじゃない。助けたら俺が落ちただけだ」

「それをかばうって言うんだ。でも、伊藤は苦しむだろうな」

伊藤が苦しむ？伊藤にとって不利益なこととは何一つ無いはずだ。それどころかクラスの同情を買うこともできるのに。

「どうしてだ」

「してほしくも無い同情をされてさ。それに、お前がそんな体になっただけ知ったときには伊藤の奴はどう思っただろうな」

伊藤は俺の夢を知っている。俺はもうそんなこと気にしていない

が経験した俺はよく分かる。他人の夢を潰してしまうことがどれだけ罪の意識を感じるか、取り返しのつかないことをしたと一日中後悔する。そんな思いをさせたくないかった。

「絶対に話すなよ」

「分かっている。でもよ、すぐに分かることだろ」

「かもな。でも、少しでも忘れてからでいいだろ」

「また今度一緒に帰ってやるから今日は病院に行けって」

「うー分かった」

愛華を説得して帰ってもらった。今日は秋の大会に向けてのメンバー発表がある。確実に状況を知らない監督なら俺を入れてくるだろう。それを辞退しなければならぬ。そんな所を愛華に見られたら体のことがばれてしまう。

部員を前に監督がスタメンを発表していく。意外にも俺の名前は呼ばれなかった。

「で、キャプテンは夏と同じで五十嵐だ。ベンチメンバーはお前達で決めればいいぞ」

監督は俺達を残して体育館を出て行った。

「まったく手抜きな監督だな。おいスタメン集まってくれベンチ考えるぞ」

隣の五十嵐が他のメンバーを呼び集め隅の方に行ってしまった。他の部員に話しかけられることも無く俺は一人その場に座っていた。そうなると俺は一人集まりから置いていかれた気分だ。バスケットの繋がり五十嵐がいなくなるとここまで俺は孤立しているのか。

「5人で話して決めたから文句は言わせないぞ」

五十嵐が戻ってきてベンチのメンバーを上げ始めた。

最後まで俺は呼ばれなかった。

「そんじゃ練習始めるぞ」

呆然と放心状態で立っている俺のところに五十嵐が来た。

「どうした中本元氣ないぞ」

「どういつつもりだよ。俺無しでやれると思ってるのかよ！」

怒鳴りながら五十嵐の胸倉を掴んでいた。それでも五十嵐はまったく動じていなかった。

「1クオーター10分、前半2クオーター後に5分のインターバルを挟んで後半の2クオーター、これがこの星川小学校を含めたこの地区で採用している特別ルールだ。意味が分かるか」

「何が言いたい」

五十嵐は今更特別ルールを出してきて何が言いたいんだ。それくらい俺でも知っている。

「総時間40分の試合だ。普通では考えられない長さだ。これは技術より体力勝負にしていると言う意味だ。つまり、中本、お前には不似合いのルールだ」

「だからってベンチ入りすらさせてもらえないのか」

五十嵐は練習をするメンバーを見て呟くように言った。

「あの中でお前のパスを受けてくれる奴は何人いるんだろうな」

「そうか……そんなことが理由かそれなら……」

五十嵐はボールを俺にパスをした。

「少なくとも俺だけはお前にボールを預けていいと思っている。ベンチ入りだけならなんとかなるかもしれない。説得してみる」

五十嵐の説得でなんとかベンチ入りを許された。だが、誰一人俺を受け入れた顔をしていない。五十嵐の頼みならと言う顔だ。

竹刀と柔道着を引き摺りながら武道館を出た。夢の相手を無理矢理やらされて体力がなくなりかけている。体全身から熱が出ていて風邪をひいたような錯覚もする。

「五十嵐任せたぞ！」

「無茶苦茶なパスするな！」

体育館から慎也と五十嵐の声がする。中をのぞくと慎也が練習をしている。

秋の大会が近いから一生懸命なんだな。私も頑張らなくちゃ。夢も強くなってきたるし油断したら駄目だよな。

「慎也、頑張つてね。応援しに行くからね」

影で聞こえないような小さな声で応援してみた。もちろん振り向いてくれることはなかったけど今の私はそれだけでも胸が一杯になつて嬉しくなつた。

「なにニヤニヤしながら見てるんです」

不意に話しかけられて声のするほうを見ると椎名が見ていた。陸上部の帰りだろうか体操服のままだ。タオルで顔を拭きながらつまらないものを見るような目で私を見ていた。

「傍から見るとただの怪しい人に見えるよ」

「あ、ああ。すまなかつたな。変なところを見せて」

帰ろうとすると椎名に呼び止められた。いつもの私なら無視して帰るところなのだがその呼び止めた言葉が私を引き止めた。

「中本が好きなら見ていればいいんじゃない」

「何を言っている」

声では強がつているけど本当はすっごく驚いていた。私が慎也のことを好きだつてこと誰も知らないはずなのに……

「好きなんですよ中本のこと、ずっと見てればいいんじゃない。だけど……中本に近づくのは許されないんだからね」

椎名に強く言われた。慎也に近づくな？なぜ椎名にそんなこといわれなきゃいけないの。

「なぜだ」

動揺しても強気な自分で椎名に噛み付いていった。それなのに椎名はまったく怯むこともなく当然のように答えた。

「中本が愛華と付き合っているのは知っているよね。それなのに毎日あんたが付きまといつて中本は迷惑していると思わないの」

中本と斎条が付き合っているのは良く分かつている。だけど、私は斎条には負けたくなかった。その気持ちはまったく揺らぐことはなかったけど慎也が迷惑していると言われると少し揺らいでしまう。

「なぜそんなことを言われなければならない」

「愛華が教えてくれてね、中本がお前に迫られて困っていたって、迫るなんて…私はただ自分の本当の気持ちを伝えただけなのに。」

「中本はそんなこと言っていない」

「言えるわけないでしょ。中本は好きな人がいても告白されたらその人のことを考えちゃうくらい優しいんだから」

そんな…あの優しい言葉や笑顔は全て嘘。本当は私が迷惑だった？そんなの……

「自分が満たされればそれでいいの？中本ことも考えたらどうなの？せっかく本当の自分を見せられる人を見つけたのに、その人は無理をして笑っていてくれたの？私の大切なあの人は辛い思いをして私の隣にいてくれたの？私にとって一緒にいた大切な時間もあの人のとってはただの苦痛の時間だったの？」

「中本には近づかないようにしなさいよ」

椎名の忠告なんて私の耳には届いていなかった。頬を伝う涙が床に落ちるように今まで大切に集めていた思い出の砂が私の手からこぼれていった。

第29話 孤立した彼から離れる彼女

昼休み教室で俺は自分の席で愛華と一緒にいた。夏休みが終ってから愛華はやけに俺に触れるようになってきた。初めは手を繋ぐだけだったのに今は腕を抱きながら終始笑顔で俺の隣にいる。これならまだいいほうだ。廊下を歩いている時後ろから抱きつかれた時は周りの目線がよりいっそう痛く感じた。

「少し離れてくれないか」

「やだ」

「やだつて…すぐにでも離れてくれないと俺、伊藤に睨み殺されそうなんですけど」

俺達から距離を置いたところで伊藤は仁王立ちで睨みをきかせていた。横で五十嵐が笑いを堪えている状況だ。

「未来」

愛華は伊藤を上回る睨みで伊藤を退けた。それを見た五十嵐が声を上げて笑った。

「伊藤、お前弱すぎ。斎条なんかに眼付けで負けてるんじゃないやねえよ」
「う、うるさい」

強く抱きしめられていた左腕が開放された、愛華は服を整え隣の席に座った。

「慎也君が嫌がるならやめる。でも、帰るときは譲らないからね！」
ウインクと微笑で拒否する気持ちを剥ぎ取っていった。

小悪魔の表情から目を背けると愛華が座っている机に目が行く。

俺の隣の席、珊瑚は始業式のあの日から夏風邪で学校に来ていない。先生の話では連日の部活の疲れと夏バテで体調を崩したそうだ。風邪なら大丈夫だろうと安易な考えでいたが今日でもう5日目だ。そろそろお見舞いに行ってみるか。

「中本、ちよつと」

クラスメイト数人と話している五十嵐が俺を呼んでいる。俺は愛

華との会話を止め五十嵐の所へ向かった。愛華には文句を言われたがそれぐらいも許されないのかと思ってしまう。

「中本君、瑠璃川さんは大丈夫なの？」

話の輪に入るなりクラス的女子に話しかけられた。愛華や伊藤達以外で話しかけてきた女子は夏休みが終って初めてだ。

「珊瑚？俺は良く知らないけど…体調崩したただろ」

「部活の時は元気だったんだけどな。途端にだったから大丈夫かなって」

この男は珊瑚と同じ剣道部だったはずだ。それ以外にも珊瑚のことを聞いてくる質問が次々と出てきた。珊瑚とのつながりは違ってもみんな珊瑚のことを心配してくれているようだ。

それより、知らない間に珊瑚のことを思っていてくれる友達がいなくなにもできたことに俺は嬉しかった。

「って、なんで俺に聞くんだ。普通先生だろ」

「瑠璃川のことはお前が一番良く知っていることなんてこの学校の常識だぞ」

「そんなことを常識にするな！」

からかう五十嵐に噛み付いているとバスケ部のメンバーが五十嵐を呼んでいた。

「分かった今行く。みんな瑠璃川のことが心配なんだ。ちゃんと答えてやれよ」

五十嵐が輪から離れていった。みんなから頼りにされてそれに答えられる。あいつの側にはいつも笑顔があつて失敗なんて寄り付かない。そんな五十嵐が羨ましくて俺の目標でライバルだ。

「で、珊瑚のことだけど」

再び話し始めようとする…が、みんな散り散りに離れて行ってしまう。それもみんな冷めた顔をしていた。

「お、おい」

呼び止めようとしたがみんな離れて行ってしまう。その中の一人だけ残ってみんなクラスの中に解けていった。

「なんだよ。あいつら」

「誰もお前と話したいわけではないんだぞ。俺達は五十嵐に聞いてただけだ」

五十嵐、その一つのピースが抜けただけで俺を拒むように絵は碎け散ったのか。

「五十嵐の前だったからな、それなりに振舞ってやったがもうその必要はないからな」

去り際にトドメを残していった。

「どうせまたお前が瑠璃川を怪我させたんだろ。瑠璃川もお前をかばうために変な芝居しやがって…俺達に近づくなよ。何されるか分かったもんじゃねえからな」

そして俺は一人になった。五十嵐のいる輪に入ろうと思えば入れる。だが、それは五十嵐の付属品だと自分で認めているのと同じだ。唯一、自分の居場所が用意されている愛華の隣、それは俺の逃げ場愛華にすぎり自分の存在を叫んだって結局俺ではなく愛華がいるから俺はそこにいられるだけだ。

教室を見渡した。が、どこにも俺の入る場所はなかった。それ以前に、俺はここにいていいのだろうか。この教室に…この学校に…この世界に……

「中本、どうした。酷い顔だな」

凜々しく氷の刃、そんな声を聞いたのは何ヶ月ぶりだろ。

「珊瑚…」

目の前には珊瑚がいた。

「あ、瑠璃川さん。学校に来られるようになったの」

愛華が近づいてきた。

「ああ、昨日には完治していたんだがな。念のため病院にいった。それと、これ。桜先生から預かってきた」

珊瑚は愛華に紙を渡し自分の席に着いた。俺もそれにつられるように席に着いた。

「珊瑚、もう大丈夫なんだよな」

「ああ、心配させてすまなかつたな」

何だ。氷の壁？二人きりじゃないからか。それにしても、珊瑚が遠くに感じる。いつもは氷の壁の一部がガラスみたいになっていて近づけるようになっていたはずなのに…今の珊瑚の壁はどこからも近づくことができない。

「珊瑚」

「何だ中本」

中本だと……珊瑚が俺から離れていつている。俺、また知らないうちに珊瑚を傷つけていたのか？

「珊瑚、俺また何かしたのか」

「いや、そんなことはない。ただ……」

「ただ？」

「その…今ですまなかつたな」

どうしてと聞く前に授業が始まってしまった。授業中何度か話しかけたが答えてくれることはなかった。

放課後になった。するとすぐに愛華が近づいてきた。今日は愛華と帰る約束をしていた。だが、珊瑚のあの言葉も気になる。ここは愛華に謝るしかないか。

「愛華、その」

「慎也君、ごめんなさい」

いきなり頭を深く下げられ俺は言い出した声を引つ込めた。

「用事ができちゃってすぐに帰らなきゃいけないくなっちゃったから先に帰るね。バイバイ」

それだけ言っただけで慌てて帰っていった。ここまでさっぱり諦める愛華は珍しいものだ。でも、これで気兼ねなく珊瑚と話せる。

「おい、珊瑚」

「すまない。部活があるから」

俺の呼びかけから逃げるように離れていく珊瑚の腕を掴んだ。
「少しだからいいだろ」

手を振り払われ珊瑚は振り返った。その瞳には微かだが潤んでいた。

「その引き止める手も無理をしているのだろ」

珊瑚は教室を飛び出していった。俺はそれを追いかけた。

珊瑚を追い詰めたのは屋上の扉前だった。珊瑚は扉の前で諦めたのか俺のほうへ振り返って近づいてきた。俺の立っている横に珊瑚は階段に座った。俺もその隣に座った。

「どうしたんだよ。俺から逃げるようにして」

「べつに逃げているつもりはない」

「それだよ、それ。苦手な話し方をして俺から逃げてるだろ」

強気に聞くと珊瑚は黙って下を見ていた。

「俺、悪いことでもしたか」

「憤也は悪くない。私だけが悪いんだから」

本音で叫んだ珊瑚は苦い顔をして俺から目を背けた。続けて話すこともなく珊瑚は悩んでいる顔をしていた。

「なんだよ、それ。分かんねえよ」

珊瑚の肩を掴んで俺のほうを向かせたが珊瑚は俺の顔を見ようともしなかった。

「……………」

「珊瑚！」

何も答えない珊瑚に苛立ち始め声を張り上げてしまった。すると、珊瑚は肩にある俺の手を握りながら小さな声で話し始めた。

「名前を呼ぶのも、この掴みとめる手も、私を思ってくれる優しさも、何もかも嘘なんですよ。無理して私に優しくして苦しんでいるんですよ」

「なに言ってるんだか。誰がそんなこと言った」

確かに珊瑚のことで苦しんだ時はあった。だが、それは自分が馬鹿らしくて悔しくて自分自身に苦しめられていただけだ。珊瑚は悪くない。それどころか、感謝するぐらいだ。珊瑚は悩んでいた自分

に間違っていると教えてくれた。新しい夢もくれた。どんなに酷いことをしても許してくれて俺を支えてくれた。ずっと本当の気持ちでぶつかってきてくれた。

そんな珊瑚を俺が迷惑がるはずがないだろ。

「だって、慎也は斎条と付き合ってるから……私が慎也と仲良くしている迷惑だから」

「俺はそんなふう思ったことは一度もないからな。それに、ただ話すだけで愛華が怒るはずないだろ」

「でも、慎也のそばにいただけで迷惑になると思う」

珊瑚はどうしたんだ。あの時はあんなに強気で自信があつたのに「だから、もう慎也にも斎条にも近づかない」

「愛華に負けないんじゃないのか。愛華に勝って俺を好きになるってあれは嘘だったのか」

自分で言つて恥ずかしくなった。でも、それが俺の中での珊瑚だ。珊瑚がそう簡単に夢を諦めるはずがないとこれは絶対の自信があつた。

「言わないで！それを言わないで！」

両耳を押さえて珊瑚が泣き出した。夢。これが珊瑚の中で一番大きな何だったのか。

「分かつてる。分かつてるけど……誰よりも強くなりたい、誰にも負けたくない、それが私の夢だつて分かつてる。でも、分からないよ。斎条には負けたくない。斎条以上に慎也を好きになりたい。だけど、それを目指すだけで慎也が苦しんでいるって思うと……私何もできなくて、慎也を苦しめたくなくて……負けたくないのに苦しめたくない。私、どうすればいいか分からないよ」

珊瑚を抱き寄せた。なぜだろう。泣かれると全力で守りたい。珊瑚を思う気持ちが自然とそうさせた。

「人に好きになつてもらつて辛いはずないだろ。だから、珊瑚は自分のしたいことをすればいいんだ。俺もそれに全力で答えるから。だから、夢を諦めないでくれ」

落ち着かせるためゆつくりと優しい声でささやくように話した。

が、珊瑚に突き飛ばされ俺から離れていった。

「優しい声も抱きしめてくれたのも全部無理をしているんでしょ。そんな嘘に喜ばされるぐらいなら、はっきり拒絶してくれた方が嬉しいよ！」

行ってしまう。また明日話してみるか……いや駄目だ。明日何があるか分からない。このまま会えなくなるかもしれない。これが最後になるかも、そんな最悪な伝えきれない別れはしたくない。

「待ってくれ。珊瑚！」

珊瑚は止まってくれた。近づこうとしたが珊瑚の赤い顔を見ると近づけなくなった。たった10段の階段を降りれば抱きしめる距離になるのにそれができなかった。

「な、なに」

震えながらも強気な声で聞いてきた。俺は、伝えたいこと全てを話そうと決意した。珊瑚がどんな思いで聞いてくれるか分からないけど全部伝えたかった。

「俺、珊瑚には遠くに行ってほしくない。隣にいてほしい。悲しい顔じゃなくて笑っていてくれよ。俺から逃げないで隣ですつと笑っていてくれ」

「の時と同じだね」

聞き取れないが珊瑚は小さく口で笑っていた。そして、また歩き出してしまった。

「お、俺、絶対に嘘は付かないから。もう、珊瑚を傷つけるような嘘はつかないって約束する。だから、珊瑚も俺とは本心でぶつかつてきてくれ！」

「慎也の嘘は　　だから。　　をつくために　　してるんだよね」

そのまま珊瑚は行ってしまった。俺はそれを追いかけて背中しか

見えない珊瑚に最後まで伝えたいことを叫んだ。

「俺は嘘を付かない。だから、珊瑚も約束を守ってくれ。今度の日曜日、大会の日。待ってるから。珊瑚が来るのを待ってるからな」
返されることのない返事を俺はずっと待っていた。

第30話 今自分がすべきこと

大会前日の土曜日、体育館は多くの生徒が部活動に精を出していた。

俺達バスケ部は練習の仕上げとして紅白戦をすることになった。

俺のチームには五十嵐がいるもののそれ以外はベンチ入りもできなく実力が低い奴らばかりだ。五十嵐いわく、圧倒的な実力差の時にどのように対応するか試してみたいそうだ。つまり、五十嵐の中では俺もこいつらと同じ扱いだと言うことだ。見くびられたものだな。

「試合と同じルール。45分でやる。選手の交代は自由。それじゃ始めるぞ」

監督が高くボールを投げてゲームが始まった。

「まずは軽くいってみるか。左に1人、中央を2人が抜け、中本は右で待つてろ」

ボールを持った五十嵐はコートの真中で指示を出していた。今回はあくまでも五十嵐の指揮能力の向上とレギュラー陣の特訓である。俺達は五十嵐の指揮に従うのが第一条件だ。

レギュラーは中央の2人に一人ずつ、俺には2人、左に1人ついた。

「中央二人。中本のカバーに入れ」

俺の隣に1人と向かい側に1人入った。もし、シュートが外れてもリカバリーができそうだ。

それにしても敵が4人も張り付かれる状況では打ちたくても打てたもんじゃない。少し走るしかないか。と、そんなことを考えているとボールがリングを揺らした。

がら空きになった中央を五十嵐が1人で抜いてきめたようだ。

「中本なんかに束になって張ってるんじゃないやねえよ。1人でボールを奪う気持ちでかかってこい」

「はい！」

五十嵐の喝を素直に聞いたレギュラー陣は攻める態勢に入り始めた。

「2人で取りにいけ。後は、守りだ」

俺は五十嵐の隣まで下がった。正直イライラしていた。俺をおとりにして自分がきめる。たしかに策としては成功したがチームを信頼していない感じがする。

「なぜ、俺にボールをくれなかった」

「あの状態では決められないと判断したからだ」

「俺を信じてくれなかったのか」

「お前に無理をさせたくなかった。かつこよく言うところなるな。さ、くるぞ。目立ちたいなら自分で奪ってきめてみる」

言われなくてもそのつもりだ。チームの守りは雑なものでボールはすぐ近くまで迫っていた。

「中本かよ」

苦い顔をしたそいつは俺からボールを守るため体で隠した。だが、俺にそんな守り通じることもなく容易にボールを奪うことができた。すると、相手は俺からボールを奪うそぶりすらせず一斉にゴール下を堅めに向かった。

「いいポジション取れ」

指示を出した五十嵐は少し開けた場所へ向かっていた。五十嵐得意の立ち位置だ。ゴール下はいい場所を手に入れるためにみんな押し合っていた。

「まったく、どこまで信じてもらってないのだから」

コートの中で1人ボールを持って立っている俺は自分の限界ギリギリのラインでシュートを打った。得意なロングシュートは綺麗に決まった。が、五十嵐は何事なかったようにゲームを再開させた。

「俺と中本交代。次2人はいれ」

俺は五十嵐に言われるままコートから外れた。

「どうだ五十嵐。技術は落ちてないぞ」

「技術には10点満点をやってもいいな。だが、チームワークは相変わらずの1点だ」

「どうしてだよ。チームに貢献したし、お前達のおとりもちゃんと利用できただろ」

「……あいつらどう思う」

五十嵐が見ている先、そこにはボールを持っている1人に対して3人で奪いかかっている。5人もいるにも係わらず1人だけに張り付くのは異常だ。3人は息が上がっていて今後の試合のことなんて考えていないだろう。

「あの3人何考えてるんだ。あれじゃ、半分もやっていけないだろ」

「あいつらは1クォーターで交代だ。それを知っているから10分に全力を出しているんだ」

10分、今にして思うと本当に短くて何が出来ると思ってしまう。それが昔の俺の限界だった。あいつらは昔の俺と同じ状況にいるってことか。

「あいつらは試合に出れない。だから、レギュラー陣には自分達の間も戦ってほしいと思っている。あいつらは自分なりに伝えようとしているんだらうよ」

「俺も、どこからシュートが打たれるか分からないって伝えたかったんだが」

俺はその場しのぎの嘘を付いてしまった。しかし、これは俺のプレイスタイルで相手の意表をつくのが俺のやり方だ。

「馬鹿か。レギュラー陣はお前のシュートなんて見飽きてるんだ。お前がどこからでも打てることも、それを止めることもできないって良く知っている。もし、レギュラー陣のことを考えていて、俺を信頼してくれたならアリウープを仕掛けても良かったんじゃないのか。ボールだけを考えるなってさ。まっ、中本には分からない領域だらうがよ」

レギュラー陣のことを考えて……レギュラー陣に俺は何を伝えたいんだ。俺の強さ？俺の技術？そんなもの伝えたって明日の試合に

役立つのか。そんなことしか伝えられないなら紅白戦にすら出られないほかの奴に代わってやったほうがいいんじゃないのか。

1クォーターが終って五十嵐が前に出た。

「よし、3人下がれ」

10分間全力でプレイしていた3人はコートから出るなりその場に座り込んでスポーツ飲料を一気に飲み干していた。

「どうだった」

「五十嵐の言ったとおりだった。二人が下がった途端、格段に上手くなった」

「やっぱりか、あの時の後遺症といったところか」

五十嵐は、克服させるかと呟いて俺を指さした。

「よし、俺と中本とあと1人誰かはいれ」

「五十嵐、俺」

断ろうとしたら間髪いれずに五十嵐の本音が飛んできた。

「勘違いするなよ。中本じゃない。今、あいつらに必要なのは俺やお前みたいな数段上のプレイヤーだ。夏の大会でお前の知っている奴が出てきて散々な目にあつたんだ。少しでも上の奴に対する対処法を身につけておきたいからな」

「でも、俺は何をすればいい」

すると、ずつと真剣な顔をしていた五十嵐の顔が緩んで分かりやすく言ってくれた。

「な」に、全力でやってボコボコにしてやればいいだけだ。俺とお前にパス回すようにしてもらってから好きに暴れればいい。倒れないように今みたいに休みいれてやるからさ」

全力で、ボコボコに…それならできそうだ。

結局、思うような試合はできなかったけど、五十嵐以外からもパスを回してもらえようになつて部活内のわだかまりが減ったのかなとその時は思った。

紅白戦を終え部活を終了した。疲れて動けなくなつた俺は五十嵐

と共に体育館の隅に座っていた。俺達の部活が終った後の体育館は卓球部とバトミントン部が活動を始めていた。

「五十嵐、珊瑚知らない？」

体育館に柔道着を着た神原夢が来た。今の神原の質問だと珊瑚が学校に来ているのか？

「いや、ここ数日見てないな。瑠璃川学校に来ているのか」

「うん、部員が見たって、知らないならいいや、じゃあね」

神原が見えなくなってから五十嵐が俺の顔を見た。そして、含み笑いをした。

「なんだよ」

「なんでもない。それより、探しに行かないのか」

「なんだよそれ」

「お前、いつも何かあると走り出していたからさ。瑠璃川が来ていると聞いたときのお前の顔、面白いぞ」

珊瑚が来ていることを聞いてすぐにでも会いたいと思った。でも、俺は自分から珊瑚を探しに行くことはしないと誓っていた。

「で、探しに行かないのか。もしかしたらもう会えないかもしれないぞ」

笑顔混じりでからかうように言った。

「冗談でもそんなこと言うなよ。それに……」

「それに？」

「明日、珊瑚は絶対に来る」

珊瑚が約束を守る保障なんてどこにも無い。ただ、来てくれると信じなければ来てくれないと思った。

どうして来ちゃったんだろう。明日まで来ないでおこうって思っていたのに……自分の試合が終ったらすぐに帰ろうって思っていたのに……

体育館の前で私は中に入ることも無く立っていた。

夢は：武道館かな。竹刀も柔道着も持ってきて：部活やる気満々じゃない。

帰る。今は慎也に会いたくない。

「ぶよ？サンちゃんなのら。どうしたのら、そんな所に突っ立って」
後ろからの声に肩を震わせ振り返った。そこには小さな先輩、かりんさんがいた。

「中に入らないのら？たぶん、シンちゃんがいるのらよ」

「いいんです。私、帰ります」

帰ろうとする。が、腕をつかまれた。大人の人につかまれても振り払えるのにかりんさんからは逃げる事ができなかった。

「放してください」

「そんなことを言っていていいのらか？無理矢理にでも体育館に連れて行くのらよ」

「うう」

「あちきは何があつたかよく分からないのら。だから、少し話してほしいのら」

私は、かりんさんに連れられるまま校舎の中に入って行った。

かりんさんに連れてこられたのは屋上に出るための階段だ。ここにはいい思い出はないので来たくなかった。

かりんさんは鎖の巻かれた扉を見て不服の声を上げていた。

「誰なのら、こんなことしたのは。これでは屋上に出られないのら」
「慎也が怪我をしたからです」

「うー、屋上には青春が詰まっているのに：しょうがないのら、ここで話すのら」

二人並んで階段に座った。隣にいるのはかりんさんだけど、慎也と最後に話したあの時を思い出させる。

「で、シンちゃんと喧嘩でもしたのらか？付き合っていると良くあることなのら」

「っ、付き合ってなんか無いです。それに、慎也は斎条と付き合っ

てるんですから」

そうだ。だから私は慎也から離れるんだ。

「サンちゃんは固いのら。あの時はアイちゃんから奪ってやるって、意気込んでいたのに。強いサンちゃんらしくないのら」

慎也にも同じことを言われた。慎也と会わなくなってからずっとそのことを考えていた。

負けたくない。それは本当の気持ち。でも、傷つけないのも本当の気持ち。

「だって、私がいると慎也が困るから」

「シンちゃんがそうだったのらか？それならあちきが殴ってきてやるのら」

「慎也は優しいからそんなこと言わない。だけど、分かっちゃった。もし、私が斎条だったら他の人が慎也と楽しそうに話しているのを見たくない。それに慎也だって、私を傷つけないって苦しんでいると思う」

かりんさんの緩い拳が私の頭を叩いた。全然痛くなかったけど、私の意識はかりんさんに集中した。

「サンちゃんは弱いのら。そんなことでよくよ考えるんじゃないのら。いいか良く聞くのら、誰かが幸せになると誰か悲しむのら。アイちゃんが幸せになるとサンちゃんが苦しんだのら。勝負もそれと同じなのら、勝つ人がいると負ける人がいるのら。でも、今のサンちゃんは自分の幸せのために戦ってすらいけないのら。アイちゃんと戦ってみるのら」

「だって、慎也が」

「だってじゃないのら！シンちゃんに会いたくないと言われていないのら。シンちゃん最後に何か言っていたんじゃないのらか？」

最後に？慎也の最後の言葉？

「約束を守ってほしいって、大会を見に来てほしいって」

「だったら、見に行つてあげるのら。約束したのらね」

大会を見に行く…それぐらいならいいかも。

「サンちゃんも大会頑張るのらよ」

そうだ。慎也が見に来るって約束してた。恥ずかしい試合を見せ
ては駄目だ。

「うん、頑張ってみる」

私は夢を探しに武道館へと走った。

「サンちゃん、笑うと可愛いのら。頑張るのらよ、女の子達」

第31話 ただ一点を見つめて

大会の日の朝、麗羅さんの作ってくれた朝食を食べていると親父が起きてきた。家にいること自体珍しいのにこんな朝早く起きるのはありえないことだった。

その親父は俺の向かいに座った。麗羅さんの出したコーヒー牛乳を飲み干すとテレビを見始めた。

「今日は大会だったな」

「そうだが」

親父の質問にそっけなく答えると親父はビー玉のような青く透き通った玉を出した。

「何だよ。これ」

「大会に出るなどとは言わない。全力で戦えとも言わない。ただ、倒れたらそれを飲め。救急車が来るまでの時間稼ぎぐらいしかできないがな」

親父は朝食を食べることなく寝室に戻っていった。

「旦那様、それを作るために仕事そっちのけで徹夜をされていたようですよ。本当は慎也様の試合を見たいのに今からお仕事だそうですよ」

「そうだったのか」

「はい、ですから私がしっかりと見てますからね」

麗羅さんは一眼レフカメラを磨いていた。我が家のアルバムの写真はすべて麗羅さんが撮ったものでお気に入りの写真の写真は広間にでかく掲げるほどだ。

「いいから、絶対にこないでよ」

俺は親父からの贈り物をポケットに入れて家を出た。

小学校の体育館前には他校の生徒も含め多くの生徒が集まっていた。俺は生徒の群れの中を掻い潜って体育館の中へ入った。中では

既に五十嵐が最後の仕上げをしていた。体育館の使用がもうじき終るので俺はユニホームに着替えて五十嵐を待っていた。

先生に注意されるまでやっていた五十嵐が俺の元に来た。試合が始まっていないのに既に息が上がっていた。

「中本、これから瑠璃川の応援か？」

俺達バスケ部の試合は午後からとなっている。それまでは他の試合を見にいける。俺が見に行くとしたら、椎名が出ている陸上か珊瑚や神原のである武道館の試合だろうな。両方とも午前中の試合のはずだ。

「俺は、珊瑚の応援に行こうと思ってるけど」

応援に行くと珊瑚と約束したからな。それに、椎名の方には愛華がいるはずだ。愛華と会うとなにがあるか分かったものじゃない。それに、愛華には約束のプレゼントがある。それを渡すまで会えそうにない。会ったら思わず言ってしまうそうだからだ。

「そうか、それなら俺もそっちにするかな。言っておくが、俺は神原を応援しに行くんだ。ってことは敵同士ってことだな」

両方応援する気は無いのかな？そんなところで敵対されても何とも思わないが。

武道館に入ると試合はもう始まっており、無差別の個人戦をしていた。男女問わずの試合で今は柔道をやっていた。次の試合は龍真と他校の生徒だった。

俺達は観覧の場所に座った。トーナメント表を見るともう準決勝のようだ。次の試合は珊瑚と神原になっていた。

「次は龍真と神原か。予定通りだな」

「なに勝手に決めれるんだ。珊瑚が負けるわけ無いだろ。龍真、とりあえず応援してやる。頑張れや」

やる気の無い俺の応援に龍真は犬歯を見せて笑った。そして、畳が敷き詰められた真中へ向かった。すると、背中から重い何かが覆いかぶさってくるのを感じた。

「シンシン、応援するならちゃんとしてくれよ」

「そうなのら、リュウくんはあんなのには負けないけど、そんな応援では失礼なのら」

俺の上に乗っていたのは赤井キャプテンだった。それに、かりんは学ランを着ていて応援する気満々だった。

「良かった。間に合った」

試合開始直前に武道館に入ってきたのは愛華だった。愛華は俺を見つけるなり小走りで俺のところへ来た。そして、隣に座っていた五十嵐を押しわけ俺にくつつくように座った。

「愛華、椎名の応援はいいのか」

「うん、慎也君来なかったからこっちにした」

誰の試合かではなく、俺のいる試合を見に来たのか。

「それはいいが、離れてくれないか」

「やゝだ」

よりいっそう強く抱きついてきた。武道館での俺達の集まりは変わり者の集まりに見えるだろう。そう思うと恥ずかしい。

「そこ！いちやつくな。気が散る」

龍真の怒鳴り声にも愛華は断固として退くことなく龍真を睨みつける余裕さえあった。

「くそ、もういい。すまなかったな。よろしくお願いします」

龍真は対戦相手に謝罪して一礼した。そして、試合が始まった。

相手は距離をとって龍真の動きを待っていた。相手はどこから攻められても受けきれるような構えをしていた。それに対して、龍真は……

「頭を使っても駄目な時がある」

そう言うつと低姿勢で相手の懐へ突っ込んでいった。相手は好機と判断したのだろう。龍真の襟首を掴んだ。そのまま下へ押し付けようとしたようだ。だが、龍真は勢いよく体を立ち上げ相手の掴みを振り払った。

そうなっからすぐだった。龍真は相手の袖と襟を掴んで相手を畳みに投げつけた。

「お前は、想像通り動ける体か」

たった30秒で試合は終わった。龍真と試合をした相手は怪我をするほど打ち所が悪かったようだ。俺の頭の中には龍真の言葉が残っていた。その意味が今の俺にはよく分かる。

「おい、次、神原と瑠璃川の試合だぞ」

柔道着姿の珊瑚が立っていた。一瞬、俺の顔を見て微笑んだように見えた。それを見て安心した。珊瑚は約束を忘れていなかったと核心ができた。

「珊瑚頑張れよ」

「神原、瑠璃川なんかに負けるなよ」

俺達の応援に二人は照れくさそうな顔を見せた。緩んだ二人は見合った途端、真剣な目つきになった。すでに武道家の顔だった。

「ねえ、慎也君。私のこと好き？」

いきなり、しかもこんな所でそんなことを聞かれても答えに困った。だが、愛華が好きなのは昔と変わらない。ずっと隣にいて欲しいし笑っていて欲しい存在だ。それは色々起きた今でも変わっていない。

「ああ、これからも笑っていてくれ」

「笑っているだけでいいの？」

ぎゅっと、強く抱きついてきた。顔を伏せて見せないようにした。

「愛華？」

「ううん、なんでもない。ごめんね、変なこと聞いて。ほら、始めるよ」

伏せられていた顔はいつもと同じ笑顔だった。

「珊瑚、悪いけど今回はあたし本気だから」

「夢、私も負けられない理由があるから。ごめんね」

そして、二人の試合が始まった。龍真のような圧勝とは言わない

が誰が見ても実力の差は明白で珊瑚の勝利に終わった。

「あーもう、龍真にも珊瑚にも勝てないなんて。いい珊瑚、あたしの代わりなんだから絶対に優勝しなさいよ」

文句を言いながらも神原は珊瑚を応援して観覧席へ来た。そして、ついに決勝戦。龍真と珊瑚の試合が始まる。

「龍真、ひとつ聞いていいですか」

「何だ？」

試合前の二人の会話、静まり返った会場に二人の声だけが聞こえていた。

「貴方にとって強さとは何ですか」

強さ。それは珊瑚の目標。強くなることによって何事にも屈せず挑み続ける。今の珊瑚の強さは諦めない強さだ。

「武、力こそ強さ。何者にも負けぬ、ねじ伏せる最強の力。それが俺の強さだ」

力、自分の実力で相手を負かし勝ち続ける強さ。自分の力を信じる強さ。それが、龍真の強さ。その強さ、俺にも良くわかる。どれだけ自分の力に溺れようと負けられない限り強くなり続ける力。

でも、その強さは珊瑚の強さとは正反対のもの。龍真の強さは諸刃の剣。折れない限り強くあり続けるが、一度折れると元の強さには戻らない。それに対して珊瑚の強さは折れても、折れても、強くなり続ける永遠の強さ。その刃は鈍く切れないかもしれない。でも、いつか必ず諸刃の剣に打ち勝つ鋭さを得ることを信じ磨き続けるもの。

今、目の前の二つの剣はどちらが勝っているのだろう。

「そうですか。それなら……」

珊瑚は夢のときとは違い鋭利な空気を放っていた。

「私は貴方に負けません」

強気な珊瑚に龍真は不敵な笑みを浮かべ全てを飲み込むような大きな空気を放った。

「大口叩いたことを後悔させてやる」

試合が始まった瞬間、二人は組み合った。珊瑚は襟元を、龍真は袖を掴んでいた。

「サンちゃん、引き込まれるのなら」

「龍、襟行け、襟！」

今まで黙っていた中学生二人が急に熱くなり始めた。二人とも応援している方にアドバイスをしている。それにみんなも影響を受け自然と声を出していた。みんなの声が二人の動きを激しくした。

龍真は両袖を引き珊瑚を引き寄せた。力では負ける珊瑚は逆らうことなく龍真の懐へと入って行った。隙ができた襟首を龍真が狙う。だが、それが分かっていたかのように珊瑚は自分の後ろへと転ぶように襟を引き龍真を引き寄せた。珊瑚の右足に右足をとられた龍真はバランスを崩しかけた。しかし、左足を杭のように叩き鳴らし踏ん張った。踏ん張りきった龍真は襟首を掴み、右足を珊瑚の右足の脛に当て珊瑚を背中から倒そうとした。ほぼ倒れ掛かった珊瑚は、左足を龍真の腹に当て倒れる力を利用して龍真と一緒に回り龍真を飛ばした。

お互い、背中から落ち、咄嗟に立ち上がり距離をとった。

二人の攻防をみな応援を忘れてみていた。そして、二人が止まるとみんなが思い出したように大声の歓声を上げた。

「やはり、力では勝てないですか」

「危ねえな。今のは不味いだろ。技を考えろ」

「貴方に技を選んでいる暇はありません」

「はは、違いねえ。それじゃ、こっちも行かせてもらうぞ」

龍真は珊瑚の右側に近づいた。珊瑚は正面を向こうとするが間に合わず、龍真に右腕をとられ倒されてしまった。

まだ、一本は取られていないが、寝技に入ってしまった。力でねじ伏せる技では珊瑚には不利だ。もがき苦しむ珊瑚の顔が見える。

「お前、言ったよな。力では敵わないって、男らしくないけど確実に勝たせてもらうぞ」

「う、くっ……」

もがいているが何も変わっていない。動けば動くほど珊瑚の息は上がり龍真の笑みが大きくなってきた。

「もう、駄目らのら。あの顔のリユウちゃんには勝てないのら」

かりんが諦めたようにみんな決着が付いたような顔をしていた。みんなどうしてだ。まだ、20秒あるじゃないか。それなのにみんな諦めるなんて……

そうか、これが……。一瞬絶望を見るともう立ち直れない。もがくことも応援することもやめてしまふ。ここのみんなは諸刃の剣だった。

それでも俺は諦めなかった。珊瑚は勝つつて信じていた。信じたから珊瑚は今ここで戦っている。だから、俺は信じる。小さくてもいい、珊瑚の力になってくれるから。

諸刃の剣だった俺だけど、折れた刃を握り締め立ち上がると決めた。そうさせたのは珊瑚だ。今度は俺が……

「珊瑚！立て、立ち上がれ。誰にも負けないんだろ！」

「慎也君……」

その時の俺はまっすぐに珊瑚しか見ていなくて愛華の声はまったく届いていなかった。

「し、んや」

珊瑚は唯一動く左手で龍真の襟を掴み龍真を自分と床の間にねじ込んだ。このまま時間が経てば珊瑚の勝ちになる。だが、疲れと力の差で龍真は珊瑚の捕縛から逃げ出した。

二人そろって時間を見た。残り30秒。このままでは引き分けに終る。それを嫌った二人は次の組み手に全力をかける勢이었다。

「次で私は」

「次で俺は」

「勝つ！」

龍真は珊瑚の腰帯に手をかけた。それを気にせず珊瑚は襟を掴んだ。先に投げようとしたのは龍真だった。腰帯を引き上げ珊瑚の左足を浮かした。そして、不安定になった右足を払うため龍真の左足が動いた。しかし、珊瑚は宙に浮いた左足を龍真の右足に絡ませ襟を引き龍真の上半身を左肩で背負い投げた。

「一本！それまで」

ドン。と龍真がたたきつけられる音と珊瑚の勝利を告げる声。その数秒後、武道館は歓声で揺れた。

「サンちゃん。よくやったのら」

「へー、瑠璃川も強いんだ」

神原を応援していた五十嵐も最後には珊瑚を賛美していた。そして、珊瑚は俺のところへ駆け寄ってきた。

「憤也、応援ありがとうね」

「ああ、おめでとう、珊瑚」

「うん」

喜びを声で表しきれない珊瑚は俺に飛びつき全身で喜びを表していた。その時は、嬉しくて、珊瑚の嬉しい気持ち俺にも伝わってきたようだった。

その時、俺は、愛華という彼女のことを忘れていた。その時は珊瑚が俺の中のすべてだった。

第32話 笑顔と夢を天秤にかける

「慎也、ありがとうね」

全種目を終えて珊瑚は俺のところへ来た。首から提げていたのは小さなメダル一つだけだった。珊瑚は龍真と戦える種目だけ出ていて勝てたのはあの試合だけだった。それでも珊瑚は満足した笑顔を見せてくれた。

「俺のおかげじゃないぞ。珊瑚が頑張ったからだろ」

「うっん、慎也の応援が無かったら勝てなかったと思う。だから、ありがとう」

「そんなことで負けたなんて、俺は認めたくないがな」

首から4つもメダルを提げた龍真はそれでも不満そうだった。珊瑚が今かけているメダルで過去最多の記録を塗り替えるほどの快挙だったようだ。

「おーい、中本、そろそろ試合始まるぞ」

「おお、今行く。それじゃな珊瑚」

珊瑚にしばしの別れを告げ俺は五十嵐の背中を追った。

「慎也は約束守ってくれたんだね。私も絶対に応援に行くからね」

「ああ、待ってるからね」

「ねえ、慎也君、私のこと好き？」

ユニホームに着替えて五十嵐とストレッチをしていると、愛華がベンチまで来た。選手以外は来てはいけながそれを無視して愛華は俺のところへ来た。先生も他のメンバーも愛華を止めることはできなかったようだ。

「わざわざこんな所で確認することか」

「することなの。私のこと好き？」

五十嵐や他の生徒が見ているここで言いたくはなかったが、まっすぐ見ている愛華からは逃げられなかった。

「好きだよ」

「どれだけ、どれだけ好きなの。ねえ、どれだけ？」

迫ってくる愛華にたじろぐ俺は五十嵐に助けを求めた。

「男らしく本当の気持ちを言ってやれよ」

答えを待っている愛華の可愛い顔を見た。笑顔が似合うこの顔、可愛くて一緒にいると暖かくなる。それが好きな理由だ。

「一緒にいたい。ぐらいかな」

「未来や神原さんや凜さんよりも私が好き？」

「もちろん。愛華が一番好きだよ」

答えずにいと変な誤解をされそうだ。それにしても、五十嵐が聞いていることでそんなことを言わされるとは思ってもいなかった。瑠璃川さんよりも私のことが好き？」

なぜ、珊瑚だけ分けたのだろう。やはり、珊瑚は俺にとって特別な存在に愛華は見えたのだろうか。たしかに、最近は珊瑚とばかり話していたし愛華と一緒にいたのは少なかった気がする。だけど、それでも愛華は俺の彼女に変わりない。

「ああ。もちろんだろ」

「今度は即答じゃなかったね」

五十嵐が笑う横で、俺は何も言えず愛華の前に立っている。なんだか変だ。愛華は何を思っているんだ。

「私たち付き合っているんだよね」

「あたりまえだろ」

前にも同じ質問をされたことがあった。愛華は俺が愛しているか確認したいのだろうか。それだけ俺の愛情表現が弱かったのかなと反省をして、今後もっと優しくしようと思った。だが、質問は続き、愛華への愛が確かなものか揺らぎそうになった。

「それじゃ、私を愛しているの？瑠璃川さんとは何が違うの？」

なにがって、愛華は隣で笑っていて欲しい大切な存在で、珊瑚は……あれ？一緒？いや、違う。珊瑚は心から話せて、信じられる大切な人だ。珊瑚の笑顔も隣にずっとあって欲しくて…

「ねえ、何が違うか答えてよ」

「そ、それは……」

「それは、なに！」

「斎条、落ち着け。試合が始まる。試合が終るまで待つてやれよ」

「うるさい、五十嵐、放せ」

五十嵐は無理に愛華を観覧席へ連れて行きその場を落ち着かせた。ベンチを出て行くときの愛華の顔は俺が好きだった愛華の笑顔ではなく違う愛華が見えた。愛華は俺に本心を隠していたんだ。珊瑚とは違って……

「中本、お前は後半に投入するぞ。俺もそれに付き合う。それまでよく考えておけよ」

「作戦は五十嵐の担当だろ」

「斎条への返事のことだ。形にこだわるのか、自分に正直になるのか良く考えておけ」

五十嵐にはすべて分かっていたようだ。今の俺は前半の試合に集中できそうにない。そんな親友の気遣いを俺は気付いていないかのように振舞って、悪いことをしたと思った。

「試合始まるぞ」

五十嵐は、挨拶だけを済ませまた俺の隣に戻ってきた。

試合はお互い同じ実力と言ったところだ。差を付けることができても4点止まりで圧倒的な差ではない。その差も埋まったり広げたりを繰り返すだけだった。七ヶ橋小学校とは夏の大会で負けたところだ。それも、今とは違い五十嵐が指揮するチームでだ。それも30点と大差をつけられたそうさ。このチームが強くなったのか、向こうが弱くなったのか、分からないが俺と五十嵐が入れば勝てる見込みは十分にあった。

「これなら余裕だな」

「あいつがいない」

俺が安心した横で五十嵐は不安そうな顔をしていた。五十嵐は相

手チームのメンバーを一人一人確認してゆきため息を吐いた。

「やはりだ。奴がいない。手を抜いている…そんなはずはないんだが」

「何か問題か？」

「心配してもしようがないな。で、どっちにするんだ」

「どっちって……愛華と珊瑚のことか」

「それ以外に何がある」

愛華と珊瑚。愛華は俺の彼女で珊瑚は俺の友達だ。それ以上でも以下でもない。だから、どちらを選べといわれても選ぶ基準が違いくすぎる。同じ石でも宝石と岩と同じで比べるもの同士ではない。

「五十嵐が俺だったら、彼女と親友。どっちを選ぶんだ」

「それ以前に、斎条も瑠璃川も普通の女の子だったらお前は思うんだ」

「普通って」

「斎条は彼女でも幼なじみでもない。瑠璃川は転校してきたクラスメイトだ。お前はそんな二人をどう見てるんだ」

彼女や親友という固定された関係がなかったら、俺は二人をどう見ているのかだと。

「愛華は、可愛いと思う。それは五十嵐も認めるだろ」

「まー、否定はしないな」

「それに俺、愛華の笑顔がすごく好きなんだ。あの笑顔を見ていると心が温かい。それは、あの時と変わってない俺の思いだ」

「あーそうですか。で、瑠璃川は？」

五十嵐は興味がなさそうな欠伸をしていた。五十嵐にとってはただの惚気話にしか聞こえないのだろう。

「瑠璃川は、俺に夢をくれた存在だ。お互い夢を叶えるためお互いを支えあって夢を掴もうとしている。夢を諦めようとした時は励まされて、夢を叶えたら二人で喜び合う仲だ」

「で、お前にとってどっちが大切で一緒にいたい存在なんだ」

「それを決められないから困ってるんだろ。両方、って駄目だよな」

俺の理想を話すと五十嵐は鼻で笑って俺の顔を見た。

「今更なに言ってるんだ。それすら言い出せないからお前は苦しんでいるんだろうが。そうだな、斎条のあの反応では許してくれないだろうな」

五十嵐は立ち上がり体をほぐし始めた。

「そろそろ行くぞ。点差10点を埋めなきゃならないんだからな」
五十嵐が見つめるボードには10点の差がはつきりと示されていた。互角、もしくは少し上を行っていたうちのチームが負けている。「お前がうじうじ話している間に、向こうのエースが登場したってことだ」

五十嵐が指さす先には、俺と同じぐらいの小さい選手がいた。俺はそいつの実力と名前を知っている。

「天美屋海斗。夏のリベンジといきますか、な、親友の中本よ」
差し出された手。ボールを俺へ投げる時に使われるそれを俺は掴み、気合を入れた。そうだ。愛華にプレゼントがあつたんだ。それを届けよう。そして、答えは試合の間に考えればいいんだ。辛く長い20分、それだけあれば十分だ！

俺と五十嵐はコートへ入った。そこには、汗一つ流していない海斗がいた。2クォーター目の2分前に入ったばかりだそうだ。それであの点差、海斗の実力はあの時よく見せられたから知っている。だから、夏の大会で負けたことも領けた。

「やあ、五十嵐。と、……あの時のロングシューターだね。夏の大会では見なかったけど、今度は本気ってことだね」

「中本、頼みがある」

五十嵐は海斗の声をすべて無視して俺に話しかけてきた。話しかけてきたけど、その鋭い目は海斗を見ていた。

「10分でこの点差を埋めてくれないか。海斗は俺が止める」
「いいけど、どうしたんだ」

「奴とは一対一で決着をつけたい。わがままを言っすまないが頼

めるか」

親友の頼み。今まで俺の悩みも沢山聞いてくれた。アドバイスをしてくれた。一度ぐらいでは返しきれない恩を受けた。だから、断る理由なんてどこにもなかった。

「了解。けど、残り10分は期待するなよ」

「承知！」

俺と五十嵐は再び気合をいれ海斗を睨みつけた。その海斗は俺達を見て嘲笑っていた。

「舐めてもらっちゃ困るなあ。熱いやつは嫌いだよ」

背筋をゾクツとさせるその深い声は他のメンバーを怯ませていた。が、俺と五十嵐はその程度の冷たさなんか受け付けていなかった。

そして、俺達の20分が始まった。

五十嵐の話によると、海斗以外の4人はうちの3人で十分抑えられるほどの実力らしい。ので、俺と五十嵐で海斗を相手することになった。五十嵐は今日このために苦手としていたトリックやダッシュの練習をつんできたそうだ。五十嵐の動きは俺ほどとは言えないが、海斗は相当めんどくさがっている。小回り重視の俺や海斗にとって体の大きく動きの遅い五十嵐を避けることは容易だった。が、小刻みな動きができるようになった五十嵐は動く壁として、俺達の超えることのできない障害として立ちふさがることができるようになっていた。

「くそ、誰か取りに來い」

一端、ボールを預けて体勢を整えるつもりだったのだろう。だが、その判断は正解ではなかった。海斗と比べると劣る奴の持ったボールを奪うことなど今の俺でもできることだった。

「下手くそが！戻れ。俺が阻止する」

海斗は俺がロングシューターだと知っている。だからだろう。自分しか止めることができないと理解した海斗は俺が距離を掴む前に俺のところへ来た。

「入れさせねえ」

「悪いね。俺も成長しているんだよ」

俺は、シュートの姿勢から真横へパスした。タイミングを計ったかのように五十嵐がそれを受け取りシュートを決めた。

「なるほど、一人で相手するには厄介なコンビだな」

俺のシュートを塞げば五十嵐が入れる。五十嵐の相手をしていては俺が決める。海斗一人で成り立っているこのチームでは俺達を止めることはできなかった。

「はあ、はあ、や、約束の同点だ。これでいいだろ」

残り10分で俺は戦力外通告をした。予想以上に体力を消費した。残り10分中半分も動ければ上等だ。

「ああ、ありがとな」

「こ、これで負けたらジューズ奢れよ」

「おう、ジューズどころか、ミヤクドで好きなだけ食わせてやる」

俺と五十嵐は拳をぶつけて約束をした。

「くそ、役立たずども。4人がかりでも止められないのか」

「そう怒るな。これからは俺が一人で相手してやる」

「ふん、いい気になるなよ。今までののはこいつらが悪いだけだ。俺の実力じゃないからな」

強がる海斗を五十嵐は何とも思っていない。そうだ。俺も海斗と同じだった。自分ひとりではやる絶対の自信、諸刃の剣だ。だが、その諸刃の剣では一度折れてしまっても磨き上げられた五十嵐の剣には勝てそうにない俺には見えた。

「なら、始めるか」

表ではみんな試合に参加しているが、実際に戦っているのは五十嵐と海斗だけだった。俺達はその二人について走っているだけだ。その間、俺はあのことについて考えていた。

観覧席には愛華と珊瑚がいた。珊瑚はちゃんと約束を守ってくれ

た。俺を応援してくれている。心の中でありがとうと伝えた。

愛華も応援してくれている。何一つ変わらないかのような二人。

でも、俺は一人を選ばなきゃいけないんだよな。

一人で夢を目指すのは辛い。一人だったらあの時夢を諦めていただろう。そして、今ここに立っていないかっただろう。

あの笑顔があったから俺は癒されていた。頑張れた。約束を守るために必死に練習もできた。

どっちも俺にとって必要なものだ。

珊瑚の支えてくれる励ましの声。

愛華の愛おしく暖かい笑顔。

……あれ？

無意識に走っていた俺は立ち止まった。一人ボールとは違う動きをした俺に視線が集まった。

だが、そんなこと気にすることなく俺は、彼女を見た。そこには、俺の见たい彼女はいなかった。

「そうか、だから即答できなかったんだ」

俺は笑った。コートのだ真ん中で大声を上げて笑った。不気味がられても良かった。散々苦しんでいた原因がようやく分かった。自分の答えがようやく見つかったからな。

「そうか。そうだったんだ」

残り15秒、同点のままじゃねえか。

俺は歪んだ笑顔で海斗の持っているボールを奪って全力でゴールへ走った。

そうだよ。どうして気付かなかったんだ。

大好きなあれを、近頃、見ていないだろうが、

「これが俺のプレゼントだ」

高い。高い。リングへと飛んだ。五十嵐にもキャプテンにも無理だと言われたけど、血反吐を吐きながら練習しだんだぞ。

「遅くなつた約束だ！」

ダンクシュートを五十嵐以上にかっこよく決めた。

これを見て、最後に笑ってくれよ。……な、斎条。

第33話 告白

リングが大きく音を立てて歪んだ。宙で得点を見る。2点差で俺達が勝っていた。残り時間、2秒。みんなとは違う時間の流れの中にいる俺とっては長く感じたけど、海斗たちにとってそれは、驚くだけですぎってしまうほど短い時間だった。

間近に迫った勝利に俺は安心し、空気に全身を任せた。もう、体を立て直すことも、自分の足で立つこともできなかった。

勝てたのに悔しかった。このままじゃ、背中を強打してすぐに病院送りだ。そうになると、俺の思いを2人の女性に伝えられないじゃないか。

悔しくて、悔しくて涙が滲んできた。くそ、涙なんか出てこないでくれ。もう駄目みたいじゃないか。

固い床に落ちると身を強ばらせたとき、終了のホイッスルが鳴った。まるで、すべての終わりを知らせるように。

俺は覚悟した。だが、大きな何かに背中を受け止められた。それは、五十嵐と海斗だった。

「おら、倒れるな。自分の足で立て」

五十嵐に力の入らない体を無理に立たされた。それでも、俺は自分の力で立つことはできなかった。

「五十嵐、無理だ。こうなったら足を挫いたように見せるぞ」

敵だった海斗が俺に肩を貸してくれた。それを見た五十嵐も肩を貸してくれた。

「い、五十嵐、それに、かい」

「話さなくてもいい。少しでも酸素を出すな。たく、リングに全体重を任せるほど疲れきっていたくせに無茶する奴だ」

「でも、その無茶がなかったら、負けていたのは五十嵐の方だったかも知れなぞ」

俺は引き摺られるようにコートから出てベンチに座らされた。そ

ここには、すでに麗羅さんが待っていた。

「慎也様、早くこれを」

麗羅さんに差し出された怪しげな薬（親父の手作り）を口の中で転がした。味はなく体中の痛みが和らいだ感じだけがした。体力は戻らなかつたが話したり歩いたりではできそうだ。

「すぐに救急車を呼びますからね」

ケータイを取り出した麗羅さんの手を五十嵐が抑えた。

「貴方が中本にとってどんな人かは知らないですが、頼みます。一時間だけ時間やってやれないでしょうか」

「それはできません。慎也様にこれ以上無理をさせては」

「お願いします」

五十嵐が麗羅さんに深く頭を下げていた。

「こいつ、きつと答えを見つけられたと思うんです。だから、少しでも早く思いを伝えさせてやりたいんです」

「ですが」

「麗羅さん。俺からもお願いします」

俺もふらつきながら立ち、麗羅さんに頭を下げた。

「慎也様」

「俺、やっと分かったんだ。今まで考えれば考えるほど、時間が経てば経つほど、俺の本当の気持ちが伝えられなくて、辛かった。だから、今感じるこの気持ちを今すぐ彼女達に伝えたいんだ。お願いします」

麗羅さんはため息を吐きケータイをしまった。そして、肩からかけていた一眼レフカメラをいじりだした。

「慎也様の表彰式まであと一時間ちよつとですか。その間、フィルムの交換でもしてましょかね」

麗羅さんはベンチから出て行った。許可されたのかな。

「五十嵐、ありがとう」

「礼はいいからさっさと行け」

五十嵐に背中を押されて彼女を探しに観覧席へ向った。

この学校の体育館の観覧席は外からしか入ることができなくて、俺は一度外に出た。バスケの試合が終わり次の試合まで外に出ている父兄が多かったが、その中から一人俺に近寄ってくる女の子がいた、

「慎也君、すつごくかつこよかったよ。あのね。私、慎也君がもつともつと好きになっちゃった」

この顔は、笑顔なんだろうな。昔は笑顔を見て癒されて勇気付けられた。初めは遊びのつもりだったバスケも、笑顔が見たいから俺はここまでやり続けたんだ。でも、今日の前にあるこの顔は笑顔に見えない。何だろう。どんな顔と聞かれたら『笑顔』だ。だけど、俺の好きな笑顔ではない。急に光がなくなつたようなその笑顔は俺を引きとめようとする力は持っていなかった。

「少し、話さないか」

俺は彼女の手を取ってあの階段へ連れて行つた。

そこはもう屋上に出ることのできない階段だ。行き止まりの階段は誰も通ることもない。埃っぽいそこは俺の今までを見ていてくれた。だから、今から告げる大事なこの瞬間も見ていて欲しい。俺の辛い思い出は俺とこの場所だけのものにしたかったから。

「私この場所嫌い。慎也君が怪我した所だもん」

俺も好きではない。ここでは涙を見てきたから。そして、今からも見ることになるから。

「あのさ、俺達別れないか」

「なに言ってるの？変な慎也君」

彼女は笑った。俺の言っている意味が分からないはずはない。ただ、分かるうとしていないだけだ。

「俺、本気なんだ。別れよ」

ゆつくりと笑顔がなくなり、悲しげな顔になり始めた。

「やだ！別れたくない」

強く抱きついてきた。昔の俺はそれが可愛くて、抱きしめ返したり頭を撫でたりしたけど、今の俺はなにもしなかった。

「やだ、やだ、やだ！そんなこと言わないで、ずっと一緒にいる。私、慎也君が好き。慎也君も私が好きって言った。だから、いや」

さらに強く抱きしめてきた。薄地のユニホームには汗や水とは違う何か熱いものが染み込んできた。そんな彼女を俺は引き離れた。

「俺も大切に守ってやりたいと思っている」

「それなら」

光を見つけたような彼女は俺の好きな明るい笑顔を見せてくれたが、それを俺は突き落とさなければならなかった。罪悪感があったけど、俺はそうするとあの時決めたんだ。

「だけど、それは友達としてだ。彼氏彼女の関係にはもう戻れない」

「やだよ。どうして私じゃ駄目なの」

「俺にとって妹みたいな存在なんだよ。手を繋いでも、抱きしめられても、可愛いとしか思えなくて、口では好きだと言っても心はそうじゃなかったんだ」

俺の手を握ろうとした彼女は小さく振るえ、出した手を戻した。

「ごめんな、今まで言えなくて、これからもいい友達で」

「彼女でいさせてください」

彼女の主張に驚き最後の言葉を飲み込んだ。

「お願いします。彼女でいさせてください。誰にも付き合っているって言いません。だから、誰にも別れたって言わないでください。慎也君の許しなしで抱きついたり、甘えたり、手を繋いだりしませんが。慎也君が女の人と手を繋いでいても、彼女を作っても、キスしても、結婚しても、子供ができて、私を彼女にしてください。私のことを忘れないでください。私は慎也君の彼女だと思わせていただきます」

彼女でいさせてください、か。少しでも繋がりを残していきたい。

チャンスがあつたら正式な彼女になりたい。今考えるとそんなことを考えていたのかもしれないな。

「好きにすればいいさ。でも、俺はもう愛せないかもしれないぞ」

「それでもいい。だから、遠くに行かないで、そばにいて欲しいの。いさせてください」

俺は答えることもなく、背を向けて立ち去ろうとした。

「それじゃあな、斎条」

階段を降りていくと、明るく元気な声が聞こえた。心配させないよつに無理した声だ。それでは俺の心に忘れられないように斎条が一つ刻まれるではないか。

「また明日ね。中本君」

俺は珊瑚を探すために体育館の観覧席に戻った。が、既に他の試合が始まつており、そこには顔を知っている人はいなかった。と、思ったがあまり好ましくない人がいた。

「駄目駄目なのら。サキちゃんもヒメちゃんも面白くないのら。これなら、ユメちゃんをからかっていた方が面白いのら」

かりんはケータイで誰かと話しながら文句を言っていた。

「やめとけて、今の彼女はお前が関わっていい状態じゃないだろうが」

虎之耶キャプテンとかりんだ。今行われているのはバトミントンの試合だった。

「珊瑚はいないか」

二人に気づかれないように帰ろうとする。

「おいおい、シンシン、先輩前に無言で立ち去るのはどうかと思うぞ」

「すみません、時間がないんです。関わらないでください。キャプテンたちは試合でも見ていてください」

すると、キャプテンは熱くなつて試合を指さした。

「だ、誰がこんなむさい男どもの試合なんて見て喜ぶんだ。馬鹿野

郎

「だって、かりん、文句言っていたじゃないですか」

「ああ、あれば別口なのら。それよりいいのらか？」

かりんは、ケータイをしまい。俺を見た。

「サンちゃんを探しているのらね」

「どうしてそれを知っているんですか」

「おーほっほっほ。あちきのこのアホ毛は飾りじゃないのら。サンちゃんなら、シンちゃんを探しにあそこへ行くといっていたのら。早く行くのら」

「は、はい。ありがとうございます」

俺は始めて役にたった先輩にお礼を言って、悲しみの階段へ向かった。

「この悪趣味」

「嘘は付いていないのらよ」

「でもよ。あそこに行くなら見ちゃう可能性もあるだろうが」

「それもまた、経験なのら。あの子達は早く大人になりすぎたのらだから、少し子供に戻してあげてもいいと思うのら」

「子供にねえ。戻ればいいけど…潰れたりしないか？」

「その時は頼んだのら、コノちゃん」

「俺任せかよ。本当に大丈夫かな」

「なんとかなるのら。がんばるのらよ、男の子、女の子」

あの階段へ向かうには、三階まで上がってから、教室前の廊下の突き当りまで行かなければならない。学校の隅にある階段だ。

「のかな」

試合や運営で忙しい今、こんな隅の教室に人がいる。

「大丈夫だって、だからな」

男の声と女の声、俺は声を殺しながらその教室に近づいた。

そこにいたのは伊藤と五十嵐だった。この2人が自分の教室にいるのは変な話ではない。だが、この2人だけ、という所が珍しかった。

中に入ろうとしたが、五十嵐の言葉に俺の足は止まった。

「中本は斎条と別れた。予定通りだ」

なんだって、五十嵐の奴、なに言ってるんだ。

「それにしても驚いた。五十嵐からこんな話持ちかけてくるなんて」
「伊藤だって、斎条と仲を直したかったんだろ。中本と付き合い始めてから、お前相手されていなかったし、別れさせたかったんだろ。俺と目的は違ってもやることは一緒だろ。お前に恩を売っておいて損はしないからな」

2人の信じられない会話に聞き入っていた。2人とも俺が信賴していた2人だ。特に五十嵐は困った時助けてくれる親友だ。何かの間違ったかと思いたい。

「五十嵐は感謝している。瑠璃川とも近づけたし、愛華も前に増して笑ってくれるようになった」

「瑠璃川は本当に思うように動いてくれたよ。まさか、中本が惚れるほどとは思わなかったけどな」

珊瑚？珊瑚が五十嵐の計画通りに動いていた？利用された。俺の気持ちも珊瑚の気持ちも斎条の気持ちも全部。あれだけ応援してくれたのはすべて嘘の演技だった？

「このまま、中本が瑠璃川のところへ行ってくれれば俺もやりやすくなるな。ところで、許してもらえるかな？」

「んゝわかったわよ。許す。で、本当にするの？愛華は相当頑固だから簡単にはいかないと思うよ」

「ああ、もちろん。伊藤の許可を得ることができたからな」

五十嵐は握り締めた自分の拳を見てはつきりといった。聞きたくなかったのに聞こえてしまった。

「俺は、斎条に告白する！」

五十嵐、斎条のことが好きだったのか。はは、あいつ、全部嘘付いていやがった。俺にも珊瑚にも斎条にもみんなに嘘を付いて、自分だけが得をしようとした。まさに詐欺師だ。

俺は二人に気づかれないように階段へ向かった。なんだか、涙を流したい気分だったからだ。

そこに珊瑚がいるかもしれない。そんなことは頭のどこにも残っていないかった。

第34話 仮面の道化師が生まれた時

俺の悲しみをすべて見てきたこの場所。そこには、珊瑚がいた。俺は珊瑚に声を掛けることなく階段の中腹に座った。

珊瑚も俺のとなりに座った。お互い何も話さずただ黙って時の流れを感じていた。

昔は沈黙が苦しいと思ったときもあった。だが、今の俺にとっては心地良く感じた。

それでも珊瑚は話しはじめた。その言葉一つたりとも俺の言葉には響きそうになかった。

「慎也、試合勝てたね」

そうだ。俺、七ヶ橋に勝ったんだ。

「これで、慎也も夢に近づけたのかな？」

夢、俺の夢ってなんだっけ。

「私はね。今度、龍真ともう一度試合するんだ」

俺は、どんな夢をどうして目指していたんだ。

「龍真はね。今までの誰よりも強いって言ってくれたんだ」

自分のためではない。俺は誰のために夢を目指していたんだ。

「本人は覚えてないみたいだけど、私は、龍真に認めてもらって兄さんを超えたい」

斎条に喜んでもらいたくて始めたんじゃないのか。

「だから、これからもお互い頑張ろうね」

その斎条を突き放した。何も考えず。その時の感情に任せて。

「慎也が夢を叶えられるようにこれからも応援する。だから、五十嵐に急かされたからか？だから俺は、あんな判断を。」

「これからも、私のこと応援してくれる？」

親友に騙され、利用され、嫌な結果しか残らなかった。

「その…これからも慎也の隣にいていいかな？」

いつも側にいた斎条を悲しめた。それも俺の責任だ。

「斎条には悪いと思うけど、私は」

いつも、いつもそうだ。俺は側にいるみんなを悲しめる、辛い思いをさせる。それも、俺が親友に操られてた。

「私は慎也が好き。私を見ていて欲しい」

誰かに騙されて辛い思いをさせるくらいなら。

「私と付き合ってもらえませんか？」

目の前に珊瑚が立っていた。

そうだ。本当なら珊瑚は俺とこんな仲になることは無かったんだ。

あの時、珊瑚を応援しなければ。

あの時、応援に行く約束しなければ。

あの時、珊瑚に謝らなければ。

あの時、珊瑚の夢を聞かなければ。

あの時、珊瑚と呼ばなければ。

あの時、珊瑚を追いかけてなければ。

あの時、保健室に行かなければ。

あの時、珊瑚に話しかけなければ！

どこか一つでもなければ、俺達は今ここにいなかったはずなのに。俺達の切っ掛けのすべてにあいつがいる。俺達はいつの手の上で踊っていただけなのだ。

まるで、道化師だな。

人気者になっても、みんなの視線を集めても、俺には何も与えられない。ただの笑い者。なのに、当の本人は何かを得ようと必死に踊り続けて、逃げられもしない手の上で踊り続けていたなんて。そんなことなら。

「慎也、私…」

「俺、瑠璃川のことそんな気持ちで見えていないから」

きっぱり言い切って、階段を降りていった。引きとめる声も理由を求める声も聞き入れる気は無かった。ただ、後ろからは嗚咽しながら泣く声が聞こえたただけだ。

誰かに誰かを傷つけさせられたくない。傷つけるぐらいなら自分の意思でやってやる。誰かの思うようには動かない。これからは、自分の意思で決める。

騙されるなら親友なんて要らない。

傷つけるぐらいなら友達も要らない。

一人でいい。誰も俺に近づかなければ傷つけることもない。本心でぶつかり合わなければ騙されても傷つくこともない。

親友も、彼女も、友達も、仲間も、信頼も、夢も、何も要らない。

そうだ。無だ。何もなければ失う辛さも、傷つく痛みも何も感じない。

心を表に出さない。誰にも読まれることのない心を持つ。

だが、踊り続けよう。今度は俺が奴を利用してやる。

理想の関係を築くため、俺の変化を悟られないため、俺が一人でいられるように。

仮面をつけよう。本心を隠すための仮面を。

俺は仮面をつけて暗い一人の舞台で踊り続けよう。

「それから俺達は、偽りの仲になったんだ」

俺は冷たくなったコーヒーの残りを飲み干した。自分でもここま

で話したのに驚いていた。話し出して止まらなかったといったほうが正しいかもしれない。

「五十嵐たちは知ってるけど、他の奴らには言うなよ」

右肩にある頭に向って言う。だが、返事はなく、代わりに小さな寝息が聞こえた。

「おい、聞いてたのか！」

俺は友美を突き飛ばした。すると、友美は口元を拭い慌てて頷いた。

「う、うん。聞いてた聞いてた。で、転校生の名前ってなに？」

俺は友美の額を叩いた。こいつ、冒頭で寝てやがったな。

「いったゝい。なにをするの」

「せっかく話し続けてやったのに、なに寝てるんだ」

額を擦りながら友美は頬をかいて苦笑いしていた。

「冗談だつて、7割ぐらいは聞いてたつて」

「全部じゃないんだな」

「大筋は聞いてたもん。でも、あれだけ酷く思ってたのにどうして今は仲良しなの？ 私なら許せないけどな」

確かにそうだ。小学生の時の俺にとって今の俺は想像もしなかっただろう。

「中学生の時に色々あったからな」

「中学で？ 何があったの」

「その話はまた今度な」

友美は口を尖らせて、けちーと言っていたがそれを話すには時間が必要だと思った。

「でも、どうして慎也が知らないことまで知ってたの？ 瑠璃川さんとかりんさんとの会話とか」

「中学の時、とある集まりのリーダーになってな。その時に全部聞いたんだ。何があったのか、何をしていたのか。その集まりに参加するようになってからかな、仲が直り始めたのは」

「慎也は、まだ愛華や瑠璃川さんのことが好きなの？」

幾度となく聞かれたなその質問。だけど、俺の答えは変わってない。

「わかんねえ。どうなんだろうな」

「2人とも同じ学校だよ。気まずくないの？」

友美とは高校からの付き合いだ。だから、知らないのだろう。俺達の切れない繋がりを。

「2人だけじゃないぞ。椎名も、龍真も、神原も、東も、凜も、海斗も、早瀬も、工藤もみんな同じ学校だ。と言うより、中学で俺と関わった奴らもみんな一緒に入学したんだがな」

俺が行くから誰かが付いてくる。その誰かについてまた誰か付いてくる。それが鎖のように繋がったのだ。あいつ、松島を除いてだ

が。

「ほへー、みんな仲良しなんだね」

「友達離れできないだけだ」

「いいじゃない。仲良しなのには変わらないんだから」

「そうだといいいんだけどな」

俺は友美の持っていた空き缶を捨てると電車が駅に入って来た。

「行くぞ。これに乗れなかったら徒歩で帰るしかないんだからな」

「ねえ、聞いてもいい？」

友美は腕を組んできた。俺を見上げる瞳が透き通っていて綺麗だと自然に言えそうだった。

「なんだ」

「そんな辛い話、どうして私にしてくれたの？」

誰もいない電車。俺達は席に座ると進みだした。あと数十分、この質問に答えることなく無言で過すのは辛かった。

「仮面を外すって約束したからな。まずは、共に舞台上上がってくれる人を探さなきゃな。それなのに、隠し事はなしだろ」

「よく意味が分かりません」

「たく、大切な人に自分のことを知ってもらいたいのは当然のことだろが」

「へえ？そ、それって、好きってこと？」

赤くなつた友美は俺から離れて、口元を押さえていた。

「ばーか、ちげえよ。友達としてだ」

そして、俺達2人だけに乗せた電車は夜の中を進んでいった。俺と友美との間が委員長同士の関係から少しだけ近づいた気がした。この感じはまるで、小学生の時、いらないと言つた斎条や瑠璃川とのあの関係に似ていた。でも、あの時と同じ嫌悪感はなかった。

友美は俺と共に舞台上がってくれるだろうか。そして、最後まで降りずにいてくれるだろうか。

俺は、仮面をつけた道化師を辞めることができるだろうか。少なくとも、松島と再会する日までには、ただの道化師になりたい。

第34話 仮面の道化師が生まれた時（後書き）

はい、と言う訳で中本慎也の小学生編『仮面の道化師が生まれる時』が終了しました。

いかがでしたでしょうか？楽しんでもらえたら嬉しいです。

では、次回予告として、次回は今回の話の裏側、五十嵐誠のお話『道化師になりたい詐欺師』です。

また、読んでいただけるよう頑張ります。

第35話 過去の夢と思い出（前書き）

『道化師になりたい詐欺師』は五十嵐の小学生時代の思い出話です。前回の話の裏側や新しい登場人物をお楽しみください。

第35話 過去の夢と思い出

「おはよう誠君」

「おはよう愛華」

俺は自然と彼女の手を取って朝の道を歩いた。小さい時からいつも一緒に小学校も一緒になれて嬉しい。兄貴は俺を海外の学校に行くように進めていたが愛華がいない学校には行く気はなかった。

「私、誠君がサッカーしているのが好きなの。誠君かっこいいんだもん」

幼稚園の頃からやっていたサッカー。はじめは運動をするためだったけど、今は愛華が喜んでくれるからやっている。シュートを決めると愛華は笑顔で喜んでくれる。元々、運動は得意ではないが愛華が喜んでくれるから辛くても練習した。真夜中までボールを蹴っていたこともあった。

「誠君、一緒に帰ろう」

小学校のサッカーチームの誘いがあったけど断った。その時の俺にとってサッカー選手は将来の夢となっていたが、愛華と一緒に帰ることに天秤にかけると圧倒的に愛華の方が強かった。

「誠君、この問題教えて」

勉強は嫌いだった。でも、たくさん勉強した。愛華にすごいと言ってもらいたくて、多くの知識を手に入れた。テストで満点を取ると愛華が拍手してくれる。難しい問題を解いて兄貴に褒めてもらうより、愛華に掛け算を教えて『ありがとう』と言ってもらう方が何倍も嬉しかった。サッカーと勉強の両立は大変だった。でも、寝る時間を削って時間を作った。

「誠君、一緒に遊ぼう」

俺にとって愛華は何よりも優先される存在だった。友達と遊ぶ約束をしていても、愛華を選んでいた。たとえ友達がいなくても愛華がいればそれでよかった。

「ケホッ、ま、誠君。辛いよう」

体の弱い愛華が風邪を引いたら一晩中看病してやった。愛華の親は仕事でいないときが多かった。だから俺が代わりに愛華の看病をした。タオルを何度も濡らして、汗を拭いてやって、一晩中起きて手を握ってやった。例えば、自分が病気になっても看病してやった。

風邪をうつされても注射や薬で誤魔化して平気な顔で愛華と会った。

「誠君、指切りしよう」

「指切り？何の」

「告白の約束」

「はあ？」

「あのね。私、誠君のことが好きなの。だから、告白するの。でもね、まだ駄目なの。だから、4年生になるまで待っててね。だから、指切り。告白する約束」

差し出された小指に俺も小指を出した。

「指切りげんまん、嘘ついたら針千本のくます。指切った」

指切り、それだけでもう告白された気分だ。愛華も同じ気分なのだろうか、これほどになく可愛い笑顔を見せてくれた。

「指切りしたから絶対に守らなきゃ。針千本も飲めないからね」

「守れなくても、俺は愛華にそんな酷いことしないって」

「ありがとう。やっぱり誠君は優しいね」

3年生の時の話だ。その時から早く4年生になりたくてたまらなかった。

ねえ、誠君。誠君教えて。誠くん。待ってよ誠君。誠君。まゝことと。

「五十嵐君、紹介すね。中本慎也君」

心待ちにしていた4年生。その時あいつがやってきた。

「中本君はね。バスケットをやっているね。すごいんだよ。中学生と一緒に練習もやっているんだって」

俺は真夜中までやってるぞ。

「それにね。頭もよくてもう5年生の勉強しているんだって」

俺はもう高校卒業できる学力を持つてゐるぞ。

「それに、とても優しいんだよ」

優しさなら俺の方が上だろ。

「五十嵐君も中本君と仲良くしてね」

愛華のお願い。俺はそれを断ることができなかった。

「五十嵐誠だ。よろしく」

作り笑いをして手を差し出した。だが、中本はその手を見て嘲笑った。だがすぐに笑顔になって俺の手を握った。

「中本慎也。長い付き合いになるだろうな」

中本は俺の耳元まで顔を近づけた。

「止めた方がいい。君にその笑顔は無理だよ」

俺は強く握られた手を振り払った。

「五十嵐君。今から中本君の練習を見に行くけど一緒に行く？」

「あ、ああ」

俺はその日から誠から五十嵐になった。すべてはあいつが来て変わったしまった。

俺は愛華のために数多くのものを犠牲にしてきた。それをあいつは全て帳消しにしゃがった。

海外留学も諦めた。もし、外国の学校で勉強していたら今頃大学生になってるだろう。

時間をサッカーに費やした。もし、サッカーをしていなかったらもつと別のことに時間を使えたのに。

友達も将来も諦めた。友達を増やしてたくさん遊べた。サッカー選手になることもできた。

嫌いな勉強もした。勉強なんかしなかったらサッカーに時間を使えた。辛い思いをする必要もなかった。真夜中起きて走る必要もなかった。

薬や注射の痛い思いもしなくて済んだ。体が悲鳴を上げるほどボロボロになった。

指切りをしなかったらこんなに悔しい思いをしなくて済んだ。
中本を受け入れなかったら変わっていたかもしれない。

4年生のあの時何かあったかもしれない！

「くそ！……最悪な奴だな。俺」

目が覚めた。夢だった。あの時の辛い思いはもうしなくなかった。
夢で本当によかったともう。

布団の中で汗ばんだ体を起こす。両手と首に汗が滲んでいた。息苦しさもあった。悪夢から目覚めるのは助かるけど、この蒸し苦しさが嫌でたまらない。時計の緑の文字盤は朝5時を指していた。数年前はこの時間に起きて走っていたんだと思うと馬鹿らしく思えた。結局、4年生になっても告白されることはなかった。愛華の中ではあの指切りは無いことになっていた。それだけならよかったのだが、愛華の中で俺はただの友達になっていた。それに、俺が『愛華』と呼ぶと苦い顔をされた。そんな顔を見たくないから俺は『斎条』と呼ぶしかなかった。

その頃には俺だけに笑顔を見せてくれることはなかった。笑顔が見られたのは中本のための笑顔を少し見られるだけだ。

「悔やんでいても仕方ないな。小学生の約束なんて引き摺るもんじやねえな」

俺の練習場、早朝や夜は暗くゴールやボールはよく見えない。だから、兄貴に頼んで照明を付けてもらった。早朝でも真夜中でも練習できるようにだ。前までサッカーだったこの場所は今はバスケのコートになっていた。

軽くボールをついて、ゴールに入れた。

「よし、学校に行くか」

俺は朝早くに学校に行っている。1人で練習をするためだ。スタート地点が違うなら速度を上げればいいだけだ。算数と一緒に。と、昔の考えが高校生になった今でも少し残っていた。そのせいだろう。

こんなに早くに登校してしまうのは。

リクセリア学園。綺麗な校舎だが、山奥なのはいただけない。本
当なら別の学校にするつもりだったのだが、斎条が行くからついて
来たみたいなものだ。

俺は、体育館で1人バスケの練習をしていた。高校になってから
バスケはしないことにしていた。でも、日課だろうか。体育館で数
時間過すのがあたりまえになっていた。俺は体育館の真中に寝そべ
って昔のことを考えていた。

「マコマコ、なぐにやってるんだ。こんな朝早くに」

「先生こそこんな早く来て馬鹿じゃないですか」

「ちげーよ。当直だよ当直。それに、相手がかりんだぞ。ともに
寝てられるかって」

赤井虎之耶先生は俺の隣に寝そべった。初め見たときは驚きだっ
た。虎之耶とかりんは高校を卒業してすぐにそろって外国へ留学、
ずば抜けた学力でたった2ヶ月で大学を卒業して日本に戻って教師
になっていたのだ。滅茶苦茶な話だ。それに、虎之耶は納得でき
たがかりんがそんな芸当できるわけがないと今でも思っている。

「で、なに考えていたんだ。エロいことでも妄想してたんだろ」

「違いますよ。ただ……」

俺は黙って目を閉じた。虎之耶も察してくれたのか黙って眠りに
つこうとしていた。俺は思い返していた。俺が詐欺師として生きた
時代を。

5年生になってすぐにそいつはやってきた。全身から冷たい空気
が出ているような女の子だった。黒板に名前を書いていた。綺麗な
字だ。チョークであそこまで綺麗に描けるのは先生でも無理だ。達
筆に黒板に書かれたのは『瑠璃川珊瑚』と書かれていた。

「よろしく」

隣には難しい顔で黒板を見る斎条、きつと読めないのだろう。中

本も同様のようで、俺は冗談交じりに教えた。

その後は色々あったけど瑠璃川は俺達を避けているのがよく分かった。だが、彼女がもたらしたのは俺にとって大きなものだったのはみんな知っているだろう。

その時俺は中本問題と同時に別の問題も抱えていた。すべては瑠璃川が転校してきた日に始まった。

瑠璃川が転校してきた日、俺は中学校に行った。中本が小学校ではなくこつちで練習をしていると知っていたからだ。あまり俺は中学校に出入りしていないので緊張していた。

下校する中学生を吐き出す校門前から進むことができず俺はただ立っていた。中学生に対して恐怖はない。だが、中学生の実力を知るのが怖かった。聞くところによると、中本は中学生を負かしているそうだ。その中学生の実力を知って絶望しなくなかった。

「帰ろう。また今度来ればいいや」

帰ろうとすると後ろからバスケのボールが飛んできた。

「待て、かりん。会議があるだろうが！」

「コノちゃん怖いのら。あちき難しい言葉分らないのら」

ギャーギャー騒ぐ声が聞こえたと思ったら、背中に小さなものがぶつかって押し倒された。

そこには、中学の制服を着た小さな女の子がいた。

「捕まえたぞ、かりん。お仕置きしてやる」

「や、やめてなのら。コノちゃんのお仕置きという名の調教はともこの小学生の前ではできないような嫌らしい手つきで」

「誤解を招くようなことを言うな！」

「はぶぶ、そのちみ、あちきを助けてくれなのら！助けてくれないと、あちきの大切なものが！あちきの操が！」

俺が初めて出会った中学生の女性は見習いなくない人だった。

第36話 生徒会募集中

俺は赤井と名乗る中学生の後についていった。バスケ部への案内を頼んだはずなのだが、彼はほとんどん校舎の中に入って行つた。階段を登り始めた時に騙されているなと気付いた。だが、俺の後ろには笹山と名乗るちんちくりんな女子がいた。引き返そうにも彼女が俺の背中を押していて戻れなかった。

無理矢理気味に連れてこられたのは3階隅の教室だ。行き止まりにある教室で、入り口のプレートには生徒会室と書かれていた。

「入りなよ」

扉を半分開けて赤井は中に入るよう進めた。

「いや、俺は体育館に行きたいんだけど」

「残念なお知らせだ。バスケ部はキャプテンの都合で休部になっているのだ」

「本当に駄目なキャプテンなのら。そんなだから試合でいつも負けるのら」

「本当に、誰のせいだと思っているんだ」

赤井は笹山の頭をアイアンクローで引き寄せ生徒会室に放り込んだ。

「ほら、バスケ部に用があるんだろ。話ぐらいなら聞いてやるから速く入れ」

バスケ部キャプテン、赤井に俺は招かれるように生徒会室に入つた。

生徒会室の入り口の向かいの壁には唯一の窓があり日差しが入っていた。日が暮れてきてから日差しが入るなら日中は真つ暗な部屋だろう。

その生徒会室は国境を引いたかのように二分割されていて、実際に部屋の真中には仕切るための赤いテープが張られていた。

両壁には棚とロッカーが並んでいて、壁の前には平行するように二つの並べられた机。赤テープで対称に配置された部屋だが整理の仕方がまったく違った。

右の領域は机に資料が綺麗に積まれていて棚の本も順番どおりに並んでいて几帳面さがよく見えた。それに対して、左の領域の机には何もない。綺麗に片付けられて何もおかれていない。さらに、棚にも何も置かれていない。ただ、隅の方のロッカーからはお菓子のゴミが溢れていた。

「ささ、ここに座るのら」

笹山がいたのは入り口が視界になる部屋の隅だ。そこには冷蔵庫やガスコンロなどお茶を飲んだりできるようになっていた。さらに、笹山が座っていたのは黒革張りのソファだ。その中心にはガラスのテーブルがあった。そこは表の生徒会室のプレートが間違いのようなスペースだった。

笹山と赤井は並ぶように座っていてその向かい側に俺が座った。2人の前には専用のマグカップに飲み物が注がれていた。それにも極端な差があり赤井の前には黒のコーヒーが湯気を上げていて、笹山の前には限りなく白に近いカフェオレが湯気を上げず置かれていた。

「粗茶ですが、どうぞ」

赤井が俺の前に置いたのは湯飲みに入った透明な液体。一口飲むと真水以外の味がしなかった。

「ただの水道水ですか。ケチですね」

「日本の水道水を馬鹿にするな」

「そうなのら。あちきの生まれた町では同じ水で同じ量のワインと交換できたのら。そんな贅沢を言ううちみは川の水をはいつくばるよに飲め」

「貴様は星川町の生まれだろうが。天の川に流してやろうか」

「ふふふ、甘いのらコノちゃん。それはあちきの飯の姿でしかないのら」

俺は2人のやり取りに疲れて水を飲んだ。一息つくと自分の目的を思い出した。

「で、何故体育館ではなくこんな所へ連れて来られたんです」

赤井はコーヒーを飲みながら資料を数枚テーブルに並べた。表紙には『臨海学校ドキドキ炎の告白大作戦』と書かれていた。

「改めて自己紹介だな。俺は赤井虎之耶。バスケ部のキャプテンで、君が探していた憧れの先輩だ。成績優秀、運動神経抜群の理想の文武両立した最強の生徒会長。特別に虎之耶様と呼ぶことを許可してやる」

「あちきは笹山かりん。学校のアイドルでこの世界の創造主。この世界はあちきのものであり、あちきのためにあるのだよ。よいか、そんなあちきが大人しくこの男の下で働く副会長なのは屈辱的なのだが、卒業とやらをしなくてはならないので仕方なくだぞ。だからあちきに力を貸すのら。報酬としてあちきをかりん様と呼ぶことを許してやるのら。さらに、今ならミヤクドナルトのクーポン券をつけてやるのら」

かりんは広告の切れ端のクーポン券を俺に投げつけた。期限は今日までのようだ。

「で、傲慢な貴方達と俺に何の関係が」

俺はばら撒かれたクーポン券を丁寧に集め、かりんの前に置いた。すると、虎之耶は目の前の資料を指さした。

「これだよ、これ。君も臨海学校のことは知っているだろ。えっと

……何年生？」

そう言われれば自己紹介がまだだった。

「五十嵐誠、5年生です。中本とは友達で同じバスケ部に入っています」

虎之耶は俺の顔を指さして何度も頷いていた。

「ああ、マコマコね。知ってるよ。で、見ての通りだ。手伝え」

俺は部屋を見渡して虎之耶の言いたいことを察しようとした。だが、ただの生徒会室にしか見えなくて言いようがなかった。

「どこをどう見ると？」

「マコちゃん、噂で聞くほど頭の回転が速くないのら。いいか、良く聞くのら。この部屋には副会長のおちきと、それを補佐するコノちゃんしかいないのら。その状況であちきの最高の計画を遂行できると思っっているのかね」

虎之耶は踏ん反り返るかりんの頭を丸めた資料で叩いた。

「お前が悪いんだろうが。……見て分かるように生徒会といっても俺とこいつだけ、書記とか経理とかがいたんだが、かりんに振り回されて幽霊委員状態だ。さらに、こんな奴の子守までしなくちゃならない。だから、このイベントを成功させるため手伝ってくれないか」

生徒会長って大変なんだ。確かに、校門前で見せられたのが日常茶飯事にあつたら仕事どころではないだろう。

「手伝えと言われても俺小学生ですよ。それに、中学校にはバスケットをしに来たんですけど」

「だから、初めに言っただろ。残念なお知らせだと。俺がこの仕事をしているのに部活ができと思うか？自主的にやる奴はいるだろうが、本格機動はしないだろうな。つまり、マコマコの目的を果たすには俺を手伝うしかないのだ」

話を飲み込めたのを確認すると一枚の紙を出された。そこには『けいやく書 MAKOTO IGARASHI』と書かれていた。さらに横にペンを置かれた

「聞きたいことが沢山あるんだが、何故英語だ」

「国際裁判にも使えるようになるのら。あと、血判にはこれを使うといいのら」

最後にかりんは鍍付いた画鋏を置いた。ここにある契約一式はかりんが用意したらしい。

「ここに生年月日と住所と学校名と好きな人の名前を書くのら」

1192年3月5日、住所は冥王星、学校名は星川小学校。最後の質問には『検討中』と書いた。かりんがその紙を奪い取ると『検

討中』を消して『笹山かりん』と書いた。

「もう、マコちんだったら。でも、ごめんなのら。あちきには好きな人が」

「で、具体的に何をすればいいんです？」

身悶えるかりんを無視して俺は虎之耶に詳細を聞くことにした。

「具体的には……イベントを確実に進めるためにどうすればいいか検討したり準備したりするんだ。それで、」

すると、黒い携帯電話を渡した。メーカーの名前が書かれていなく見たことないデザインだった。

「支給品だ。料金はかからないけど、生徒会のメンバー同士にしか繋がらないから注意しろよ」

「ちなみに、あちきの手作りなのら。5km圏内なら何人でも話せるのにあわせて、お互いの位置が分かるグローバルポジショニングシステム付きの高性能なのら」

「GPSって言ったらどうですか」

携帯の登録欄を見ると名前と顔写真が一緒に登録されていた。登録の先頭は笹山かりん、続いて赤井虎之耶となっていた。あいうえお順なのに製作者の力で自分を優先していた。さらにその下には赤井龍真、東詩音、神原夢、南海堂聖弥、早瀬舞と登録されていた。

「この5人も生徒会メンバーですか」

「おう、そうだ。マコマコと同じ小学生なんだな。明日紹介してやるよ。それとも何か、早瀬ちゃんが気になるのか？ いいぞ、電話してみろよ」

「なに言ってるのら、マコちんはユメちゃんに興味があるのら。ほら、電話してみるのら、ほらほら」

かりんは自分の携帯を差し出していた。かりんの携帯には白いボディにピンクのラインが交差するようにプリントされていてリボンが結ばれているように見えた。その携帯から女の子の子が聞こえていた。

「ぬふふ、奥手なマコちゃんのために代わりにかけてあげたのら。あ

「、もちもちい、ユメちゃん。今ねえ、目の前にマコちゃんがいるの。うん、うん、えゝ、やだ。ぐへへ、わあたから泣くな。ほれ、マコちゃん話してやれなのら」

俺は携帯を受け取って電源を切ってかりんに返した。

「何をするのら。せつかくユメちゃんと話す切っ掛けをあげたのに。ユメちゃんがこの時をどれだけ楽しみにしていたのかちみは知らないのかね」

「知らないですね。それに、話したいなら直接かけてくればいい。向こうも番号知ってるんだろ。誰かに背中を押されなきゃ動けないなら何も手に入らないと思え」

黙って話を聞いていたかりんと虎之耶は満面の笑みになり俺の頭を叩いた。

「いい、やっぱりお前にして正解だったな」

「うんうん、マコちゃんは面白いのら。これならあちきらについてこられるのら」

こうして俺は虎之耶とかりんの下で生徒会の一員として働くことになった。結局、バスケの話はまったくできなかった。虎之耶にうまく騙されたようだ。

中学校を出ると既に外は夜になっていた。俺は1人寂しく家に帰ろうと駅へ向った。

駅には中学生や高校生が大勢いたが小学生は俺ぐらいだった。ホームで待つには時間があり、俺は駅の入り口付近で空を見上げていた。そこは星空で、生徒会に入ったこれからもこの空を見ながら時間を潰すことになるんだと考えていた。

「電話なのら！早くでるのら！」

ポケットからかりんの声が聞こえた。声の元はあの携帯だった。

一瞬辺りの目が集まったがすぐにそれは無くなった。代わりに哀れみの声が聞こえた。

「かりんの餌食か」

「可哀想に、あの歳でかりんの目にかかってしまったのね」

「虎之耶の奴、ちゃんと調教しておけよ」

中高生の同情の中、携帯の画面を見る。そこには、南海堂聖弥と表示されていた。名前は聞いたことがあった。同じ学校でサッカー部の奴だ。そこそこ勉強もできるそうだが良く知らない奴だ。

「もしもし、五十嵐ですけど」

俺は、初めて話す人なので丁寧に対応した。相手も同様のよう丁寧な話し方だった。

「はじめまして、南海堂です。いきなりで悪いんですが、ホームまで来てもらえますか？」

何故俺の居場所が分かったかと疑問に思ったが、この携帯にはGPS機能があることを思い出した。

「いいですけど、何かようですか」

「男同士の会話は、電話越しでは伝わらない時が多いだろうが」

南海堂の声に混ざって聞こえたのは他の男の声だった。その声が聞こえた後、一方的に切られてしまった。無視してもよかったのだが、今後の関係のことを考えると行くしかないと思った。俺は、中高生の人並みを縫ってホームへ向った。

第37話 かりん様ご立腹

ホームに出ると開けた場所があった。柱を中高生が避けるように広がったその空間には2人の男子小学生がいた。1人が俺に気付き俺の前まで来た。

「五十嵐誠だね。南海堂聖弥です」

礼儀正しくて真面目そうな奴だ。聖弥の差し出された手を握ると見た目と違って握力があつた。柱に寄りかかって俺達を見ていたもう1人の男が俺の前に来た。

「お前がああ五十嵐か。楽しくなりそうだな」

聖弥といったもう1人の男は、俺や聖弥と違う七ヶ橋小学校の制服を着ていた。俺より少し背が高く、俺と違い見た目どおりの正確をしてそうだ。お世辞にも真面目そうとはいえない。

「赤井龍真。喧嘩には負けたことない。何かあつたら呼びな」

差し出された手を俺は握らなかつた。その顔からは何か企んでいるように見えたからだ。

「警戒してるねえ。それにしても、兄貴に簡単に捕まっただよな」
龍真は笑いながら差し出した手をポケットに突っ込んだ。

「で、わざわざ呼び寄せて何か話でも？」

「なに、これから長い付き合いになるかもしれないんだ。顔を覚え
ておこうと思つてな」

「でも、明日になれば顔を見れるんじゃない」

俺のもつともの意見に2人は鼻で笑つてそれを否定した。

「誠君は知らないんですよ。かりんたちの破天荒さが」

「だな。あの日も明日集まるんだろ。落ち着いて話すなんて無理
だと分かつてることだ」

「詩音と夢のことですね。では、行きましょうか」

聖弥は到着した電車に近づいた。電車から降りる中高生を待ち俺達
が乗り込むといきなり龍真が倒れた。車内の真中で倒れた彼に誰

も声を掛けなかった。聖弥もいつもと同じことだと言っているように席に座っていた。

「くっそー。英里、貴様小学生を足蹴にしゃがって」

龍真が振り向いた後ろには中学生の女の人だった。彦星中学の制服を着た彼女は龍真を文字通り見下ろしていた。

「あらあら、ごめんなさいねえ。イライラしていたからつい」

「それが人を蹴っていい理由になると思っているのか」

「理由？あんたを蹴るのにそんなのいらないでしょ」

ホームで龍真を嘲笑う英里に龍真は襟をつかみかかっていた。すると、扉が閉まり龍真を置いて電車は動き出した。

「置いていってよかったのか」

「電車を降りたのは龍真の意思ですから。それに、いつものことです」

聖弥に進まれるまま俺は聖弥の隣に座った。流れる外の駅には龍真と英里が言い合っていた。それを囲む野次馬の中高生。それがいつものことだと我関せずと平然としている聖弥。こいつらとまともに話し合いはできないだろうとその時の俺は思っていた。

「遅いのら！」

翌日の放課後、5分おきにかかってくるかりんの電話で俺は中学校の生徒会室に呼び出された。今回の生徒会室は並列して置かれていた机が片付けられソファアが真中に置かれていた。ソファアには不機嫌なかりんがケータイで電話しながら踏ん返り返っていた。

俺が生徒会室に入ってからずっとかりんは電話をしていた。正確には電話の相手が出なくて小刻みにかけなおしているだけだ。相手は誰か想像はできた。生徒会室にいるのは俺と中学生2人だけだった。本当なら今日の放課後に他の小学生も来る予定だったのだが誰も来ていないのだ。

「コノちゃん。龍真はどうなった。弟をちゃんと管轄しろなのら」

「だから、龍真は昨日の帰りが遅かったから親父に怒られて今日は

早めに帰ったんだ」

「そんなこと知らないのら。あちきとパパンのどちらが怖いのら」

「10倍増してもおつりが来るぐらい親父が怖いな。それより、お前のお友達はどうした」

「それはあちきが聞きたいのら。ユメちゃんもシオちゃんも電話に出ないのら」

1人では心細いので俺も聖弥に電話をかけてみた。すると、すぐに繋がった。が、それは留守番の音声だった。

『ただいま忙しくて電話に出られません。かりんさんじゃなければかけなおすのでお名前をどうぞ』

ピーと発信音になった。一応、礼儀として名前だけでも残しておこうと俺は名前を言った。すると、生の聖弥の声が聞こえた。

「もしもし、誠君ですか」

「聖弥か。なんだよ、出られるんじゃないか」

すると、電話越しでも分かる苦笑いが聞こえた。

「いやー、誠君には言っておいたほうがよかったのかもしれないが、自分達はかりんの相手をするのがめんどくさいので、逃げさせてもらいましたよ」

電話の向こうでは騒音の中に数名の声が聞こえた。声を聞き取ると龍真がいるようだ。

「まさか、そっちにみんないたりするのか？」

俺の質問に答えることなく電話を回す音がした。すると、聖弥ではなく龍真の声が聞こえた。

「よお、誠か。だから言っただろ、話なんてできないって。兄貴の相手頼んだぞ」

一言言って次に回された。

「はじめましてかしら。東詩音ですよ」

電話の向こうの女の子、東詩音は同じ星川小学校の子だ。俺はよく知らないが、伊藤があまりいい奴ではないといっていたのを覚えていた。学年は一緒だがクラスが違うのでその存在は詳しく知らない。

いが、先生に反発的で自分の意見は絶対に正しいと言い切る子だそう。その自信はただの傲慢ではなく、本当に正しいから厄介なのだそう。屁理屈を言っているのではないので先生たちも反論できないようだ。

「舞がそっちにいますよですから大切に扱ってね」

「は、はじめまして。神原夢です」

詩音に変わって電話に出たのは神原夢だった。夢も詩音について厄介な奴だと聞いている。同じ学年の女の子で、武術、特に剣道が強いそう。さらに、口が悪く喧嘩っ早く他校の生徒に殴りかかったこともあるそう。その夢と詩音は仲が良くよく2人で他校へ入り浸っているようだ。伊藤の話では詩音に負けにくいぐらい自分が正しいと思っている奴で、その話し方は荒々しいけど真っ直ぐに話すそう。しかし、その夢の声は裏返っていて焦っているように聞こえた。夢は何か言いたそうに口ごもっていたが俺が電話しているのを見つけたかりんが俺のケータイを奪い取った。

「あーもちもちい？ユメちゃん？いい度胸してるの。あちきの呼び出しを無視してどうなるか分かっているのかな」

「はあ？あのね、あたしの家は中学とは反対方向。いつも、ようがあるならそっちから来いって言うてるだろうが」

「ユメちゃん。あちきを歩かせようと、外の世界を歩けといっているのかね。か弱い女の子をこの日差しが強い中歩かせようと」

「てめえ、あたしも女だ。それに、何がか弱いだ。野良犬追いかけつけてげらげら笑っているくせに」

ケータイから聞こえてきた夢の声は飾り気の無い彼女の本当の声だった。その声に花は無いけど真っ直ぐ届くいい声だった。

「あーあのねえ、ユメちゃん。今の話全部マコちゃんに聞かれてたよ」

「えっ、あ、ああ、……」

かりんの一言で電話は途絶えてしまった。かりんは勝ち誇った顔でケータイを俺に返した。

「ふん。たわいのない奴め、あいきを無視したバツなのら」

かりんがソファーに座りグラスに注がれたオレンジジュースを飲み干すと生徒会室の扉が開いた。そこには早瀬舞が立っていた。舞は小学校で部活をしている人で知らない人はいないほど有名な保険委員の子だ。部活に関係なくどの試合にもいて救急箱片手にベンチに座っているのが星川小学校の常識になっている。舞は運動部のマスケットのような子で中学校の先輩にも人気がある。舞の兄が星川中学の教師なのも含め、中学校で保険委員として手伝いもしているようだ。

「ご、ごめんなさい。委員会の仕事があつて遅れました」

入り口で頭を下げる舞の前に虎之耶が膝を着いてひれ伏した。

「いいのだよ。早瀬ちゃんが来てくれただけで十分なのだよ」

舞に手を差し出そうとした虎之耶の背中をかりんが蹴った。地面に虫のように倒れこんだ虎之耶は舞を見上げるように顔を上げてしばらく固まっていた。少しずつ笑顔になっていく虎之耶を見たかりんは頭を踏みつけて舞の手を引いて生徒会室を出て行った。

「かりん、貴様。俺を何だと思ってるんだ」

虎之耶の怒鳴り声にかりんは冷めたような目で振り向いた。夢との電話を済ませてからずっとこの目で冷めているというよりは怒りを通り越している状態だ。

「小さな女の子のスカートの中を見て興奮している馬鹿なペド野郎なのら」

ぶい、と頬を膨らませ舞を無理矢理引つ張っていった。状況がよく分かっていない舞はどうすればいいかあちこち見ていた。

「あ、あの、かりんさん？」

「変態のコノちゃんなんてどうでもいいのら。マコちゃんも一緒にユメちんの所に行くのらよ」

俺はかりんにズタズタにされた虎之耶に肩を貸しながらかりんについていった。

かりんに連れてこられたのはファーストフード店のミャクドナル

トだった。中学校の近くということで店内は学生が多くにぎわっていた。その中、壁際の隅を独占した小学4人組がいた。俺達に気付いた4人は手招きをしていた。虎之耶と舞はその手招きに誘われ、俺は何か買うために列に並んでいるかりんの側にいた。

かりんが列に並んでいるのに気付いた学生達がかりんのために前を譲っていった。そして、待つこと無くかりんは店員の前に立った。すると、かりんはポケットからクーポン券を出してカウンターに叩きつけた。

「これで買えるだけ出すのら。それと、スマイルを5つなのら」
クーポン券を見た店員は注文に反して苦笑いをしてマニュアルどおりの対応をした。

「お客様、こちらの期限は昨日までとなっております」
ニコツ、と彼女は笑顔を見せたがかりんもそれに対して微笑み返した。

「だから何なのら？ 一日遅れただけで駄目なのか？」

「はい、駄目です」

かりんのアホな質問に当然ですと店員が答えた。しかし、かりんは納得していないようだ。

「まったく、小さい奴なのら。広告のクーポン券で誘ってそれ以外でもうけようという裏システムを知っていながらその策に乗ってやっているのに。店長を呼べ店長を！」

カウンターをバンバン叩くかりんに店員の女性は困りきっている。俺はかりんとは他人のふりをしていた。店員は困った顔でかりんを説得しようとしていたが泣きじゃくる子供よりかりんは手がつけられなかったようだ。騒ぎを聞きつけて奥から店長らしき人が来た。

「店長、こういう教育をしてるのら！ あちきはこんな奴をアルバイトに認めたつもりは無いぞ」

かりんの身勝手な主張に店長は平謝りしていた。身勝手に滅茶苦茶なのになぜ店長はかりんの説教じみたクレームを黙って聞いているのだろう。

「はあ、ご指導ご意見ありがとうございます。かりん様には頭が上がりません」

「うつすい頭なんか見たくないのら。こいつをクビにするのら」

かりんは店長の下げた頭をぺちぺちと叩いていた。

「で、ですがかりん様。このように人手が足りない状況で彼女に辞められると売り上げに」

「ふん、そんなお客の動きを読めばいいだけなのら。ここは学校の終了時間から夕食の間までの下校時間での売り上げが6割なのらだったら、そこに人を割けばいいだけなのら」

かりんなりの経営学を語ってかりんはため息を吐いた。

「もういいのら。これで適当にそろえてくれなのら」

かりんはカウンターにお札を数枚叩きつけるとメニューを言うことなく席に向かった。小さな足でわざと足音を立てていた。俺はかりんの耳元にささやいた。

「かりんって、ここの経営者か何かなのか？」

かりんに対する店長の対応やかりんの発言。ことかりんは客と店以外の関係があるように俺には見えた。しかし、ご立腹だったかりんはいつもの腑抜けな声を上げた。

「ぬふふ、マコちゃんあちに興味があるのかな？ふ、残念ながらあちきの正体は教えてあげないのら。なぜならあちは魔法美少女かりんちゃんなのらよ。秘密があつたほうが萌えるのらよ」

かりんは甲高い笑い声を上げながら虎之耶たちのところへと歩いていった。本当、変な先輩だ。

第38話 心ここにあらず

「ちみたち、あちきの呼び出しを無視するとはいい度胸なのら」

小学生4人の前に立つて怒っているみため4年生のかりんは小さな手で夢の頬を叩いた。

「痛！何をする」

「痛いのら。でも、無視されたあちきの心はもつと痛かったのら」

胸に手を当ててしおらしく呟いているかりんの隣を頼んだ品を持った店員が通った。夢たちはかりんの話を見かず各自に配り始めた。

「夢、はいコーラ」

「詩音ありがと。これ聖弥の？一つもらっていい？」

「かまいませんよ。誠君も突っ立てないで座ったらどうです」

俺は聖弥と龍真に挟まれるようにして座った。目の前のテーブルには手際よく飲み物や食べ物が進められていった。

「って、あちきの話を聞くのら！それに、これはあちきのお金で買ったのだと分かっているのか」

かりんはテーブルをひっくり返そうとしたが床に固定されていて投げられなかった。引っ込みがなくなったかりんはテーブルを叩くしかなかったようだ。

そのかりんに詩音が手馴れたようにおまけのおもちゃを差し出した。

「かりんにはこれをあげるから大人しく遊んでおいで」

「わーい、飛行機だ。ぶーん楽しいなあ。って、あちきを馬鹿にしてるのか！」

「馬鹿にはしてない。かりんは本当に馬鹿なだけ」

「はは、東ちゃんの言うとおりだ。いい加減大人しく座れよ」

かりんを手招きする虎之耶は舞と夢に挟まれて座っていた。かりんは頬を膨らませながら虎之耶と舞の間に無理矢理入り込んだ。

するとかりんは目の前のドリンクの中身を確認せず飲み出した。

しかし、すぐにむせてた。

「苦い。誰なのらにがりドリンクを頼んだのは」

「買ったのはお前だろうが。落ち着け、さっきから変だぞ」

虎之耶になだめられたかりんは深呼吸をしてその場になった。

「皆の衆、心配をかけたのら」

「誰も心配なんてしてねえよ」

「ああ、してないしてない」

龍真のボヤキに夢も頷いていた。だが、落ち着いたかりんは2人に噛み付くことは無かった。それを見た夢と詩音はおふざけはここまでかと椅子に深く座った。

「なら、かりんも落ち着いたみたいだし自己紹介でもするか」

虎之耶がようやく進めようとしたがかりんがまた厄介なことにした。

「ちなみに、面白い自己紹介をした子には重役を任命してあげるのら」

これは頑張らなければならぬのだろうか。生徒会での重役という経理ぐらいだがそんな役目を負うのは面倒だろう。だが、かりんのことだ。何を考えているか。

「あちきら2人はもう分かっているともうのら。だからあ、夢ちゃんから」

かりんは隣の夢におもちのマイクを渡した。

「星川小5 - 3 神原夢。危険な姉が一人いてみんな気をつけるように」

夢は自己紹介と言えないような自己紹介をしてマイクを次に回した。

「同じく5 - 3 東詩音。これと言って言うことはないです」

「5 - 2 南海堂聖弥。以上」

「七ヶ橋小赤井龍真。自意識過剰な兄が1人いるな」

そして、俺にマイクが回された。

「星川小5 - 1 五十嵐誠。俺にも歳の離れた兄が1人いるだけだな」

最後にマイクを受け取ったのは舞だった。今までの流れではみんなやる気が無いようだ。だが、舞は正直で真面目ないい子だ。それはみんな認める。だけど、彼女はあわせるということを学んだ方がいい。

「星川小学校5・4早瀬舞です。えつと……兄……が1人います。兄は星川中学校で保健の先生をやっています。私も小学校で保健委員をやっています。部活には入っていませんけど、たまに吹奏楽部のお手伝いもしてます」

やっぱり、一人だけまともな自己紹介。それ以外のみんなはやる気が無いようだ。

もちろん、かりん様はそんな自己紹介では満足いかず怒っているようだ。

「何なのら何なのら。ちみたち生きているのか？あちきが小学生だった頃はもつと潑刺として明るい子だったのらよ」

「ま……しゃあないって、俺達のハイクオリティーな小学生ライフを上回る奴らなんていやしないって」

かりんががっかりしたタイミングを図ったかのようにケータイの着信音が流れた。ケータイの持ち主は詩音で電話に出ていた。そのケータイは生徒会の支給品ではなくメーカーの個人用のようだ。短い会話を済ませると詩音は鞆を持って席を立った。

「急用ができたので帰ります」

「待つのならシオちゃん。あちきたちを残して帰るなんてその用事がそんなに大事なのらか」

「凜が呼んでいるので、約束しましたよね。生徒会は手伝いますが凜を最優先させてもらうと。では、また明日」

詩音が帰っていくのに続いて龍真が立った。

「兄貴、俺そろそろ帰るわ」

「そうだな、親父の機嫌が悪かったから俺も帰るか」

龍真と一緒に虎之耶も帰っていった。2人と入れ替わるかのように早瀬優雅がきた。

中学からすぐ来たらしくスーツ姿の優雅は学生溢れる店内で浮いていた。

「舞、帰りますよ」

「待つのならユウガちゃん。マイちゃんは今あちきが預かっているのら」
かりんが呼び止めるも舞は帰る支度をしていた。それに優雅はかりんを叱るように強めの口調でかりんを脅していた。

「いいですかかりん。何でも自分の思うようになると思っていると
いつか後悔しますよ」

「それではみんなさようならです」

舞はペコリと頭を下げて帰っていった。そして、次に動いたのは夢だ。

「ユメちゃんも帰るのか」

「帰るのかって、この人数で多数決もできないだろうが。やることも無いだろうし帰る」

多数決とは聖弥に聞いた話だとこの生徒会の決定方法らしい。臨海学校でやるイベントやゲームを実際に俺達でやってみてその企画を採用するかどうかを多数決で決めるらしい。なので、この人数で検討しても多数決ができないのだ。

夢もいなくなって俺と聖弥とかりんの3人だけになった。

「では、自分達も帰りましょうか」

俺は聖弥の誘いを受け席をたった。すると、かりんは俺の服の裾を小さく握っていた。

「帰るの？あちき1人は嫌」

「今更しおらしく引き止めてるんじゃないやねえよ」

「けっ、わあかったのら。さっさと帰れなのら」

俺達はかりんに追い出されるように店から出た。すると、出口には虎之耶が一人でいた。

「ようやく出てきたか。んじゃ、三人で話そうや」

俺達は虎之耶と駅への道を歩くことにした。

「何を企んでいるんだ」

俺と聖弥と虎之耶の3人は夕日と夜の混ざり合う紫がかった空の下を駅へ向けて足を運んでいた。流石にこの時間帯にもなると小学生の姿は見えずそれどころか高校生ばかりだ。その中の俺達の存在は少々奇異な目で見られていた。

俺はこのできすぎた出会いについて虎之耶に訪ねた。あのみんな合わせたかのようなやる気のなさ。特に、話に聞いていた夢と詩音だ。あの2人、話どおりだともっと騒がしいと聞いていた。なのに、あの心ここにあらずな感じは想像したものとは違った。

「企む？ 違うな。正確には企んでいた、だ。すでに計画は完遂した。マコモコ、日本語は正しく使わないとな」

「だから、何を企んでいたんだ」

「まー今回はセイセイの発案なんだけどな」

聖弥の？ 俺は聖弥を見た。今回のおかしな出会いには彼のたくらみでこの結末を迎えたらしい。その当人は大きな欠伸をしながら頬をかいていた。

「企むだなんてそんな。自分はただ皆さんの要望にこたえただけですよ」

「要望？」

「今回の集まり。弟を含めみんな都合が悪かったんだ」

虎之耶が生徒会初心者の俺にかりん生徒会の集合の意味を教えてくださいました。

「生徒会の集まりは俺が集めるのとかりんが集めるかの二つがあるんだ。で、かりんの集まりは時間が掛かるんだ。あいつの会合は早く済んでも8時過ぎで、最悪の場合10時を過ぎることもあるんだ。用事があるときにそんなことされると迷惑だろ」

「なので、自分が策を立てたんですよ。一度集めて解散したらかりんも諦めるでしょうから」

「かりんを騙すほどの用事って何なんだ」

「龍真はあれだ。親父が帰るまでに家に帰らなきゃならないからな」

もし、今日も遅くなったら野営決定だったな。早瀬ちゃんは見たり優雅の管理が厳しいみたいだし帰りが遅くなると大騒ぎされるみたいなんだ」

「確か、夢は姉に呼び出されていたとか。夢も姉には逆らえないみたいですし。詩音は今日友達の大事な日だとか」

何かとみんな忙しいんだな。もし、俺がそんな状況だったらのんきにミヤクドナルトでコーラを飲んでいられないだろうな。

「そんなに大事な用事があるならなんでみんな来たんだ？」

「誠君も見たはずです。かりんのしつこい電話を。なので、しぶしぶ集まったということですね。それに、一度集まって解散したのをまた集めるなんて野暮なこといくらかりんでもするはずないでしょ」なるほど、電話で断つてもあのかりんは諦めない。けど、二度も集める気は無い。人間の心理を読んだ策だ。さすが天才と騒がれるほだけあるな。

「かりんには悪かったけど今回はしょうがねえよ。ま、俺が上手く落ち着かせておくから心配するな」

俺と聖弥は駅へ、虎之耶は家へ帰るために途中で別れた。俺と聖弥が駅へ着いた時には黒い夜になっていた。もし、かりんに付き合っていたらこの時間になっても拘束されていたのだろう。そう考えると聖弥に感謝だな。

「どうでしたか生徒会メンバーの印象は」

聖弥の差し出したガムをもらいホームで電車を待っていた。鼻に爽やかな空気が入ってくる。

「退屈しない代わりに休息もなさそうだな。常に頭を使っていと飲み込まれそうだ」

「そうですか。五十嵐誠、意外とお馬鹿さんなんですな」

「悪口と捕らえていいのか？」

睨みを利かせると聖弥は子供のように笑った。

「ええ、構いませんよ。あのメンバー相手に頭で勝負しようと考え

ているんです。馬鹿としか言いようが無いです」

「それなら、俺と同じタイプの聖弥はどうやって付き合ってるんだ。さっきの考えを聞くと頭を使っているように見えるが」

聖弥は唸りながら首を傾げていた。答えるのを渋っていたようだが自信なさげに答えた。

「多少は使ってますけどね。彼女達と付き合うなら謀略などを考えないことです。自分の思いで付き合わないとやっていけませんよ」
知恵無しの真っ直ぐな付き合い。俺の苦手な……小さな時置いてきた生き方だ。

第39話 かりん様の華麗なる先制攻撃

「こんなもんだな」

算数のテストを裏返してクラスを見渡した。終了まで20分しかないが、みんなまだ机に向っていた。四年生（去年）に習ったものなので難しいテストでもなくケアレスミスがなければ満点だろう。

4月下旬になり桜も緑の葉が増えてきたこの時季はテストの時期として小学生を苦しめている。もしこのテストのできが良くなかったら補習を進められるからだ。

放課後や休日に補習をするそうだが強制力はなく参加自由だ。だが、一つ下の学年のテストをできなくていいのかと先生が見えない力で迫ってくるそうだ。ので、このテストで50点取れないと今後の休日が危うくなるということだ。

なので、みんな必死なのだが俺にとつてはどうでもよいことだ。今回は自信があるし、万が一50点以下でも補習を受ける気もない。調子が悪かったといえば済むことだ。

暇な20分。緑と青の夏の景色になりつつある中庭を見ながら次のテストの国語の予習をすることにした。俺は、テストの裏に覚えている限りの文豪の名を書いていった。

「あーあー、聞こえるかな？」

制限時間まで数分となったころ、放送のスピーカーから聞き覚えのある声が聞こえた。

静寂の中に鉛筆の擦れる音しかしなかった清んだ教室に、真っ黒な墨のような声をぶち撒かれてみんな顔を上げた。担任の先生も不意をつかれスピーカーの電源を切れずにいた。

「あちきはこの学校の生徒に恨みを持つものだ。ので、あちきはこの学校に三つの爆弾を仕掛けたのら。この放送が終わってから一時間で爆発してみんな粉々なのら。ぬふふ、泣き騒ぐ声を楽しみにしてるのらよ」

かりんの放送が終ると近くの中本や伊藤はテストに戻った。俺も人名を再び書き始めた。

さらに、瑠璃川や斎条も少し考えてテストを再開していた。

だが、他の生徒はうるたえて私語が生まれ始めた。騒がしい手前でチャイムがなり先生はテストを無理矢理集め教室を跳び出て行った。

放送に混乱する教室は収拾をつけるのが面倒なくらい騒がしくなっていた。だが、俺達5人は次の国語のテストのため教科書を読んでいた。

「なあ、五十嵐。さっきの放送なんだと思う」

「爆弾テロだろ？気にすることじゃねえよ」

「ふーん」

中本の質問に軽く答えた。中本自身、さほど興味が無いようで話の種として聞いてきただけのようだ。

「もし爆発したらどうなるんだ？」

「学校がなくなって大変だな」

「五十嵐君の言うことが本当なら私は困るなあ」

話に入ってきたのは斎条だった。テストの時季になると斎条は話すことが減り俺達と接することが減る。勉強熱心といえは聞こえがいいのだが、ただ単に勉強が得意ではないからだ。一夜漬けの付け焼刃でいかにも崩れそうで余裕のない斎条が話しかけてくるのは珍しいことだった。

「学校がなくなったらみんなバラバラになるでしょ。そんなの嫌だな」

俺、斎条、伊藤の3人は昔ながらの付き合いでいつも一緒にいた。もし、一人でも足りないとい周りのみんなが心配するくらい3人一緒にあたりまえだった。

そこに中本が入って来た。たった1年で中本がいることもあたりまえになった。そして、瑠璃川もそうなりつつあった。

斎条が言ったのはそんな仲が崩れるのが嫌だといいたいのだろう。

でも、この学校がなくなった場合、斎条の知り合いで離れてしまうのは中本と瑠璃川と椎名ぐらいだ。昔からの長い付き合いの俺や伊藤とは別れることはない。だったら、この学校は斎条にとって中本の側にいるだけの価値しかないのだろうか。

そう想ってしまうと、かりんが本当に爆弾を仕込んでいてくれると嬉しいと思うてしまう。

「大丈夫だろ。いくらなんでも今の日本で爆弾テロが成功することはないだろうよ」

「それをしたのが普通の人ならな」

俺を否定したのは夢だった。休み時間なので他クラスの夢がここにいるのは不思議ではないが珍しい客であることに変わりはない。

夢を見た伊藤や斎条は黙ってしまったが、瑠璃川だけが興味ありげに俺と夢を見ていた。

「何しにきたんだ？」

「さっきの放送聞いたでしょ。学校にかりんが来ている。捕まえに行くよ」

「別にいいだろ。先生達に任せれば」

「それができないから呼びに来たの」

休み時間終了のチャイムが鳴ると先生が入ってきて生徒が席に着くのを待たずに用件だけを言った。

「みんな、すぐに校庭に出てください。決して校舎に残らないように」

先生が教室を出て行くと、それに続くようにみんな教室を出て行った。斎条も伊藤も瑠璃川も出て行った。俺と中本は夢と教室に残っていた。

「五十嵐は校庭に行かないのか」

「夢が一緒に来て欲しいといっているのね。で、中本はどうするんだ。一緒に来るか？」

「五十嵐が何するか興味あるけど、厄介ことに巻き込まれそうだから遠慮しておく」

意外と鼻の利く中本は手を振って教室を出て行った。

「さ、聖弥が待ってる。早く行くよ」

「へいへい」

俺は力なく席を立って夢についていった。

夢につれてこられたのは理科室横の準備室をかねた倉庫だった。

埃っぽい空気と教室にはない独特の木の匂いがする部屋だ。部屋の中は動物の剥製や人体模型など授業で使われたことがないもので溢れていた。

窓際には緑の藻が繁殖した水槽。その正面に資料の山を無理矢理跳ね除け空間を作った机が置かれていた。

机と対の椅子に聖弥が座っていてくるくる回っていた。

「ようやく来てくれましたか。待っていましたよ」

「呼ばれた理由ぐらいは分かるが、本当なのか？いくらかりんでも爆弾は無理だろ」

聖弥は一通の封の切られた封筒を差し出した。黒い封筒に『挑戦状』と白い文字が書かれていた。夢は封筒には興味が無いようで水槽を見入っていた。

封筒の中には新聞の文字を切り貼りした手紙が入っていた。

『アチキノオクリモノキニイツテモラエタカナ。ウソダトオモツテイルトイタイメラミルノラヨ。タメシニホウソウカラ10フンゴラタノシミニスルノラ』

「10分後？そろそろだな」

「ええ、それに、ここで起きるそうです」

「どうしてそう言い切れるんだ」

すると聖弥はケータイを出した。その画面にはかりんからのメールが表示されていた。

『うつす。かわゆいあちきの声が聞こえたら理科室に行くといいのら』

「こんなメールを信じて本当に来たのか？」

「はい。面白そうでしたから」

聖弥の行動の基準は面白いかどうかなのだろうか。それではかりんと同じな気がする。

「何が起きるか分からないのか？」

「ええ、もし本当に爆弾があつたとしても誠君と一緒に天国でも退屈しなさそうですから」

「聖弥は確実に地獄だけだね」

「そうかもしれませんが。でも、閻魔との対決も面白そうですね。…

…そろそろ時間ですね」

夢の嫌味にも用意していたかのような返事をした聖弥は時計を見て立ち上がった。

周囲を見渡す聖弥。俺もつられて怪しそうな場所を探した。夢は何が起きるか興味がなさそうに椅子に座っていた。

探してみたが怪しいものはなかった。理科準備室に不似合いなダルマや招き猫が置かれているならすぐ分かる。だが、普通の準備室だ。

「はったりじゃないのか」

「いえ、必ず何かあります。楽しむためなら銀行強盗も惜しまないような人ですから」

「ねえ、これ誰がした？」

夢が差し出したのはビーカーの中に入ったメダガだ。片手でも持てるほどの小さなビーカーに数十匹のメダガが入っていた。飼育するには不自然だ。水槽の掃除をするときなど一時的な避難なら分かる。だが、ここには大きな水槽があるのにそれをしている意味がない。

メダカを水槽から出す必要があるのは……。

「まったく、酷いことする」

「す、ストップ！」

「夢待ってください」

夢は水槽にメダカを戻そうとした。それを俺と聖弥が同時に止め

た。咄嗟の大声に夢は肩を震わせ固まった。

その瞬間を待っていたかのように水槽が音を立てて爆発した。緑色の藻が混ざった水が夢の頭から襲い掛かった。

頭から藻水をかぶった夢は動かずにいた。肩や髪には藻が着き、長年前からそこに生えているかのように一体となっていた。

「か、か、か」

体を固めたまま夢は震えていた。爆発に驚きながらも落とさなかったビーカーの水が波打っていた。

「かりーん！」

水槽の側面には緑のマジックで『玉手箱もびっくり。一瞬でコケだらけなのら』と書かれていた。緑色の水がなくなつて初めて見える文字だった。

からになつた水槽の中には透明な箱があつた。その箱の中には時計や電気回路があり時限タイマー付きの爆弾があつたようだ。手作りのようで本格的で十分な威力を持っている。ケータイを作れるほどのかりんなので、爆弾を造れても変な話ではないのだろう。

「殺す！殺す！殺す！絶対にかりん泣かせたる」

「まーまー、夢落ち着きなさい。ここはまず虎之耶に応援を頼みましょう」

聖弥は対かりん用兵器の虎之耶を呼ぼうとした。だが、電話が繋がらないようだ。

「かりんの作つたケータイだ。電波を遮断するぐらいお手の物だろ」
聖弥も頷きケータイをしまった。聖弥は鞆からスポーツタオルを出して夢に渡した。

「風邪を引きますから使ってください」

「あ、ありがとう」

さらに聖弥は鞆から別のケータイを出した。個人用のもののように誰かに電話をしていた。だがすぐに肩を落として首を振った。

「虎之耶も龍真も無理だそうです。夢、詩音はどこにいますか？」
タオルで髪を拭いている夢が首を振った。

「詩音は無理。大事な用があるから補習受ける代わりに今日はサボリ」

「となると」

聖弥は俺を見た。言いたいことは分かったが頷きたくなかった。

「誠君。お願いしますよ」

「分かったよ。手伝うよ」

ここまで本気の爆弾を仕掛けられたんだ。挑まないのはプライドが許さなかった。

「かりんは本気できてます。こちら本気であたりますよ」

第40話 2人の天才と2人の悪魔

俺達は興奮する夢を連れて放送室へ向った。星川小学校の放送室は四階にある。放送室に行くには一つしかない階段を登るしかない。つまり、放送室の近くに先生達がいたら、即捕まり校庭に追い出されてしまうのだ。

三階まで上がった時、数人の先生に出会った。男性の先生だけで各自さすまたを持っていた。

「君たち何をしている。すぐに外に出なさい」

予想通り先生が止めにきた。しかし、肩を捕まれた夢はそれを振り払って先生をにらみつけた。

「うつさい。邪魔じゃボケが」

理科室を出てから夢はずっとこの状態だ。全身から不機嫌のオーラを出している夢を先生は止められなかった。

「ま、待ちなさい」

形だけでも止めようと声を掛けたが夢は止まらなかった。戸惑う先生に聖弥が近づいた。

「先生方。先ほどの放送の犯人が誰だか想像できていますよね」

「もちろんだ。中学校の連絡でかりんは今日休みだそうだ。まったく、今回は何を考えているのだから」

「でしたら、自分達に任せてもらえないでしょうか。先生方は生徒の安全の確保を」

「だがね。君たちも生徒だ。私は君たちも守る義務がある」

「ですが、彼女を止められるのは自分達だけだと先生方も心の中で思っているのでは？」

先生達は辛そうな表情をした。聖弥の言う事は間違っていないようだ。確かに、教師が生徒に手を上げた時点で問題になる。この場合、同じ生徒同士の方が何かと都合よいだろう。

「それに、かりんとぶつかり合うなら、生徒同士の方がよいのでは

？」

先生達は俺達に聞こえないように話し合っただけで俺達に頭を下げた。

「これ以上大騒ぎにならないように……怪我をしないように気をつけてお願いできるか」

「善処します」

聖弥の返事に頷いた先生達は階段を降りて行った。

俺達はさらに階段を登ると最上階の四階に来た。そこは短い廊下と放送室の扉しかない所だ。

放送室の扉は見るだけで分厚いと分かる防音用の扉だった。その上には『放送室』と書かれた蛍光灯が赤く光っていて使用中だと言っていた。

扉の前には夢しかない。先生も警察も大人は1人もいなかった。「おら、出てこいや。でてこねえならけり破るぞ！」

「ぬふふ、そんなこと言われて出るほど馬鹿じゃないのら」
夢は放送室の扉を何度も蹴っていた。しかし、クッションが施された扉をいくら蹴っても大きな音はしなかった。

夢の性格の変わりように恐怖を感じるが、あれほど酷いことをされたのだ。あれぐらい怒っても当然かと思ってしまう。だが、その怒る夢が面白いのか放送室の中からかりんの笑い声が聞こえた。

「それにしても、警察がいないのは変な話だな」

これほど大きな事件だ。学校はすぐに警察に連絡するもんだと思っていた。

「警察はありませんよ。この学校では」

俺の疑問に答えたのは聖弥だった。

「もし、本当の爆弾テロで犯人が分かっていたらすぐに通報しているでしょう。ですが、今回の犯人はかりん。かりんとは言え中学生の生徒です。そんなかりんが起こした悪戯に警察を呼ぶのは誤報扱いです」

なるほど。相手がかりんでは先生達もどう対処すればいいか分か

らないのか。警察では大きすぎるし自分達では手に負えない。そんな微妙な状況だったのだ。

「さらに、学校の面子もあるでしょうしね」

俺が首を傾げると聖弥は続けた。

「もし、警察にかりんが捕まった場合、全国二ユースで報道されるでしょうね。『中学生、恨みを晴らすために小学校テロ』って、そんなことになったら大騒ぎ。ただでさえ生徒数が減ってきているこの学校のイメージが悪くなる報道は避けたいのでしょう」

「ひでー話だな」

「ですね。さらに、かりんの相手を自分達に任せたのにも裏があります。生徒同士でのいざこざなら喧嘩で済ませられる。さらに、あの放送も悪戯で済む。もし、先生達がかりんを捕まえたとなるとPTAにばれたとき言い訳ができませんからね」

聖弥の奴、この短時間で先生達の考えをそこまで読んでいたのか。それに、俺の知らないことを知っている。この知識と回転の速さはすごいと思えた。

「それが分かっているあの交渉をしたのか？」

「ええ、確証はなかったのでいくつか手を考えていたのですが、思ったより簡単に行きましたね」

扉を蹴りつかれた夢が荒い息を整えながら戻ってきた。

「駄目、全然開かない」

「困りましたね。かりんの目的は分かりませんが、爆弾もしくはそれに似たものを探さなければならぬでしょう。なのに、何の手がかりもないこの状況で闇雲に探しても」

「あ、それなら、これ放送室の扉に張ってあったんだけど」

夢が出したのは一枚の紙だった。その紙にはかりんの直筆の文字で今回の主旨が書かれていた。

『ハローなのら。これからヒントを頼りにあるものを見つけてもらうのら。もし、失敗したら全校生徒が悲惨なことになるのら。がんばるのらよ』

「明様な挑戦状だな」

「ですね。それに、全校生徒が人質となるなら少々本気を出さないといけないようですね」

聖弥が代表してヒントとやらを読んだ。

「どれどれ：『やーい、ばーか。誰がヒントなんかやるかって。爆弾は自分の力で探すんだなおろかものどもめ』だそうですよ」

「てめー、どこまで人を馬鹿にしてやがるんだ！」

人を馬鹿にしたかりんのヒントに夢は再び切れて扉を蹴り始めた。

「出てこい。今なら一発で楽にしてやる」

「ぬふふ、怒ってるのらね。ユメちゃん」

嘲笑うかりんの声がした。かりんの声が聞こえたのは放送室やスピーカーからではない。俺達の後ろから聞こえたのだ。

「かりん。なぜ後ろにいる」

怒り狂うつっていた夢だったが、かりんの予想外な所への出現に驚きすぎてどう対処すればいいか分からないようだ。

「ぐふふ、やはり凡人の考えしかもってないのら。放送室から出るのは扉からとは限らないのら」

笑うかりんが指したのは窓だった。まさかだと思う。ここは四階だぞ。

「窓から出たのですか。無茶をする。落ちたらどうするつもりだったのですか」

聖弥はかりんなんかの心配をしていた。かりんなら落ちても問題なさそうな気もする。三回転宙返りをして見事な着地を決めそうな人だからな。

「心配無用なのら。こう見えてもあちきはフリークライミングが得意なのら」

それでも何も装備をしていない。さらに掴む所の少ないコンクリートの壁を手の力だけで移動するのは危険だろう。それだけ自信があったのだらう。それに、落ちたとしても本当に大丈夫かもしれない。

「じゃ、健闘を祈るのら」

そう言い残すとかりんは階段を降りていった。

「……………逃げやがった!」

夢の声によりやく動くことができた俺と聖弥はかりんを追いかける夢に続いて階段を降りた。

一つ階を降りて三階に降りるとそこには仁王立ちしたかりんがいた。追いかけたかりんが逃げもせずそこにいた。しかも2人も。

中学校の制服、身長、顔、何をとってもまったく同じかりんが2人いた。唯一の違いは髪につけたリボンの色ぐらいだ。赤いリボンと青いリボン。わざと見分けがつくようにしているようだ。

「ぬふふ、困ってるのら」

「ユメちん。どっちを捕まえるのかな?本物のあちきがどっちか分かるかな?」

「無理なのら。ユメちんはお馬鹿さんだから分らないのら」

「そうなのかな?ユメちんはやっぱりお馬鹿さんなのかな?」

赤かりん青かりんと交互に夢のことを馬鹿にしていた。また夢が取り乱して殴りかかると思ったが苦い顔をしていた。

「かりんが2人。面白いですね」

聖弥の顔は笑っているが心はめんどくさがっていると思う。実は俺もそうだからだ。

「厄介な奴が来たな」

夢はかりん増殖の正体を理解しているようだ。

「夢、あれはかりんと誰なんだ」

俺が聞くと夢は爪をかみながら二人を睨んでいた。

「かりんの妹、笹山ゆず。星絵小学校の三年生。見て分かると思うけど、かりんと瓜二つで見分けがつけられない上に性格も同じ。厄介な子だ」

妹。小学生三年生の妹と見た目が変わらない中学三年生の姉か。妹の成長が早いのか姉が餓鬼のままなのか。たぶん、いや絶対に後

者だな。妹が小三なら納得できる。小三でかりんと同じ思考なのも困るがな。

「でも、見分ける必要なんてないな」

夢は不敵な笑みを浮かべてかりんとゆずに近づいていった。

「およ、ユメちゃんついに壊れたのかな？」

「うんうん。壊れたのら」

夢が二人に触れようとしたが二人は別々の方に逃げた。

「ユメちゃん。もしゆずを殴ったらどうするのら？」

「間違つて殴られる方はたまつたもんじゃないのら」

それでも夢は笑みだった。

「大丈夫。2人とも殴れば半分正解だから。それに、ゆずもあれだけ悪口言つて許されると思つてんじゃねえぞ」

かりんとゆずは飛び掛る夢からバラバラに逃げた。

「くつ、姑息な手を」

左右別々に逃げる二人のどちらを追うか迷っている間にも二人はどんどん小さくなっていった。

「致し方ありません。二手に分かれましょう。二人は青い方を自分は赤いほうを追いかけます。もし、30分経つても捕まえられなかったら体育館に集合という事で」

俺と夢も聖弥の提案に頷き二手に別れた。

俺達が追いかける青かりんは音楽室に逃げたように見えた。

第41話 生きる伝説、蘇る伝説

俺達は青かりんを捕まえるために音楽室に飛び込んだ。俺達が入るまで全ての窓が閉められていたので、熱された空気が音楽室を満たしていた。さらに、長期間使われていないようで独特の匂いもした。

星川小学校の音楽室には机はない。椅子だけがきれいに並べられているだけだ。これは、合唱や演奏をする際に机が邪魔だからこの形になったのだ。なので、教室全体に開放感があり、とても広く見える。

その広い教室の真中に青かりんがいた。教壇の中央の椅子に座り俺達を見ていた。

「自ら逃げ場のないここに逃げ込むなんて、馬鹿でいい子ね」

不敵な笑みを浮かべた夢が近づくが、かりんは逃げることもなく俺達を見ていた。

「近づくな！」

椅子に座ったままのかりんは突然大声を出して夢を退けた。ただの子供に大声で怒鳴られただけなのに俺達は動けずにいた。これが年上の重圧というのもだろうか。

「な、何を偉そうに」

夢は強気に噛み付いたが、かりんに近づくことができなくなっていた。あれほどかりんを追いかけていた夢が急にどうしたというのだろうか。

すると、かりんは立ち上がり夢に自ら近づいてきた。夢は一瞬逃げようとしたがその場に留まった。

動かなかったというより動けなかったに近いと思う。なぜなら俺もかりんの睨み付ける目から逃げられないからだ。直接睨みつけられていないのにこれだけ恐怖と緊張が溢れてくるのだ。夢は俺以上に何か見えない力でそこに縛り付けられているのだろうか。

かりんは夢の目の前に仁王立ちした。目線の高さでは夢のほうが高い。だが、俺にはかりんのほうが大きく見えた。

「偉そうにだと。ふ、偉そうではない。偉いのだ。唯我独尊とはこのかりん様のためにあり、この世界はかりん様のものであり、その中でうごめく全てのものがかりん様のものだ。つまり、この小さな手の上で踊るユメちゃんたちは、神であるあちきと同じ枠で囲ってはいらないのら」

「こ、この〜！」

夢が拳を振り上げたがかりんは下からの目線でそれを見ているだけだ。それだけなのに夢は拳を振り下ろすことができずにいた。

「力で解決しようと言っのらか？それでねじ伏せて自分が正しいと言いたいのならね。別にいいのらよ。このかりん様は全知全能だ。ユメちゃんもよく知ってるのらよね」

「う、く、で、でも」

「ユメちゃん教えてあげるのら。世の中不可能なことはないというのは本当なのら。でも、相手がその世の中の創造主ならその限りではないのらよ」

かりんは夢に止められることなく俺の前に立った。その顔はいつもと同じ顔をしていた。威厳、重圧、恐怖その他諸々先ほどまで出していた力はまったく感じなかった。

「ぬふふ、どうなのら。これがあちきのちからなのら。それじゃ、また」

音楽室を出て行こうとするかりんの肩を俺は掴んだ。

「待て、ちやっかり逃げようとするな」

「ぬ。神の体に触れてよいと思っっているのか」

「何が神だ。ただの人間風情が。お前が神なら俺は宇宙だ。で、爆弾とやらはどこにある」

俺の手を振り払ったかりんは頭を捻って悩んでいた。

「うぬ〜。確かに何も無しで探せは無茶だったのら。爆弾を見つけてくれなきゃ面白くないのら」

ヒントをくれるというかりんは両手を広げて見せた。

「ヒントその1。両手十本指で数えられる限界の数はいくつなのら？」

「両手で？それなら10じゃない」

夢が何の考えもなく当然の答えを言った。夢の答えは常識でありあたりまえの考えで、もしそれが正解ならかりんの問題は問題でも何もなかった。

「それは違うな。片手で10まで数えることもあるだろ。それ以上だと俺は思う」

「ほう、さすがマコちゃんなのら。それじゃ、ヒントその2。少数の人間をコケだらけにするなら理科室。全生徒をコケだらけにするには何処でしょう？ヒントその3。手紙は放送、水槽は爆弾、では、メダカは？以上なのら」

俺が手を離すとかりんは走って音楽室を出て行った。

「逃がさなくても直接案内させればよかったじゃない」

「いや、それだとかりんをずっと監視してないとならないだろ。もしもの時、邪魔されたらめんどくさいからな」

「そうかも」

俺達も音楽室を出て聖弥に合流しようとした。だが、夢が扉に手をかけた途端動きが止まった。

「あ、あれ？開かない」

夢がガタガタと扉を揺すっているが開く気配はまったくなく。すると、かりんの笑い声が聞こえた。

「ぬふふ。閉じ込めてしまえばヒントがあろうと見つかりっこないのら」

見えない扉の向こう側からはかりんの走り去っていく音が聞こえた。

「やられたな」

俺は椅子に座って天井を見上げていた。夢に聞くと、かりん

はこの学校のマスターキーを持っているそうだ。もちろん、オリジナルではなくかりん自身が作り出したものだそうだ。そんなものを持っているとは予想すらしなかった。

夢は扉を蹴り破ろうとしていた。だが、何度も蹴っているが壊れることはなかった。煩いから諦めろという夢は俺の隣に座った。

扉が壊せないの、聖弥が助けに来てくれるか、学校が爆発しない限り俺達はこちらに閉じ込められたままだ。こんな時こそケータイなのだが、かりん製はいま製作者の力によって使えない。兄貴に頼んでケータイを買ってもらおうと思った日だ。

「あゝ最悪。かりんにいいように遊ばれた」

夢は理科室を出てから今までずっとかりんのことでイライラしていた。少しずつ落ちてきていているが、思い出すだけで怒りは頂点に簡単に達していた。

「なあ、夢はなんでかりんなんかにつき合っているんだ。長い付き合いだとうんざりすることも多いだろ」

「そりゃ、疲れるし酷い目にも合わされる。先生からは嫌な目で見られるし、事件が起きると必ず疑われる。本気で殴りたくなる時もある」

「だったら、付き合わなければいいだろ」

俺の質問に夢はしばらく頭をかきながら考えた。

「でも、それなりにいい人だ。誠は付き合いがまだ浅いから分からないんだ。かりんはふざけて滅茶苦茶だけど、困った時は助けてくれる。誰にでも同じ接し方をする。だから、かりんは普通の人じゃない。だからみんな集まるんだと思う」

「それだけ」

「うん。それだけ」

「誰にでも同じ接し方をするやつならいくらでもいるだろ。特別かりんにこだわらなくても」

見た目は年下に見えるが、かりんは中学三年生。小学五年生の俺達とは年齢が違えば学校すら違う。詩音や舞となら分かるがかりん

と付き合うのは精神以外にも面倒な事が多いと思う。

だが、夢は小さく笑っていた。

「誠は知らなすぎだ。かりんのこと、あたしのことも、この学校のことも。一度あたしのクラスに来てみればいい。自分がどれだけ微温湯に浸かっているのかよく分かるから」

星川小学校。俺は学校のことをよく知っているとってた。でも、俺の世界はいつもの顔とバスケ部しかなかったのだとしばらくして知らされた。この学校の姿と冷たさ、それに、かりんの暖かさと夢たちの素直さを。

「誠はどんな人にも同じ態度で接しられる？」

「それぐらい誰でもできるだろ。いつもの自分を飾らず見せればいいだけだろ」

そしてまた夢は笑った。

「嘘だね。相手が某国のお姫様だったり、世界屈指の大富豪の娘だったり、やくざの娘だったり、同性愛者だったり、どんな人でも色眼鏡で見ないでいられる？その真実を知るまではできるかもしれない。でも、知ってしまったら少なからずそんな目で見てしまう。それをしないのがかりんなの」

今まで会ったことのない珍しい関係の子ばかり上げてきた。そうか、珍しいを思ってしまう時点で俺は色眼鏡で見ているということか。

「それに、かりんの側にいるだけであたし自身もそんな目をしなくなってきた。かりんの隣にいと訳ありな子がよく集まるから。誠はどんな子なんだろうね」

訳ありな子。そのカテゴリーでは俺もそれに入ってしまうだろう。だが、俺は話さないでおきたい。これは俺の問題で他人に理解してもらいたいとも思っていないからだ。

「どんな人間なんだろうな」

「すっごく興味あるんだけどな。ま、どれだけ強がってもかりんには見抜かれるから覚悟しておくといいよ」

夢は俺の目の前で手を叩いた。

「はい、話はここまで。次は誠の出番。ここをどうやって脱出する？」

自分は考える気がないと言わんばかりに夢は肖像画を見ていた。

その方が俺はありがたい。夢は考えるタイプではなさそうなので心配ない。だが、聖弥や虎之耶みたいな考える奴がいると考えがぶつかる時がある。他人と考えがぶつかるのは好きではないのだ。

「夢はどうしたらいいと思う」

考えがぶつからないのは嬉しい。だが、今回は考えつまり知恵ではなく知識が必要なのだ。俺の持っているこの学校に関しての知識は一生徒の枠内ではない。なので、夢の知識を知っておきたかったのだ。なのに、夢は最も簡単な答えしか言ってくれなかった。

「窓ガラス割って飛び降りる」

「ここは三階だ。かりんじゃないんだから死ぬぞ」

「でもさ。もう時間もないしどうする？かりんに負けるのは嫌だからね」

夢の言うとおり残り時間は20分もない。何が起きるかさはさっきのヒントでおおよそ予想がつく。予想が当たっているとしたら早くヒント1を解いて爆弾を止めなければならない。みんなをコケだけにされては困るからな。

「そうだな……ガラスを割るぐらいなら怒られずに済みそうだが、カーテンを裂くのは問題になりそうだし、何より時間がないな」

「カーテン？何するの」

「簡単な話だ。かりんのやったことを真似するんだ。この下は教室だからガラスを割れば出入りはできるだろ。命綱の代わりにカーテンを使おうと思ったんだが」

俺が言い終わる前に夢はカーテンを引き千切っていた。刃物もないのに手で裂けるはずがない。それが諦めた理由だ。

だが、夢は簡単に縦に裂いていた。
「なんで切れるんだ？」

「カッターナイフ。かりんの直結なら七つ道具ぐらい持つてないと」
輝く刃を見せると夢は怒りが蘇ったかのようにカーテンを切り裂き始めた。時折、笑い声が入り怖く感じた。

「ま、待てって、綱が出来上がったとしても危険なことには変わりないだろ」

「これぐらいのこと危険なうちに入らない」

「やめとけて、聖弥が見つけてくれるのを待った方がいいって」

「いや、時間がありませんからここは挑戦してみたほうがよいのでは」

「そうだよ。怖いなら誠はここで待つていればいいじゃない」

夢は腰にカーテンを巻いて窓枠に足をかけた。俺はカーテンを引っ張り夢を引き止めた。

「やめろって、もうじき聖弥が来るから」

「どうでしょ。意外と自分は薄情ですから」

「そ、聖弥はここぞってときに裏切るから……で、」

背後に俺を突き落とそうとしている聖弥がいた。

「あら、気付きましたか」

「いたなら言えよ。ってか、どうやって入った」

すると、聖弥は鍵を見せた。丸い金属の輪に数多くの鍵がついたそれは学校のオリジナルの鍵のようだ。

「学校を回するには必要でしょ。意外と簡単に貸してくれましたよ」

俺達は窓から飛び降りる計画を即中止した。そもそも、漫画や映画の世界ではないのでそんなことをしたら精神科のお世話になりそう。それに、そんなことを本気でやろうと思うのはかりんくらいだろう。でも、夢も実行しようとしたんだ。かりんに侵されているのだろう。

「で、赤かりんからは何か聞き出せたか」

「まあ、そこそこ。三つの爆弾のうち一つは理科室のもののことだそうです。残り二つなんですけど、その内一つは外れでもう一つは当たりだとか。当たりを選んで生徒みんなを喜ばせれば自分達の勝

ちだそうです」

ようやく目標が分かった。だが、聖弥は悩んでいるようで首を傾げていた。

「ですが、どこにあるか検討がつきません。『なぜ生徒は避難した』と言われましたが、意図が分かりません」

生徒がみんな校庭に避難したのは、爆弾が爆発した際の安全を考えてのことだ。しかし、かりんの仕掛けた爆弾にとってそれは不都合なことだ。かりんの仕掛けた爆弾は理科室の件のようなものだと思う。爆弾の側にいる人間に被害を与えるもので、そこまで威力は高くないだろう。なのに、生徒が外に避難してしまった。これでは生徒全員に被害を及ぼせることはできないだろう。

そう考えるとあの放送も不思議なものだ。あの放送では全校生徒が外に避難するのは目に見えている。俺達に爆弾探しをさせたいだけならメールや電話で済ませればよかった。現に理科室に集まったのもメールがあったからだ。やはり、生徒を外に出したのには何か意図があるのだろうか。

考えられるのは爆弾もしくはそれに近い物で全校生徒に被害を与えるために外に出した。だが、校庭に爆弾を仕掛けてもすぐに見つかり駆除されてしまう。

かりんの計画を成功させるには生徒全員を校庭に出さなければならなかった。そう考えると爆弾が違うのか。くそ、決定するためのヒントが足りない。

「赤かりんは他に何か言ってなかったのか」

「そう言えば詩音の頼みでもあるあるって言ってたな」

「詩音のか。そう言えば今日休みだったっけ。夢、詩音はなんで休みなんだ」

「詩音の昔からの友達の子の包帯が取れる日だから付き合うんだってさ」

4月も終りかけた今日。今日は兄貴や兄貴の知り合いにとっても特別な日だそう。それをかりんが知っているとしたら…。

「時間もないし、試してみるか」

「おや、誠君。分かったのですか」

聖弥の問いに頷くと俺達は音楽室を出た。

星川小学校には昔から学校伝説と言うものが存在する。臨海学校のキャンプファイヤーもその内の一つだ。今回の事件が学校伝説になぞらえて行われたものとしたら。

俺達が来たのは屋上だ。そこにはかりんだけがいた。

落下防止用の柵がない屋上の淵には筒のようなものがいくつも並べられていた。その筒には線が繋がっていて、その線はかりんの側の機械に集まっていた。

「ようやく来たのらね。マコちゃんもようやく思い出したのらね。今日という日のことを」

「ああ、だが、分らない。仕返しをするとはどういう意味だ。俺の覚えている限りでは悪い伝説ではなかったはずだが」

するとかりんは俺の後ろを指さした。そこには俺達の会話を理解していない聖弥と夢がいた。

「あちきが小学生の時から既にこれは始まっていたのら。テストばかり考えていて今日の伝説のことなんてすっかり忘れているのら。そのくせ、キャンプファイヤー伝説は信じる。伝説の全筋を知らずに一部だけに頼る。そして、伝説に裏切られると怨む。そんな馬鹿どもに神の裁きを下して何が悪い」

「悪いに決まってるだろ」

「誠、何のこと言ってるの？」

夢が俺とかりんの会話を割って入ってきた。会話の内容をかりんも知ってもらいたいらしく黙った。

「星川小学校の四大伝説って知ってるか」

「夏のキャンプファイヤーの前で告白すると絶対に成功するってやつ？」

「秋の大会で応援してもらって試合に勝つと両想いになれるという

のありますよね」

夢と聖弥が知っているのはそんなものだろう。この二つの伝説は今でも良く知られているものだ。だが、あと二つは知られていないほど廃れてしまったものだ。

「あと、冬のクリスマスにクリスマスパーティーで二人きりになればみんな公認の仲。そして、今日、春の昼間に花火を見ると素敵な出会いができる」

春夏秋冬、出会いから公認まで1連なりになった伝説。すべて行うことで完成する恋の伝説。かりんが怒っているのはそれを無視して一部しか行わないのを怒っているのだ。

「ですが、伝説は伝説。実際に行って叶った人などいないのでは」
聖弥に賛同してやりたいのだが俺にはそれができないのだ。なぜなら、俺の両親はその伝説の成功者なのだから。

するとかりんは自分自身を指さした。

「残念ながらあちきが生きる伝説なのら。それよりいのらか。あと三分でみんな水浸しなのら」

俺と聖弥は笑うかりんの足元へかけよった。そこにはケータイ電話が繋がっていた。

「ぬふふ。これが最後の関門なのら。四桁の数字を入力すれば放水は阻止できるのら。それでは、健闘を祈るのら」

そう言い残すとかりんは屋上から飛び降りた。

俺達は慌てて駆け寄った。すると、かりんは中庭の花壇の真中に2本足で立っていた。

「やっぱり大丈夫なんだ」

「はは、人間離れしてますね」

かりんはそのまま校舎の中に入って行った。

「ちよつと二人とも、かりんが人間じゃないのは昨日今日知ったことじゃないでしょ。それより、これ止めるよ」

俺と聖弥はかりんの仕掛けた時限装置を見た。電子回路は専門外なのでよく分からないので、下手にいじるのは不味いと思った。の

で、聖弥に聞いてみることにした。

「止められそうか？」

「この短時間では無理ですね。パスワードを入力した方が速いです。ですが、一万通りもの入力を試す時間もありませんね」

パスワード。きっとそれを解くにはヒント1が鍵となっているのだろう。聖弥に頼ってしまうのは悔しいが、斎条たちが風邪をひくのと比べれば軽いものだ。

「両手で数えられる限界ですか？」

「ああ、かりんのヒントでそんなことを言われたんだ」

すると、聖弥は指折り数え始めた。その数え方は今まで見たことのない独特のものだった。

「なるほど、かりんにしては面白いことを……。分かりましたよ。その答え」

聖弥が四桁の数字を入力した。すると、タイマー表示は消えた。

その数秒後、俺達の勝利を称えるようにピンク色の花火が幾つも空に咲いた。

第41話 生きる伝説、蘇る伝説（後書き）

ぬう、セイちゃんには見事とかれてしまったのら。
諸君はパスワードが分かったかなのら。

最終話 思い出を背負って俺達は走り始める

出合いの打ち上げ花火。告白のキャンプファイヤー。想いを伝える大会。2人だけのクリスマス。

星川小学校の恋の伝説。兄貴やその友達、さらにはかりんまでがその伝説を成功させてきた者達だ。この伝説は彼らによって受け継がれてきた。

一時は失われかけた伝説だが俺の時代でまた息を吹き返した。そして、今でもこの伝説は受け継がれている。ずっと歳の離れた後輩から成功の報告を受けるたび心が温かくなり残してよかったと今でも思っている。

だが、その伝説は俺には微笑んでくれなかった。

花火も見た。告白もした。大会で優勝もした。クリスマスも二人で過した。なのに……なのにあいつは俺に振り向いてくれなかったんだ。ずっと慎也だけを見ていた。やつも知らず知らずのうちに伝説を再現していたんだよな。でも、慎也にも伝説は微笑んでくれない。そもそも、慎也の相手は本当に慎也が好きなやつだったのだろうか。

「伝説は一途で素直ないい子にしか微笑んでくれないのら。神様はいい子にしか優しくしないのら」

大昔にかりんに言われた台詞。今でもしっかり覚えている。もし、かりんが本当に神様だったら、俺の願い事なんて聞いてくれないだろうなと思うってしまう。

自分に嘘について嫌いなことを好きになろうとした。

友達を騙して自分に都合のよいように動くようにした。

嘘について舞があらせて落胆させた。

真実を告げて悲しめ利益を得た。

自分だけのためにみんなを利用して一人で笑っていた。たった一人で。

俺はそれでもいいと思った。俺が得をすれば後はどうでもよかった。慎也と出会ってからずっと俺の頭の中の計画は着々と進んでいた。伝説の失敗も小さな誤差だと俺は思っていた。

小さな誤差など俺の計画には問題ではなかった。だが、計画は成功していない。

どれだけ頑張っても、どれだけ考えても、どれだけ嘘をついても、どれだけ人を傷つけても、どれだけ一人になっても、どれだけ………。

考え続けて、頭が痛くなって、苦しくて、寂しくて、孤独だった。たった一人で俺は……。

「な」に寝てんだよ」

体育館の真中で大の字で寝ていた俺の前にいたのは、バスケのボールを持った慎也だった。

昔のことを思い出している間に寝てしまい、虎之耶もどこかにいってしまったようだ。

慎也がボールを俺に見せた。

「久々にやるか？」

慎也の誘いに俺は立ち上がった。お互いあの秋の試合が終わってからバスケを引退していた。中学になってからもバスケ部には幽霊部員として入っていただけだ。

「言っておくが、俺は強いぞ」

自信ありげに言う慎也は呆れた顔をした。

「誰が制服で本気でしあうんだよ。軽くパスだけだ」

そういうと慎也は一回バウンドしたパスを出した。俺もそれを真似してお互い歩きながらパスをしあった。

そのパスは受け取りやすく小学校から変わっていない。無理矢理なパスに見えて確実なポイントにボールを投げてくれる。キラーパスなのに受け止められなくてすまないと思ってしまうほど優しいパスだ。

その慎也はいつも俺のライバルだった。バスケだって、友達の信

頼だつて、恋愛だつて、いつも慎也は俺の前にいたように見えた。そんな慎也に勝ちたかったが今まで俺が満足した勝ち方はしていない。

「誠、考えるのって疲れないか」

突然の慎也の問いに慌てたが平然を装った。

「別に考えてなんかないぞ」

「俺にはそう見えるんだけどな」

「例え考えていたとしても俺は疲れたりはしないな」

「なら、無理でもしてるのか」

リズムよく続いていたパスが止まった。俺がボールを取り損ねたのだ。

「おいおい、なに動揺してるんだよ」

「動揺なんてしてねえよ」

慎也に強めのパスを出した。それを慎也は片手で受け取った。

「まゝいいけどよ。友達、だよな。俺達」

「あたりまえだろ」

俺は今まで通した台詞を出した。友達、口ではそういつているけど本当にそうだろうか。俺があれだけ騙して利用しているのを知ったとしても友達でいてくれるのだろうか。

「……誠。中学の卒業式少し前になるんだが、教室でした話覚えてるか」

俺は何かあったら忘れないようにしている。いつ何時役立つかわからないからだ。記憶力には自信があったが、慎也の言っていることを思い出せないでいた。

「何かあったか？」

「お前。俺がどんなに変わろうと友達でいてやるって言ったんだ」
「言われても思い出せない。中学時代？あのころも色々あって大変だったことは覚えている。」

「あの時の返事。まだはつきりとはしてなかったな」

慎也はボールをつきながらゴールに近づいていった。フリーシュ

ートラインにたった慎也は俺を見た。

「例え、お前が嘘をつこうと、俺を利用しようと、俺は構わない。お前が必死だつて分かった。だから、俺は俺にできることでお前の力になってやる。力になって、助け合つて、相談できて、気付かせてくれて、騙されても笑顔になれて、本気で語り合えて、本気で喧嘩できて、そんなもん全部ひつくるめて、それができるのが友達つて言うなら。誠、お前は俺の友達だ」

参ったな。やっぱり慎也には勝てないや。考えでも、人間としても俺はこいつより大きくなれそうにないな。

「なあ、慎也。小学校時代に全校に恐れられた超ロングシュート。今でもできるか」

「さうな。ここ数年試合してないからな。でも……」

ゴールのすぐ下にいた慎也はゴールに向けてボールを投げた。すぐ側にあるゴールではなく、反対のゴールへだ。小学校時代のコートの倍はある高校のコート。慎也がシュートを試みた距離は小学校時代の限界の倍以上はあった。

投げられたボールは気持ちのいい音を立ててゴールに入って行った。

「俺の夢はプロのプレイヤーだ。ライバルのお前に忘れたとは言わせないぞ」

「この化け物が。今すぐアメリカに行つても問題ないんじゃないか」そして俺達は笑った。気持ちよかった。計画が成功するまで取つておこうと思つた最高の笑顔だ。慎也と出会つてから初めてした本当の笑顔だ。

「誠、そろそろ行こうか。かりんに愚痴られるぞ」
「そうだな」

これから三年間。慎也たちといられる短い時間。これだけの時間で今まで数年間溜めていた本当の笑顔をすべて出し切れるだろうか。そのためにはまず……。

もつ考えるのはよそう。本当の気持ちでこいつといたら、そんな

こと簡単なことだとすぐに分かった。

「なあ、慎也」

「ん？なんだ」

「お前が俺の友達第一号だ！」

俺達は笑い声を上げながら廊下を全力で走った。

高校生活も全力で走り抜ける。
最高の友と一緒に。

最終話 思い出を背負って俺達は走り始める（後書き）

長い間、読んでくださってありがとうございます。

慎也の小中学生時代と誠の小学生時代を少し楽しんでいただけたか？

歯切れが悪い！そう思われる方もいらっしゃるかもしれませんが。

なぜなら、これはただのプロローグです。え！長すぎるって！

だって、これだけ予備知識として知っておいて欲しかったんです。

今後、慎也たちの高校生生活の連載が始まる予定です。

ですが、この作品は自分の初作品だったので続けてよいものか疑問です。

なので、高校生編はみなさんの反響しだいですね。

厳しい評価やこんな所がよかった。こんな展開を希望しますなど多くの声を頂けたらと思っています。

では、自分の子供たちがまた皆様の前で踊れる日が来ることを願って、しばしのお別れを…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9048c/>

演劇団長は道化師さん

2010年10月8日14時48分発行